

ウルトラマンタイガ
BUDDY&SPY
CE

彩花乃茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この地球に宇宙人達が密かに暮らし、活動している事はほとんど知られていない。これは宇宙を超えて出会った若者たちの奇跡と絆の物語だ。

目次

掴み取れ光	1
勇気を貸して	27
星の復讐者	46
キミへのペンダント	66
キミの決める未来	86
アベルの流儀	107
ただいま喧嘩中	127
魔の山へ	146
悪魔を討つ	164
渦巻く因縁	183
絆なき光	204
夕映えの戦士	222

執念の闇	243
嵐を穿つ覇者であれ	263
二者択一	282
英霊の魂とともに	302
星の魔法が消えた午後	322
それでも宇宙は夢をみる	343
トライスクワッドファイル	366
鉛の銃弾 前編	374
鉛の銃弾 後編	398
護る力と闘う力	418
キミの声が聞こえない	439
我らは1つ	460
超えるぜ！時空！	481

風来坊と夜明けのコーヒー	501
最高のユナイト	521
自分色に染めあげて	541
この銀河の果て	562
ウルトラビッグマッチ	583
悪の美学	608
バトル・ゴー!	625
帰ってきた雪	643
師匠の師匠 紡がれる絆	662
雷にご用心	681
日々の未来	700
永遠に燃やすは絆の炎	717
尽きない無限	735

バディ&スパイス	753
最終章1 復活のグリムド	772
最終章2 ニュージェネクライマックス	792
最終章3 奇跡と絆の物語	812

掴み取れ光

遠い宇宙の果て。何処かの宇宙では7人の光の戦士が青い仮面の巨人、ウルトラマン
トレギアと激闘を繰り広げていた。

「シユアー！」

「シヤアツ！」

兄弟ウルトラマン、ウルトラマンロツソ・フレイムとウルトラマンブル・アクアは同
時に光線技のフレイムスフィアシユートとアクアストリユームを放つもトレギアは難
なくそれを避ける。

「オオシユウワツ!!」

続けてウルトラマンオーブ・オーブオリジンも腕を十字に重ねてオリジウム光線を放
つも、トレギアは急旋回でそれすら避けてしまう。

「ヴアアアア・・シユアー!!」

「イイイイサツ!!」

避けた場所を狙うようにウルトラマンジード・プリミティブのレッキングバーストと
ウルトラマンエックスのザナディウム光線が放たれると、トレギアはバリアで2つの光

線を受け止め、反撃に電撃にも似た光線トレアルティカイザーを放ってくる。ジードとエックスは咄嗟にそれを避ける。

「シヨオオオラッ！」

「ズイアアア!!」

「ぐはあっ!?!」

その隙を突いたウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリーは光のエネルギーを込めた拳を2人同時にトレギアに叩き込むと、トレギアは小惑星に叩きつけられる。

「観念しろトレギア。終わりの魔獣も全部俺達が倒した。お前の野望もここまでだ」

ギンガは起き上がるトレギアに向けてそう言い放つ。7人のウルトラマン、彼らこそニューージェネレーションズ。それぞれ違う宇宙を守る戦士達だがトレギアという共通の敵と戦うため次元を超えて、この宇宙に集結したのだ。

「そいつはどうかな?」

対するトレギアは「フッフ」と嘲笑うかのような反応で返してくる。

「ウルトラマン達よ。では、ごゆっくり」

「待てトレギア!!」

ニューージェネレーションズは黒い霧となるように消えていくトレギアを止めようとすると、足元で点滅する何かに気づく。地雷式の爆弾だ。

「しまった！罨だ！」

気づいた時には既に遅く、ニュージエネレーションズは爆弾の爆発を逃れる事が出来ずに大ダメージを負ってその場に倒れ込んでしまう。

「フッフ」

それを爆発の届かない安全圏で眺めるトレギア。そんな彼の元に1人のウルトラマンが現れる。

「トレギア」

「っ！タロウ！」

ウルトラマン No. 6。2本の角が特徴な赤い戦士、ウルトラマンタロウだ。

「闇に落ちた者を光の国に近づけるわけにはいかん」

「フン、宇宙の番人を気取るか。光が正義だと誰が決めた！」

声を荒げたトレギアはタロウへと挑みかかっていく。すると倒れているニュージエネレーションズの元に3人の戦士が遅れて駆けつけてきた。

「先輩！トレギアは俺達が止めます！」

「油断するなタイガ。トレギアは手強いぞ」

「任せてください！最高のチームワークを披露するチャンスだ！」

自分達のチームワークならと自信に満ち溢れているのはウルトラマンタイガ。ウル

トラマンタロウの息子として数多の宇宙で経験を積み重ね、U40のウルトラマンであるウルトラマンタイタスとO-50のウルトラマン、ウルトラマンフーマとともにトリスクワットというチームを作り上げたウルトラマンだ。

「だったらこれを持って行け」

ギンガがそう言うのとニュージエネレーションズはそれぞれ『光』をトリスクワットの3人に託す。

「光の勇者！タイガ！」

オーブ、ロツソ、ブルのO-50ウルトラマン達から光を託されたのはタイガ。

「力の賢者！タイタス！」

エックスとジードから光を託されたのは3人の中では年長者であるタイタス。

「風の覇者！フーマ！」

ギンガとビクトリー、未来と過去のウルトラマンから光を託されたのはフーマだ。

「それがきつとお前達の力になってくれるはずだ」

「はい！」

タイガ達トリスクワットはトレギアと戦うタロウの元へと向かって飛ぶ。

「タアアッ!!」

「ハアアッ!!」

互いの必殺光線をぶつけ合うタロウとトレギア。一旦距離を取ろうとした一瞬の隙を狙われて放たれたトレギアの光線にタロウは咄嗟に腕を交差させてガードしようとする。トライスクワットの3人がそれをガードした。

「見ててください父さん！トレギアは俺達が止めます！」

「俺達（私達）はトライスクワットだ!!」

「よせ！お前達が敵う相手ではない！」

止めようとするタロウを背にトレギアへと向かっていくトライスクワット。最初に仕掛けたのはフーマだった。

「光の速さでてめえをぶっ倒す！」

素早い攻撃でトレギアを斬りつけるフーマ。そこにタイタスが追撃をかける。

「賢者の拳を受けてみよ！」

タイタスの強烈なパンチに流石のトレギアも怯まされっていると、タイガが両腕にエネルギーを集束させる。

「ストリウム・・・ブラスタアア!!」

タイガの必殺光線であるストリウムブラスタアが直撃し、爆炎が周囲に舞うも・・・トレギアはまるで先ほどまでのトライスクワットの攻撃で怯んでいたのが演技だったかのように出てきた。

「フハハハ！フン！」

「ぐああああつ!？」

トレギアのトレアラルティカイザーが直撃したタイタスは光の粒子へと分解されて消滅してしまう。

「タイタアアアス!!」

「ハアつ！」

「がああつ!？」

「フーマアアア!?!よくも俺の仲間を・・・絶対に許さねええええ!!」

続けてフーマまでも光の粒子となって消滅してしまうと、怒りに身を任せたタイガは怒りに身を任せてトレギアへと向かっていく。

「若いねえ」

「ぐあつ・・・はな・・・せ」

「では、よき旅を」

あつさりと首を掴まれてしまったタイガ。トレギアはタイガにもトレアラルティカイザーを浴びせて消滅させてしまう。

「タイガああああ!!」

タイガの父であるタロウは息子が目の前で殺されてしまった事を嘆きながらも、その

仇を討つため全身を虹色に輝かせながら炎を纏う。

「ハアアア・・・」

対するトレギアも青い炎を身に纏い、2つの炎が宇宙の果てでぶつかり合った。

~~~~~

~~~~~

それはほんの2カ月ほど前の出来事。平凡な日々を過ごしていた才賀伊智香はとある事件に巻き込まれ、私設諜報機関ツキカゲの一員であり自身の学校の先輩でもある源モモに助けられたことでその生活が一変した。彼女の弟子となった伊智香は日夜修行に励み、見事ツキカゲの一員となった。

「さて初さん。今日はどんなミッションなの？」

そして現在。高校3年生のモモと同級生である八千代命は先輩であり現在は前線を退く形を取っている青葉初芽に本日招集した理由を尋ねる。

「今回皆さんに集まってもらったのはミッションではありません。先日ソラサキの港から密輸入されようとしていた動物を保護したのですが・・・どうにも凶鑑に記載のない新種の生物だったんですよ」

初芽はモニターに保護した生物を映し出す。モニターに映し出されたのは4〜50

センチほどの一匹の鮫にも鯨にも見える生物だった。

「新種の生物かあ。刺激的〜」

「これ、発見したって報告すればそれなりのお金がもらえるんじゃない？」

命の弟子である相模楓は欲に目がくらみそうになっているも初芽は話を続ける。

「仮にこの子の名前をサメクジラと呼称させていただきませぬ。そしてこのサメクジラさんを密輸しようとしていた組織の事を今後調べていく課題の一つになりますね」

密輸入の際の映像に映るのは3人の男たち。全員黒スーツにサングラスというあからさまに個人を隠すような恰好をしている。

「にしてもカワイイですね。ちょっと撫でてもいいですか？」

サメクジラに興味を示す長身の少女は石川五恵。ランクは横綱でメンバーの中で最も強いのだが誰よりも可愛い物好きでもある。

「もう少し待ってくださいいね。毒がある生物かもしれないので検査を終わって安全が確認できたら撫でてもいいですよ」

「それで初芽。今後こいつ等を調べていくと言っても、何か他に手がかりはないのか？今ある情報だけでは新種の生物を密輸しようとしてただけの連中だぞ」

初芽の幼き頃からの友人であり、五恵の弟子であるテレジアは他に情報がないのかを尋ねるも初芽は首を横に振る。

「残念ながら得られている情報は多くありません。しかしながらこの映像で分かる通り、彼らは未知の武装をしているところからただの密輸入犯罪者というわけではないようです」

黒服の男達が気づいたドローンへと向けて発砲してきた銃撃。それは銃弾ではなく光線だった。光線銃。それは現代技術ではそこまで小型・量産化できないはずのものだ。しかし彼らはそれを所持している。怪しい組織としてツキカゲが調べるには充分な理由足り得た。

『あの光線銃。あいつ等、宇宙人だな』

「え？宇宙人？」

何処からか誰かが言った言葉に伊智香はついつい反応してしまう。

「いやいや宇宙人なんているわけないでしょ」

「そうですね。もしいるとしたらお友達になりたいですね」

楓は宇宙人なんてと否定し、初芽もいてほしいぐらいにしか思っていなかった。しかしながら伊智香は「今の声はいつたい何だったんだろう？」としばらく考えていた。

~~~~~

~~~~~

東京某所某駅。1人のサラリーマンが終電を逃してベンチに腰を掛けていた。

「はあ、今日も終電を逃しちまった…。今月何度目だよ。ノー残業デーは何処言ったんだっての」

残業続きでため息をついてしまうサラリーマン。そんな彼の横に誰かが座った。

「お疲れのようですね」

「ええ…。まあ…。」

若い女性の声に話しかけられた。しかしサラリーマンはもうそちらを振り向く元気も残ってないのかただ疲れた表情で俯いたままだ。

「良かったらこれをどうぞ」

初対面であるはずの女性は栄養ドリンクを一本サラリーマンに差し出してくる。しかしその栄養ドリンクにはラベルが張られていない。

「えと、これは…。」

「うちの会社の新商品のサンプルです。何本かあるので1本どうぞ」

「ありがとうございます」

サラリーマンはお礼を言おうと顔を上げる。するとそのタイミングで女性は立ち上がってしまい、顔はうかがえなかった。

「ライマギエクスを使っていて『エナジー100倍! 怪獣パワー!』がキャッチコピーな

んです。明日も仕事、頑張ってくださいね！」

そう言い残した金髪の女性はホームを去っていく。サラリーマンはせつかなのでそのドリンクの蓋を開けて早速飲んでみた。

「おつ、ホントに体の内側から力が湧き出てくるみたいだ！」

少し飲んだだけでみるみる力が湧き上がってきたサラリーマンは先ほどまでの疲れは何処へ行ってしまったのか勢いよく立ち上がる。やつれていた顔も完全に元氣を取り戻していた。

「よしーなんだか歩いて帰れる気がしてきた！」

会社に戻って泊まる事を覚悟していたサラリーマンはそのまま徒歩で帰宅していく。

「フフっ、元氣になってくれて良かったですよ」

その姿を金髪に紫色の瞳をした女性は暗闇から見守っていた。

~~~~~

~~~~~

数日後、ツキカゲメンバーは例の怪しい黒服達を発見、2人と1人に分かれたのでこちらも2手に分かれて尾行をしていた。

『こちら風魔。黒服2人は建物の中に入ったみたい』

『了解です。まもなく五右衛門がそちらに到着するので、合流するまで突入は待つてくださいね』

相模楓『コードネーム・風魔』とその師匠である命『コードネーム・千代女』の師弟組は2人の方を追跡していたがその2人組は建物内へと入ってしまった、石川五恵『コードネーム・五右衛門』が合流するまで待機を言い渡される。

「こちら百地。1人の方も別口から同じ建物内へと入った模様です」

モモ『コードネーム・百地』とその弟子である伊智香『コードネーム・孫市』の師弟組で追跡していた1人も同じ建物内へと入り、同じくテレジア・レイこと『コードネーム・蔵人』の合流後、潜入する。

「孫市、相手は私達も知らない武装をしているからもし戦闘になるような事があつたら逃げる事を優先してね」

「は、はい」

モモはかつて自分の師匠に言われた事があることと同じ事を伊智香にも告げると、追跡していた黒服の男が楓達が追っていた男2人と合流していた。

「今回の交渉はイマイチだったな。それなりの資産家って聞いてたからもう少し奮発してくれると思ってたのによお」

「そもそもこの間の生物兵器が奪われちゃったのが原因だろ。こういう金額交渉は信用

を失えば、そこんところがシビアになっちまう」

ツキカゲに気づく素振りも見せない黒服の男達。ツキカゲメンバーは3人の確保のタイミングを伺っていると衝撃の事が起きた。

「もう擬態いいか？俺お前らと違って機械じゃないから疲れるんだよ」

そう言った1人の男の顔はとても人間とは思えない黒く長い一つ目へと変化させる。ツキカゲが知るよしもないが変装宇宙人ケムール星人だ。

「！！！！！！！！！！」

当然ツキカゲメンバーはそれに動揺してしまうも、仮にもスパイである彼女らは声を押し止める。

「俺は別に機械を使つてないぞ」

「俺も。お前が変装得意じゃないだけだろ」

他の2人も別に機械など使つてないと告げるとケムール星人は驚きの声をあげる。彼らが何者かは分からない。しかし突入するなら油断しきっている今が最大のチャンスだった。

『確保をお願いします』

初芽の指揮で先陣を切ったのは五恵とテレジア。格闘能力に優れている2人だ。2人はケムール星人を鎮めると続けて命と楓の師弟コンビが黒服の男の1人を取り押さ

えた。

「な、なんなんだお前達は！」

「させない！」

2人が取り押さえられて動揺した残る1人は懐から銃を取り出そうとするも、それよりも早く刀を抜いたモモは銃を弾き飛ばして黒服の男は驚いたように尻餅をついた。

「いや〜宇宙人が本当にいたなんて刺激的だ〜」

「これをどこかに通報したら報酬がもらえたりしませんかね？」

命と楓はこの未知との遭遇にそれぞれの想いを呟いていると、尻餅をついている男は最後の手段と言わんばかりにスイッチのようなものを取り出した。

「畜生。地球人なんかに！捕まって・・・捕まってたまるかあ!!」

捕まりたくないと言われたスイッチ。次の瞬間、ソラサキの夜の町に1体の怪獣が現れた。

「やっちまえ！サンダーダランピア！」

背中に数本のコイルを生やした怪獣サンダーダランピア。見た目と名前の通り電気を扱う事に長けている怪獣だ。

「うわあ・・・。流石にこんな刺激的なのは求めてなかったかも」

『皆さん。ミッション中止です。至急撤退を！』

通信先の向こうでも怪獣の出現を確認した初芽は全員にミッションの中止と撤退命令を下す。全員脱出を最優先して確保した宇宙人を放棄してその場を離脱しようとした矢先、『終ワリ』は訪れた。

~~~~~

~~~~~

「サンダーダランピア。丁度いいエネルギー源が現れたな。ほら、目覚めるなら丁度いい頃合いだぞ」

怪しげな女性は夜のソラサキに現れたサンダーダランピアを見上げながら右手の指をパチンとならす。すると彼女から栄養ドリンクを受け取ったサラリーマンが突如として身体から物凄い電撃を放ちながら4足歩行の首長竜のような怪獣へと変貌した。

「復活おめでとう終わりの雷、終電恐竜デンジュラス。歓迎の用意はできているぞ」

終わりの魔獣。かつてこの世界とは別の宇宙でニュージェネレーションズが撃破した星を終わらせるほどの凶悪な力を持った7体の魔獣達の事だ。そのうちの1体、終電恐竜デンジュラスが復活した途端、まるで自身の身体をデータにすることで脳空間を移動し、サンダーダランピアの背後で実体化した。

「さあ、よき旅の終わりを。そして始まりを」

怪物が現れた事にソラサキ市民が慌てふためき人々が逃げていく中、その女性は面白そうなものを見るかのように笑っていた。

「うわっ、なんかまたもう一体现れた!？」

「今夜は刺激的過ぎるって」

命達は当然現れたもう一体に驚きと焦りを抱きながらも、建物内を何とか脱出する。するとデンジュラスはサンダーダーランピアのコイルに噛みつき、その電力エネルギーを喰らい始めた。

「何だあいつは……。サンダーダーランピアア！そいつを振り払え！」

テレジアに連行されている真つ最中の黒服の男はサンダーダーランピアへ向けてデンジュラスを振り払うため電撃を放つ。その電機は余波だけで周囲の建物の機材をショートさせ、電気対策をしているはずのツキカゲ用通信機器すらエラーを起こしてしまふほどのものだ。しかしながらそんな電撃ですらデンジュラスには怯みもしない。それどころかその電撃すらもエネルギーとして取り込んでいく。

「いったい何？何が起こっているの？あの怪物達はなんなの？」

状況が読み込めていない伊智香はもはやどうすればいいのか分からなくなり取り乱している、彼女の内に宿る光が語り掛けてきた。

『落ち着け伊智香』

「えっ？またこの声・・・」

『サンダーダランビアの電気エネルギーを食べてるのは終わりの雷、終電恐竜デンジユラス。AI技術が発達していた惑星サマーンに壊滅的被害を与えた危ないやつだ！』

「終電恐竜・・・デンジユラス・・・」

謎の声はデンジユラスの事を伊智香へと説明すると、もう訳が分からないと呟いた伊智香は逆に頭がクリアになつて少し落ち着いてきた。だがその落ち着きが油断にも繋がった。

「きやあつ!？」

エネルギーを喰らいつくされたサンダーダランビアは干乾びてしまいその場に倒れ込むと、それに巻き込まれた建物の瓦礫がツキカゲへと降り注いできた。

「みんな！大丈夫？あれ？伊智香ちゃん？」

「ここです！」

奇跡的に誰も瓦礫の下敷きにはならなかったが、瓦礫は見事なまでに伊智香を他のメンバーと分断するように道を塞いでしまった。

「伊智香ちゃん！大丈夫？怪我はない？」

「はい。怪我はしてません。ですがこの道は通る事は出来ません。黒服の男達が使つて

いた別ルートで脱出します!」

伊智香は別ルートで合流すると他のメンバーと別行動を取り始める。するとそれ察したかデンジユラスは伊智香が戻っていった建物目掛けて電撃光線を放ってきた。

「えっ? きやああああっ!」

「伊智香ちゃん!」

響く伊智香の悲鳴に最悪な事態を想定するツキカゲメンバー。爆炎とともに崩れる建物の中、『光』は現れた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

それは伊智香のいる建物に向けて電撃光線が放たれ、ガスに引火した事で建物が爆発に包まれる数十秒前の出来事。

「た、助けてくれえ・・・」

両腕が縛られていた事で動きに制限があつたケムール人。彼はツキカゲと共に脱出は出来なかつたため瓦礫の下敷きとなつていたので。

「・・・待つててください。今助けます!」

手頃な鉄骨を手にとった伊智香はテコの原理で瓦礫を退かそうとするも、伊智香の力ではそれは持ち上がらない。

『……どうする？今ならお前だけでも逃げられるぞ』

「そんなの駄目だよ。私は助けない。今この人を見捨てて逃げちゃえば自分の気持ちに嘘をついちゃう事になる」

『お前の気持ち？』

「私がツキカゲに入ったのはこんな私でも誰かの力になれるかもあって、誰かを助けられるかもあって思ったから。ここでこの人を見捨てれば……その気持ちを否定しちゃう。そんなのはしたくない！だから助けるの！」

伊智香は自分の覚悟を叫ぶ。しかしデンジユラスはそれを妨害するかのように電撃を放ってきた。その電撃は建物のガスに引火して爆発を巻き起こし、伊智香は爆炎に？まれそうになる。するとその瞬間、伊智香の胸から一つの光が飛び出てきた。

『お前の覚悟！受け取った！』

その光は伊智香とケムール星人を爆炎から守ると、銀色のキーホルダーのような形へと変わる。

『伊智香！あの宇宙人を助けて、お前の気持ちが嘘じゃないって証明するぞ！』

「さっきまでの声は君だったんだね。私に力を貸してくれるの？」

『ああー!』

キーホルダーが伊智香に力を貸すと答えると、伊智香の右腕にプレスレットが出現し、それは黒いガントレットへと変わった。

『俺はタイガ!光の勇者!ウルトラマンタイガだ!』

「タイガ・っ」

『俺はお前。お前は俺だ。さあ、その手で俺を掴むんだ!』

伊智香はその日その光を、タイガの光を掴み取った。

『カモン!』

右腕のガントレット、タイガスパークの下部にあるレバーを引いた伊智香は腰のホルダーから左手でタイガアクセサリーを外す。そしてそれを右手に持ちかえると、タイガスパークのクリスタル部分が赤く輝いた。

「光の勇者!タイガ!」

『叫べ伊智香!バディ・ゴー!』

「バディ・ゴー!」

アクセサリーを握る右手を空へと突き上げると、伊智香は光に包まれて光の勇者、ウルトラマンタイガへとその姿を変える。

「シユア!」



伊智香が変身したタイガは空中で回転しながら着地をすると、まずは助け出したケムール星人を安全なところに降ろした。

「あ、あれは!」

黒服の男はタイガの姿を見るなり驚きの反応をする。

「あの銀色の巨人を知ってるのキミ?」

「地球じゃ知らないのも無理はねえよな。あの巨人はウルトラマンタイガ。銀河に平和をもたらす光の巨人の1人だ」

「まさか地球にウルトラマンが来てたなんてな、俺達の計画なんか失敗確定だったんじゃないかよ」

自分達の計画は最初から破綻していたと後悔する黒服達。

「ウルトラマン・・・」

「タイガ・・・!」

「銀河の平和だなんて刺激的だね」

それぞれがタイガを見て感想を呟いてると、タイガはファイティングポーズを取る。するとデンジユラスは長い首を鞭のように振るってタイガに攻撃を仕掛けてきた。

「タアツ!」

その首による攻撃をバック転で回避したタイガ。続けてデンジユラスは背中のコイ

ルから電気で構成された無数の針を飛ばしてきた。

「スワローバレット!」

タイガは腕を十字に重ねると連続して放たれる光線でその針を全て撃ち落とす。

「オオオオ!!」

そして爆煙を切り抜けてデンジユラスの首元に跳び蹴りを叩き込むと、デンジユラスはその一撃で激しく怯んだ。

「ハアっ! トウア! テリヤアア!!」

怯んでいる今がチャンスだとタイガは怒涛の連続打撃を仕掛ける。

「ハアアアッ! ダアッ!」

連続パンチからのドロップキック。タイガは反撃の隙を与えようとしない。しかしドロップキックから体勢を立て直したデンジユラスは口から電撃光線を放ち、タイガは咄嗟にそれをガードする。その攻撃こそ耐えきったタイガだったが胸の赤いランプ、カラータイマーが赤く点滅し出す。

「あれは・・・何かの警告?」

「ウルトラマンは地球上では3分間しか活動できないんだよ」

楓は警告にも似た点滅を黒服の男に尋ねると、黒服は素直に説明してくれた。

「ハアっ!!」

飛ばされてきた電撃の塊を光を纏わせた手刀で両断したタイガは右腕を空へと掲げた後、頭部の上で両腕を重ね合わせ、腰まで両腕を下げる。すると全身が虹色に輝き左腕を上、右腕を下に支えとしたT字ポーズを構えた。

「ストリウム・ブラスタアアア!!」

タイガの必殺光線ストリウムブラスタアがデンジュラスへと放たれ、それはデンジュラスへと命中したのだが・・・その一撃ではデンジュラスは倒しきれていなかった。

「伊智香！オーブレットを使うんだ！」

「オーブレット？」

タイガの中にいる伊智香は「オーブレットって何の事？」と思っただが、次の瞬間頭の中に1つのプレスレットのイメージが浮かび上がる。

『カモン！』

タイガスパークのレバーを操作すると伊智香の左腕にオーブ・オーブオリジンを模したプレスレット、オーブレットが召喚・装着される。そして伊智香はつかさずそれをタイガスパークへとかざした。

『オーブレット・コネクトオン』

オーブレットからオーブの力が解き放たれると、タイガにオーブの幻影が一瞬だけ重なる。

「スプリーム・・ブラスターアア!!」

そしてストリウムブラスターと同じ動作で光線を放つと、先ほどの光線よりも威力が高まっているその光線が直撃したデンジュラスは爆発し、その身体はデータが分解されていくように四散していった。

「っ！」

そしてその爆炎から1つの光がタイガへと飛んできたので、タイガはそれを掴み取ると・・伊智香の手には1つの指輪が握られていた。

「これは何？」

「ウルトラマンの力を感じる・・」

デンジュラスを模したような指輪にタイガはウルトラマンの力を感じるとだけで何も知らないようだ。

「やったあ！」

「ありがと〜！ウルトラマン〜ン！」

「師匠〜！みなさ〜ん！」

命達がタイガの勝利に喜んでしているとタイガの変身を解いた伊智香が「お〜い」と言うかのように手を振りながら駆け寄ってくる。

「いち・・孫市！無事だったんだね！」

伊智香の無事を確認し、モモは嬉しさのあまり彼女を抱きしめる。

「ごめんなさい。通信機器が駄目になったせいで連絡が取れなくて・・・」

「いいよ。無事でいてくれて良かった」

モモはしばらく伊智香を抱きしめたまま放さなかった。

~~~~~

~~~~~

ウルトラマンタイガがデンジユラスを撃破する瞬間を見届けた謎の女は面白い物を見た嬉しそうに笑いながら去ろうとする。そして彼女は先ほどまでデンジユラスとなつて暴れていたサラリーマンが倒れている事に気づいた。

「おつといけない。初の成功例なのだから回収しないといけないな」

銃型のアイテムを取り出した彼女はそれを倒れているサラリーマンへと向ける。するとサラリーマンの体は蒸発するように消滅し、その場には黄緑色に輝く宝石だけが残った。

「もつと強くなつてくれよウルトラマンタイガ。でなきやこれから復活する『終』達を倒せんだらう」

その宝石を拾い上げた彼女はチラリともう一度ウルトラマンを見上げる。彼女の作

り出す『終』はまだ始まったばかり。

## 勇気を貸して

事件終了後、怪獣事件があった場所から遠く眠りに浸っている親に気づかれないうちに帰宅した伊智香は半透明になっているタイガと向かい合う。

「どうだった。俺の力は！」

「あれってやっぱり私が君になってたってことなの？」

「な！俺のおかげで何とかなっただろ？やっぱり地球には俺がいないと駄目だな！」

勉強机に腰をかけながら伊智香にそう語ってくるタイガに内心「なんか馴れ馴れしい」と思いながらも質問する。

「それでタイガ君はどうして私と一心同体？になってるの？」

「ああ。あれは12年前、お前がまだ4歳ぐらいの時だな。トレギア相手に敗れて光の粒子になって時空の狭間を彷徨ってる時にお前の声が聞こえたんだ」

「私の声が？」

自分の声が・・・人間の声が宇宙まで届くはずがない。そう言いたくもなかったがウルトラマンなら聞こえるのかもしれないとそのまま話を聞く。

「俺の波長とお前の波長が合ったみたいだな、俺はその波長に引き寄せられてこの地球

に来たんだよ。その時お前は事故で意識不明になってな、身体を失ってた俺は波長の合うお前と一体化しないと今にも消えそうな状態だったってこともあってお前と一体化する事で互いに難を逃れたってわけだ」

「そういえば・・・昔事故で2、3日意識が戻らなかつた時があつたってお父さんから聞いたこともあるけど」

伊智香はそういう事があつた程度に聞いてはいたが本人は覚えていなかった。

「つまり12年もタイガ君は私の中にいたって事。・・・えっ、なんかやだ」

「なんかやだってなんだよ。もつと感動しようぜ。宇宙的な出会いだろ？互いに命を助け合う。前にゼロが言つてたぜ。確か地球ではこういうのをWINWINな関係っていうんだろ？」

「そうだけど。そうじゃなくてね」

もしかしたら自分の裸も見られてたかもと考えた伊智香は恥ずかしい気持ちになりながらもパジャマに着替えようとすする。

「あつ、タイガ君。そっち向いてて」

「えっ？なんで？」

「いいから！」

枕を投げつけられたタイガは半透明な状態で10センチほどのサイズに変わり枕を



避けると渋々伊智香とは反対側を見る。

「タイガ君つてさ、デリカシーないって言われない？」

「デカシー？なんだそれ？」

「・・・そつからか〜」

そもそもデレカシーという単語自体を知らなかったタイガにため息をつく伊智香。それに疑問を抱きながらも「まあいいや」とタイガは話を続ける。

「とは言え、つい最近まであんまり意識はなかったんだけどな」

「そうなの？」

「パワーが回復するまで長い間待っていたんだ。さあ！ここからが始まりだぞ伊智香！」

「えっ？何か始まるの？」

「俺とお前はこれからこの星の平和を守るヒーローになっていくんだ」

着替えを終えた伊智香が振り返ると10センチタイガはシュワツと飛び上がる。するとタイガは伊智香よりやや大きいぐらいのサイズになった。

「選ばれた事を誇りに思え！俺達は一心同体。運命共同体なんだ。これから一緒に地球のヒーロー頑張ろうぜ！」

「・・・とりあえず・・・もう寝るね」

壮大な事を言ってくるタイガに伊智香は思考が追いつかず・・・ベッドに入り、深い眠りに入った。

~~~~~

~~~~~

翌日。学校を終えたツキカゲメンバーはW a s a b iの地下にあるツキカゲ基地へと集まっていた。

「邪魔するぞ」

「え？だ、誰ですか？」

「お久しぶりですしづきさん！」

入って来たのはツキカゲではない黒いスーツを着た桃色の髪の少女。その少女を見るなり伊智香は部外者が入ってきたと思って驚くも、他のツキカゲメンバーは驚くどころか「久しぶり」だとその相手を歓迎していた。

「し、師匠。あの方はいったい？」

「そう言えば伊智香ちゃんは会うのは初めてだったね。あの人は風の部隊の隊長、薩摩しづきさん。私も風の部隊との交換留学の時に世話になった事があるんだ」

「お主がモモの弟子となった新入りか。凧の部隊隊長のしぶきじゃ。よろしくの」

凧の部隊。数か月前にソラサキを舞台とした悪の連合と戦うため同盟を結んだ政府公認の警視庁に属する部隊であり、黒百合学園の高校に通っていた薩摩しぶきはそのリーダーだ。

「それでしぶきさんはどうしてここに？今回は他のみんなは一緒じゃないんですか？」

「昨日おんしらが捕えてくれた宇宙人から取り調べをした結果を伝えにきたんじゃ。そしてたら風潰しに情報が溢れて来て凧はてんやわんやじゃ。つと、話を戻すぞ。以前から宇宙人の存在は気づいておったんじゃが、こうして捕まえたのは初めての事例での。通信が傍受されても厄介じゃから口頭で伝えにきたんじゃよ」

どうやら彼女は昨日ツキカゲが確保した宇宙人達から聞き出した結果を伝えにきたようだ。

「あの3人は『ヴィラン・ギルド』と呼ばれる怪獣売買を目的とした組織の下っ端のようでの。おんしらが確保したサメクジラ？とやらの販売をするため地球に来ていたらしいのじゃ」

「あの人達は今何処に？宇宙人だから星に返したつてことはありませんよね？」

「安心せい。普通よりも嚴重な監獄におる。あやつ等がどんな能力を持つてるかは知らんがそう簡単に脱出することはないじゃろう」

ひとまず脱出の心配はないようでツキカゲメンバーは一安心しているとしぶきは話を続けようとする。

「それでじやの。上層部はツキカゲにヴィラン・ギルドの対処を頼みたいとそちらの上と掛け合っていると話もあつたのじや」

「ちよ、ちよつと待って！ヴィラン・ギルドって宇宙人組織で怪獣を呼んだりするかもな組織でしょ？そんなのにどうやってあたし等で太刀打ちするのさ？」

命は宇宙人はともかく怪獣の相手をする事など自分達にできない趣旨を伝える。

「何も怪獣と戦ってくれなどは言わん。そんなの風の部隊にも無理じや。しかし怪獣を呼ばれる前に奴らを捕まえる事が出来ればそれを未然に防げるかもしれんというわけじや」

「なるほどねえ。それなら命達にもできるかも」

それならできると納得する命に他のメンバーも納得しているとさっそくと言わんばかりに地震のような振動が響いてくる。初芽はすぐさまドローンによる映像を確認してみると、ソラサキの隣町にまたも怪獣が現れていた。

「ここまで振動が伝わってくるほど近いところにいる。気を付けろよ伊智香！」

「う、うん」

また怪獣と戦う。そうなる事に対して少なからず伊智香は不安を感じていた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

少し前、夕方の公園。周囲の子供達が友達や家族と共に帰っていく中まだ5〜6歳程度の1人の少女はまだブランコに座ったままだった。

「どうしたんですかお嬢ちゃん。まだ帰らないのですか？」

そこに1人の女性が近寄ってくる。サラリーマンに栄養ドリンクをあげた女性だ。

「知らない人に声をかけられたら返事をしなきゃいけないって先生が言ってた」

「そうですよね。お嬢ちゃんにとって私は知らない人ですもんね。私は児童相談所の天堂って言います」

「てんどーお姉ちゃん？」

少女は確認するように女性の名前を言う。すると天堂と名乗る女性は優しくそうな笑顔で頷いた。

「ええ、これで知らない人じゃないですよね？お嬢ちゃんのお名前は？」

「美月」

「ミツキちゃんですね。どうしてミツキちゃんはまだお家に帰らないんですか？お友達はいみんな帰っちゃいましたよ」

「美月のお母さん。また違う男の人といるの。お母さんね、その人が帰るまで帰っちゃ駄目って」

「あく。なんとなくそんな感じはしてましたけど、やっぱりそんなご家庭ですか。ご自宅に行っても娘は遊びに行ってるって突き返されたんですよね」

天堂は言葉巧みに美月の事情を聞き出していく。話しているうちに天堂への警戒心を解き始めた美月は無表情だった顔つきがほぐれ始める。すると美月のお腹の音がなつてしまう。

「ご飯、食べてないんですか？」

「ごはんも今は学校の給食だけ。幼稚園の時もお母さんはご飯を作ってくれたこと、なかった」

「それは相当ですね。あつ、そう言えば丁度いいものを持ってますよ！」

バックから小さな袋を取り出した天堂。その中身はデフォルメの怪獣を模った数枚のクッキーだった。

「手作りクッキーです。本当は他の人にあげるつもりだったんですけど・・・今日は渡せなさそうだったのでミツキちゃんにあげちゃいます」

「いいの？」

「ええ！せっかく知り合つたんですからぜひどうぞ！」

美月はその手作リクッキーを受け取ると天堂はその頭を撫でる。

「お母さん、ミツキちゃんの事をちゃんと見てくれるといいですね!」

「うん!とこころでお姉ちゃん。これ、食べていい?」

「どうぞどうぞ」

お腹が減っていた美月はさつそくそのクッキーを食べ始める。

「大丈夫ですよミツキちゃん。お母さんは必ずミツキちゃんを見てくれるようになりますから」

美味しそうにクッキーを食べている美月の頭を天堂は少しの間撫でる。

「おや、随分反応が早いですね。やはり子供だから効き目が早いんでしょうか?」

クッキーを食べ始めてから数分後、美月の体に変化が起こり始める。その姿はまさしく『怪獣』のようなフォームとなっていく。

「・・・ほう最凶獣ヘルベロスか。そうか、そうきたか」

天堂は美月が変貌した怪獣を見上げてそうきたかと反応する。最凶獣ヘルベロス。宇宙でも名をはせるほどの凶悪怪獣で身体中に生えている刃状の突起が特徴だ。

「結構レア物だとは思うぞ。けれど私が求めていたのはそれじゃないんだ。ミツキなら終わりの闇辺りのものになってくれると期待してたんだが残念でならん」

「オね・・・ちゃん」

「おつと残念発現を撤回しよう。まだ意識があるなんてやっぱり流石だぞ。終わりの間候補だっただけはあるな。ミツキ」

「おカ・・・さ。とコかエ・・・る」

ヘルベロスと呼ばれた怪獣は西の方へと歩き出す。どうやら家のほうへと帰ろうとしていようだ。

「大丈夫だぞミツキ。それならきつとお母さんはちゃんとミツキの事を見てくれるだろうな」

~~~~~

~~~~~

「今回の怪獣はアイツね」

ドローンの撮影によりツキカゲのモニターに映るのは最凶獣ヘルベロス。ツキカゲメンバーは流石に怪獣には対処できないと成り行きを見守る。

「ねえ、こういう時は自衛隊って動かないの？」

「民間人の避難が優先されて、そう簡単に自衛隊は出撃できんのじゃ」

自衛隊が出撃出来ないのも『そういうもの』として自分達を渋々納得させていると慌てた様子で初芽が走ってくる。

「急ごしらえですが改良完了しました！戦闘用ドローンの出力アップ版です！怪獣を倒す事は難しいでしょうが気を逸らして時間を稼ぐぐらいはできるはずです」

初芽はさっそく改良型のドローン10機を出撃させ、ヘルベロスへと攻撃を仕掛ける。しかしながらヘルベロスにとつてそれは豆鉄砲のようなもので多少意識する程度で反撃しようとするしなかつた。

「駄目だよ初さん。聞いてない」

「・・・もつと出力を強化する必要があるようですね」

「またウルトラマンが来てくれたら・・・」

モモのつぶやきを聞き逃さなかつた伊智香は気づかれないように部屋を出て行く。みんなを巻き込みたくないと不安は消えないままだが、黙つて見てるほうが被害が拡大する上、大好きな師匠であるモモがウルトラマンを求めているからにはいかなない訳にはいかない。

「ねえタイガ君。ホントの事を言うかね。やっぱり怖いよ。怪獣と戦うの」

「・・・だつたら逃げるか？」

「ううん。逃げない。みんなを守りたいから戦う。けれど私にそんな勇気が足りないの。だからタイガ君、タイガ君の勇気を私に貸して」

「フツ。俺のでよければ幾らでも貸してやるぜ！」

タイガは自分の勇気ならいくらでもと答えると、少し笑った伊智香は戦う勇気を引き出す。

「ありがとう。．．．行こうタイガ君！」

「応さー！」

戦う覚悟を決めた瞬間、伊智香の右腕にタイガスパークが出現し、みんなにバレないように見えないようになっていた腰のホルダーが姿を現す。

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

腰のホルダーからタイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ちかえて、それに宿るタイガの力を解き放つ。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

アクセサリーを握る右手を空へと掲げた伊智香の姿はタイガに．．．光の巨人ウルトラマンタイガへと姿を変えてヘルベロスの前へと降り立った。

「シユア！」

タイガがヘルベロスと向かい合って早々、ヘルベロスはタイガを『敵』として認識し攻撃を仕掛けてくる。

「タア！」

ヘルベロスの刃から放たれる赤い斬撃をバック転で避けたタイガは2本の角を青く輝かせる。

「ブルーレーザー！」

角から青いレーザー光線を放ったタイガはそれで赤い斬撃を撃ち落とす。するとヘルベロスは背中突起を飛ばして攻撃してきた。

「スワローバレット！」

それを光線で撃ち落としたタイガは跳び回し蹴りでヘルベロスの首元に蹴り入れると尽かさず連続パンチを胴に浴びせる。しかし胴はともかく背びれ等の外皮はかなり強靱な作りをしているようでタイガの打撃がそれほど通っていなかった。

「硬いね。この怪獣」

「ああ。だったらこうだ！」

身体を回転させたタイガは虹色の竜巻を巻き起こしてヘルベロスを攻撃しようとするも、角から放たれた電撃に竜巻が打ち消されてしまった。

「何っ!?! うわっ!?!」

驚くタイガに鋭い尻尾による攻撃が襲い掛かり、それを受けたタイガは背中から倒れ込んでカラータイマーを赤く点滅させる。

「いてて・・・大丈夫か伊智香?」

「う、うん。あつ、まだ逃げてない人があそこに」

起き上がるタイガは少し離れたところのアパートで逃げ遅れている男女に気づく。

「なんだと!・・・ならこれ以上こいつを先に進ませる訳にはいかないな」

命を守るために戦う。その使命を担うタイガは拳をギュッと握って跳び上がると、空

中で回転しながら燃える炎のキックをヘルベロスに叩き込んで怯ませる。

「怪獣の力を使うぞ!」

「怪獣の力?・・・もしかして昨日の指輪!」

『カモン!』

昨日デンジュラスを倒した時にゲットした指輪を装着した伊智香はそれをタイガスパークにかざす。

『デンジュラスリング・エンゲージ』

デンジュラスの力を解き放ったタイガは右腕に電気エネルギーを集束させる。

「ブラストサンダー!」

右拳を突き出して電撃光線を放つタイガ。その電撃光線はヘルベロスへと命中し、ヘルベロスは全身が痺れて動けなくなった。

「今だ伊智香!ブルレットだ!」

「うん！」

『カモン！』

ウルトラマンブル・アクアの力を宿すブルレットを呼び出して装備した伊智香はそれをタイガスパークにかざしてその力を解き放つ。

『ブルレット・コネクトオン』

「アクア！ブラスタ―！」

水の力が合わさった光線、アクアブラスタ―がヘルベロスへと放たれるも、その光線は赤い斬撃に切り裂かれて水溜まりになるように散ってしまった。

「ん？水溜まり？・・・そうだタイガ君！今だよ！あの水たまりに炎をー！」

「炎？そうか！だったら伊智香！ロツソレットを使い！」

「うん！」

『カモン！』

ウルトラマンロツソ・フレイムの力を宿すロツソレットを呼び出して装備した伊智香はそれをタイガスパークにかざしてその力を解き放つ。

『ロツソレット・コネクトオン』

「フレイム！ブラスタ―！」

ストリウムブラスタ―に炎の力を合わせた光線はさきほどのアクアブラスタ―に

よってできた水たまりに命中する。すると水蒸気爆発が発生し、ヘルベロスの足元が大きく傾いた。

「今だ！」

そのチャンスを見逃さなかったタイガは即座にストリウムプラスターを放ってヘルベロスに命中させると、それに対処できなかったヘルベロスは耐えられずに爆散した。

~~~~~

~~~~~

「良かった。あの巨人が怪獣を倒してくれたわ」

安心した女性は隣で一緒に戦いを見ていた男性と家の中へと戻っていく。

「お・・・か・・・さん・・・」

どうやらその女性は美月の母親のようだが、母親は助けを求めるように手を伸ばしている美月に気づく素振りすらも見せない。それどころか美月の事を気にかけている素振りも見せていない。

「ホント、怪獣がこっちに近づいてきてる感じがして、ヒヤヒヤさせられたわ」

「ずっと怪獣を見てばかりだったもんなお前は」

「聞こえましたか？良かったですねミツキちゃん。ちゃんとお母さんが貴女の事を見ててくれましたよ！」

倒れている美月に近づいてきた天堂はしやがんでその頭を撫でる。

「お母さん・・・見てて・・・くれたんだね」

お母さんに気にかけてもらえた。それに満足した美月は最後は嬉しそうな表情を見せて、そのまま深い深い眠りについてしまう。

「・・・最後はミツキが笑顔になって良かったな。あの母もミツキの事をあまり良く思っていないかったようだし、これでどっちも幸せなんじゃないか？」

やり遂げた表情の天堂はその場を去っていく。既にそこには倒れていたはずの美月の姿はなくなっていた。

「とはいえ、貴重な高エネルギーの結晶だ。ついでにヘルベロスのジュエルも貰っておくでしょう」

去っていく天堂の手には赤紫に輝く宝石が握られていた。

~~~~~

~~~~~

「今回もウルトラマンに助けられたね」

ヘルベロスを倒した伊智香はひっそりと基地へと戻つてくると、みんなはウルトラマンが怪獣を倒してくれた事に安堵していた。

「怪獣が倒されて安心するのはいいけど、ウルトラマンに任せっきりにするのは駄目よみんな。私達の役目は悪の組織の活動を未然に防ぐ事。怪獣が現れる前に事件を収めて少しでもウルトラマンの負担を減らしてあげないと」

安堵するツキカゲメンバーに活を入れたのはツキカゲOBでありWasabiの店長を務めるカトリーナ。現役時代は初芽の師匠をしていて、今はツキカゲ協力者としてメンバーをサポートしている女性だ。

「確かにカトさんの言う通りだね。命達もツキカゲとしてできる事をしないと面目丸つぶれだよ」

ウルトラマンばかりに任せる訳にはいかない。自分達もツキカゲとして可能な限りをする決意を固めている真つ最中だったため、伊智香はちよつと戻りにくい空気になっていた。

「あつ、伊智香ちゃん何処に行つてたの?」

「ご、ごめんなさい。少々・・・」

モモは数分ほど姿を消していた伊智香が戻つて来た事に気づき声をかけるも、すぐさま察して「ごつちこそ問い詰めてごめんね」と反応してくる。

「ごめんね。出来れば気づかれたくない気持ちには分かるけど、突然いなくなっても困るからこういう時は誰かに声をかけてから言っただけ」

「は、はい・・・そうですね」

どうやらモモは伊智香が御手洗いに行っていたのだと解釈してくれたようだ。タイガの事を話すわけにもいかないのです。その方が都合がいいと思つた伊智香はそのまま話をそれに合わせることにしていた。

星の復讐者

一月前。宇宙ステーションに宇宙デブリが衝突して爆発した。その爆発によりそのステーションにいた日本人夫婦の宇宙飛行士が帰らぬ人となり、この事はニュースでも取り上げられたがすぐに人々の記憶から忘れ去られていった。

「それで・・・その宇宙ステーション事故がこの企業とどういう関係があるんですか？」
今回のツキカゲのミッシェンはとあるベンチャー企業の裏金の証拠を掴むということなのだが、何故か初芽は宇宙ステーションの事を話題にしてきたのだ。

「ベンチャー企業コズモテクニカ。最近宇宙開発にも手を出したって聞いてるぞ初芽」
「確かこの社長が自分の誕生日に記念ロケットを打ち上げてSNSが炎上したとニュースで見たな」

「ええ。それで先日先に一度楓ちゃんがその企業に潜入捜査をしてもらったのですが、その際にこのような映像が得られたのです」

映し出された映像には宇宙空間に浮かぶ男性の宇宙飛行士が映っていた。

『罪人よ。己の罪深さを思い知れ！』

男から映像が切り替わると、宇宙ステーションに『Happy Birthday』と

書かれたロケットが衝突し、爆発してしまふ映像が映し出されていた。

『これが貴様の罪。その命、今こそこの手で奪う』

映像の最後に再び映った男性は最後にそう言い残したところでそれは終わっていた。

「師匠。これってもしかして・・・」

「ええ。ゴズモテクニカ社長に対する殺人予告ですね。調べによればこの映像は一部メディアにもリークされていて明日にでもニュースになるでしょう。表向きの護衛の方は風の部隊にお任せし、私達が調べるのはこのロケットのお金の出どころです」

ツキカゲはあくまで影の組織。表舞台には立てないので護衛任務は請け負っていない。なのでそちらは風の部隊に任せ、自分達が企業の闇を暴くという算段だ。最も風の部隊も公の組織というわけではないので変装は必須だが。

「この企業の罪を暴いて社長が逮捕でもされればこの男も復讐を思いとどまってくれるだろう」

「そうだといいいね」

テレジアと五恵は復讐を思いとどまってくれることに期待し、決行は明日の深夜0時だと言ひ渡される。

「ツキカゲはこんな感じで任務をこなしていくんだな」

「あれ？タイガ君私と一緒にだったからある程度分かってたんじゃないの？」

「回復に専念する日もあったりで常に意識があるってわけじゃないんだよ。人間だって寝て回復するだろ？だから伊智香が任務の時は意識がなかったりもしたんだよ」

伊智香が任務の間は意識がなかったりもしたというタイガに「ふくん」と反応を返す。内心は「着替えの時にもそうしてよ」と思ってたがウルトラマンというあからさまに文化が違いそうなタイガに言っても無駄だなと何も言わなかった。

「あの、初芽さん。それでその殺害予告をしてきた男性は・・・？」

モモは自分の予想が外れていくれと思いつつも恐る恐る男性の事を初芽に問いかける。案の定初芽はその『答え』を知っていた。

「これを・・・」

初芽は用意していた数週間前の新聞をモモたちに見せてくる。そこには宇宙ステーションの事件の記事とともにその夫妻の写真が写っていた。

「・・・やつぱり・・・」

話の流れ的に薄々は察していたモモは青ざめた表情になる。宇宙飛行士夫妻の夫の方は先ほどの宇宙飛行士その人だったからだ。

「事故の原因は社長の飛ばした誕生日口ケットで・・・それに怒ったこの旦那さんが殺害予告を・・・？いやいやそうだとしたらどうやってこの人は地球に戻って来たの？」

「そこなんですよ。誰かのいたずらや嫌がらせの可能性もありませんが・・・」

「刺激的過ぎるって。お化けの殺人予告よりただの嫌がらせの方が嬉しいよ」

「でもお化けだったらお化けだったらで友達になってみたいですよね！」

初芽の発言にその場の全員が「いや。それはない」と思いながらも決行当日を迎える事となった。

~~~~~

~~~~~

「こちらBブロック。異常なし」

『こちらCブロック。同じく異常なしだよ』

一般ボディーガードに扮してコズモテクニカ社長を護衛するのはしぶきと同じく凧の部隊である金髪の少女乱獅子ゆら。凧の2人と一般ボディーガード1人の3人に守られながら会見の会場へと向かおうとする社長は電話をしながら歩いていった。

「おい、アンタ護衛されてる身だぞ？電話ぐらい控えろよ」

ゆらは社長に護衛されている身ながらも歩きスマホをしている事を注意するも、社長は「おかまいなく」で止める気はない。

「来た来た！社長！宇宙ロケットの事は事実ですか？」

「先月の打ち上げたロケットが宇宙ステーションの爆発事故と関わりがあるとの事です

が

「ノーコメント」

会場へと到着すると初芽の予想通り記者にも例の映像は知られていたようで、記者達は社長へと駆け寄ってくる。その全てに社長はノーコメントと答える気のない対応をしていた。当然会場は荒れていると一人の記者がとある人物に気づいた。

「おい、あれを見ろ！」

そこにいたのは事故にあつた夫妻の旦那、九条レントその人だった。

「ぜひお話を……」

「貴様の命は……俺がこの場で消し去る！」

記者達は九条に詰め寄ろうとすると……九条は白い光線銃のようなものを取り出して社長へと向けてきた。記者達は一斉に逃げ去っていき、しぶき達も社長を逃がそうとその場から退避していく。

「復讐の……ま……く……あ……け！」

その様子を面白そうに眺めていたのは白と黒、半分半分なシャツを着ている一人の男性。その男は会場の椅子に腰かけるとしぶきは九条を止めようと光線銃を殴り飛ばす。

「もうやめい！確かにあの男は外道もいいところじゃが、復讐なんてしても何も解決はせん！」

「黙れ！お前に何が分かる！……大切なものを目の前で失った悲しみ。……俺から奈々を奪ったあいつをこの手で消し去る！だから俺は人間を超える力を手に入れた！この復讐を成し遂げるため、悪魔と契約をしてまで!!」

「待てい！……逃げおつたか」

拾い上げた光線銃を頭上へと掲げた九条は魔法陣を潜ってこの場から姿を消した。

「……俺には分かる」

「突然何？」

その様子を隠れて眺めていた伊智香にタイガが語る。

「大切なものを奪った奴への憎しみだよ。俺も大切な仲間を奪われたからな」

「気持ちには分からなくはないよ。……でも私は……」

自分は復讐に賛同できない。タイガとは違い伊智香は心の中でそう思っていた。

~~~~~

~~~~~

「社長！速く車に……！」

「ウザい！俺に指図すんじゃないよ！」

一般のボディガードに車に乗るよう言われた社長だったが、社長は乗車を拒否して

しまう。その態度に頭がきたゆらは「てめえ」と掴みかかろうとすると魔法陣でワープして来た九条が彼女達の前に現れた。

「貴様だけは・・・!!」

九条は社長へと光線銃を向けると、社長の真後ろに魔法陣が出現した。その魔法陣は宇宙の何処かへと繋げられていたようで、社長はその宇宙の何処かへと飛ばされそうになった。

「ぎやあああ!!助けてくれええ!!」

「っ!」

「痛あ!?!何すんだ!!」

半ばタツクルする形で社長を救い出すしぶき。すると社長は助けられたにも関わらずしぶきを突き飛ばすと、しぶきが魔法陣に吸い寄せられそうになった。

「しぶきさん!」

見ていられなくなった伊智香は吸い寄せられそうになるしぶきに手を伸ばすも、伊智香の非力さでは引き寄せるどころかむしろしぶきと共に引き寄せられそうになる。

「伊智香ちゃん!」

「モモ!・・・と誰だ?」

伊智香の近くにいたモモは飛び出では伊智香の手を掴むとゆらもしぶきの手を掴む。

「貴方は間違つてる！力づくの復讐じゃ何も解決しません！」
「っ！」

九条はかつて妻の奈々が言っていた「力で押さえつけるだけじゃ何も解決しない」という言葉を思い出し、無意識のうちに魔法陣を停止させる。

「その程度か？お前の愛というのは？冷たい宇宙を彷徨い続けるぞ。愛する者が永遠にな」

伊智香たちには聞こえず、九条だけに聞こえてくる悪魔の囁き。

「己の心の闇を見つめろ。すべてを憎め」

「うわああああっ!!」

取り乱したかのように駆け出した九条を追いかけようとする4人。しかし九条は光線銃のトリガーを引いて魔法陣によるワープを行う。

「この場所を燃やし尽くす!!」

屋上へとワープした九条は怒りに身を任せながら叫ぶと空に光線銃を抱える。すると先ほどの場所にいるツキカゲメンバーの元に初芽から通信が入った。

『大変です皆さん。その光線銃から発せられる電波の影響で使用済みの人工衛星が地上へと落下し始めています。このままでは相当な被害です。こちらでも可能な限り対処はしてみますが、皆さんはあの人を止める事を最優先にお願いします』

「了解です！」

「たぶんあの人はこのビルの何処かにいる。手分けして探そう」

目的が目的なのでこのビルにはいるはずと判断したモモは手分けして探す事を提案するとみんなはそれに同意する。伊智香はタイガスパークでワープ先のエネルギーを感知して屋上へとやってくる、彼は魔法陣を潜りながら光となり、その光が魔法陣とともにロボット怪獣へと変貌していく光景があった。

「人間が・・・怪獣に・・・」

「何者かがあの人の憎しみの心を利用したんだ。こんな事ができる奴は・・・まさか・・・」
タイガはトレギアの仕業かと疑うと伊智香はロボット怪獣を見上げる。

「止めるよタイガ君！」

「ああ！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

伊智香はそのロボット怪獣を見上げるとタイガアクセサリーを手にとって右手に持ちかえる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シユアー！いくぜー！」

「駄目！」

ウルトラマンタイガに変身した伊智香。タイガはロボット怪獣、ギャラクトロン Mk II にも似た怪獣・・終わりの光、荒天終輝センコウを倒すため戦おうとするも伊智香の意思でその動きが静止させられる。

「待つてタイガ君！あの人を傷つける事になる」

「でもそれじゃこっちが・・うわっ!？」

戦わなければこちらがやられてしまうとのおうとしていたタイガにセンコウは周囲の光エネルギーを吸収して自身のエネルギーとした銃剣から閃光のような光線を放ってくる。それを跳び上がる事で避けたタイガは右拳を振り下ろして銃剣を地面に叩き伏せた。

「今だ！」

「だから駄目だつて・・ッ」

伊智香とかみ合わないタイガはセンコウの手から放たれた光線に吹き飛ばされてしまう。

「伊智香！気持ちは分かるが止めたかつたらもう戦うしかないんだ！」

「でも・・でもお・・」

内心伊智香も戦うしかないと分かつてはいるが認めきれずに戦うのを躊躇う。その間にも倒れているタイガにセンコウは銃剣を幾度となく振るって追い討ちをかけてきた。

~~~~~

~~~~~

「フフ．．！」

会場のスクリーンにタイガとセンコウの戦いを映し出し、白と黒のハーフ&ハーフの服を着た目立つ格好をしていた先ほどの男性が子笑いしながらもポップコーンを頬張っていた。

「お隣、よろしいですかトレギアさん」

「霧崎。この姿の時はそう名乗っているんだ。よろしくね」

隣の席に座ろうとする天堂に男性は霧崎と名乗る。

「どう？君にあげた身体、上手く使えてる？」

「ええ。貴方に救われた命だ。貴方の目的のために私も助力を惜しまない。これはそのお礼です」

天堂は終わりの雷が倒された際に得た宝石を霧崎へと差し出す。

「上手く使えてるみたいで嬉しいよ」

ニタリと笑う霧崎はコーラをズズリと一気に飲み干していた。

~~~~~

~~~~~

「うわああああっ!?!」

圧倒的センコウの攻撃に手も足も出ないタイガ。もはや九条を助ける助けがない以前にこの状況をどう乗り切るかに思考をシフトしようとしていたタイガと伊智香の前に一つの光が舞い降りた。

「もうやめて!・レント!」

降りてきた光はセンコウのメインコアである胸部のクリスタルを突き抜けると、コズモテクニカの屋上に舞い降りる。その光は九条の魂ともう一人、その妻である奈々の魂を運んできたのだ。

「奈々・・・どうやってここに?」

「貴方の憎しみが悪魔を呼んだように、私の強い想いは賢者を呼んだ。心優しい賢者さんは私の願いを叶えてくれたの?」

「君の願い?」

九条の魂が抜け出た事で一時停止するセンコウに、ひとまず安心だと判断した社長はモモとしぶき、ゆらの3人とともに屋上へとやってきて2人を見守る。

「貴方の復讐を止めること。一緒に宇宙に帰ろう。・・・私達の命が消えたあの場所へ」
「俺は・・・」

自分が命尽きていた事に気づいてなかった九条は彼女の発言によりようやく自分の死を自覚する。すると奈々は九条の事を優しく抱きしめた。

「空から地球を見守ろう。2人で」

「・・・うん」

復讐を捨て妻と共に地球を去る事を選んだ九条。すると2人の前に賢者の光が降りてくる。

「ありがとう賢者さん」

「どういたしまして」

賢者の光に対して敬礼をした2人は笑い合いながら光となって消えていく。すると賢者の光は2人を見届けてからタイガのカラータイマー目掛けて飛んできた。

「久しぶりだなタイガ」

タイガの中に入り、伊智香の前に現れた光。それはタイガへと話しかけてきた。彼こそがタイタス。トライスクワッドのウルトラマンタイタスだ。

「おいおいタイタス！これは夢じゃないんだよな？」

「ああ！再び共に戦う時が来たようだ」

「また一緒に戦えてうれしいぜ！」

タイガは再開を嬉しがるも、そんな場合ではない。

「あ、あの再開を喜んでる場合じゃないと思うんですけど・・・」

「おっと、そうだったな」

「賢者！ウルトラマンタイタスの力を君に！」

タイタスの光がホルダーへと宿ると、その光はアクセサリーの形へと変わる。伊智香はそのアクセサリーを手を取った。

「力の賢者！タイタス！」

右手にアクセサリーを持ちかえた伊智香はそれに宿るタイタスの力を解き放つ。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

赤と黒の体色をした強固な筋肉をしたウルトラ戦士。ウルトラマンタイタス。

「又ウン！」

夜の町に出現した彼は最も力強く逞しいという意味を持つモスト・マスクュラー。

「ハアッ！」

背中の広がり強調するラットスプレッド。

「フウン！」

横から見た胸の厚みを強調するサイドチェストとポーズを決める。一見ただポーズを決めてるだけのように見えるが自身の攻撃力を高めるといふ効力があるのだ。

「憎しみの力だけでまだ動くか」

宿っていた魂が成仏し、機械の身体のみが残るセンコウはその身に宿る憎しみのエネルギーだけでまだ動く。それに対してタイタスもその拳を構える。

「賢者の拳は、すべてを砕く！」

地響きを響かせながら駆け出していくタイタス。センコウはそれに銃剣を振るうとタイタスはその銃剣へ向けて拳を振るった。

「フウン!!」

タイタスの拳は銃剣を粉々に粉碎するだけでなくセンコウを激しく吹き飛ばす。

「ハアッ！ジードレットを使いなさい！」

「うん！」

そして起き上がろうとするセンコウにタツクルを決めて、後退させると右腕を右上に伸ばすポーズを取るとジードレットを使うよう伊智香に指示をする。

『カモン！』

『ジードレット・コネクトオン』

ウルトラマンジード・プリミティブの力を宿すジードレットをタイガスパークにかざした伊智香。するとタイタスは作り出した光弾にジードレットの闇のパワーを纏わせた。

「レッキング・・・バスタアア!!」

闇のパワーを纏わせた光弾をセンコウ目掛け殴り飛ばすと、それが命中したセンコウは粉々に砕け散る。すると爆炎からは1つの光が飛んできたのでタイタスはそれを掴み取ると、伊智香の手にはまたも指輪が握られていた。

「また指輪?」

「ウルトラマンの力を感じる。不可解だ」

「・・・まあとにかくこっちはなんとかなったね。衛星の方はどうなったんだろう?」

一安心した伊智香は人工衛星はどうなったかと心配すると、初芽から通信が入った。

「大変です!人工衛星の一機だけアクセスが不能で地球へと落下してきています。現在落下コースを計測中です」

「いかな。トオア!」

それを聞いたタイタスは人工衛星の落下を食い止めるため宇宙へと飛び立つ。僅か数十秒で宇宙へとやってきたタイタスはその視界に人工衛星を捉える。

「これが・・・宇宙・・・」

一方伊智香は初めての宇宙に感動すると同時に宇宙デブリを見て何とも言えない気持ちにもなる。そんな中、とあるモノたちの策略によりまたしても怪獣が出現した。

~~~~~

~~~~~

「祭りの時間は終わらない」

タイタスが宇宙へ到着する少し前。霧崎は立ち上がり青い仮面を展開すると、天堂は銃を手取る。

「貴方が赴くまでもない。少しちよっかいを与える程度なら・・・これで充分だ」

1台のミニカーを取り出した天堂はそれを手のひらにぶつけて怪獣へと変形させる。「アタックチェンジ」

それを空中に投げ上げた天堂はそれを銃で撃ち抜くとそれは禍々しい光に包まれて宇宙へと飛んでいく。

『GO！ギャラクトロン！』

その禍々しい光は白い竜のロボット怪獣。ギャラクトロンとなってタイタスの背後

に現れた。

「つーギャラクトロン！敵の差し金か！だが貴様を相手にしている暇はない！」

人工衛星の方を優先したタイタスはその拳で落下している衛星を粉々に粉碎した。

「・・・暇ができた。相手をしてやろう」

タイタスがギャラクトロンの方を振り向くと、ギャラクトロンはタイタス目掛けて光線を放ってくる。

「フンッ！」

その光線を拳で弾いたタイタスは伸ばされてくる尻尾の爪を左拳で砕くと、その懐に入り込んで胸部のクリスタルを打ち抜いた。

「終わりだ。プラニウム・・・バスタアアア!!」

エネルギーを集束させ光弾を作り出したタイタスはそれを殴り飛ばすと、その光弾はギャラクトロンに命中する。その一撃で粉々に砕けたギャラクトロンにタイタスは疑いの目を向けた。

「やはりこれもトレギアの仕業か？いや、足止めにしてもこの直接的な手段はトレギアからならぬ行動だ。・・・トレギアの他にも裏に誰かいると警戒しておくべきだな」

『タイタス、タイタス。掃除するから代わってくれ』

「うむ」

『ウルトラマンタイガ!』

タイガは交代すると周囲の宇宙デブリを見渡す。

「さてと、片付けちゃおっか」

「待ってタイガ君。これは地球人の出したゴミだから地球人で何とかしないと」

「えっ? それでいいのか?」

「うん。それがあの夫婦への伴いになると思うから・・・」

タイガは「そういうものか」と言いながら地球へと帰還して変身を解く。すると丁度社長がしづき達を話しているのに出くわした。

「こういうのはどうだろうか? 事故にあった宇宙飛行士の慰霊碑をロケットに乗せて・・・うわっ!」

「黙ってるクズ」

「まったく奴は・・・フツ」

懲りない社長を拳で黙らせたゆらはスカツとした表情になるとため息をつきながらも何処か満足そうなしづきとともにその場を去っていった。

~~~~~

~~~~~

「聞いた伊智香ちゃん。あの社長、裏金発覚で捕まったんだって」

その後、不正なお金の流れが公にされた社長は無事逮捕され、謎は残るが今回の事件も無事解決となった。

「これであのお2人の魂が無事天国に行ければいいですね」

「あの2人はそれでも宇宙から見守りそうだけどね」

2人は笑いながらも走り込みをしていると、10センチ台の半透明なタイガは右肩に座り込む。

「まあ悪い奴は報いを受けなきゃだからな。ここがいい落としどころだろ」

そしてさらに左肩には10センチ台の半透明なタイタスが左肩でスクワットをし出した。

「しかしこれは・・・君に丁度いい適切なトレーニングと判断できるな。流石は君の師匠だ」

『タイタスさん・・・。何でスクワットをしながらなの？・・・というかタイタスさんも居座る感じなの？』

「ええ！お世話になります！」

伊智香は「なんか増えちゃった」と心の中でツツコミを入れつつもモモと共にトレーニングを続けるのだった。

キミへのペンダント

「ああ、いったいどうしてこうなっちゃったんだよ……」

青年はスマホの画面を眺めながら頭を抱えていた。つけたままのテレビに映るのはバイト先である飲食店の厨房で調理器具を使い悪ふざけをする青年自身。どうやら彼は仲間とともに悪ふざけをした動画をSNSに投稿した結果、拡散・炎上してしまったのだ。

「賠償金800万はどうかになったけど……もうどうすりゃいいんだよ俺は」

高校生である彼はバイト先から賠償金を請求されただけでなく、今は自宅謹慎だが実質退学処分という事が確定した状況となっている。両親もその800万を何とかしようとしてくれて住んでた家を売る形で何とか金銭的には何とかになったのだが……父親は息子がそのような事をしたのが会社知られ降格処分。母親も夜までパートの毎日。自分はSNSが拡散し、今もテレビの話題にされているためまともに外も歩けない。

「どうすりゃって……貴方自身の責任じゃないですか」

「そりゃそうだけども……ってえっ?」

青年が振り返るとスーツ姿の女がいつの間にか部屋に入っていた。

「えっ？あ、アンタ誰だよ？」

「貴方が謹慎中に副担任になった先生ですよ。当然ながら事情は把握してます。だから一度会いに行こうと思つて足を運びました」

わざわざ足を運んできた副担任に対して青年は皮肉を込めて「わざわざどうも」と呟くと、副担任はそれに動じずにバッグから小包を取り出す。

「短い付き合いだと思いますがお菓子でもどうぞ。私の手作りですよ」

青年は短い付き合いという彼女に「はつきり言つてくれるな」と思いつつもお菓子を受け取る。

「貴方のやってしまったことは所謂バイトテロと呼ばれるものですよ。チェーン店でない事や貴方が学生という事もあつて800万で済まされたようですけどホントならもっと高額を請求されていたはずなんですよ。学校も苦情の電話対応に追われています」

副担任はその生徒を突き放すようにバイトテロの事を話す。そしてようやく青年は自分ののでかした事を自覚した。

「俺は……なんてことを」

「ようやく反省ですか。……とはいえ次は謹慎が明けですね。その時にまた。ごきげんよう」

副担任は彼の部屋を出て行くと、彼の家族が住んでいるアパートへと振り返る。

「さて貴方はどうですかね？さっきのガチャを爆死してしまった人は本当にハズレくじでせいぜいSR程度のグルジオにしかなくなってくれなかったのですが・・・」

人を怪獣へと変えてしまう事をどうとも思っていない様子の副担任。いや、終わりの魔獣を復活させんとする天堂は次こそはと期待しつつ何処かへと去っていく。

「・・・なんだよあの副担任」

青年は釈然としない気持ちながらも小包の中のマフィンを手取る。

「美味そうだな」

そのマフィンを瞬く間に平らげた青年に異変が起きたのはそれから1週間後の出来事だった。

~~~~~

~~~~~

「なんかこうさ、侵略だ〜っ！って感じに来るかなって思ってたけど、意外と大人しいよね。宇宙人さん達」

「話を聞く限り侵略目的ってわけじゃないですからね」

楓と命が共に暮らす1室。2人は意外と攻めてこない宇宙人達の話をしていた。

「地球は怪獣を売るための言わばプレゼン会場みたいな扱いをされてるらしいですからね。侵略しにきてるとは違うようですよ」

「人様の星を勝手にプレゼン会場にしないで欲しいよね〜」

「地球をくれって言った宇宙人に誰かがOKでもしたんじゃないですか?」

スマホのニュースを見る限りソラサキ以外に海外にも複数体怪獣が出現し、ある程度暴れまくったら姿を消したらしい。ヴィラン・ギルドが怪獣のプレゼンをして落札されたら、その必要はなくなり終了という流れのようだ。

「とはいえプレゼン前に必ず下見に来る人達がいるという話ですし、そこを確保しないとですよ!」

楓にそう言われた命は「そだね〜」と軽く返事をしながらもギターを手に取り、演奏し始める。

「あつ! そうだった! 思い出した!」

演奏を中断した命はバッグの中から紙袋を取り出すとそれを楓に手渡す。

「何ですかこれ?」

「いつも頑張ってる楓にプレゼント。開けてみて」

「また勝手に。今月も厳しいんですよ。・・・わあ!」

楓は家計を気にしつつもその紙袋から中身を取り出すと・・・その袋の中からは赤いペンダントが入っていた。

「今日帰りに露店で買ったんだ。楓にあげるよ。命のぶんもあってお揃いだよ」

「お揃い。・・・ありがとうございます！」

楓はそのペンダントを素直に喜ぶ。そのペンダントが今回の騒動の原因だとも知らずに。

~~~~~

~~~~~

「本日のミツシヨンなのですが、ソラサキの町で露店を開く男性、その人から買ったペンダントを身につけると原因不明の体調不良に陥るという話です。今回はその裏を取るためにペンダントの確保をすることなのですが・・・」

「えっ!?!」

画面に映し出されたペンダントに命と楓は心当たりがあった。昨日命が勝ってきたペンダントがまさにそれなのだから。

「ねえ命ちゃん。楓ちゃん。そのペンダントってさ・・・」

「い、いや、まさかねえ・・・。まさかね」

慌てる命はチラリと楓に視線を移すと、楓はササツと自身の身に付けていたペンダントを隠した。

「・・・五恵ちゃん。テレちゃん。手伝って」

「うん。ごめんね命ちゃん」

「すまない楓」

五恵とテレジアはそれぞれ命と楓を取り押さえるとモモは2人のペンダントを確認する。案の定そのペンダントは噂のペンダントだった。

「申し訳ありませんが回収させていただきますね」

2人は渋々ペンダントを初芽へと手渡す。

「ごめんね楓。今度代わりのものを買ってあげるから」

「いえ。おかまいなく。・・・なんか私もそれを身に付けてから少し疲れるような感覚があったので」

どうやら2人にも不自然な体調不良が発生していたようで初芽はそのままペンダントの調査。命と楓はペンダントを買った場所に再び向かってみることにした。

「師匠。昨日はここだったんですよね？」

「うん。昨日はね」

数十分後、命は昨日ペンダントを買った場所へとやって来た命と楓だったが、露店は

場所が変わってしまっていたようでその場にはなかった。

「やっぱり場所を変えてきたみたいだね」

「どうします師匠？」

「・・・楓は休んで。楓の方が今日はペンダントを付けてた時間が長いでしょ？その間にちよつくら探してくるよ」

「そんなこと言ったら師匠の方が昨日から付けてたじゃないですか！」

2人が言い争っているとき偶然にも同じ人から買ったであろう例のペンダントを付けた女子学生が通りすぎる。

「ちよつといいかな？」

「え？は、はい」

2人は学生からそのペンダントを買った場所を聞き、さっそくその場所を他のメンバーへと伝えた。

~~~~~

~~~~~

「急いで伊智香ちゃん！」

「ま、待つてください〜い」

モモと伊智香は命達から聞かされた露店にそれなりに近かったので急ごうとしているのだが・・・モモと伊智香では基礎体力から違うため、差が付いていた。

「伊智香！モモに放されてるぞ！」

「鍛え方がなっていないな。もつとトレーニングをした方がいいぞ」

「・・・ツ。えいつ！」

タイガとタイタスは伊智香の肩に座りながらそう言ってくる・・・ちよつとイラつと来た伊智香はわざと軽くジャンプをした。

「おわつ、ちよ!?!」

スクワットをしていたタイタスは何故か無事だったが座っていたタイガは伊智香の肩から落下した。

「ツキカゲはそれぞれ師匠と弟子という関係があるのだな。私達トライスクワッドにもそれぞれ師匠と呼べる存在がいるのだぞ」

「そうなのタイタスさん？」

「ああ。私は親友だった男の父親であり育ての親が。タイガも自身の父が師匠であったと聞く。もう一人・・・フーマも誰かから技を教わったとは言っていたが詳しくは聞かされていないな」

「っ?」

何かが落ちる音を聞いた気がした伊智香は一度足を止めて辺りを見渡す。そこには1つの青いペンダントが落ちていた。

「誰かの落とし物かな?」

辺りには自分とモモ以外誰もいない。ひとまず伊智香はそれを預かることにし、後で交番にでも届けようと考えつつもモモの後を追っていく。

「無事ウルトラマンとなる者が拾ったか。．．．それでいい。仲間達と共に達者でな」

腕が4本ある宇宙人はわざと伊智香の近くにそのペンダントを落とししたようで．．．そのペンダントを伊智香が拾ってくれたことで一安心したその人物は風と共に姿を消してしまった。

~~~~~

~~~~~

「お兄さん。ちよつといいですか?」

「ん? ああ、昨日の娘だね。今日も来てくれたのかい?」

露店をやっている青年にまずは自分も欲しい客を装って接触する命。

「昨日のは友達にあげちゃったんで自分のぶんもと．．．まだあります? 出来れば2人ぶ

ん」

「おや、もう1人。妹かな？」

「後輩です」

「OK。2人ぶんだね」

青年は赤いペンダントを紙袋にしまおうとすると、命はその手をガツシリと掴んだ。「なんてね。お兄さんから買ったペンダントで体調を崩してる娘が続出してるのは調べがついてるんだ」

「お話、聞かせてもらいますよ」

「チツ、ここでの商売はここまでか！」

楓に背中から手裏剣を突き付けられた青年は商売に見切りを付けながら慌てた様子で路地裏へと逃げていった。

~~~~~

~~~~~

伊智香はスクワットをしながらもバランスを保っているタイタスからそれぞれにも師匠がいると聞かされながらも露店へと到着すると、すでに到着していた命と楓が露店の男から話を聞いていた。

「チッ、ここでの稼ぎはここまでか！」

路地裏へと逃げていく男の顔が地球人のそれではないものへと変化する。昆虫のような巨大な複眼を持つシャプレー星人だ。

「だけど地球人達からそこそこ生命エネルギーは集められた」

「このパターン！きつと集めたエネルギーで怪獣を出す気だ」

怪獣を出される前にシャプレー星人を確保しようとする4人だったが、それは一歩及ばずのところまでシャプレー星人の持つ青い水晶が輝いた。

「出てこい！ベムラー！」

青い水晶から発せられた光は1体の怪獣を出現させる。宇宙怪獣ベムラー。凶悪な宇宙怪獣であるベムラーが集められたエネルギーによって強化され青くなった背びれと2本の角を持つ強化個体となったベムラーだ。

「ベムラー。それも強化型か。油断するなよ伊智香！」

復帰していたタイガは油断をしないよう伊智香に注意喚起をすると、伊智香はこつそりとその場を離れてタイガスパークを出現させる。

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はすぐさまそれを右手に持ち替えて、それを

空に突きあげる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

伊智香はウルトラマンタイガへと変身すると、タイガは強化ベムラーの前へと降り立つ。

「デモンストレーションだ！ウルトラマンをやっちまえ！」

「その石。それで怪獣を操ってるんだね！タア！」

シャプレー星人の持つ青い石。それが怪獣を操るコントローラーの役割をしているのだと判断した命はそれを狙ってクナイで攻撃しようとするも、シャプレー星人はバツク転でそれを避ける。

「あつぶないね。せっかくエネルギーを集めたんだ。これが良い値段が付くようしつかりプレゼンをしないとさ！さあ！暴れるベムラー！！」

ベムラーを暴れさせようとするシャプレー星人。しかし次の瞬間、その背後に何者かが立ってシャプレー星人の肩を叩いた。

「ご苦労。いいカンジの仕上がりだな」

「おっ！さつそく買い取り手か！」

「ああ。あれならいい餌になりそうだ」

「餌だあ？そいつはどういう・・・」

シャプレー星人はせっかく自分の作り上げたベムラーが餌扱いを受けて気に入らないと後ろを振り返ろうとすると・・・背後に立っていた男は手に持っていたビーフジャーキーをまるでナイフのように振るい、シャプレー星人を斬りつけた。

「があ!？」

切られた場所を押さえながらその場に膝をついたシャプレー星人に謎の男は追い討ちとばかりに蹴り付ける。既に致命傷を受けていたシャプレー星人はその一撃で力尽きると男は転げ落ちた青い石を拾い上げた。

「さあ、来い。終炎機エンジンジョー」

男がエンジンジョーという怪獣の名を呼ぶと4つの宇宙船のような何かが飛んできて、それが1つに合体してロボット怪獣キングジョーによく似た赤いロボットになる。終炎機エンジンジョー。終わりの火という二つ名もある終わりの魔獣の1体だ。

「エンジンジョー!こいつも復活したのか!？」

驚くタイガにエンジンジョーはベムラーの頭を掴みあげ、そのままベムラーの熱エネルギーを吸収した。熱エネルギーを吸い尽くされたベムラーは体温が無くなり氷のように固まってしまうと氷のオブジェが碎けるように碎け散った。

「この間もそう・・・。ヴィラン・ギルドが呼んだ怪獣をあなたの怪獣の餌にしてたんだね」

「・・・ザツツライ」

「だったらアナタを拘束するよ」

「やってみな。お嬢さん」

命の振るうクナイを難なく避ける男はニヤニヤした表情でビーフジャーキーを「食べる？」と命に問いかけてくる。命はその手を弾いて食べない意思を示しながらも斬りつけようとするも・・・その男の姿は闇に消えるように消えていた。

~~~~~

~~~~~

「タアアア！」

ベムラーと戦うつもりだったがエンジョーの登場でそちらと戦う事になったタイガ。タイガはエンジョーに連続パンチを叩き込むも、高熱を帯びているエンジョーのボディを殴ったタイガの方が手に火傷を負うようなダメージを受けていた。

「アアツ!!」

「熱っ・・・アツアツのフライパンを触ったみたい」

「だったら・・・シユアア！」

「これでは触れることができないと判断したタイガは距離を取るとスワローバレット

を放つも、強固な装甲のエンジヨーにはその程度の光線では傷一つつけられなかった。

「触れないなら冷やそうタイガ君！」

『カモン！』

『ブルレット・コネクトオン』

「応っ！アクアブラスター！！」

水の力を乗せた光線アクアブラスターでエンジヨーを冷やそうとするも、その光線に對してエンジヨーは熱線を放ってそれを相殺してしまう。

「このっ！伊智香！オーブレットだ！」

「うん！」

『カモン！』

『オーブレット・コネクトオン』

「スプリームブラスター！！」

タイガはオーブレットの力を使いスプリームブラスターをエンジヨー目掛けて放つも、エンジヨーは4機のマシンに分裂して光線を回避した。

「何だと!？」

驚いたタイガの目の前で合体し直したエンジヨーは両手の平の火炎放射口から炎を放ってくる。

「っ!!」

咄嗟にそれをバリアで防ぐタイガだったが・・・その火炎放射の勢いに押し負けてビル数個をなぎ倒すように吹き飛ばされてしまった。

「な、なんて火力だ」

『代われタイガ! パワー対パワー! ここは私が・・・』

『待ちな旦那。頭と仲間は生きてるうちに使うものだけ』

「その声は・・・!」

タイガは伊智香の持つペンダントから聞こえてきた声に反応すると、そのペンダントは光となって伊智香の腰のホルダーでアクセサリーに変化した。

『よう嬢ちゃん。お前は俺を呼び出すチケットを手にした。俺の事はこう呼びな! 風の覇者、フーマってな』

『カモン!』

「風の覇者! フーマ!」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフーマ!』

そして右手を突きあげると、伊智香の姿は青い疾風のウルトラマン。ウルトラマン

フーマへと変身した。

「久しぶりだな！フーマー！」

「これで3人が揃った！」

「生まれた星は違っても！」

風の覇者。ウルトラマンフーマ。

「共に進む道は1つ」

力の賢者。ウルトラマンタイタス。

「我ら！」

光の勇者。ウルトラマンタイガ。

「トリスクワッド！」

今ここに3人のウルトラマンチーム。トリスクワッドが再集結した。

「覚悟はいいか嬢ちゃん。ぶっちぎるぜ!!」

残像を残すほどの高速移動で距離を詰めたフーマは手刀でエンジョーの関節部を攻撃すると右腕の火炎放射器の部分が切り落とされ、地面へと落下する。

「セイヤッチ！」

続けて回し蹴りで左の火炎放射を逸らすと残像を残す高速移動で後ろへと下がり飛び上がる。そして空から光の手裏剣を飛ばして左の火炎放射器も破壊した。

「ニンッ！」

複数人に分身したかのように見える高速移動でエンジョーを翻弄するフーマ。神速とも言つていいその高速移動は熱線を放とうとするエンジョーでは捉えられず、明後日の空へと熱線は飛んでいく。

「セイ！シャア！セイヤツ！」

圧倒的速さのフーマにとつて隙だらけとも言えるエンジョーに光の手裏剣や光刃を飛ばして攻撃するフーマ。その攻撃は全て関節部や接続部をピンポイントで狙つていて、エンジョーは分裂して回避することができなくなる。そこでフーマのカラータイマーが赤く点滅し出した。

「おつと時間か。さあ仕上げだ！嬢ちゃん！ギンガレットを使え！」

「うん！」

『カモン！』

『ギンガレット・コネクトオン』

ウルトラマンギンガの力を宿すギンガレットの力を解き放ったフーマは右手でVサインを作るとそれを挑発するようにエンジョーへと向けた。

「これはピースマークじゃねえぞ。お前はあと2秒で終わりつてことだ」

その宣言の通り、フーマは目にも止まらぬスピードで必殺の光刃。七星光波手裏剣を

二連撃で放ち、2秒でエンジョーを撃破した。するとエンジョーからは1つの光が飛んできてそれは伊智香の手の中で指輪となった。

「まただ・・・」

「なんだそれ？指輪か？なんか変な感じがするぜ」

伊智香はまた出てきた指輪を怪しがりながらも変な感じだと軽く済ませる。

「フウ。セイヤツ！」

フーマが空へと飛び去って行き変身が解かれる。

「つてなわけだから俺もよろしく頼むぜ嬢ちゃん！」

10cm台の半透明なフーマは伊智香に簡単に挨拶をする。タイガとタイタスに続いてフーマもとなると勘弁してほしいと考えた伊智香は深いため息を突きながらも現状を受け入れるしかできなかった。

~~~~~

~~~~~

「はい、楓。改めてプレゼント！」

命は人々から生命エネルギーを集めるペンダントの代わりに楓に別のプレゼントを与えた。

「今度は大丈夫なやつなんですよね？」

「もちろん。今度は露店じゃなくちゃんとしたお店で買ったものだからさ」

楓はそのプレゼントを開けてみるとそこには髪留めが入っていた。

「わあ・っ。師匠、ありがとうございます！ところで師匠もしかしてプレゼントくれた理由って……」

「気づいてた？昨日つてさ命と楓が師弟になった日じゃん。昨日の帰り道にふと思い出してさ」

「師匠……覚えててくれたんですね」

楓はいつもそういったことを忘れてしまっていた命がそれを覚えていた事とプレゼントを貰えた事に感動する。

「いつもありがとね楓。私の弟子でいてくれて……ありがとうございます」

キミの決める未来

突如としてソラサキの隣町に現れた怪獣。ツキカゲメンバーは学校の時間帯で対処のしようがなかった。

「先生、具合が悪いので保健室に行ってきます」

学校を抜け出した伊智香はウルトラマンタイガへと変身して、突如出現した怪獣へと立ち向かう。

「シユアー！」

真つ先に跳び蹴りを決めたタイガは連続パンチを浴びせてからアップパーカットを決め、怪獣を怯ませる。すると怪獣は禍々しい色をした毒の光線を放ってきた。

「ぐあああああつ!!？」

「うう・・・何この光線?！」

毒の光線はタイガの左腕に浴びせられ、出たばかりのタイガ早くもカラータイマーが赤く点滅してしまう。すると膝を付いて痛がるタイガに怪獣は嘔みつき攻撃をしかけてきた。

「っーイデユア!!？」

咄嗟にそれを左腕で受け止めてしまったタイガは次の光線が撃たれるよりも先に身体を虹色に輝かせてエネルギーを集束させる。

「ストリウムウ・・・ブラスタター!!」

口の中に直接放たれたストリウムブラスタターは怪獣を内側から爆発させてタイガは何とか窮地を脱すると変身が解かれる。しかしそのダメージは伊智香にも少なからず残っていてメンバーの元に戻った伊智香は「昨日家で火傷をした」とその場しのぎの言い訳をしのいだった。

~~~~~

~~~~~

「いきなり学校を出て行っただと思えば怪我をして帰ってくるなんて、まだまだ未熟ね伊智香」

「とりあえず怪獣も消えて良かったじゃないですか」

ツキカゲ基地。伊智香は楓にまだまだ未熟と注意されて話題を怪獣へと切り替えた。

「それがね、まだちゃんと倒されてないかもしれないのよ」

「えっ?」

「風の部隊に投降してきた男の人・・・その人も宇宙人なんだけどね。その人の話によれ

ばあの怪獣の名前はセグメゲルっていつてその男の人の故郷を滅ぼした侵略兵器らしいんだ。セゲル星人は自分達の住みやすい星を次々と侵略してその領土を拡大する人達で、まず召喚師と呼ばれる人がセグメゲルを召喚して惑星を蹂躪させる。召喚師がいるかぎりあの怪獣は何度でも現れる。・・・って証言してたらしいのよ」

Wasabiの店主でありツキカゲの協力者であるカトリーナは風の部隊からの報告を一同に伝える。

「つまり怪獣を呼ぶ人を捕まえないといけないってことですよね」

「そうそう、そういうのだよ。久しぶりにツキカゲっぽい刺激だよ」

「ただそのセゲル星人ってのは地球人とほとんど同じ姿をしているらしくてね。手がかりは召喚するための宝石だけって話よ」

相談した結果初芽と怪我をしている伊智香がドローンや町の監視カメラでそれらしい人物を探し、他のメンバーがソラサキと怪獣が出現した隣町の搜索をするという事になった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『出現地点の地点に電磁波の乱れが観測されました。おそらく召喚士の方は量子特異点

となるポイントを利用して怪獣を出現させたと考えられます。召喚士は破壊されなかつた場所にいるとも考えられ、以上のことからお相手がいると思われるポイントに一番近いのは五恵ちゃんですね。五恵ちゃん。くれぐれもご注意を』

「とはいったものの・・・やっぱり手がかりが少ないんだよね」

手掛かりになるものが宝石だけでは探しようもなく、五恵は手詰まりになりながらもシヨッピングモールを歩いているとカワイイ猫のぬいぐるみが視界に写った。

「かわいい〜」

「カワイイ〜」

五恵とほぼ同時にかわいいと反応した少女。この出逢いが2人の運命を大きく左右することとなる事を本人達は知らない。

「仕事・・・生まれて初めてサボっちゃったんです」

同時にカワイイと反応していた少女の名は葵。本人曰く家庭の都合で高校に通わずに働かざる負えず、その仕事申中だったのにも関わらず思わずサボってしまったらしい。2人はそのまま喫茶店へと移動すると五恵は葵の話を開始した。

「葵ちゃんってどんな仕事をしてるの?」

「うちの会社、新しく土地開発するところの下調べを請け負ってるんです」

「土木系の仕事なんだ。大変だね。さっきあの辺りにいたのも?」

「うん。場所はいいけど強豪がいるからどう対処しようか審議中・・・かな。まあ他にも色々とね」

「難しいことは良く分からないけど・・・色々大変そうだね」

土木系な事は難しいと思いつながらも大変そうなことだけは理解する五恵。すると葵は羨ましそうに「こっちの人はみんな楽しそうでいいなあ」と呟いた。

「うちはなんか親のせいもあって・・・仕事しか許されない空気だね。仕事にいらぬものは全部敵って感じで重く苦しくて・・・」

「そんな仕事辛くない？」

「私にはこれしかないから」

「そうじゃないと思うよ。仕事なんて他にもたくさんあるし・・・」

「そんな簡単じゃないんだ。決められたレールつてのもあるけど、私一応この仕事の責任者だし・・・代わりもいなくて、自分が辞めたいってだけで辞めるわけにはいかないの！」

思わず本音を暴露してしまう葵。それに気圧されつつも五恵はその肩に手をポンと乗せる。

「仕事に人の未来を決める権利はないよ。私もね、今やってる仕事を始めた頃、やっていける自信がなかった頃があったんだ。そんな時にね、私の大好きな人が言っていたの。自

分の未来は自分で決めていいんですよって」

五恵はツキカゲに入った頃を思い出しながら初芽に言われた事がある言葉を葵に伝える。すると葵は顔を俯かせながら悩み出す。

「やりたいことなんて・・・考えた事もない」

「私も今やつてる仕事には年齢制限？みたいなのがあつてね、私もあと2〜3年ぐらいで引退しないとイケないの。その後の事なんて私も考えてないよ。だからさ・・・一緒にゆつくり考えていこうよ。これからやりたい事を」

「ありがとう」

~~~~~

~~~~~

「伊智香！聞いてくれ！」

ドローンの映像をチェックしていた伊智香に声をかけてきた小柄な少女の名は白虎。かつてはツキカゲと敵対する組織の一員だったのだが、今はツキカゲの一員として活動しているのだ。そんな白虎が話しかけてきた理由が・・・

「最近ここに幽霊が出るんだ！」

「ゆ、ゆゆ幽霊?」

幽霊を怖がるタイプの伊智香はその話にビクリと反応してしまう。

「幽霊ですか? 白虎ちゃん、いったいなにかあったのですか?」

チエツクをしながらも白虎の話題に興味を持った初芽。すると白虎は幽霊の話語り出す。

「この間な、オレンジジュースを飲んでたらいきなりボチャンって何かが落ちたようにオレンジジュースがバシャってなつたんだ」

「あつ・・・」

その話に伊智香は心当たりがあつた。その場に自分もいて目撃していたから分かる。コップの淵に座っていたタイガが白虎がテーブルをドカッと叩いた振動で落ちた事を。

「それにな! 読んでた漫画を床に置いてたらいつの間にかページが進んでたりしたんだよ」

「あつ・・・」

それも心当たりがあつた。その漫画は伊智香が白虎に貸した漫画で、タイガが読んでいた真つ最中の漫画を貸してしまったのだ。つまりそれも続きが気になったタイガが勝手に読んだ可能性が高い。

「・・・」



「読んでた最中の漫画を貸した伊智香が悪い」

無言で10cmタイガに視線を向けると、タイガは伊智香のせいだと言い訳をしてきた。

「それは・・・困った妖精さんですね」

あくまで夢を壊すつもりのない初芽はその『幽霊』を『妖精』と表現してあげていた。しかし内心では「白虎ちゃん自身のせいでは？」と思っていたのは内緒だ。

「っ！見つけました。この人が召喚士ですね」

そんなやり取りをしつつもドローンの解析を終えた初芽はその特定された召喚士たる人物のデータをつきカゲメンバー全員に送信した。

~~~~~

~~~~~

「えっ・・・！」

そのデータを閲覧した五恵は召喚士として送られてきた写真の相手を見て驚いた。その召喚士とは目の前にいる人物、葵その人だったためだ。

「っ・・・！」

五恵は咄嗟にそれを葵に見られまいと隠そうとするも、五恵がツキカゲというSPY

のプロなら葵もその道のプロ。五恵の隠そうとする行為を見逃さなかった。そのスマホを奪い、画面を見た葵。自動的にそのメッセージは削除されるのだが、消えるよりも早く彼女はそれを見てしまった。

「違う。それは・・・」

「・・・騙してたのね」

裏切られた。そう感じてしまった葵は「仕事に戻る」と小さな声で呟くとバッグの中から緑色に輝く宝石を取り出した。

「セグメ・アクバル・エスサラ！」

葵が宝石を掲げながら呪文を唱えると、毒が彼女に浸透しつつも宝石から光が放たれて、その光はセグメゲルを呼び出した。

「葵ちゃん！」

五恵は葵を止めるべく追いかけていく。

~~~~~

~~~~~

『伊智香急げ！変身だ！』

「でも腕が・・・」

『そんなの俺達と一緒になんだからもう治ってるだろ！』

気分転換にと言いつて抜けてきた伊智香はタイガと一緒にいることで傷の治りが早まっているはずと言われ、毒に侵された腕を確認すると・・・タイガの言う通り治っていた。

「まだちよつと痛いけど、これなら戦えるかも・・・」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手を取った伊智香はそれを持ち替えて空へと突き上げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「タアアアア!!デユア！」

伊智香はウルトラマンタイガへと変身すると光線を撃たせる隙を与えないとパンチやキックを連続で叩き込む。するとセグメゲルの頭突きを受けて一旦距離を取る。

「ハッア！」

そしてセグメゲルの光線を避けたタイガはスワローバレットで光線を撃ち消した。

「よし！終わりの魔獣の力を使うぞ！」

「分かった！」

『カモン！』

伊智香が呼び出したのはエンジョーを倒した際に手に入れた指輪。エンジョーリングだ。

『エンジョーリング・エンゲージ』

「イグニスファイニース！」

両手で三角を作り上げたタイガはそこから熱線を放ってセグメゲルを攻撃する。

「よし！もう一撃だ！」

『カモン！』

次に呼び出したのはセンコウを倒した際に手に入れた指輪のセンコウリングだ。

『センコウリング・エンゲージ』

「ハアっ！」

突き出した右拳から放たれた光線は一撃目はセグメゲルに命中する。

「もう一発喰らえ！」

しかしもう一発放った2撃目の光線。その光線を捻じ曲げたセグメゲルはその光線エネルギーを吸収してしまう。

「何だよそれ!？」

驚くタイガに対してセグメゲルは反撃に毒炎の光線を放ってきた。

「うわああっ!？」

「何やってんだタイガ！オレが行く！」

それをギリギリで避けたタイガ。それを見かねたフーマは自分が行くと交代を要求してきた。

『カモン！』

「風の覇者！フーマー！」

手にしたのはフーマのアクセサリー。それを右手に持ち替えた伊智香は空に突き上げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

タイガから交代してウルトラマンフーマに変身した伊智香。

「どっせい！セイツァー！」

フーマは素早い身のこなしでセグメゲルとの距離を詰めると回し蹴りでその首を蹴りつけ、左右の手刀で胴を切りつける。

「へへっ。来な！」

尻尾の攻撃を跳んで避けたフーマは指をクイツと動かして挑発をしつつ、巧みにセグメゲルの攻撃を避ける。

「ぬおっ!？」

しかし油断をしてしまったか体当たりを受けてしまうとそのまま尻尾が首に巻きついてきた。

「ガっ!? ニンっ!」

印を組んで煙とともに消えたフーマ。するとセグメゲルの背後から現れて、がら空きの背中を蹴り飛ばした。

「へへっ、どうだ」

再び挑発したフーマはその首元を蹴り飛ばそうと足を上げると、その足目掛けて放たれた光線を受けて毒を浴びてしまった。

「ぐあああっ!」

「私が代わろう」

「悪い。頼んだ!」

このダメージでは無理だと判断したタイタスはフーマに代わる意思を伝え、フーマもそれを承諾する。

『カモン!』

「力の賢者! タイタス!」

手にしたのはタイタスのアクセサリ。それを右手に持ち替えた伊智香は空に突き上げる。

「バディ・ゴ―！」

『ウルトラマンタイタス！』

フーマからウルトラマンタイタスへと交代すると、タイタスは地面を大きく揺らしながらゆつくりと前進していく。

「又ウン！」

その鍛え上げられた筋肉はセグメゲルの牙をも寄せ付けず、噛みつき攻撃も難なく耐える。そしてその屈強な拳をセグメゲルへと叩き込んだ。

「フン！ハアッ！ドウア！！」

何度も叩き込まれる拳は一撃一撃が必殺技級で流石のセグメゲルも激しく怯まされる。するとタイタスはその尻尾を掴みあげて力いっぱい右拳を振り下ろした。

「ダアツ！！」

その一撃はセグメゲルの尻尾を引きちぎり、セグメゲルは悲鳴のような雄叫びをあげると……そこから体液が噴き出してタイタスへと浴びせられた。

「きやあつ……うう……」

「グア……身体が毒に侵食されていく……」

毒液の交じる体液を浴びせられたタイタス。伊智香もその毒液によって苦しみ出してしまった。

~~~~~

~~~~~

「友を殺せば地球人類の平和は守られる。友を守れば地球人類は滅びる。アツハハハハッ！」

「タピオカミルクティーです。どうぞ」

「ハハッ！．．．どうも天堂さん。これが今話題の．．．ではさつそく．．．」

友と平和で葛藤する五恵をあざ笑う霧崎にタピオカミルクティーを持ってくる天堂。それを受け取った霧崎はタピオカをズズリと一気に飲み干していた。

~~~~~

~~~~~

「葵ちゃん！待って！」

「離せ！」

葵を追いかけてきた五恵は彼女の手を掴んで静止させようとするも、怪力である五恵の手を葵は振り払う。



「我々はセグメゲル様選ばれた高潔な人類なの！地球人にセグメゲル様は止められない！この星はセゲル星人のものになる！」

「地球を手に入れて葵ちゃんはその後どうするの？」

タイタスのカラータイマーが赤く点滅する最中、五恵は必死に葵を止めようとする。

「次の星に行くだけ」

「葵ちゃんはそれでいいの？この星が全部壊れちゃってもいいの？」

「私には関係ない！」

「どうして？今日楽しいって思ってくれたはずでしょ？ここは貴女にとって壊したいと思うような悪いところだった？」

「そんな事。なかった」

「だったら・・・！」

近くで激しい戦いを繰り広げるタイタス。その揺れに反応した2人はタイタスとセグメゲルの戦いに視線を向ける。

「又オオ!!」

毒のせいで力の入りきらないタイタスは観覧車へと倒れ込んでしまう。

「ずっと。こんな居心地のいい場所にいた貴女には分らない！」

ウルトラマンにもセグメゲルは・・・自分達は止められない。涙目になりながら葵は語

り出す。

「これが私のやりたいことなの！」

「そんなの嘘だよ。なら何で泣いてるの？」

五恵に言われてようやく葵は自身が涙を流していることに気づく。今の葵はこれまでの自分と矛盾した感情に揺れ動き、言葉と感情がかみ合わないのだ。

「又ア!?!」

一方で壊れた観覧車を盾にセグメゲルの攻撃を防いだタイタスは立ち上がろうとするも、セグメゲルの体当たりを受けて再び倒れ込む。その倒れた場所は2人の間近で、2人はその風圧に吹き飛ばされそうになってしまう。

「しまっ…!?!」

タイタスへ目掛けて放たれようとするセグメゲルの光線。タイタスの後ろには葵達もいるにも関わらずだ。あくまで召喚士であり、セグメゲルを制御しているわけではない葵はあまりに突然の事で対処が遅れていると、五恵が彼女の手を引いた。

「ピリつとするよ」

スパイスをひとかじりして身体強化をした五恵は彼女の手を引いたまま一気に駆け抜ける。

「この身体能力…! 貴女本当に地球人？」

「地球人だよ」

ツキカゲの切り札と呼べるスパイスには一定年齢の少女達の身体能力を極限にまで高める効力がある。それを知らない葵は思わず五恵も星人なのではと疑うも、五恵は地球人だと彼女の問いに答えた。

「ていうか何で私を助けるの？私……」

「友達。だから……」

「えっ？」

「少なくとも私は……友達だと思ってるから」

侵略者である自分を助ける理由を問われ、五恵は悩むことなく『友達だから』と答える。するとそれに心動いた葵は涙を自身の涙を拭う。

「私辞めたい。こんなこともうやりたくない」

「ならセグメゲルを……」

正直な気持ちを暴露した葵。五恵はならばセグメゲルを止めるよう頼むも、葵は首を横に振る。

「セグメゲル様は一度召喚したら止まらない。でも召喚士はセグメゲル様の猛毒の抗体を持つてる。それを渡せば……あの巨人はまた戦える！」

そう言った葵は宝石を掲げると彼女はその宝石に自身の抗体をタイタスへと分け与

えようとする。・・・自身の命と引き換えにして。

「葵ちゃんまさか・・・やめて葵ちゃん！」

「セグメ・アクバル・エスタダーハ！」

光となつて消えていく葵に、彼女が何をしようとしているか察した五恵はそれを止めようとすると、彼女は止める気はない。

「止めないで五恵。自分の未来は自分で決めていい。そう言ってくれたよね。初めてなの。自分でやりたいって思えたことなんて・・・」

「でもそんな事したら葵ちゃんは・・・」

「そんな顔しないで五恵。私達はずつと・・・友達だから」

そう言い残して彼女は光となつて消えていった。

「葵ちゃああああん!!」

その光を受け取ったタイタスは、その光が身体に浸透してセグメゲルの毒素が完全に打ち消される。そしてタイタスはセグメゲルの放った光線を難なく耐え凌ぎながらも逆光を背に威勢よく立ち上がった。

「フッ！」

殴る。

「ハッ！」

殴る。

「ヌウンー！」

叩き伏せる。

「フーン！」

両腕でセグメゲルの爪を受け止めつつ、頭突きをぶつけるタイタス。セグメゲルの毒に耐性を得たとはいえ蓄積されたダメージまでは回復していないタイタスは早期決着を狙い反撃の隙を与えないように殴り続ける。タイタスのカラータイマーは既に赤。これ以上時間をかけることは不可能なのだ。

「ハアっ！伊智香！この力を使い！」

「うん！」

『カモン！』

『エックスレット・コネクトオン』

ウルトラマンエックスの力を宿したエックスレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークにかざして力を引き出す。

「エレクトロ！バスターアアア！！」

声を重ねて放たれた一撃。電撃を纏ったプラニウムのエレクトロバスターを受けたセグメゲルは爆発四散した。

「うう．．．葵ちゃん」

「．．．感謝する。異星の友よ」

タイタスは葵に感謝をして空へと飛び去っていった。

~~~~~

~~~~~

「行つてきます！」

翌日、悲しみが消えないながらも五恵は今日も学校へと登校しようとしていた。

「葵ちゃん．．．私達は守るからね。葵ちゃんが守ってくれたこの町を．．．」

絆を紡いで、今日もツキカゲは町を、人々を守るために戦う。

## アベルの流儀

「サアツ!!」

遠い宇宙の果て。王立惑星ロージア。赤と青、そして銀色の体色をした光の巨人『ウルトラマンスマッシュ』はもう一人の鉛色の巨人『ウルトラマンバレット』と戦っていた。

「生まれ! 止まるんだバレット!」

ウルトラマンスマッシュ。彼らは別宇宙にある惑星ダブルスから『終の魔獣』と呼ばれる存在の瘴気に当てられ暴走するウルトラマンバレットを止めるべくこの星へと舞い降りたウルトラマンだ。

「ヴああアア!!」

本来ウルトラマンバレットは西部惑星バレットが終の魔獣を討つべく作り出した人造ウルトラマンだった。しかし光の戦士を再現する上であまりにも純粹に作られたが故に瘴気に耐えられず暴走し、生まれた星の惑星バレットを含めて既に5つもの星を壊滅へと追いやっている。

「サアアあつ!!」

スマツシユは力づくでも止めようと飛び回し蹴りからかかると落としを決め、バレットを跪かせる。だがあくまで倒すつもりはないから躊躇うように力が入り切っていない。切った。

「ヴァアツウ!!」

そんなスマツシユの想いも届かずバレットはスマツシユの脚を掴み、放り投げる。そして背中を強く打ちつけられ痛がるスマツシユに向けて腕を十字に構えてくる。

「ガトリウム光線ん・ん」

「ジュアアアアアっ!」

十字にしている右腕を横に伸ばすと同時に放たれる細く早い光線。それはまるでマシンガンのように連続して放たれていく。避けようとするスマツシユだが数を放たれる光線の全てを避ける事は敵わなかった。

「もう、止められないのか。なら・・」

光線を受けながらも覚悟を決めたスマツシユは腕をL字に構える。

「シューティングスマツシユ!」

スマツシユの放つ必殺光線とバレットの光線がぶつかり合う。光線の数こそバレットの方が多いが単純な威力はスマツシユの光線の方が上で、シューティングスマツシユはガトリウム光線を撃ち破りバレットへと命中する。スマツシユの一撃は本気だった。



先ほどとは違い本気でバレットを倒すつもりで光線を放ったはずだった。だが終の魔獣と戦えるだけの防御力に設計されたバレットは光線一撃程度で沈黙するように作られてはいなかった。

「ヴああああッ!!」

バレットの暴走は止まらない。

「ウルトラマン!」

スマツシユの後ろにはまだこの星の生き残りがいて、このままバレット暴走を見過ごすわけにはいかないスマツシユは『戦う』以上の覚悟を決める。

「ハアアアア・・・」

スマツシユは全身からエネルギーを解き放ち、光となってバレットへと特攻する。そしてバレットの懐に飛び込むとともに大爆発を起こした。

「懐かしい夢を見たな」

眠りから目を覚ました天堂は自身の持つ鉛色の銃を手取る。

「戦いによる傷も癒えた。そろそろ私も・・・身体を動かしたい気分だな。少し遊んでみるか。ウルトラマンとツキカゲの連中とな」

~~~~~  
~~~~~

「ごめんなさいね。待ったでしょう」

廃墟の一室で一人椅子に座っている霧崎の元にやってきたのは一人の宇宙人。ガピヤ星人にも関わらず体の半分以上がサイボーグな彼は宇宙でも有名なヒットマンのアベルだ。

「なあに。それほど待つてないさ」

「一応自己紹介ね。私は時空を又にかけるヒットマンのアベルよ。貴方が依頼者の霧崎ちゃんね」

「ああ。随分派手にやるらしいな」

「まあね。兄貴に似せて作らせたこの特注ボディにかかれば、どんな相手も一コロよお。それに今回のターゲットは兄貴を倒したウルトラの一族というじゃない。俄然やる気が出るってもんよ」

ウルトラマンと戦えるとやる気満々のアベル。そんな彼に霧崎は更なる条件を依頼する。

「できるだけ追い込んだ上で事を運んでもらいたい」

「了解。契約成立、と言いたいところだけど・・・そんな薄ら顔じゃ嫌よ！あるんで

しようアナタにも。真の姿ってやつが」

「ハハハっ！流石腕の立つヒットマンだ。見透かされたのは初めてだよ」

面白そうに青い仮面を開いた霧崎はそれを顔にかざすと真の姿、ウルトラマントレギアへと姿を変える。

「えっ？アンタもウルトラマンなんじゃない！」

「昔の話さ。今はしがない悪魔とでもしておこうか」

そう言ったトレギアにアベルは「悪魔との契約なんてドキドキしちゃう」と握手を求めてくる。彼と握手をした途端ネチヨリという機械油がトレギアの手へばりつき、トレギアは嫌悪感を示してすぐさま手を放した。

「……！！」

トレギアはハンカチを取り出して手を拭うとアベルはさっそく依頼を果たすためターゲットを狙いに行く。

「待ってくれアベル。私からもついでに依頼をお願いしたい」

アベルを呼び止めたのは天堂。彼女に振り返ったアベルは雰囲気からトレギアの仲間だと直感し、話は聞く姿勢になる。

「ウルトラマンが憑依している人間がいる組織。ツキカゲ。その人間達もターゲットに入れてほしい」

そう言った彼女は今のツキカゲ6人の写真をアベルへと手渡す。モモと伊智香。命と楓。五恵とテレジアの6人だ。

「へえ、ウルトラマンのいる組織ねえ。いいわよ！ついでにやってあげようじゃない！あつ！報酬は一割マシだけでいいわよ。地球人の1人や6人増えたところで大したことないから」

「ではよろしく頼む」

「・・・取れない」

自信満々のアベルにツキカゲの暗殺も依頼する天堂。そして油を拭うトレギア。それぞれの思惑が動き出す中、ツキカゲはその刺客に狙われる。

~~~~~

~~~~~

『ミツシヨン完了ですね。皆さんお気をつけて帰還してください』

その夜。ツキカゲ達は怪獣の取り引きをしようとしていた宇宙人達を取り押さえて帰還しようとしていた。

「風魔。そういえば何だったっけ。あの宇宙人が取引しようとしてたあの卵」

「どんなのは分かりませんが、確か『バードン』とか言っていましたね」

彼女達を知るよしもないが、彼女達が確保した卵は火山怪鳥バードンの卵だ。大熊山を生息地にするバードンは卵を冷やして孵化させる習性があるのだが、そこを狙われて卵が盗まれたのだ。

「卵なんだから親元に返してはあげたいけど・・・」

「この卵の親を知る手段はない。それは諦めるしかないな」

卵を親元に還すという意見もあつたが親どころか何の卵かすら分からない彼女達は最悪殺処分も視野に入れながらも帰還しようとしていると・・・

『伊智香！危ない！』

「・・・えっ?」

タイガの「危ない」発言に後ろを振り返る伊智香。すると彼女を狙って一発の銃弾が飛んできた。

「っ!!」

即座に気づいたモモはそれを刀で切り落とす。飛んできたのはレールガンのように銃弾は残らず、刀身がバチバチと電撃を纏っていた。

「大丈夫孫市?」

「は、はい。大丈夫です」

『レールガンを使う相手は先ほどの人達の中にはいませんでした。おそらくは別の・・・』

精度から考えて暗殺者という可能性もあります。皆さん、後を付けられないよう帰還してください』

初芽の指示で尾行されないよう慎重に帰還していくツキカゲメンバー。それを一人は観察していた。

「へえ、スパイって聞いたけど地球人にしてはやるみたいじゃない。いいわあ。尚更やる気が出ちやう！本番の明日が楽しみね」

ツキカゲを試してみたアベルは明日が本番だと一人テンションを上げていると、ツキカゲを追いかけることなくその場を去っていった。

~~~~~

~~~~~

翌日の放課後。本日はミツシオンではないのだが自分達がヒットマンに狙われている可能性があるため集まり、対策会議を開いていた。

「最近の傾向から考えてみるに・・・ヒットマンは宇宙人の可能性が高いですね」

最近では異星人同士の闇取引現場を取り押さえる事が増えてきたツキカゲ。そういった理由もあり異星人に名が売れてきた可能性も少なからずあった。そのため今回はその報復として狙われている可能性が高いと判断されていた。

「どうするの？宇宙人のヒットマンなら私達の知らない不思議科学で昨日みたくバーンって撃ってくるかもしれないよ」

「初芽さんの透明になるクリームみたく透明になって襲ってくるなんてことも有り得るんじゃない」

それぞれが警戒している中、慌てた様子で白虎が対策会議中のツキカゲメンバーの元に戻ってきた。

「おいみんな！ちよつと来てくれ！上に変な客が来てるんだ」

「ごめんね白虎ちゃん。今忙しいから・・・」

五恵は今忙しいから後にしてと追い返そうとすると、白虎は次にとんでもない発言をした。

「あれはどうみても宇宙人だ！」

『宇宙人』その言葉に敏感になっていた一同は上には行かず、監視カメラの映像で Wasabi 店内の様子を確認すると・・・そこにはなんと地球人に化けるわけでもないそのままの姿のアベルがカレーを食べている映像が映っていた。

『これがこの店のカレーね。私、こう見えてグルメなの』

スプーンを手を取ったアベルはその口にカレーを運んでいく。

『これは・・・!?ピリツと効くスパイスになめらかな舌触り・・・この店、やるわね』

「え？何あれ？食レポ宇宙人？し、刺激的・・・」

命は食レポをしているアベルに驚いていると、アベルはカレーをそのまま平らげる。

『ごちそうさまでした。美味しかったわよ。・・・ところで聞きたいんだけど・・・』

食事を終えたアベルはカトリーナに何かを尋ねようとする。

『ツキカゲの基地つてここで間違いないわよね？』

『ツキカゲ？なんのことでしょう？』

カトリーナはとぼけてみるも、アベルは下を向く。

『ああ、隠そうとしなくてもいいわよ。下。透視して確認済みだから』

そう発言したアベルに対してカトリーナは2丁の拳銃を取り出すと、アベルも右腕のレールガンを構える。

『止めておきなさい。貴女はターゲットじゃないの。こんな美味しいカレーを作る無関係な人を殺すのは惜しいわ』

自分1人では勝ち目はない。そう判断したカトリーナは銃を降ろすと、アベルは監視カメラの方に視線を向ける。

『ツキカゲの6人。店を滅茶苦茶にされたくなかったら出て来なさい』

脅しをかけてくるアベルだが応じるツキカゲではない。

『仕方ないわねえ。ちよつと手荒になるわよ』



店の奥にいったアベルは地下へと続くエレベーターを撃ち貫くと、そこから地下施設へと飛び降りていく。

「シユタ！・・・いてて、脚挫いちゃったかしら？あらい大丈夫」

「動かないで！」

地下のツキカゲ基地へとたどり着いたアベルは速攻でツキカゲメンバーに取り囲まれる。

「ターゲットの方から来てくれるなんて助かるわあ。1人1人なんて面倒よ。全員まとめて相手をしてあげる」

「心も体も滾らせる！」

一同はスパイスをキメて身体能力を強化すると両サイドから攻めてきた五恵とテレジアの拳をアベルはヨガのポーズでかわす。

「あら、危ない」

「風魔！」

「了解！」

命と楓は同時にクナイと手裏剣によって仕掛けるも、アベルは自身に当たりそうなののみをレールガンで撃ち落とした。

「狙いは悪くないけど、まだまだだね」

「ハアアア！」

「てえええい！」

モモと伊智香が同時に攻めていくと「当たらない。当たらない」と挑発しながらアベルは跳び下がってその刃を避ける。

「っ！今です！」

「えっ？何これ？ぎやあああああつ！」

刀を振るうモモは初芽へと合図をすると、初芽は何らかのスイッチを押す。するとアベルの立っている足元が空へと打ち上げられ、アベルは外まで飛ばされていった。

「あいたあつ！？ああもう頭にキター！こうなったら踏みつぶしちゃうんだから！」

外まで飛ばされて頭から地面にぶつかつたアベル。ブチぎれたアベルは巨大化し、ツキカゲ基地の上にある神社を踏みつぶそうとしてきた。

「行くよタイガ君！」

『カモン！』

外へと出た伊智香はタイガアクセサリーを手に取り、それを右手に持ち替える。

「光の勇者！タイガ！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シユア！！」

「あいたあつ!? 転がる! 止まらない! まだ止まらない! 止まったあ!」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香は巨大化したアベルへとスワローキックを叩き込む。その一撃で転倒したアベルは中々止まらなかつた転がりから止まり立ち上がる。

「何済んだゴリアアア!! ってあらヤダ、ウルトラマンじゃない。ターゲットの方から来てくれるなんて、手間が省けたわ」

「本命はこつちってわけか」

「悪いけどねちつくくやってって頼まれてるのよ。恨まないでよね!!」

そう言ったアベルは右腕のレールガンから開幕早々一発を放ってきて、タイガはそれを避けつつもスワローバレットで応戦する。

「ハアっ!」

「あら危ない!」

頭を下げて光線を回避したアベルは即座に反撃のレールガンを放ってきて、タイガはそれを避けつつビルの裏に隠れる。するとアベルはそのビルごとレールガンで打ち抜こうとしてきた。

「つと!」

「あら丸見え!」

それを避けたタイガはアベルの放ってくるレールガンを避けつつ、スワローバレットで応戦しているとアベルはビルを掴みあげて投げつけてきた。

「えっ？マジ？うわっ!？」

そのビルをキャッチしたタイガはそれをゆっくり下ろそうとすると、その隙を狙われて背後から撃たれてしまう。

「つ・・・手強いな。魔獣の力を使うぞ！」

「うん！」

『カモン!』

跳び出したのは荒天終輝センコウの力を宿した指輪。それを伊智香はタイガスパイクにかざす。

『センコウリング・エンゲージ』

「ハア！」

拳を突き出した先から放たれた光線が命中したアベルは背中から転倒する。その様子をおの男は見ていた。

「そうだあ。いいぞ。使える力は存分に使うがいい」

魔獣の指輪を使うタイガを嬉しそうに見上げる霧崎。その手にはクルミが握られていて、クルミの殻を握り砕いた霧崎はその実を頬張る。

「鍛え上げられた筋肉が銃弾にも勝る事を見せてやる！伊智香！私にウルトラチェンジだ！」

「うん！分かった！」

『カモン！』

「力の賢者！タイタス！」

『ウルトラマンタイタス！』

「あらヤダ、ゴリマツチョ!?!」

伊智香はタイガから交代してウルトラマンタイタスへと変身すると、タイタスはポーズを決めながらアベルの放つ銃弾を弾きつつ距離を詰めてくる。

「何よそれ!?!」

「フンっ!」

「私のレールガンが!?!よくもやってくれたわね!」

タイタスの重たい拳を受けたアベルは右腕のレールガンが壊れてしまい、反撃にタイタスをドカドカと殴りつけるも、堅牢な筋肉を持つタイタスにそのような攻撃は通じなかった。

「鍛え方がなっていないな。私が適切なトレーニング方法を教えてやろうか?」

「何よダツサイ星つけちゃって!」

その一言がタイタスを怒らせた。

「貴様、U40の勲章を馬鹿にすることは許さんぞ！」

右腕にエネルギーを集束させるタイタス。それに対してアベルも壊れたレールガンに自身のエネルギーを集束させる。

「フアンタステイック！アベルフィクション！」

ぶつかり合ったタイタスとアベルの拳。そのぶつかり合いは圧倒的筋肉を持つタイタスが制して、アベルは激しく吹き飛んだ。

「あらく！飛んでく飛んでく!?地面、地面は何処？あつ！地面！ほおわっち！」

何とか着地成功をしたと安心したアベルは自身の足元を見ると、そこには偶然にもモモ達が出た。

「アンタ達に出会ってからどうもケチがついてるのよ！」

「しまつ！みんな、ここから離れて！」

アベルは八つ当たり気味にツキカゲメンバーへと何処からともなく取り出した剣を振りかぶろうとすると・・・

「変われ旦那！」

『ウルトラマンフォーマー！』

タイタスからウルトラマンフォーマーへと交代されて、高速で駆け寄ったフォーマーはその剣

を蹴りつけ、その軌道を逸らした。

「何!? 今度は細マツチヨ!？」

いい加減にしてと言いたげに叫んだアベルは剣をフーマに振りかぶるも、フーマはそれを軽く受け流す。

「どうした? ヒットマンってのはそんなもんか?」

「んだとゴラアアっ!」

フーマの挑発に乗ったアベルは一瞬だけあつたフーマの隙をついて一突きをすると、フーマは煙とともにPONとその場から消えてしまう。

「残像だ」

「そんなのアリか!？」

いつの間にか背後に立っていたフーマに驚き、反応の遅れたアベルはフーマに武器を取られて、自身の剣で斬りつけられる。

「今だ伊智香!」

「うん!」

『カモン!』

伊智香が呼び出したのはウルトラマンビクトリーの力を宿すビクトリーレット。それをタイガスパークにかざして力を引き出した。

『ビクトリーレット・コネクトオン』

「鋭星光波手裏剣！」

金色に輝くV字の刃を飛ばすフーマ。その光刃はアベルを縦に真つ二つに両断した。

「こ、こんなやられ方。兄貴に申し訳が・・・」

兄貴に申し訳ないやられ方をしたと最後に言い残したアベルはそのまま爆発すると、戦いを終えたフーマはその場から飛び去ろうとする。

「ミッション完了ってな」

「待てフーマ。何やら怪しい気配を感じる」

タイタスの言葉で静止したフーマ。その背後に感じ取った『闇』にフーマは振り返った。

「初めましてウルトラマンフーマ。私はバレット。ウルトラマンバレットだ」

ウルトラマンバレット。自身をそう名乗った鉛色のウルトラマンは指で銃を作るような動作をすると「バーン」と言いながらフーマを撃つような動作をする。

「なんだてめえ？」

「トレギアさんがやたらお前達を気にかけているので、私も興味が湧いた。少し遊ばせてもらおう」

「トレギアだと？上等じゃねえか！」



トレギア。その名前を聞いたフーマは激昂し、光波手裏剣をバレット目掛けて投げつける。するとバレットは人差し指から光弾を放って光波手裏剣を射抜いた。

「変われフーマ！光線なら俺の方が得意だ！俺が行く！」

『ウルトラマンタイガ！』

フーマからタイガに交代すると、タイガはスワローバレットでバレットを攻撃する。するとバレットは腕を十字に構えて、右腕を横に伸ばした。

「ガトリウム光線」

互いに連続して放たれるスワローバレットとガトリウム光線。しかし弾数はガトリウム光線の方が多かったようでタイガは撃ち負けて背中から倒れ込み、カラータイマーが赤く点滅してしまった。

「これがウルトラマンタイガ。トライスクワッドの実力か」

一発だけ掠めていた左肘を押さえるバレットは納得したような反応をしながら闇となつて消えていく。

「待て！」

タイガはトレギアの事を聞き出そうとするも、それよりも先にバレットはこの場から姿を消してしまった。

くくくく

くくくくくく

「お疲れ様。どうだった？」

クルミを食べながら天堂のもとに歩み寄って来た霧崎は彼女に声をかける。

「中々面白い相手でしたよ。特にタイガというウルトラマン。あれは面白い」

「そうでしょう」

嬉しそうに頷いた霧崎はクルミを食べ終わるとその殻を地面に捨てて踏みつぶす。

「もつと。もつとだ。面白いものをこれからもみせてくれよ。ウルトラマンタイガ」

## ただいま喧嘩中

「フーマ、これの次の巻取って」

「あつ？次なら俺、今読み始めたばっかなんだけど」

伊智香の部屋。10センチサイズのタイガ達は基本的に実体はないのだが、サイズ加減によっては物体に干渉できるほどの力が出るようで本人達は『今のこれに慣れるようトレーニングをする』と漫画本のページを上手くめくって漫画を読んでいた。

「まったく・フツ・君達は・ハツ。それが・ヌウン。トレーニングになってるようには見えないが」

漫画本をまるでダンベルのように持ち上げながらスクワットをしているタイタス。それを見て伊智香はため息をついた。

「どうした伊智香？ため息なんてついて？」

「・・・あゝ。そゆことね。・触らぬ神に祟りなし。ニン！」

ため息をつく理由が分からないタイガだったが、なんとなく察したフーマは漫画を閉じるとその場から姿を眩ませる。

「よし！本日のトレーニング終了！いやあ、今日も良い汗を流した！」

筋トレを終えたタイタスもその場を後にすると、そこにはお怒りな伊智香と未だ漫画の続きを読むタイガのみが残る。

「ん？どうしたんだ伊智香？怒ったような顔して？」

「ようなじやなくて怒ってるんだよ！最近タイガ君達自由過ぎでしょ！ここ、私の家。私の部屋だよ！」

「一心同体なんだから硬い事言うなって」

悪びれる様子もないタイガに対し、伊智香の怒りは加速する。

「一心同体を言い訳にしないで！最近いつもいつも・・・私のプライベートももう少し気にしてよ！」

「プライベートって・・・今までんなの気になかっただろ？」

「言わなかっただけで気にしてたよ！」

「ああもう。わるうござんした〜」

逆ギレしたタイガは適当に謝ってその場から消えていくと、疲れたように伊智香はため息をついていた。

~~~~~

くくくくくく

アベルの事件から一週間後。あの事件もあつて安全が確認されるまでツキカゲの活動を控えていた。

「師匠、まだ活動は再開しないんですか？」

「うん。初芽さんが警備を強化するって言つてたからそれ待ちなんだよね」

前回の戦闘で異星人の科学力で地下が透視された事を反省した初芽はそれ用の対策手段を組んでいるようだ。

「ん？雲が出てきたのかな？」

突然空が暗くなった気がしたのでモモは空を見上げてみると・・・そこには巨大な鳥がいた。

「何アレ鳥？」

『ただの鳥ではない。あれはバードン。火山怪鳥バードンだ』

博識のタイタスは空飛ぶ巨大な鳥の正体を伊智香に告げる。その鳥こそバードン。火山怪鳥バードンだったのだ。

「怪獣！みんなに連絡しないと」

モモがツキカゲメンバーに連絡を取つてる間に彼女から離れた伊智香は物陰へと隠れる。

「行くよタイガ君！」

「・・・フンッ」

伊智香はいつも通りタイガに呼びかけるも、未だ喧嘩中のタイガは怒って返事をしよ
うとしない。

「まったく君は・・・。ならば私が行こう。セグメゲルの猛毒に耐性を得た私だ。セグメ
ゲルほどでもない毒など私の筋肉の敵ではない！」

「うん！お願いタイタスさん！」

『カモン！』

「力の賢者！タイタス！」

タイタスのアクセサリーを掴み取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

「ムウン！」

伊智香がウルトラチェンジしたウルトラマンタイタスはサイドチェストで防御の姿
勢を取ると、バードンは毒を帯びたクチバシによる攻撃を仕掛けてくる。しかしタイタ
スはバードンのクチバシによる攻撃を物ともせず、毒でもダメージを受けない。

「今の私にその程度の毒など効かん！」

バードンにアッパーを叩き込んだタイタスはそのまま首を両手で掴んで地面に叩き伏せる。

「ハアッ！」

上腕二頭筋を強調するダブルバイセップスのポーズを決めたタイタスは起き上がるバードンに渾身の拳を叩き込むとそれに怯んだバードンは逃げるように遠くの空へと飛び去って行った。

「もしかしてあのバードンって・・・」

変身を解いた伊智香はバードンの飛び去って行った空を見上げる。何故ここにバードンが現れたか心当たりがあったからだ。

「ねえタイタスさん。この間の卵、あれってもしかしてバードンの卵だったんじゃないかな？」

『その可能性はあるな。親が子を守ろうとするのは・・・当然のことだ』

タイタスは何処か含みのある声でそう言うともモモが伊智香のもとへと走ってくる。

「あつ、ここにいたんだね伊智香ちゃん」

「ご、ごめんなさい師匠。ところで師匠、あの巨大な鳥なんですけど・・・」

「やっぱり伊智香ちゃんも同じ事を考えてたんだね」

「どうやらモモも伊智香と同じく回収した卵がバードンの卵ではないかと考えていた

ようで、2人はWasabiでその事を他のメンバーに相談してみた。

「その可能性は捨てきれませんね。ですが回収した卵は既に私達の手を離れていますから鳥さんに返却してあげるのは難しいです」

初芽の話によれば卵は一度風の部隊によって『国』の管轄となり、現在は生物研究所にあるとのことだ。

「宇宙人から回収したのが痛手に出るとはね・・・どうしようか?」

「どうしようって言ったって、国を相手取るわけにはいきませんし・・・」

「でも大きい鳥のお母さんは子供を探していると思うよ。なんとか返してあげないと」

命と楓は国は相手に出来ないとお手上げと考えるも、それでも五恵は子供を返してあげようという。そんな中だった。

「そんなみんなに朗報かもしれない話よ。卵、盗まれたんですって」

店の奥からやってきたカトリーナは回収した卵が研究所から盗まれた事を告げてきた。

「確かに取り戻しやすくなったと言えば朗報だけど・・・」

「正義の組織としては複雑な気分ですわね」

「いいんじゃないか。正義のためならどんな手段も厭わない。私達はあくまで『悪の手から卵を取り戻す』だけだ」

テレビアの言葉に頷いた一同はさつそく行動に移すためアベルとの戦闘から改修された地下施設へと移動する。見た目こそ以前のツキカゲ基地と変化はないが、透視やスキヤニングによる対策を今まで以上に強化されたのだ。

「では研究所の映像を確認しますね」

研究所の映像を確認してみると、深夜にコソコソと隠れて卵を盗み出すのではなく、真昼間から堂々と単身で研究所に突入し、右腕と一体化しているサーベルを振り回しながら周囲の機材を壊し、卵を盗んでいった相手がいた。

『ようやく手に入れたぜバードンちゃんよお！まあ、このマグマ星人フレバ様にかかればちよろいもんよ』

自分の事を隠すどころか自身のことを『マグマ星人フレバ』と名乗るほどの自信家っぷりを見せたその宇宙人は卵を軽く叩きながら研究所を後にしていく。出て行く際も人間に擬態せず出て行ったそれは初芽のドローンにかかれば潜伏先を調べるのに時間がかからなかった。

「地球人に擬態しないうえに卵を持ったまま逃走していくのですから・・・潜伏先はすぐに分かりましたよ」

マグマ星人フレバが潜伏しているというその場所は以前、ツキカゲが経営者を捕まえたことで今は使われなくなっているソラサキの港近くの工場だった。

「これは大した自信家だねえ」

「自信家を通り越してお馬鹿さんな気がしますけどね・・・」

命と楓は「地球人舐めすぎでしょ」と呆れた顔をしているも、五恵はやる気満々に立ち上がる。

「それでも早く卵を助けてあげないとお母さんの鳥と二度と会えなくなっちゃう」

「では作戦は今夜決行しましょう。夜の22時に作戦を始めます」

それまでは一旦解散ということで伊智香も一時帰宅をしようとする喧嘩したせいですつと黙っていたタイガがようやく話し出した。

「・・・ていうかき、タイタスコそ大丈夫だったけど、バードンは猛毒を持つてる怪獣なんだぞ。父さんやゾフィー隊長。兄弟子のメビウスまで苦しめたほどの強敵なんだ。そんな相手だし、俺は卵ごと倒した方がいいと思うけど」

タイガはバードンは倒した方がいいと意見してくるも伊智香は首を横に振る。

「ダメだよタイガ君。危険だから駆除するなんて考え方をしたら大切なものまで見失っちゃうよ」

「大切なもの?・・・いったいなんだよ?」

「心。良心・・・かな。卵を、敵意のない相手を倒しても良心が痛まない?」

「・・・別に危険な怪獣を倒しても心は痛まないと思うけどな」

あくまでタイガはこれまでのウルトラ戦士の体験からバードンは危険な怪獣という考えは曲がらないようだが、タイタスとフーマは伊智香の言う事を理解しつつも「まあ、タイガにはまだ難しいか」とも考えていた。

「タイガ、お前はそういうところが危なつかしいんだよ。見た目が怪しいからつてすぐ敵と判断すんのか？」

「先人たちの戦いからして危険だと判断する気持ちも分かるが、あのバードンは卵を探してこの地に来た可能性があるのだぞ。それを知った上でバードンを倒すのは賢者として見過ごせん」

「何だよ。2人とも伊智香の味方かよ。ハア・・・」

ため息をついたタイガは姿を消す。

「まったく4800歳にもなつてまだまだガキだな」

「えっ？タイガ君つて4800歳なの!?私と同年か年下だと思つてた」

「ははっ！だろお！でもウルトラマンと地球人と同じや決定的に寿命の感覚が違うんだぜ。M78の概念で言えばタイガは中学3年ぐらいで年下つて思うのも間違っちゃいねえけどな。一応俺は5000歳だけどO-50はちよつと特殊だからM78の概念で考えちゃ駄目だぜ」

O-50はM78とは違い後天的にウルトラマンとなるのだが、その事を知らない伊

智香はよく分からなそうな顔をする。

「まあ年齢の話をしたら旦那が俺らの中じやダントツだな」

「タイタスさんは何歳なの？」

「私は9000歳だな。これでもU40の勲章持ちでは一番若いのだぞ」

4800歳のタイガの倍近く生きていることとなるタイタス。タイタスの胸のスターシボルは勲章であり、そのシボルを持つものの中でタイタスが今現在一番若く他にもU40最強のウルトラマンジョーニアスを筆頭に数人いるのだが・・・それはまた別の話だ。

「とはいえタイガはまだ若い。やはりまだそう言ったものが難しいのかもしれない」

タイガの精神的未熟さが危ういものだとはタイタスもフーマも理解していたが・・・それはいつか分かってくれる日がくるはずと信じる他なかった。

~~~~~

~~~~~

「ツキカゲ。ミッシヨンスタート」

モモの号令でバードンの卵の奪還作戦が始まる。マグマ星人フレバがいるのは工場の奥にいたのだが、そこにたどり着くまで1体も現れなかった。

「この守りの手薄さ。自分一人でどうにかなると思ってるのか・・・ただのバカなのか」
「ただバレないだけって思ってるだけならいいけど・・・」

警備の手薄さを逆に警戒しながらもツキカゲは奥へと進んでいくと、マグマ星人フレバは交渉相手の宇宙人、マーキンド星人と価格交渉をしている真つ最中だった。

「4000、いや貴重な卵なんだから6000ゼニーでどうだ」

「孵化してない怪獣の卵は貴重ですからねえ。いいでしょう。それもあのバードンの卵ということなら7000ゼニーで買うとしましょう」

「マジかよ！やったぜ！」

自分の提示した金額よりも高値がついた事にマグマ星人フレバはガッツポーズをしているとマーキンド星人の方が先にツキカゲの存在に気づいた。

「おや、どうやら来客のようですね。警備が手薄では？」

「警備？そんな金がかかるから使ってねえよ」

「なんと！ではあの親バードン対策は？」

「そっちの対策には抜かりねえぜ。とっておきがあるからな」

「・・・はあ、商談は一時中止です。この状況を貴方だけで乗り越えたら続きとしましょう」
「う」

商談の続きは後でと言いつ残したマーキンド星人はワープ装置でこの場から消えてい

くと、マグマ星人フレバは辺りを見渡す。

「だよ。とつとと出て来な侵入者」

「・・・相手は人数に気づいてない。ここは私が出るよ」

人数に気づいてないマグマ星人フレバに対してモモが単身で前へと出て行く。

「お前が侵入者か。目的は大方この卵だろ」

「アナタが盗んだその卵、返してもらおうよ」

「出来るもんならやってみろ。うおっ!?!」

マグマ星人フレバはモモに右腕を変化させたサーベルを向けようとする。大きな揺れが発生した。モモが外を見るとそこには卵を取り戻しに来た親バードンが工場近くにいた。

「現れやがったか。お前の相手はあいつをぶっ倒した後でだ。来い!レギオノイド・マグマカスタム!」

空から降ってくるように降りてきたロボット兵器レギオノイド。右腕がサーベル、左腕が砲身になっているカスタム機にマグマ星人フレバは乗り込んだ。

『育ちきつてる親鳥はいらねえんだよ。焼き鳥にしてやるぜ』

マグマ星人フレバの乗るレギオノイドは砲撃で母親バードンを怯ませながら右側の毒の詰まった頬袋をサーベルで貫いた。その光景を見て伊智香達はいたたまれない気

持ちになつていると10センチのタイガが伊智香の右肩に現れた。

「悪かつたよ伊智香。お前にもその、邪魔されたくない部分みたいなものもあるものな。俺は伊智香の気持ちに疎かにしてたみたいだ」

「(こつち)そ怒り過ぎてごめんね」

伊智香とタイガは互いに謝ると2人して母親バードンを襲うレギオノイドを見上げる。

「それともう1つ分かつたんだ。たとえ危険な怪獣でもさ、ああやって一方的に攻撃されてるのを見るとあまりいい気はしないな」

「・・・その気持ちだよ。タイガ君」

タイガも少しは分かつて来たのだと嬉しくなった伊智香はタイガスパークを出現させた。

「お母さんバードンを助けるよ！タイガ君！」

「オウ！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替えてそれを空へと掲げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

伊智香はウルトラマンタイガへと変身を遂げると、そのままレギオノイドへとスワローキックを叩き込む。

『ぬお!!現れたなウルトラマン!』

レギオノイドを操縦するマグマ星人フレバはタイガが現れた事に反応し、そちらに銃口を向ける。

「シユア！」

前に駆け出すことで銃撃を避けたタイガ。その背後が爆発しつともタイガはレギオノイドへと直進していく。

「シユウア！」

右ストレートからのドロップキックをレギオノイドに叩き込んだタイガは後ろへとバック転で下がると2本の角を青く輝かせる。

「ブルーレーザー！」

角から放たれたレーザー光線。それをガードしたレギオノイドに接近したタイガはローキックで膝を付かせてアッパーを叩き込んだ。

『このっ!!』

「スワローバレット！」

空中に打ち上げられたレギオノイドは反撃に銃撃を放つも、タイガはその全てをスワローバレットで撃ち落とす。

「行くぞ伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

『デンジュラスリング・エンゲージ』

伊智香はデンジュラスリングを装着し、それをタイガスパークにかざした。

「ブラストサンダー！」

「決めるよタイガ君！」

『カモン！』

電撃光線で右腕の砲身を破壊したタイガ。尽かさず伊智香はロツソレットを召喚し、それをタイガスパークにかざす。

『ロツソレット・コネクトオン』

「フレイム！ブラスタアアア！」

「やべえ!!」

フレイムブラスターによって撃ち抜かれたレギオノイドから脱出したマグマ星人フ

レバ。その脱出した先には刀を構えたモモが待ち構えていた。

「くっ、お前のせいで俺の計画は滅茶苦茶だ！こうなったらお前をこのサーベルの錆びにしてやる！」

「そんな事、貴方にはできない！」

「舐めるな！俺はサーベル暴君の異名を持つ、マグマ星人フレバだああ！」

「ハアアアッ！」

互いに駆け出すモモとマグマ星人フレバ。勝負は一瞬、一太刀で決着がついた。

「ぐはっ・・・」

すれ違い様の勝負で斬り負けたのはサーベル暴君、マグマ星人フレバだった。サーベルが折られ膝をついたマグマ星人フレバは負けを認めるつもりはないとばかりにサーベルの破片を握りしめて振り返ろうとすると、モモはその首元に剣先を向けた。

「命まで奪うつもりはないの。無駄な抵抗はやめて」

「甘ちゃんか。痛い目をみるぜ」

負けを認めたマグマ星人フレバはサーベルの破片を降ろした瞬間、銃声が響いた。

「・・・ほらな。痛い目見るって言っただろ。助けようとしても無駄なんだよ」

バタリと倒れたのはマグマ星人フレバ。その胸元からは血が流れてでいる。

「いったい誰が・・・」

銃を構えたモモは周囲を警戒していると、鉛色の銃を持った一人の女性が彼女の前に現れた。

「貴女は……！」

その女性の顔を見てモモは驚きの表情となる。その女性とはかつてモウリヨウを倒す際に戦った強敵、烏丸文子こと天堂久良羅その人だったからだ。

「なんで貴女が……生きてたの！」

銃を左手に持ちながら刀を逆手に構えるモモ。それに対して天堂は不思議そうな顔をする。

「ん？お前、覚えがあるな。……少し待て。今、この体の記憶を探ろう。……なるほどな。この人間を斬った女か」

「何……言ってるの？」

モモは訳の分からないような反応をするのも当然だ。今現在天堂の肉体にはウルトラマンバレットが憑依し、その意識を完全に乗っ取っている状態なのだから。

「この体のツキカゲと戦いたいという衝動だけは覚えていた。今日はそのような予定はなかったがせっかくだ。少し遊んでみるとしよう」

モモに銃を向けてきた天堂。距離を取ると危険だと判断したモモは逆に接近して、銃を撃たせまいと刀を銃目掛けて振り下ろす。

「甘いわー！」

銃弾で剣先を逸らした天堂はモモに回し蹴りをするとモモは受け身を取り、すぐさま起き上がる。するとそこには既に天堂の姿はなくなっていた。

「思い出したぞ。モモ、源モモだな」

その場に響く天堂の声にモモは警戒しつつ辺りを見渡す。

「ツキカゲの百地。源モモ。お前と斬り合ったこと、この体は覚えているぞ。近いうちにまた死合おうじゃないか」

声が遠くなっていき、殺気が無くなったのを肌で感じ取ったモモは警戒を解く。

「あの人は・・・いったい何者なの？」

~~~~~

~~~~~

「もう子供を取られないでね〜！」

戦いの後で孵化した赤ちゃんバードンを乗せたお母さんバードンはバイバイと手を振る伊智香にペコリと頭を下げる動作をすると空へと飛び去って行った。

「無事に子供をお母さんに返せたんだね」

「師匠！」

天堂との戦闘を終えたモモが伊智香のもとへと合流してくる。しかしその表情はやはり優れない。

「っ！」

モモは何者かの視線を感じ工場の煙突へと視線を向けるも……目の良いモモでも今の場所からそこまでは遠すぎてはつきり見えなかった。

「どうしたんですか師匠？」

「……ううん。何でもないよ。帰ろう伊智香ちゃん」

2人は仲間のもとへと戻っていく。その姿を工場の煙突の上から眺めていた天堂は銃口を2人へと向けて「バーン」と言うど霧崎がやってきた。

「彼女を倒さなくて良かったんですか？天堂さん」

「この体が……斬られた部分がうずくんだ。源モモを倒すにはそれ相應の舞台を用意しろとな」

ギユッと銃を強く握った天堂の視線は未だに遠くにいるモモへと向けられていた。

魔の山へ

それは数千年前の事。1人の巫女は地球の力を『剣』として赤い目の怪獣を山の中へと封印した。そして時は流れて現代、1人の少女の力が受け継がれた。

「協力を要請したいの」

彼女の名は安芸真鈴。近年四国にて新たに設立された組織『国防』に所属している少女なのだが、分けあってツキカゲへと協力の要請をしにきたのだ。

「それで、どうして協力の要請をしてきたのかな？」

かつての山伏の事もあり万が一の可能性も考えてツキカゲ基地には招き入れずに *W a s a b i* にて話を聞く命とモモは彼女からその理由を語り出す。

「設立されたばかりという事もあってうちの組織にはまだ構成員が少ないんだ。私も含めてまだ3人しかいないほどにね。それに私達は影の組織というよりは一般に知れ渡っている自警団に近い感じで……いや、設立されたばかりなんで知名度も何もないんだけどさ……」

真鈴の話によればメンバーは本来3人いたのだが四国の山にある祠を狙った何者かとの交戦した結果、2人は重体となり入院する羽目になってしまい。自分1人ではその

何者かの対処は難しいと判断した結果ツキカゲに協力・もとい支援要請をしてきたらしい。

「どうする百地？」

「どうするも何も・・・畏だったら嫌だけど、そうじゃないかもしれないし」

最終的にモモに判断が委ねられ、結果として彼女に協力することとなった。

~~~~~

九頭竜村。かつて地図から消されたその村には大昔、邪悪な神であり村の守り神でもあった異形のを奉り称えるため、村に訪ずれた旅人を人柱として捧げたという伝承が残る村だ。その村にある祠には『赤目様』という邪神が封印されているという。その邪神の力を手に入れるため訪れたかもしれない謎の人物に対してツキカゲはモモと五恵と命の師匠チーム3人で四国へと向かうこととなった。

「今回は師匠ズだけで出発なんて思い切ったね」

「畏って可能性もあるから警戒してつてのもあるけど最近ソラサキはまた物騒になってきているからね。戦力を全部こっちに割り振ったら駄目でしょ」

モウリヨウや連合を処理してからのソラサキは異屋人が集まってくる土地の一つと

なりかけている。そのため戦力を残しておかなければならぬわけだ。

「あの娘の話によれば祠に封印されているのは邪神らしいけどさ・なんかクトウルフ的な名状しがたいなんか眠ってたりしないよね？」

「そんなの私達に聞かれても・・・」

モモも五恵もそれに関しては何んとも言えないと反応していると真鈴は自分達の基地へと案内し、招き入れた。3人は万が一の事も考えて警戒しながらも、これといって怪しい動きはなかった。

「一応映像が残ってるんで・・・これを・・・」

真鈴が見せてきたのはドローンによる盾を持つ小柄な少女とクロスボウを持つ少女2人と謎の相手との戦闘の一部始終。謎の相手は全身が黒いタイツを着ていて金髪に仮面といったあからさまに怪しそうな姿をしていた。彼女達を知る由もないがその相手とはババルウ星人。またの名を暗黒宇宙人も呼ばれている凶悪なものばかりがいる星人だ。

「もしかしてまた宇宙人案件・・・かな？」

「その可能性が高いかもしれないけど、他の可能性も捨てないまま調査をしよう」

探す相手をババルウ星人に絞りつつ師匠組は映像を再度確認する。ババルウ星人は誰かを探すかのように倒した2人の手を確認していた。



「手形を確認しているのかな？」

「もしかしたら巫女を探しているのかもしれないわ」

「巫女？どゆこと？」

「コホン。あの祠に赤目様を封印したのは当時の巫女が地球から借りた光の力を振るつたおかげと伝承でありまして、いつか赤目様を倒せる戦士が現れた時に封印を解く事ができるのもまた巫女だけなんです」

「ババルウ星人に巫女が狙われているのでは？そう考えたモモ達はふと一つの疑問が浮かび上がる。」

「ところで真鈴ちゃんは どうしてその事を知ってるの？」

「・・・実は私・・・」

「モモ達は彼女こそババルウ星人ではと再び警戒していると、彼女は意外な言葉を言い放つ。」

「私、その巫女なんです」

本人は理解していなかったようだが、彼女自身が狙われていた張本人だった。

~~~~~

~~~~~

モモ達が巫女である瑠璃が狙われていた張本人だと悟った頃、伊智香は日課のトレイニングをしていた。

「いくら君の師匠がいらないとはいえ、トレイニングをサボっていいわけではない。分かってるな伊智香！」

「うん！」

「ならばまずはスクワット1000回を3セットからだ」

「うん！・・・うん？」

タイタスによるトレイニングを受けることとなった伊智香。しかしタイタスはいきなりスクワット1000回を3セットと今の伊智香には難しい回数を言ってきた。

「タイタス。流石に伊智香にスクワット1000回はキツイと思うぜ」

「そうだけ旦那。誰しも旦那みたいなマッスル目指してるわけじゃないんだ」

「むう。とはいえ私の見立てでは日頃のトレイニングメニューから考えるにこれがベストなトレイニング方法なのだが」

「こういうのは気持ちの問題なんだって。いきなりとつても多い量を『はい。スタート』でできるわけないっての。確かに今の伊智香に適切かもしれないねえが伊智香の感情も考慮しようぜ」

「確かにそうだな。すまない伊智香。では50回を3セットにするとしよう」

「うう・・それでも多い」

回数を減らしたタイタスにそれでも多いと伊智香は愚痴るも・・グロツキーになりながらもなんとか伊智香はタイタスからのメニューをこなしていた。

「よし！せっかくだから俺も伊智香を鍛えてやるとするか！」

「ハア・・ハア。えっ？フーマが？」

「ツキカゲつてのはスパイ。闇に潜んで活動するような組織だろ？そういうのは俺が適任だと思っただよ」

フーマは忍者みたいなウルトラマンと認識してる伊智香は「確かに」と頷く。

「基本は『隙なく、無駄なく、淀みなく』だ」

「うくん。なんかよく分かんない」

「最初のうちは分かんなくていいんだよ。俺も教わったところはさっぱりだったからな」

フーマは思い出す。自身の修行時代を。

「よく分かんないけどとりあえずやってみるよ」

伊智香はフーマの言った『隙なく、無駄なく、淀みなく』を意識しながらトレーニングを再開する。

「よし！俺も何か教えて・・・」

「お前に教えられることってあんの？ないだろ」

タイガも何かを教えてやろうとするも、フーマはタイガの性格からして教えられるものなんてないだろうと言ってくる。

「あ、あるさー！」

「たとえば？」

「光線・・・とか」

「お前。本気で言ってる？」

地球人である伊智香に光線技を教えようとするタイガにフーマはため息をついていた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

謎を解明するため九頭竜村へと足を訪れたモモ達。到着した彼女達はまずは周囲を確認するも・・・何の変哲もない村に思えた。

「いいの？案内役を置いてきて？」

「確かに案内できる人がいて欲しかったけど・・・間違いなく狙われてるのは真鈴ちゃん

だろうし、万が一の事も考えるよね」

敵の目的は邪神の解放。万が一にも真鈴が捕まってしまった場合、その邪神が世に解放されるかもしれない。そう考えると彼女をここに連れてくるわけにはいかなかった。

「幸い真鈴ちゃんは前回の国防の出撃に参加してなくて顔も割れてないし、下手に護衛をしてバレやすくするよりはこつちに人員をあてる方がいいかもって。．．．思ってたんだけどね」

モモは後ろを振り向いてみると．．．彼女の視線の先には真鈴が隠れるようにモモ達の後をつけていた。

「気づいてるからもう出てきていいよ」

「ご、ごめん。でも私だけ何もしないなんて出来なくて」

ついてきてしまったものは仕方ないとため息をついた一同は結果的に彼女の護衛をしながら村を探索するという結果に落ち着く。辺りを見渡してみると村は何やらお祭りの準備をしている様子だった。

「今日はお祭りか何かなのかな？」

「昔々、皆既日食の日。天空から異形のものや堕ちてきたんだ。異形のものや様々な厄をもたらしたのが、この村の人達だけは生贄を捧げることで逆に厄から守ってもらって

いたんだ。それがこの村の守り神、赤目様なんだ」

神社で祭り会場の設置をしていたお爺さんはモモ達に気づくなりそう説明をしてきた。命はモモの耳元で・・

「生贄が必要な神様ってやっぱり邪神なんじゃ？」

そう呟くとその場の村人全員が一斉に命を睨みつけた。

「この村では立派な神様なんだから下手なことは言わない方がいいよ。命ちゃん」

「ご、ごめんささい」

命が謝ると村人たちの視線が元の穏やかなものとなる。モモ達は一安心していたが真鈴だけはそれに違和感を感じ取っていた。

「なんだろう？この違和感みたいなの・・」

「どうしたの真鈴ちゃん？」

「なんか村人の人達がおかしい気がしたんだけど・・なんだろう？」

違和感こそ感じているが、その違和感の正体は何なのかまでは分からない真鈴。すると4人の前に1人の男性が近づいてきた。

「おや珍しい。若い娘達が村の外から祭りにくるなんて。俺は新聞記者の番場竜っていうんだ。毎年ここに取材しにきてるんだ。良かったら話を聞かせてくれないかな？」

番場竜と名乗る新聞記者は村の外から来る人間は珍しいと取材をしてくる。しかし

彼に対してはモモ達も違和感を感じ取った。

「私達は探しものがあったてここに来ただけで・・・そういうのはまた今度で」

真鈴は探しものがあるのでと断ると番場は残念そうにため息をつく。

「それじゃ私達はこれで・・・！」

モモ達はその場を後にすると村はずれの人気のない田んぼまでやってくる。

「あの新聞記者。露骨に怪しかったね」

「うん。如何にもって感じだった」

「え？えと、何がですか？」

気づいていたモモ達に気づいていなかった真鈴が尋ねる。

「あの人ね。私達と話をしている間一度も瞬きをしてなかったんだ」

そうモモ達と話している間、番場は一度たりとも瞬きをしなかったのだ。それだけで

はない。あの男は作り笑いを一切崩さなかった。残念そうにため息をついた瞬間もだ。

露骨に怪し過ぎた番場はモモ達に警戒されるには充分過ぎた。

「命ちゃんは どう思う？」

「例の犯人かどうかは分からないけどたぶん地球人じゃないよね。最近のパターンから

考えてさ」

「だよ。そう考えちゃうよね」

自分も宇宙人かも番場が宇宙人かもしれないと思ってたと同意するモモに真鈴は不思議そうな顔をする。

「あ、あの宇宙人ってどういう事ですか？」

宇宙人と遭遇した事がない真鈴は「宇宙人なんて」と信じていない反応をしていると、何か怪しげな気配を感じ取った。

「何だろ？ ビビっときた」

「ちよ、真鈴ちゃん!？」

真鈴は謎の気配を感じるその先へと向かっていき、モモ達もそれを追いかける形で同行していくのだった。

「どうしたの真鈴ちゃん？」

「ここから怪しい気配を感じたので・・・」

真鈴は扉の隙間から古い屋敷の中をのぞき込む。そこでは村人たちが奉られる神を崇め、そこにいた黒く金髪の宇宙人と耳の大きな宇宙人がそれを先導していた。

「っ！何を見てやがる！」

自分達を見ていた真鈴たちに気づいた宇宙人は気づかれたと逃げようとするモモ達を追いかけてくる。そしてそこにいた村人達もまるで宇宙人に洗脳されているかのよう追いかけてきた。

「二手に別れよう！」

モモと真鈴。命と五恵に分かれた彼女達はそれぞれ左右に逃げていく。2人の宇宙人と村人たちもそれぞれ手分けして2組を追いかけていくと命と五恵は耳の大きな宇宙人・フツク星人に追いつかれた。

「これは・・・やるしかないみたいだね。刺激的にいこうか」

「そうだね・・・！ピリツとするよ」

命と五恵はおそらく操られているであろう村人たちをなるべく傷つけないよう麻醉弾で眠らせていきつつも、フツク星人と戦闘を開始した。

~~~~~

~~~~~

「ふう。ここまでくれば・・・」

一方モモ達は村人達の追跡を振り切って山奥にある祠までやって来ていた。

「あれ？もしかしてここって・・・」

「ここはかつてこの地に舞い降りたという神が封印されているという祠ですよ」

2人の前に現れたのは番場だった。警戒するモモは数歩下がって距離を取るも、番場は警戒されている事は気にせず近づいてくる。

「いやあ、驚いた。気づいたら何故か皆さんが村人の皆さんに追われていたのですから」
驚いたという番場だがその表情は笑ったまま崩れない上に瞬きもしない。

「・・・何だろう。この祠の奥、何だかやな感じがする」

祠に封印されているという『邪神』の気配を感じ取った真鈴。その反応を見た番場は真鈴が巫女であることに気づいた。

「そうか。お前が巫女か！」

真鈴が巫女だと知った番場は豹変し、その姿を変える。暗黒星人とも呼ばれるババルウ星人だ。

「皆既日食の日は封印のパワーが弱まる。お前のその巫女とやらの力で封印を解いてもらうぜ」

正体を現した番場竜ことババルウ星人ブ羅斯は真鈴の腕を掴むとその手を祠に奉られる岩場へと押し付ける。すると岩場の裂け目が金色に輝き出した。

「さあ、復活の時だ！」

歓喜のあまり、より間近で見たいと巨大化するババルウ星人。巨大な相手には対処は難しいと判断したモモ達はずぐさま初芽に連絡した。

~~~~~

~~~~~

「そうですか。宇宙人が巨大化を……。ひとまず気を付けて戦線を離脱してください」
「……………」

初芽の通信でモモ達のピンチを知った伊智香はすぐさま基地の外へと出る。

「行こうタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手にした伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香は九頭竜村まで飛んでいくとババルウ星人の前に降り立つ。

「なんだお前は？タロウ？いや違うな。誰だ？」

「俺はタイガ！ウルトラマンタイガだ！」

「知らねえな！」

知らないと言われたタイガはその事を少し気にしつつもババルウ星人へと立ち向かっていく。

「タアッ！」

タイガの拳を受け止めたババルウ星人はタイガの腹部を蹴りつけて怯ませると回し蹴りをしてくる。回し蹴りをしてくる脚を掴んだタイガはそのまま自分も地面に倒れ込むように身体を捻らせてババルウ星人を転倒させた。

「ハアっ!」

起き上がったタイガは両足でババルウ星人を挟んでもう一度転倒させると、そこに全身を使ったダイブを決めようとするも、ババルウ星人はそれを避ける。

「ウワツ!?!」

「どうした若造。そんなもんか?」

「誰が若造だ! うっ・・・」

角を掴まれて無理やり起き上がらされたタイガは、そのまま押さえつけられてしまっても肘内で相手を怯ませて難を逃れる。するとババルウ星人は腕のカッターを煌かせるとそれをタイガへと振るってきた。

「っ!・・・うわっ!?!」

初撃は避けれたタイガだったが予想以上に素早い動きに翻弄されたタイガはその腕のカッターによる一撃をわき腹に受けてしまい膝をついてしまう。

「もう終わりか? 退屈だ」

タイガを舐めるように髪を逆なでするババルウ星人。それに反応したのはフーマ

だった。

「舐めやがって。俺がぶつちぎる！」

『カモン！』

「風の覇者！フーマー！」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

「セイヤっ！覚悟しな金髪野郎。調子乗っていられるのも今のうちだけだぜ」

伊智香はウルトラマンフーマへと変身を遂げると、フーマはババルウ星人を挑発し、

高速で接近する。

「何っ!？」

その速さに驚いたババルウ星人はフーマの回し蹴りを喰らい転倒する。

「疾風怒濤！俺はお前より速えぞ」

「このっ！」

起き上がったババルウ星人はフーマへと殴り掛かるも、フーマはその拳を弾いて後ろに回り込む。そしてわき腹に一撃を決める。そして怯んでいるババルウ星人の後ろに回り込んだフーマは再び回し蹴りで転倒させた。

「遅え。遅え」

兆発するフーマにキレたババルウ星人は腕のカッターを振るってくるも、その側面を両腕をクロスさせて受け止めたフーマは即座に後ろに跳び下がった。

「もう終わりかよ？ 退屈だぜ」

「畜生！ 真似しやがって！」

真似をするフーマに向けてババルウ星人は光線を放つと、フーマは右腕を輝かせた。

「極星光波手裏剣！」

ババルウ星人の光線を極星光波手裏剣で相殺したフーマは自慢げに腕を組む。

「俺の光線は一味違うだろ。．．．さあ、仕上げと行こうぜ」

「うん！」

『カモン！』

ビクトリーレットを装備した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ビクトリーレット・コネクトオン』

金色に輝くV字の光刃を展開したフーマは剣を取り出したババルウ星人目掛け高速で駆けていく。

「鋭星！ 光波手裏剣！」

飛ばさずにそのまま手裏剣でババルウ星人を斬りつけたフーマは駆け抜けると光刃

を解くとババルウ星人はそのまま倒れ込む。それを背にフーマは「お前は遅すぎる」と告げるとババルウ星人は爆発した。

「やったねフーマー！」

「ああ。それじゃ帰るか」

フーマはそのまま飛んで帰ろうとするとタイタスが何かに気づいた。

『待て。何か来る』

「旦那。何かってなんだ？」

フーマはタイタスにそう訪ねた途端、山が割れてそこから悪魔のような姿をした怪物が現れた。その怪物こそが赤目様・・・悪夢怪物ナイトファングだ。

「何だ？うわああああっ!？」

「変われフーマー！俺が行く！」

『ウルトラマンタイガ！』

突如火球による攻撃を仕掛けてきたナイトファング。警戒してなかったところからの不意打ちに対処できなかったフーマはその攻撃の雨を浴びることとなるとタイガが前に出た。

このナイトファングとの戦いがタイガに新たな力を与えることとなる。

悪魔を討つ

「シユア！」

封印が解かれた悪魔、ナイトフアングを倒そうと先制攻撃を仕掛けるウルトラマンタイガ。タイガは角からブルーレーザーを放って牽制しつつ蹴り込もうとするも、タイガはナイトフアングの放つ火球により怯まされてしまう。

「くう……！」

「……！」

タイガに興味を無くしたかのように久しぶりの外界を見渡したナイトフアングは翼を広げて空へと飛び去って行く。

「させるか！」

『カモン！』

『ブルレット・コネクトオン！』

「アクア！プラスチックター！！」

背後からアクアプラスチックターを受けるナイトフアングだったが、その一撃に怯む様子もなく何処かへと飛び去って行ってしまふ。既にカラータイマーが赤く点滅していたタ

イガはそれを追いかけることは敵わなかった。

~~~~~

~~~~~

「まさか村の人達が幽霊だったなんて・・・」

消えた村人達に驚かされた命と五恵はモモ達と合流する。

「あれは幽霊なんて生易しいものじゃないね。あれはたぶん・・・悪霊だと思う」

「悪霊って・・・刺激的で笑えないって」

苦笑する命に落ち込んでいる真鈴は話を続ける。

「長年生贄にされてきた人達の幽霊が悪霊になって、それに目をつけた宇宙人達に利用されて・・・こんな事態になったの」

自分がここに来てしまったからと落ち込む真鈴。3人はどう言葉をかけようか悩むも、まずは逃げたナイトフアングの対処をしようと判断し、ツキカゲ基地へと帰還する事にした。

~~~~~

~~~~~

「なんとかすると行っても・・・難しいですね」

モモ達3人は真鈴を連れてツキカゲ基地へと帰還するとすぐさまナイトフアングの対策会議を開いた。情報の少ないナイトフアングを何とかするといっても今はまだ記録に残る文献を調べて情報を探る程度しか出来ていなかった。

「みんな、ちよつといい？」

手詰まりの中やってきたのは風の部隊に所属する轟葉栖美。様々な動物と意思疎通ができるという能力を持つ彼女は一冊の古びた文献をツキカゲ基地へと持ってきた。

「葉栖美さん、それはいったい？」

「前に宇宙人から押収した太平風土記って本だよ。今回は緊急事態ってことでツキカゲにもこれを見てもらおうって持ってきたんだ」

葉栖美は風土記のあるページをめくる。そこにはババルウ星人が化けた番場が言っていた伝承と同じ事が書かれていた。

「モモちゃんから伝えられた情報と一致するのってさ、たぶんこのページに乗ってる怪獣なんだよね」

「無威徒奮愚・・・ナイトフアングと読むのでしょうか？」

『ナイトフアング。そうか！もしか！もしやと思っていたがやはりあれはナイトフアングか！』

薄々は察していたタイタスはナイトフアングの名前に反応する。

「知ってるのタイタスさん？」

『ああ、噂程度にはな。人々を悪夢をもたらすというナイトフアング。よもやこの地球に降り立っていたとはな』

「ナイトフアングをなんとかする手段は・・・」

「地球的・・・エネルギー」

文献を見た真鈴はそう呟く。

『ほう。お嬢さんも私と同じ答えとは・・・』

タイタスは関心しながらも説明を始める。

『この文献を読み解くに、麗しきシャーマンは祠を媒介として地球的エネルギーを引き出して奴を封印しようだ』

「なるほど・・・」

封印のされていた手段は分かった。しかしそれを再現するのは難しいと伊智香はトリスクワッドの面々と悩んでいるとドローンで町を監視していた初芽が報告をしてきた。

「大変です皆さん！東京都内にナイトフアングが！」

初芽は東京都内に降りてきたナイトフアングをモニターに映し出すと、ナイトフアングは怪しげな音波を放ち始める。すると映像に映る人々がバタバタと倒れ始めた。

『伊智香！この音を聞いちや駄目だ！』

「皆さん！この音を聞いちや駄目です！」

タイガに警告されて伊智香はメンバーに音を聞いちや駄目だと警告する。初芽は咄嗟に近くに置いていたヘッドホンをつけることで難を逃れたが他のメンバーはそれを聞いてしまったことではたばたと倒れてしまった。

伊智香は夢を見た。モモと出会う日の事、偶然取引を目撃してしまい、見知らぬ男達によつて攫われて危ない目にあつたことを。

モモは思い出す。かつてモウリヨウの罠にハマられてしまい、師匠である半蔵門雪が殺されかけたことを。

命は思い出す。自分の師匠が片腕を失う事となり前線を離れることとなつた事件のことを。

楓は思い出す。作戦だったとはいえ師匠である命に裏切られ捕えられてしまった時のことを。

五恵は思い出す。モウリヨウの作り出した薬で我を失い、初芽を手にかげようとしてしまった時のことを。

テレジアは思い出す。幼き日、初芽のみが助けられ、自分のみが誘拐犯に捉えられたままとなったと思い込んでしまった出来事を。

各々が過去のトラウマを悪夢として見せられていると難を逃れた初芽が周波数を解析し、音波を反響させて遮断する装置を作り出し、ツキカゲ基地にそれを流し出す。すると倒れた伊智香達が目を覚ました。

「うう……。嫌な夢を見た気がする」

「ナイトファングは人々に悪夢を見させる。そしてその苦しみを自身のエネルギーへと変換する」

「……人の苦しみを……」

「えっ？何伊智香ちゃん」

「あつ、えつと・きつとナイトファングは人々の苦しみをエネルギーにしてるんですよ」
伊智香はタイトラスが言った事をそのまま皆へと話すと、皆はそれに納得する。

「なるほど。だからナイトファングは人口密集地の東京に……」

「師匠。たとえばこれが怪獣だとして……今基地に流しているこの音波を怪獣に向けたら、怪獣の音波を打ち消せますか？」

「可能なはずですね」

五恵はコーヒーの四方をペンで取り囲むようにして例えると初芽はそれを可能だと判断する。

「ですがこの作戦を実行するには私の作った強化ドローンだけでは難しいですね。ZE Tの協力が必要です」

「それにこんな規模の作戦だと私達と同じ音波を聞いて倒れてるの人々の避難誘導も必要だ。風にも協力を要請すべきだ」

初芽とテレジアはそれぞれツキカゲだけでは難しいと判断して各地の組織に応援要請をすることを提案し、皆それに同意する。

「でもあの怪獣を封印しないかぎり・・・」

「適材適所だ。あいつの体内には今でもかすかに地球のエネルギーが眠っているはずだ。それをこのお嬢さんが引き出し、私達の光の力と融合させれば勝機はある」

半透明な10センチタイタスは真鈴の右肩でスクワットをしながらも策を伊智香へと話す。

「なんか・・・肩が重いんですけど」

真鈴は肩に乗るタイタスを霊能的に感じ取ったのか、肩を払う。そして各々がその準備に取り掛かるも真鈴は一人悩んでいた。

「真鈴さん？」

「前から悩んでいたんだ。私さ、チームとしてはオペレーターの役割をしてさ。戦闘には参加しないんだよね。チームの中では最年長のお姉ちゃんなのにさ、戦闘では年下の女の子たちに頼りっぱなしなんだよね。2人は気にしてないんだけど、こっちはどうにも気にしちゃうのよ。自分は無力なんだなって……。それがどう？ いざ前線に出てみたらあんな怪物を世に放り出しちゃうような足手まといよ。・・・ハア」

落ち込み、ため息をつく真鈴に伊智香は何か言葉をかけようとするも、かける言葉が見つかからない。そう思っていると真鈴は自身の頬を両手でバシツと叩いた。

「ああもうーうじうじしてるなんて私らしくもない！ 球子と杏のお姉ちゃんだからしっかりしないと！」

自分らしくないと自力で立ち直った真鈴は自分にも何か出来ることがあるはずだと外へと出て行く。

「あいつ自分で非戦闘員って言ってたわりにアクティブだな」

「そうだね・・・」

タイガと伊智香は随分とアクティブなオペレーター、真鈴に呆気にとられながらも彼女を追いかけて外へと出て行った。

~~~~~

~~~~~

「ほらほら！こっちよこっち！」

迷彩により人々には空飛ぶロボットにしか見えないが、空には無敵甲冑というアーマーを身に纏い空を飛ぶ女性がいた。彼女の名は敷島来夢。妹とともに2人姉妹だけの組織ZETの一員でコードネームはノブナガ。初芽の応援要請に応じた彼女は風の部隊が避難させた地点までの誘導を任されていた。

「よし！誘導ポイントまであと少し！」

あと少しで誘導ポイント。そう安心しかかっていると彼女を狙ってナイトファンクが火球を放った。

「やばっ！」

来夢はその火球をギリギリで躲し、何とか誘導ポイントまで誘導すると、予定通りナイトファンクに音波を浴びせることに成功した。その隙に眠りに囚われていた人々を非難させていく風の部隊と来夢の部下の女性たち、通称来夢ガールズ。そして避難が完了すると伊智香はナイトファンクを見上げられる場所までやってきた。

『ここから俺達の出番だ！行くぞ伊智香！』

「うん！行くこうタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はナイトフアングの前へと降り立つと、放たれた火球を炎を纏った回し蹴りで打ち消した。

「なっ……!?!」

振るわれた触手に首を絞めつけられたタイガはナイトフアングの音波を浴びせられる。するとタイガはかつての悪夢を……。タイタスとフーマが、そしてタイガ自身がトレギアの手にかかった時のことを思い出してしまう。

「うわああ……ぐあ!?!」

悪夢に苦しむタイガに対してナイトフアングは容赦なく攻撃を仕掛けてくる。ツキカゲ基地にいる初芽も援護したい気持ちがあつたが、すでに音波の音量はMaxで手の施しようがなかった。

「はあ……はあ……」

そんな中真鈴はタイガとナイトフアングが見上げられるモモが待機していた場所までやってくる。

「真鈴ちゃん!? いったいなんで・・・」

「あの悪魔から地球のエネルギーを引き出せれば・・・きつと・・・」

既にやるべきことを悟っていた真鈴は自身の巫女としての力でナイトフアングの中に残る地球的エネルギーを引き出そうとする。それはナイトフアングの頭上に光のオーロラを作り出していると、それに気づいたナイトフアングはモモと真鈴の方へと振り向いた。

「っ!!」

危険だと判断したモモは真鈴の手を引いてこの場を離れようとするも、彼女は動こうとしない。すると2人に向けてナイトフアングの火球が飛んでくると・・・ナイトフアングから解き放たれた地球的エネルギーのオーロラが剣の形を成して、真鈴の手に握られた。

「・・・えっ?」

自分が無事な事に驚くモモ。モモと真鈴は剣から発せられたエネルギーのバリアによつて守られていたのだ。

「これは・・・」

「地球のエネルギー・・・かな? スゴイパワーを感じるもん」

真鈴自身もその剣に宿るエネルギーに驚いていると、次にどうすべきかを地球が告げ

てくれたかのように剣を振るい、その剣をタイガのカラータイマー目掛けて投げ飛ばす。

「お願い。ウルトラマンタイガ」

地球的エネルギーである剣を託されたタイガ。するとタイガの中にいる伊智香が腰につけてあるタイガアクセサリーが地球的エネルギーの剣と共鳴している事に気が付いた。

「これは・・・？」

「俺の光のエネルギーと地球のエネルギーが共鳴している」

タイガの光の力と地球のエネルギーの共鳴。すると地球的エネルギーの剣はタイガアクセサリーと一つとなつてその形状が変化した。

「よし。新しい力で・・・悪魔を討つよ！」

『カモン！』

伊智香はパワーアップしたタイガアクセサリー、タイガフォトンアースアクセサリーを手にとるとその左右のクリスタルをタイガスパークへとかざす。

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの力を手に！」

フオトンアースアクセサリーを右手に持ち替えると、左右のウイングが展開する。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！フオトンアース！』

「シユア！」

黄金の鎧を身に纏ったタイガ、ウルトラマンタイガ・フオトンアースへと強化変身を遂げたタイガは再びナイトフアングと向かい立った。

「ハッ！デリヤア！」

ナイトフアングの放った火球を拳で跳ね返したタイガ。跳ね返された自身の火球に怯んだナイトフアングは怒った様子でタイガへと触手を鞭のように振るってくるも黄金の鎧を身に纏ったタイガにそのような半端な攻撃は通用しない。

「ハアアアッ！」

タイガは反撃と言わんばかりに回し蹴りをナイトフアングの眼に目掛けて決め込む。その一撃に激しく怯まされたナイトフアングにタイガは連続パンチを仕掛けて、更に怯ませる。

「デエア！」

突進攻撃を正面から受け止めたタイガは右拳を頭部目掛けて叩き込み腹部に蹴りも決め込むと、ナイトフアングは後退してしまう。

「ハアアア・・・」

オーロラのように輝く大気中の光エネルギーをも体内に吸収するタイガ。ストリウムプラスターと同じ構えを取ったタイガはそのエネルギーを一気に解き放つ。

「オーラム・・・ストリウム!!」

タイガ・フォトンアースの必殺光線であるオーラムストリウムがナイトフアングへと炸裂する。するとその一撃が直撃したナイトフアングは爆発四散して、ウルトラマンタイガ地球のエネルギーでパワーアップした姿であるウルトラマンタイガ・フォトンアースが勝利した。

~~~~~

~~~~~

「地球のパワーか。興味が湧いた。その力、試してやろう」

手にしている鉛色の銃で自身の頭を射ち抜く天堂。すると天堂の身体が闇に包まれ、天堂は闇の巨人ウルトラマンバレットへと変身を遂げた。

「お前は・・・バレット!」

「やあウルトラマンタイガ。地球の力、試させてもらおう」

バレットが現れた事に反応したタイガ。バレットは真つ先に先制攻撃と言わんばか

りの貫手でタイガを攻撃してくる。

「っ！」

その攻撃を受け流したタイガはその拳を振るうと、バレットは右肘と右ひざで挟むようにその拳を受け止めた。

「ハアっ！」

受け止められた拳から光のパワーを放ったタイガ。バレットは咄嗟に後ろに跳び下がる。

「バアン」

人差指から光弾を放ったバレットだったが、タイガはそれを避ける事無く突撃し、バレットに掴みかかる。

「くっ……。これが本物の光の戦士の『成長』というものか」

「俺達はお前やトレギアのような闇の奴らに負けない！」

「ほう、ならばその力、もっと見せてみる！」

飛び上がったバレットはエネルギーを集束させて下にいるタイガ目掛けてガトリウム光線を放ってくる。

「スワローバレット！」

タイガもそれに対応するように強化版のスワローバレットで応戦し、ガトリウム光線

の全弾を撃ち落とした。

「ほう。ならこれはどうだ」

両腕を広げたバレットは両手を合わせて指で銃を作ると、その指先にエネルギーを集束させる。

「バレットウディザスター」

「っ!!オーラムストリウム!」

直撃はマズイと判断したタイガは再度オーラムストリウムを放ってバレットの光線を打ち破ると、タイガのオーラムストリウムはバレットの左肩に命中した。

「ぐっ・・・まさかこれほどは・・・」

ウルトラマンタイガ・フオトンアースの力を図り終えたバレットは闇に溶けていくかのように姿を消していく。戦いを終えたタイガも空へと飛び去って行った。

~~~~~

~~~~~

「地球の力、まさかあれほどはな」

バレットの変身を解いた天堂は左肩を押さえながら裏路地の壁に寄りかかる。

「発展途上のウルトラマンというのは計算外の事を巻き起こすことがあるから厄介だ」

「その割には笑っているじゃないですか天堂さん」

サンドイッチを食べながら裏路地へとやって来た霧崎は天堂にその顔が笑っている事を指摘する。

「笑っている？私がか？」

「ええ。まるで遊び相手を得たような顔をしていますよ。今の貴女は」

「遊び相手。そうか、そうかもしれないな。スマッシュと死闘を繰り広げてからはや12年。傷を癒しながら敵のいないつまらない日々を過ごしてきた。だがようやく『敵』になり得る存在に出会えたのだ。この高揚感・・・そうか、これが喜びか」

造られた存在、ウルトラマンバレット。そんなバレットがタイガとの戦いで得た感情は『喜び』だった。

「それで、次はどうやってタイガと遊ぶ気なんですか？」

「ふう・・・次か」

一呼吸置いて胸の高まりを押さえた天堂はもちろんと言いたげにハローワークの職業案内本を取り出す。

「そろそろ次の終わりの魔獣を蘇らせるとしよう。その方が貴方としても都合が良いのだらう？」

「ええ、ぜひお願いします」

サンドイツチを食べ終えた霧崎はその場を後にすると、天堂も次の終わりの魔獣を復活させるべく次のターゲットを狙いに行つた。

~~~~~

~~~~~

戦闘を終えてから数日が経ち、真鈴は愛媛へと帰ることとなつた。それを見送るためツキカゲメンバーはソラサキ駅へと来ていた。

「それじゃ皆さん。色々お世話になりました」

「もう行つちやうの?」

「帰つたらやらなきゃいけない事もあるからね」

モモが残念そうな反応をしていると、真鈴はやらなくてはならない事があると告げる。

「やらなきゃいけない事? 事後処理はこつちでやったでしょ?」

「元々さ、四国の各組織は2人づつくらいに人数が少ない組織ばかりだね。3つの組織を合併する計画があつたんだ。最前線で戦う5人の勇者とそれをサポートする2人の巫女つて感じのチームをね。そつちの話も進めないといけないんだ」

「そっか。頑張つてね真鈴ちゃん」

いざ電車に乗り込もうとする真鈴は伊智香の方へと振り向く。

「な、なんでしようか？」

「星の人？それと青い人かな。あとは牛？赤鬼かな？伊智香ちゃんには大きな角のある守護霊が憑いてるね！きつと危険から守つてくれるよ！」

「は、はは・・・。大きな角の守護霊ですか」

それぞれ誰の事か分かる伊智香は苦笑してごまかす。幸いにも自分がタイガ達と一心同体となつて怪獣や宇宙人と戦っている事は気づかれていないようだ。

「誰が赤鬼だ！」

タイガは赤鬼と呼ばれたのが釈然としなかったのか怒っていたが、それは伊智香以外には聞こえてはいなかった。

渦巻く因縁

フォトンアースの力を得た夜。タイガはその力に興奮していた。

「太陽と地球のパワーのフォトンアース！凄まじいエネルギーを感じたぜ！」

「ふん」

「良かったな」

パワーアップできたタイガと比べてフーマとタイタスのリアクションは薄めだった。

「あれ？なんかリアクション薄くね？」

「だって俺ら感じてねえし。その太陽と地球のエネルギーっての」

「私も感じてみたかった。太陽と地球のエネルギー」

あからさまにスネていたフーマとタイタスに「ええ・・」と反応するタイガ。

「しょうがないよ。あの時、私がタイガ君を選んだから」

「俺は騙されねえぞ！あの時タイガは『いぞ伊智香！』って言ってた！それやられたら伊智香もタイガのアクセサリーに手がいつっちゃうだろ！それってお前が伊智香を誘導してたってことにならねえか！」

伊智香はフォローに入るもフーマは突っかかる。

「それこそ言いがかりだろ！なあ、伊智香！」

「う、うくん。言われてみれば・・・」

言われてみれば確かに伊智香はタイガが行くぞと言ったためタイガアクセサリーを握った。

「い、いいじゃん！誰がなつても！勝てたんだし！」

「だいたいナイトフアングに眠る地球エネルギーをウルトラの光に融合させる作戦を思いついたのは私だぞ。誰がなつてもというなら私でも良かったはずだ」

「そんな事言われてもさあ・・・」

「私もオーラムプラニウム撃つてみたかった」

「俺も金星光波手裏剣撃てたかもしれないのに」

「分かったよ！次にこういう機会があったら2人に譲るって」

タイガは2人に次のチャンスがあれば譲ると約束すると2人は渋々納得する。

「しかしあれだな。フォトンにアースか。何処となくウルトラマンガイアを想起させるな」

「ガイア？誰だそれ？」

「大地の赤き巨人。地球のエネルギーから生まれた2人のウルトラ戦士の1人だ」

「地球の・・・そういうウルトラマンもいるんだね」

「知らなかったぜ」

「しかしタイタスは物知りだな。別の時空のウルトラ戦士まで知ってるなんて」

伊智香だけじゃなくタイガとフーマすら知らなかったと反応をするとタイタスはため息をつく。

「健全な肉体に豊富な知識。ウルトラマンを名乗るにはその両方を兼ね備えてなければならん。この地球とは違う地球のため、伊智香が知らないのは無理ないが君達2人はいささか後者が足りんような気がするがな」

「うっ、藪蛇だったか」

「ヤな予感」

「あつ、私もう寝るね。お休みなさくい」

伊智香がベッドに入っていくとタイタスはガシリとタイガとフーマの肩を掴む。

「せっかくだ。私が君達に様々なウルトラマンについて講義をしてあげよう！」

「ええ!?!」

「ほらやつぱり!絶対長くなるパターンだよ」

「ではさっそく始めよう。まずはTOY一番星出身、ウルトラマンナイスからだ!」

タイガとフーマが嫌がりながらも、タイタスの講義は翌朝まで続いた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ソラサキの病院に入院している車椅子の少女はつまらなそうに外を眺めていた。

「ああ、もうホントに右腕、動かないんだ」

頻発する怪獣事件に巻き込まれ、大怪我をした少女は自分の右腕を左手でさする。彼女の名は碓氷雅美。高校1年生でありながら弓道で全国区にまで上り詰めた実力者だが不慮の事故で右腕と右脚が動かなくなったのだ。

「どうせもう治らないなら・・・いつそ・・・」

夢であった全国大会を辞退する結果になってしまい・・・今後大会に再チャレンジする事もできない。彼女の夢は潰えた。『いつそ死んでしまいたい』そう彼女は考えてしまっているとは何処からか声が聞こえてきた。

『死んでは駄目です。僕なら君の体を治してあげることができます』

「えっ? 誰?」

病室を見渡すも、この病室には自分以外誰もいない。雅美は「まさか幽霊?」と恐怖しそうになっていると、謎の声が再び語り掛けてくる。

『君の体を治すかわりに、僕の頼みを一つ聞いてほしいんです』

「頼み? というか貴方はいったい・・・?」

『僕はスマツシユ。ウルトラマンスマツシユです』

雅美の前に現れた赤い光。ウルトラマンスマツシユと名乗るその光は雅美に身体を治す代わりに1つの頼み事を要求した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「今日も雨漏りが酷いなあ」

雨の強い日。2か月前の台風の被害を受けた屋根は今回も雨漏りをしていた。一度は屋根を直してもらったのだが、それは業者ではない人達による詐欺まがいなズサンなもので正しく修復されはしなかったのだ。

「直してほしいけど、今は他に手いっぱいだしなあ」

今は1人暮らしとなっている男性は雨漏りをしている天井を眺めながらため息をついていると突風が家を揺らした。

「今日は風も強いな」

風も強いことに嫌気がさしていると、インターホンを知らせる音が鳴り響いた。

「はいはい。どなたですか？」

玄関へと小走りした男性は尋ねてきた相手のもとへと行くと、そこには金髪の女性とカメラマンが立っていた。

「こんな雨の中申し訳ありません。テレビの取材で伺いました」

「取材？今更いつたいなんの・・・」

「こちらの御宅も屋根の修理の詐欺被害にあったと伺ったので・・・」

男性は「今更また取材にくるなんて」と思いながらも、ひとまず彼女達を家の中へと招き入れる。

玄関先に立っていた女性の取材に応じた後、彼が雨漏りに苦しむことはなくなった。

~~~~~

~~~~~

「終わりの魔獣の気配がしますね。久しぶりに終わりの魔獣の復活に成功しましたか天堂さん」

天堂のもとへとやってきた霧崎はそう尋ねると、天堂は少し残念そうに首を縦に振った。

「復活してくれたのは良いが私の求めていた魔獣ではなかった。今回は『水』だ」
「水。ああ、カイトンですか」

「ああ、終わりの水。終海貝獣カイトンだった。私が求めているのは風なのだがな」
ため息をついた天堂はポケットから2つの怪獣ビークルを取り出す。

「とはいえせっかくの終わりの魔獣だ。覚醒のための餌は用意してやらんな。アタツクチエンジ」

やる気がなさそうに手のひらに怪獣ビークルのバンパーを押し当てた天堂は、その怪獣ビークルを銃で撃ち抜く。

『GO！ゴモラ！』

「せっかくだ。これも与えよう」

『GO！レッドキング！』

ゴモラとレッドキング。2体の車両怪獣を召喚した天堂はため息をつきながらも2体をカイトンのいる海へと向かわせた。

~~~~~

~~~~~

「凄い渦だね。タイガ君」

「この渦、ただの渦じゃないな。怪獣の仕業かもしれない」

ソラサキの海に突如発生した巨大な渦。それに何かを感じ取ったタイガ達は伊智香とともに海へとやってきていた。

「くしゅんっ。やっぱりもうこの季節の海は寒いね」

「今、寒いなんて言ったら怪獣を倒しに行くときどうするんだよ」

既に季節は秋の終わり。この季節に海に入るのは嫌だと考えた伊智香は露骨に嫌そうな顔をする。

「まだ怪獣って決まったわけじゃないよね？」

天気は晴れで特に風も強くない日だと言うのに海には肉眼で分かるほどの大きな渦。ツキカゲも気にしてこそいるのだが流星に管轄外ということで動くことはなかった。

「むっ、そこにいるのは伊智香か？」

「あつ、風の皆さん！」

ツキカゲこそ動かなかつたが、万が一宇宙人の仕業だったらという事で風の部隊が確認のため海へとやってきた。

「キミが百地の弟子って子だね。初めまして。私は宗近飛粋。コードネームは不動だよ。よろしくね」

宗近飛粋。人の技や特技を真似ることが得意な彼女は伊智香に握手を求めてくると、

伊智香も握手を返す。

「あつ、はい。才賀伊智香です。コードネーム孫市です。よろしくお願いします」

伊智香はまだ会っていないかった凧の飛料とあいさつを済ませると、凧は何らかの装置を用意し出した。

「それはいったいなんですか？」

「これ？これは海の中に何かがあるんじゃないかって調べるためのソナーだよ。ドローンで調べられたら一番楽なんだけど、海の中じゃそうはいかないからね」

「水質調査もすべきなんじゃろうが、そう言ったものは専門に任せるしかない。しぶき達にできるのはその前に怪獣や宇宙人の円盤が近くにいないか確かめておくという事ぐらいじゃ」

危険な任務は自分達で受け持ったという凧の部隊。彼女達は機材の準備を終えるとさつそくソナーを起動させる。

「あく、やつぱり何かいるよ。渦のど真ん中に。何か大きいのがいる」

葉栖美はソナーが観測した画面を確認して海に何かがある事を確認する。

「やはりか。後は調査班に水質調査をしてもらい、海に何が潜んでいるのかを調べてもらうしかないのう」

水質調査と海の中の調査は流石に自分達ではできないというしぶき達。そんな最中、

地中からゴモラとレッドキングが現れた。

「怪獣！皆、退避じゃ！」

しづきは風のメンバーに退避を命令すると、風の部隊はその場から離れていく。

「伊智香！ゴモラとレッドキングはともに力強い怪獣だ。力対力、ここは私が行こう！」
「うん！お願いタイタスさん！力の賢者……」

伊智香はタイタスのアクセサリを手に取りとうると、慌てた様子で飛粋が戻つて来た。

「何してるの伊智香ちゃん！早く逃げないと危ないよ！」

「タイ……あつ、ちよ……」

飛粋に手を掴まれて引つ張られていく伊智香は変身ができないままその場を離れていく。すると天堂によって召喚されたゴモラとレッドキングは命令通り海へと潜っていくと、ゴモラが先に渦へと？まれた。ゴモラは海の中にいるカイテンに噛みつかれ、その生命エネルギーがカイテンへと奪われ、ゴモラの死体が海へと沈んでいった。

「今のは……！」

その一部始終を見ていた伊智香と風の部隊はもしかしたら海に危険な生物がいると判断して海から一旦離れる。

「今のはつきりと分かった。海の中にいるのはカイテンだ」

「ああ、私も同意見だ」

タイガは海の中にいる存在をカイテンだと断定すると隣にいるタイタスも頷いた。

「回転？ 回転してる怪獣だから？」

「まあ、名前の由来はそうかもしれないけどさ・・・」

終わりの水。終海貝獣カイテン。一見すると海の中でただ回転をするだけのこの魔獣だが、その実態は恐ろしい特性を秘めている。

「タイタスさん。終わりの魔獣はみんな凄い能力があつたけど、あの魔獣はどんな能力があるの？ まさかカイテンって名前の通り、回転で竜巻とか台風を作ったりするの？」

「いや、カイテンは水の魔獣。風を操る力はない。しかし海を、水を操る力ならある。一見あの貝獣はただ回転しているだけのように見えるが・・・海を洗浄しているんだ」

「洗浄？ 洗ってるってこと？」

「そうだ。地球の海水の塩分濃度は約3，5パーセントとされている。それがもし0になった場合、海にいる生物はどうなると思う？」

「それって・・・海の生物は生きられないんじゃない？」

「ああ。しかしそれだけではない。水質が変わる以上、地上の生物にも大きく影響がでてしまうのだ」

「実際そのせいで自然豊かな星だった惑星ジャグジャグや水の塊みたいな惑星のブルル

ン星が壊滅的被害を受けたってオーブから聞いたぜ」

海水が真水になるという事は海水魚である多くの魚は死に絶えて生態系も大きく変動してしまう。魚を食べようにも淡水には殺菌作用はないので生で食べることはできなくなる。更には海の浮力が減少して大型の船は沈没するようにもなり、最終的には泳ぐ事はおろか飲むことすら出来なくなる。

「なら、早く行かないとね」

伊智香は風の部隊の目を掻い潜って再び海に戻ろうとしたが、まだ半人前な伊智香ではプロ4人の目を掻い潜ることは難しかった。

「海の中に怪獣を食べちゃうような怪獣がいるってことは分かったけどさ。実際どうしようか。流石に怪獣相手だと私達にできることってあまりないよ」

「それでもじゃ。せめてウルトラマンが来るまでできることをやろうではないか」

怪獣や巨大化した宇宙人相手となると自分達にできることと言えば避難勧告や海に近づかないようにと注意喚起をすることぐらいしかできないと一同は悩んでいるもしぶきはそれでもとできることをしようとする。

「まあ、そのウルトラマンも足止め喰らってるんだけどな」

「タイガ君。それを言っちゃ駄目だよ」

怪獣の足止めどころかウルトラマンが足止めを受けている事をタイガは口出しする

も、伊智香はそれにツツコミを入れる。

「伊智香。とつとと抜け出して変身するんだ！」

「分かつてるけど・・それができたら苦労しないよ」

こつそり抜け出す事は不可能。かといってこのタイミングで帰る事もあまりにも不自然なためどうしようかと悩む伊智香。しかし突如としてタイミングは巡ってきた。

「っ！」

こちらに気づいたレッドキングが海に浸かる直前に振り返り、近くの岩を持ち上げて、投げ付けてきた。

「総員退避！」

バラバラに避けた事で風の部隊と別れる事に成功した伊智香は右腕にタイガスパークを出現させる。

「今度こそ行くよタイタスさん！」

『カモン！』

「力の賢者！タイタス！」

レッドキングに挑むため、伊智香はタイタスのアクセサリーを手取る。

「バデイ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

そしてそれを右手に持ち替えて空へと突き上げ、ウルトラマンタイタスへと変身した。

「フンっ！」

ダブルバイセップスのポーズを取ったタイタスはレッドキングの岩石投げに動じずにいると、この攻撃では効かないと判断したレッドキングは直接殴り掛かってくる。

「又ウン！」

サイドチェストの筋肉でレッドキングの攻撃を受け止めたタイタスは反撃の右拳を叩き込んで怯ませる。

「これまでの状況から察するに、終わりの魔獣の完全復活には別の怪獣からその生命エネルギーを奪い取る必要があるようだ」

タイタスにそう言われた伊智香はこれまでの終わりの魔獣達のほとんどが怪獣からエネルギーを奪い取っていたことを思いだして「そうかもしれない」と頷く。

「だとしたらさっきの怪獣・ゴモラって言うってたっけ？あの怪獣でもうカイテンは……」
「ああ、復活を遂げただろう。更なるエネルギーを与えるわけにはいかん。確実にレッドキングを倒すぞ」

レッドキングの首をホルドしたタイタスはそのままレッドキングを持ち上げて、地面に叩きつける。

「時間をかけるつもりはない！伊智香！ジードレットだ！」

「うん！」

『カモン！』

『ジードレット・コネクトオン』

ジードレットを装着した伊智香はすぐさまそれをタイガスパークへとかざす。

「レッキング・・・バスターアア!!」

タイタスはレッキングバスターをレッドキングへと叩き込むと、レッドキングは爆発四散する。そしてタイタスは海の渦へと視線を向ける。

「伊智香！あんな回転なんざ俺がぶつちぎってやるよ！」

「うん！お願いフーマー！」

『カモン！』

「風の覇者！フーマー！」

フーマアアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

ウルトラマンフーマーに変身した伊智香だったが、その回転の勢いに？まれ、いきなり波に流されてしまう。

「うおっ？ 流石に凄い勢いだな！」

回転に？ まれるフーマだったが、咄嗟に回転に逆らわない事を判断して中央にいるカイテンと一定の距離を保つ。

「まずはこの回転を止めよう」

『カモン！』

伊智香はギングレットを装着すると、それをタイガスパークにかざした。

『ギングレット・コネクトオン』

「七星光波手裏剣！」

まずは回転を止めるため七星光波手裏剣で渦を斬り裂いたフーマはその中心にいるカイテンのもとへとたどり着く。

「覚悟しなカタツムリ。速攻で片付けてやるよ」

光波手裏剣で牽制したフーマはカイテンへと駆け出して蹴りを1発お見舞いする。

「へへっ、お前がまた回るよりも早く・・・うおっ？」

フーマはカイテンが再び回転し出すよりも先に次の攻撃を仕掛けようとするもカイテンは硫酸液を吐いてくる。

「っーニン！」

咄嗟にドロロンとその場から離れて硫酸液を回避したフーマだったが、距離を取ってし

まったせいで再びカイテンは回転し出して、渦を作り出してしまった。
「うおっ、また渦からやり直しか」

やり直しとなったフーマは極星光波手裏剣を飛ばして再び渦を斬り裂こうとするも、回転の勢いが増している渦を切り裂くことはなかなかわかつた。

『もう一度私が行こう。私ならこの渦でも突き進める』

「待ってタイタスさん。ここは・・・タイガ君！」

『待ってました！行くぜ伊智香！』

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガに変身した伊智香だったが、さつそくと言わんばかりに渦に？まれる洗礼を受けてしまう。

「うわあああっ?!」

「っ！」

『カモン！』

『ブルレット！コネクトオン！』

「あ、アクアブラスタター！」

目を瞑った伊智香は落ち着いてブルレットの力を発動すると、タイガは目を回しながらもアクアブラスタターを放つと、渦の流れが変わった。

「今だよ！タイガ君！」

「ああ！パワーアップだ！」

タイガがパワーアップの意思を告げると、タイガアクセサリーがタイガ・フォトンアースアクセサリーへと変化する。すると伊智香はそれを手に取って2回リードする。

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの力を手に！」

右手に持ち替えたフォトンアースアクセサリーが展開し、その力が解き放たれる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

「シユア！」

ウルトラマンタイガ・フォトンアースへと変身したタイガはカイテンの前へと向かい立つ。先ほどまでと違いその鎧の重みでカイテンの高速回転を耐え凌ぐ。そしてその

まま渦の内側へと突入したタイガはカイテンと向かい立った。

「ここまでくればこっちのもんだ！」

渦の中に入って来たタイガにカイテンは硫酸攻撃を仕掛けてくるも、黄金の鎧を身に纏うタイガにその攻撃は通用しない。

「シューア！」

タイガは右ストレートをカイテンへと叩き込む。その一撃に怯んだカイテンは回転を停止すると跳び上がり、のしかかり攻撃を仕掛けてくる。

「オオオオ!!」

それを耐えたタイガはそのままカイテンを投げ飛ばすと水中で金色のオーロラのように輝くエネルギーを自らに集束させる。

「オーラムストリウム!!」

そして必殺光線のオーラムストリウムを放つと、それが直撃したカイテンは爆発四散した。すると爆炎の中から1つの光が飛んできてタイガはそれを掴み取る。

「カイテンの指輪……。終わりの魔獣の指輪もこれで4つ目か」

伊智香の手に握られている終わりの水、カイテンの指輪。タイガはどうして終わりの魔獣を倒すと指輪になるんだろうと疑問に思いながらも飛び去って行った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「伊智香どこじゃ〜!」

「伊智香ちや〜ん!」

変身を解いた伊智香が地上へと戻ると、凧の部隊のメンバーが姿をくらませた伊智香を探してくれていた。

「お〜い!〜ここです!」

伊智香は手を振りながら自分を探してくれている凧の部隊のもとへと駆け寄っていく。

「おお、無事だったか伊智香!」

「はい。ご心配おかけしました」

頭を下げた伊智香に別れを告げた凧の部隊は無事だった機材を回収して浜辺を後にしていく。

「しかしまああれじゃな。ああいった初々しい新人を見せられると、そろそろしびき達も新しい人員というのが欲しくなるのう」

「新人ですか! いいですね!」

「ようやくアタシ様の後輩か。わくわくするな!」

「いや2人とも。まだ入るのが決まったところかそういう子を誘ってすらいないからね」

凧の部隊は自分達も新人を迎え入れたいという話題をしつつも自分達の本部へと帰還していった。

## 絆なき光

碓氷雅美。黒百合学園に通う17歳の少女だ。今現在彼女の体にはウルトラマンスマッシュというウルトラマンが傷を癒すために宿っている。

「……」

病院を無事退院し、今日から学園に復帰する雅美は誰とも話さないまま一人で登校していく。

「友達はいないの?とか聞いてこないんだね」

『聞かれたくなさそうな質問はしませんよ』

雅美は聞かれる前に聞いてこないのかを尋ねるも、スマッシュは聞かれたくなさそうなので質問しなかったとドライな返しをする。

「……そう」

一体化する事で互いの傷を治し合う2人だが、この2人の間には伊智香達とは違い決定的なものが足りなかった。今回はそんな2人の話だ。

「……」

久しぶりに学園に来たにも関わらず誰にも話しかけられない雅美。決して周囲に嫌



われていたり、虐められているわけではないのだが弓道を得意とする彼女は高根の花というよりは孤高の存在と化しており近寄りがたい存在となっていたのだ。

「……」

当の本人はそうなりたかつたわけではないのだが、元より人と話すことが得意ではない彼女はそれでもいいかと気にしないようにしていた。結局クラスの誰とも話さないまま一日の授業を終えた雅美は部活へと向かおうとしていると、急いで走っていく飛穂とゆらを見かけた。

『何処に行くのですかね。あの2人は?』

「さあ?あの先輩達はいつもあんな感じにいつの間にか何処か行くらしいし」

基本的にはあまり他人に興味がない雅美だったが、この日は妙に2人の事が気になった。

『気になりますね。追いかけましょう』

「えっ?でも……」

何やら気になるからと追いかけようとするスマッシュにイマイチ乗り切れない雅美。しかし何となく気になるのも事実で雅美は2人をつけてみることにした。

「あの2人、何処に行くんだろう?」

『あつ、少し待ってください』

雅美は2人を追跡しているとスマツシユが静止をかける。すると雅美の体が透明になった。

「これは？」

『ウルトラステルスです。これで貴女の姿は他の人達からは見えません』

ステルス迷彩を雅美にかけてスマツシユ。その効果もあり周囲に気づかれる事無く雅美は2人を追跡していくと、黒いスーツに着替えた2人はしぶきと葉栖美と合流して古びた工場へと入っていった。

「あの2人、確か卒業した先輩達だったはず・・・」

しぶきと葉栖美に見覚えがあった雅美は4人集まって何処に向かうのだろうと、視線を向ける雅美。見えないとはいえその視線に気づかない4人ではなかった。

「・・・見られてんな。どうする？」

「見えないね。何らかの手段で透明になってるのかな」

「どうする軍茶利？」

「敵意は感じないところを考えると少なくともここに潜伏している奴らとは無関係とは思えぬが油断はできん。警戒は怠るな」

ウルトラステルスで尾行してきているが雅美の事を今回の自分達のターゲットではないところまでは見抜いている風の部隊は警戒しつつも先へと進んでいく。

「ここは・・・研究室？」

「どうやら何かしらの生物の研究をしているみたいだね」

「うん。私も見たことない動物ばかりだよ」

風の部隊が入った一室は研究室になっていたようで、そこには彼女達が見たこともない宇宙生物たちが何体も捕えられていた。

『誰か来ますね』

研究室に近づいてくる数人の足音。風の部隊はすぐさま身を隠すと、ここで研究をしている男達が研究室に入って来た。

『あの方達。どうやら宇宙人のようですね』

「宇宙人・・・！ホントにいるんだ」

『あの、僕も一応宇宙人なのですが・・・』

「そ、そういうえばそうだった」

雅美は目の前にいる相手が宇宙人だと聞かされて驚くも、ウルトラマンも宇宙人ということを指摘されてしまう。

『しかしこの緊張感。師匠との修行を思い出しますね』

「師匠？」

『僕に戦い方を教えてくれた師匠です。とても厳しい御方でした。ナイフや投げ槍で追

い回したり、果てには崖から突き落とそうとしてきたりと……」

「こ、怖い師匠だね」

『師匠はウルトラマンではないながらも、単身で数々の怪獣に単身で勝利し、その名を宇宙に轟かせた実力者です。……おっと』

スマツシユは恩師の事を思い出していたが、宇宙人達に動きがあつたので話を中断する。

「ようやく手に入れたよ！ベリアルの遺伝子！」

「いくつものオークションを転々とし、ようやく落札したからな」

彼らが手に入れてきたのは一度は一つの宇宙を破壊した凶悪なウルトラマン、ウルトラマンベリアルの遺伝子。スマツシユはベリアルの名を聞いて「まさか……！」と驚く反応をするも、ベリアルの事を知らない風の部隊や雅美は「誰？」と反応していた。

「後はこの遺伝子に怪獣の遺伝子を組み込めば……かのベリアル融合獣を再現できるわけか」

「そんな事はさせん！」

男たちの目的が怪獣を作り出す事と分かった風の部隊は隠れるのを止めて男達の前へと出て行く。

「っ！侵入者か！」

「お主ら！動くな！」

風の部隊は男達に掴みかかっていくと、男達はその衝撃で擬態が解かれて宇宙人としての姿に戻る。スラン星人にザラブ星人、ゴドラ星人の3人だ。

「こ、このっ！」

「待て！ここには機材があるんだぞ！迂闊に撃つな！」

ザラブ星人は光線銃を放とうとするもスラン星人にそれを止められる。

「チイ！ならこのチビを人質にとって・・・」

「だれがチビじや！」

「ぶべえ!？」

スラン星人はしぶきを人質にしようとするも、しぶきは全力のアツパーを叩き込み一撃でスラン星人をノックダウンさせる。

「くう・・・!のあ!？」

ゴドラ星人はザラブ星人を見捨てて一人で脱出しようとするも、ゆらが出した足に躓いて転倒してしまう。

「き、キサマ・・・!」

「ハイ確保！」

そしてゆらと飛粋にゴドラ星人は取り押さえられて、残るはザラブ星人ただ1人とな

る。

「残りはお前だけだぞ。観念しな！」

「ふふ。一人だけじゃないんだなあこれが・・・」

何処から聞こえてきた声に一同が反応すると、頭部が巨大な宇宙人のチブル星人がカプセルのようなものに彼らが手に入れてきたベリアルの子孫を投入していた姿があった。

「初めまして風の部隊の諸君。君達の噂は聞いていますよ。この町に潜伏しているヴィラン・ギルドを次々と逮捕してくれているそうじゃないか。困るんだよねえ。出荷先である場所に迷惑をかけられるのは」

ベリアルの子孫をカプセルに入れ終えたチブル星人は風の部隊へと振り返る。

「おっと、自己紹介がまだだったね。私の名はチブル星人マブゼ。宇宙最高の頭脳をもつものと自負しているよ」

自称『宇宙最高の頭脳』のチブル星人マブゼは風の部隊に自己紹介をするとカプセルを機材にセットする。

「この施設はいつたい・・・」

「ここは新たな生命が形を生み出す工場さ。DNAの配列を変えてより強く、より賢く、より美しく究極の怪獣を生み出す。私は生命創造という偉大な事を・・・」

チブル星人マブゼは自分語りをしていると、その場にいる動物たちは「ここから出して」でも叫ぶかのように騒ぎ出す。

「今しゃべってるだろ！黙れ！」

電流を流された事で苦しむ動物たち。それを見せられた動物好きの葉栖美は怒りを露わにする。

「この子達、助けてって言ってる。・・・許せない」

「あなたのやってる事は生命への冒涇だよ！」

生命への冒涇だと飛粋はチブル星人マブゼへと叫ぶも、マブゼは気にもしない。

「科学者の思考は倫理や道徳からは外れて自由であるべきだ」

そう言ったチブル星人マブゼはホログラムで2体の怪獣と1体のウルトラマンを表  
示する。

「私の頭脳はベリアルルの遺伝子データを解析し、それを怪獣と融合させることに成功し、  
実験は最終段階まで到達した。今、邪魔されるのは非常に困るのだよ」

ベリアルルの遺伝子を解析したカプセルを起動したチブル星人マブゼ。すると機材の  
中にさらに2つの遺伝子を入れ込んだ。

「そんなの知るかよ！お前も捕まえてやる！」

ゆらはチブル星人マブゼも捕まえようとするも、それはホログラムだったようゆら

の手をすり抜けてしまう。

「なっ!？」

「立体映像。本物は別の場所か」

「見たまえ! ベムラーの遺伝子とアーストロンの遺伝子にベリアル<sup>1</sup>の遺伝子! これらを培養することで誕生する怪獣を!」

宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣と恐れられる宇宙怪獣ベムラーと恐竜のような姿に巨大な角が特徴の凶暴怪獣アーストロ<sup>2</sup>ン。そしてウルトラマンベリアルという3つの遺伝子が培養されていくことでそれは1つの生命へと変貌を遂げる。

「いかん。脱出じゃ!」

「君達も早く逃げて!」

建物がガタガタと揺れ始め、風の部隊は動物たちの檻を壊しつつも脱出していくとそれと共に雅美も建物の外へと出る。すると建物に取り残されていたザラブ星人達はチブル星人マブゼの手により何処かへと転送され、建物から1体の怪獣が突き出てきた。

「どうです? あれこそ私の頭脳が生み出した培養合成獣、バーニング・ベムストラです」

培養合成獣バーニング・ベムストラは町を蹂躪し始めるも、毎回怪獣が現れたらすぐにウルトラマンが現れるわけでもなくバーニング・ベムストラは町を破壊して歩く。それを見たスマッシュは仕方ないため息をつく<sup>3</sup>と雅美に話しかける。



『今の僕一人の力ではあの強敵には敵いません。ですから雅美。君の力を貸してください』

「私の力？私に特別な力なんて・・・」

『人のもつ心の光はいつだって特別なものだといえます。現に僕らウルトラマンは地球人と関わることで僕らの想定以上の力を引き出してきたと教わっています。やってみましょう』

そう告げたスマッシュは自身の力を雅美に引き出させるため彼女の手にスティック型のアイテムを出現させる。

『それはスマッシュスパーク。それを使えば僕に変身する事が出来ます』

「スマッシュに・・・変身・・・？」

『さあ、早く。スマッシュスパークに右手をかざして僕に変身してください。変身さえすれば、後は僕が戦いますから』

「・・・やるしかないみたいだね」

戦う覚悟を告げた雅美はスマッシュスパークに右手をかざすと、スパークの先端が光を放つ。

「スマアアアッシュっ！」

スマッシュスパークを持つ左手を空へと掲げた雅美は光に包まれ、ウルトラマンス

マツシユへと変身を遂げる。

「スマツシユファイツ！」

スマツシユを見るなり熱線を放ってくるバーニング・ベムストラ。スマツシユは光で作り上げたナイフでそれを受け止めると、ナイフの角度を調整して熱線を跳ね返す。

「サアア！」

怯んだところに連続パンチを仕掛けたスマツシユだったが、比較的非力なスマツシユのパンチではバーニング・ベムストラはビックリともしない。

「まるで力が出ない。地球人との一体化はデメリットとは聞いた事ないはずですよ。・  
ライトフラツシユ！」

目を青白く強烈に発光させたスマツシユにバーニング・ベムストラも思わず目を隠すとその隙をついたスマツシユはその顔に引つ叩く。

「単純な『力』は劣っていても、まだ光線技で応戦できます！」

両腕を十字に重ねてスペシウム光線を放つスマツシユだがバーニング・ベムストラはそれを難なく耐え凌ぐ。

「くっ、光線の威力も低い」

熱線を回避したスマツシユは背後から腕をL字に構え、シューティングスマツシユをバーニング・ベムストラに向けて放つも・・・バーニング・ベムストラは口から青い光線

を放ってシューティングスマッシュを容易く相殺した。

「光線技の威力が安定しない。まだ完全回復しきってないからか。それとも人間との一体化のせいか・・・」

光のエネルギーがまだ完全に回復しきっていないからか光線の威力が以前よりも劣るスマッシュは早くもカラータイマーが赤く点滅してしまふ。

「これは・・・？」

「時間切れが近いようです」

エネルギー不足かつ強敵バーニング・ベムストラという圧倒的不利な状況のスマッシュ。スマッシュは冷静になり、雅美だけでも助けようと分離も考えているとバーニング・ベムストラは熱線を放ち攻撃をしてきた。

「ワアあつ!?!」

その熱線が命中したスマッシュはカラータイマーの点滅が加速し、いよいよ窮地に追い込まれる。

「(っ)まで・・・ですか」

悔しそうに拳を強く握るスマッシュ。スマッシュの中にいる雅美も諦めかけたその時だった。

「誰かは知らないけどよく頑張ったな。後は俺に任せろ!」

スマッシュを見たのはバーニング・ベムストラの放つ光線をストリウムブラスターで相殺するウルトラマンタイガの姿。

「シューア！」

駆け出したタイガはバーニング・ベムストラへとキックを叩き込むと角にエネルギーをチャージする。

「ブルーレーザー！」

タイガの放ったブルーレーザーは振るわれた尻尾に払い除けられてしまうも、タイガは動じない。

「ハンドビーム！」

手先を突き出したタイガは連続で赤い光弾を放つ。そのすべてをバーニング・ベムストラは熱線で撃ち落とすとタイガは気合いを入れ直す。

「伊智香！パワーアップだ！」

「うん！」

『カモン！』

タイガアクセサリーはタイガフォトニアースアクセサリーへと変化すると、伊智香はそれを掴み取り、右手に持ち替える。

『アース！』

『シャイン!』

「輝きの力を手に!」

ウイングが展開し、力が解き放たれると伊智香は右手を空へと掲げる。

「バディ・ゴロー!」

『ウルトラマンタイガ! フォトンアース!』

タイガ・フォトンアースへと強化変身をしたタイガは再び角からブルーレーザーを放つ。

「喰らえ! ブルーレーザー!」

フォトンアースの強化版ブルーレーザーで怯まされるバーニングベムストラ。するとタイガは倒れているスマッシュに手を差し伸べた。

「トドメは一緒に決めよう」

「・・・はい!」

立ち上がったスマッシュにエネルギーを分け与えたタイガは必殺光線の構えをする。と、同じくスマッシュも腕をL字に構える。

「オーラムストリウム!」

「シューティングスマッシュ!」

2人のウルトラマンの同時光線はバリアを打ち破り、バーニング・ベムストラへ命中

すると、そのまま爆発する。

「助かりました。感謝しますウルトラマンタイガ」

「別に感謝されるまでもないって。同じウルトラマンだろ？」

握手をするタイガとスマッシュ。そして互いに変身解除した伊智香と雅美。2人は互いにウルトラマンを宿す存在だと察するも、お互い人見知りなところがあるためにも話そうとしない。

『申し訳ありません雅美さん。僕が力を出し切れなればかりに力を発揮しきれませんでした』

「スマッシュのせいじゃ……」

スマッシュのせいじゃない。雅美がそう言おうとしたが10センチ台の伊智香の右肩に乗るタイガは「いや……」と首を横に振った。

「初対面のアンタにこういうのも何だと思うけど……今回はアンタの判断ミスだと思う。今のアンタは俺達以上に光のエネルギーが低下している。そんな状態じゃ戦うどころか変身することすら人間のほうにも負担だったはずだ」

『私は人間ならできると思っ……人間を……彼女の力を信用してやってみただけです』

「悪いけどはつきり言わせてもらおう。アンタのそれは信用じゃない。利用だ」

タイガに信用ではなく利用だと指摘されたスマツシユは何も言い返さず黙り込む。

『そう・・・ですか。そうですね。確かに僕は心の何処かで地球人1人程度の力でと考えてと思っていたフシはありました』

スマツシユは信じ切れていなかったと語る。人間の持つ光の力を。

「兄弟子のメビウスが言つてた。自分達ウルトラマンが強くあれるのは仲間との絆があつてこそだつて。アンタはその娘を『仲間』だと思つてないのか？」

『思つてなかつたです。人間はあくまで守るべき存在であり、今回は緊急措置として考えていました』

仲間だと思つてなかつた。そう言われた雅美は表情を変えないながらも信頼されていなかったことを気にし、傷つく。

「俺も仲間に出会うまで確かに『仲間なんていらぬ。1人で何とかしてやる』つて思つていた時期もあつた。だけどそれじゃ駄目なんだ」

タイガに注意されたスマツシユはその言葉を親身に受け止めると伊智香と雅美は特に会話もなく互いに家路を辿る。

「ねえスマツシユ。つまり私達が勝てなかつたのは私達がまだ仲間じゃなかつたから・・・お互いを信じていなかったからつてことだよね？」

『そういう・・・事になりますね』

「ならこれからは私は貴方の仲間。私もそう思うから貴方もそう思つて」

『雅美さん……。はい。今回はすみませんでした。そしてありがとうございます。きつとこれからも危険な戦いがあると思いますが……。僕と一緒に戦つて下さい』

絆の持たなかつた光の戦士ウルトラマンスマッシュはようやく雅美と絆を結び、本当のスタートを切り出す決意を固めた。

~~~~~

~~~~~

「ヤバいな。ちよつと言い過ぎたかもしれない」

スマッシュとの邂逅から帰宅後。タイガはスマッシュに対して言い過ぎたかもしれないと頭を抱えていた。

「まあ、うん。言い過ぎたかもね」

「初対面の相手に叱られたんだもんな。たぶんあちらさん相当落ち込んでるだろうぜ」

伊智香とフーマは言い過ぎだったと言うも、タイタスは「いや。…」と首を横に振つた。

「二体化している相手をないがしろにした戦闘をしていたのだ。あの場でタイガが叱つたのは間違いいではない。叱つてくれる相手がいなければ人は駄目な方向に進んでしま



うからな」

「メビウスもさ、地球での初めての戦闘の時に大失敗をしたらしいんだ。そんな時、仲間が自分を叱ってくれたから次からは同じ失敗をしないように反省したって言ってたんだ。周りはメビウスは光の国では優等生だったっていうから意外だなってさ」

「優等生故の過ち。おそらく彼も地球に来た頃のメビウスと同じく優等生故の失敗をしてしまったのではないだろうか」

「つまりあれか。真面目過ぎるから失敗したってことだな」

フーマの言葉にタイタスは頷く。

「自分にも他人にも厳しいというのは一概に悪いというわけではない。しかし間違った厳しさというのは自分では気づきにくいものだ。たとえ気づいたとしても・・・引き返せなくなっていることもある」

タイタスの言った言葉の意味。タイガが身をもって理解させられるのはもう少し後の出来事だった。

## 夕映えの戦士

ウルトラマンスマッシュ、雅美との邂逅から一週間後。今日も伊智香は授業を終えて帰り支度を整えていた。

「一緒に帰ろうララ！」

「ルン！」

クラスみんなが部活動や帰宅をしていく。この世界には人々に知られないまま地球人に交じって暮らしている異星人が少なからずいる。今回も地球で生活する星人の話だ。

「そういえば羽衣さん、前から聞こうと思ってたんだけど・・・」

「何ルン？」

「羽衣さんってどの辺に住んでるの？」

5月頃に転校してきた少女、羽衣ララに伊智香は何となく何処に住んでいるのかを尋ねると彼女と隣にいた星野ひかるまでもが固まった。

「えと。聞いちゃいけなかった？」

これは何かあるなと思いつつもあえてこれ以上追及するのは止める事にした。

「え、えとね。今ララはおうちが飛んで行っちゃって私の家に居候してるの」

「へ、へえ……え？」

飛んで行つたつて何？そう聞きたかつたが意味が分からな過ぎて伊智香は深く考えるのをやめた。

「今日、三星ドーナツで新作が発売されるんだけど、伊智香も一緒に行かない？」

「うん！行くよ！」

今日はツキカゲの招集がなかった伊智香は2人と共に学校を後にして、ドーナツ屋へと足を運んだ。

「あつ！小田さんだ！」

ひかるは知り合いに気づくと、そのおじさんのもとへと駆け寄っていく。

「知り合い？」

「うん！小田さん！絵描きをしているんだ」

「初めまして。小田です」

小田と名乗つた男性は夕焼けの公園の絵を描いている真つ最中だった。

「小田さん、最近いつもその絵を描いてるよね」

「はは、中々完成しないんだ。：絵って面白いものでね、昨日はいいと思って塗った色が今日はまた違う色がいいって思っちゃうんだ」

「分かる！私もオリジナルの星座を考えてるとき、似たようなことあるもん！」

「うん。それで何度も塗り直して自分なりの答えを探しているんだ」

「自分なりの答え・・・」

自分なりの答え。その言葉に3人は考えさせられる。

「答えはちゃんと見つかるんですか？」

「どうだろうね。自分の納得した答えが必ずしも周りが正しいと思う答えになることはないんだ」

「なんだか難しいね。あつ、小田さんも一緒にたべよう！ドーナッツ！」

何となくそれを理解できた彼女達は小休憩した小田と共にドーナッツを食べ始めた。

~~~~~

~~~~~

「今回の調査は夜中に地鳴りがして近隣住民が困っている件についてです」

「珍しいミツションだね。そういうのって普通、お役所仕事なはずでしょ？」

「それが・・・怪しい人影も目撃されるとのことなどで、何かしらの事件の可能性もあるのでツキカゲで一度調査してみることにしたんですよ」

翌日。招集されたツキカゲ一同に言い渡されたミツション。それは地鳴りの調査

だった。通常なら役所仕事として調べられるはずなのだが、怪しげな人影も目撃されることもありツキカゲで調べることとなった。

「つまり私達は怪しい人影を探して、それが地鳴りと関係性があるのか探るといふことですね」

「はい。そしてこれが探査用のデバイスとなります」

初芽は6人に探査用のデバイスを配るとさっそくツキカゲメンバーは調査へと向かった。

~~~~~

~~~~~

「ふうん、中々イイ趣味をしてるなあ」

とある工場へとやってきていた霧崎はその中に置かれていた1つの卵をマジマジと眺めていると、そこに小田が入って来た。

「おいアンタ。そこで何をしている？」

「お会いできて光栄です。ナツクル屋人オデッサ」

「何故それを・・・お前、何者だ？」

「そんなことはどうでもいい。私は貴方の願いを叶えにきた」

霧崎は小田の願いを叶えにきたと告げると卵を撫でる。

「ブラックキングとともに戦いに身を捧げる。それが貴方の願い」

呼応するかのようにドクンと鼓動する卵。その地鳴りをツキカゲメンバーは感知してその場所へと急ぐ。

「黙れ！俺はそんな事願っちゃいない！」

「だつたらどうしてこのブラックキングの卵を持つている？」

霧崎が指をパチンと叩くと、小田の描いた絵が周囲に散らばった。そこにはブラックキングと共に戦う一人の宇宙人の絵が何枚も描かれていた。

「ブラックキングとともに戦う最強の暗殺者。それが地球で平和に隠遁生活とはあまりにも惜しい。昔の貴方は本当に輝いていた」

「俺はもう、戦いはもうたくさんなんだ！」

「聞こえないのか？ブラックキングの鼓動が。貴方自身の本能の叫びが！」

本能の叫びと言われた小田は『本能』と葛藤していると複数の足音が向上へと近づいてきた。

「この辺りだね」

「ん？これが地鳴りでしょうか？」

怪しい人影が入り出して、という工場へと辿りついたモモと伊智香。2人は地鳴りのような音を耳にした。

『怪獣のうめき声?』

モモと伊智香は怪獣のうめき声に気づき、少しづつ工場へと近づいてくる。

「ほら、客人が近づいてきているぞ。光の巨人と戦いたいんだろ? さあ、本心はどうなんだ? 夕映えの戦士オデッサ!」

「オオオオ!!」

卵に近づける手を自ら振り払った小田。霧崎はやれやれとその場を後にすると工場の中にモモと伊智香が突入してきた。

「デバイスはここだって示してるのに何もありませんね」

隠し部屋にいた小田は幸いにも2人に気づかれることはなかったが、気づかれなかった事が逆に悲劇を呼ぶこととなる。

~~~~~

~~~~~

「それで、倉庫の中には何もなかったんですね?」

「でも確かに地鳴りはあの倉庫から聞こえていました」

「やはりそうですか。これを見てください」

初芽はモニターに工場近くの監視カメラを映し出す。

「地鳴り発生前の数分前の監視カメラ映像です」

倉庫前に1人の男性が立っていて、それは建物に入ると同時に迷彩か何かの技術で消えていた。

「っ！」

伊智香はその人物を小田だと一目で見抜き、もう一度先ほどの工場へと向かう事にした。

~~~~~

~~~~~

「こんにちは小田さん」

「君は確か・・・ひかる君の友達の・・・」

小田が工場から出てきたところに声をかけた伊智香。小田も伊智香の事をひかるの友達と覚えていたようだ。

「小田さん、もしかしてですけどひかるちゃんに隠し事をしてませんか？」

「隠し事って・・・こんなおじさんだよ。女の子に何でもかんでも話せるはずないじゃない



いか」

「・・・この倉庫から地鳴りが聞こえたんです。あれは・・・怪獣のものじゃないんですか?」

「怪獣? ハハハっ! 怪獣なんて知らんよ。すまないね、用事があるので話はここまでだ」  
「ま、待つてください!」

立ち去ろうとする小田。伊智香はそれを引き留めようとすると、怒りの形相で振り返った小田は一瞬だけ宇宙人としての姿に、ナックル星人オデッサとしての姿となってしまう。

「今のは・・・」

『伊智香。この男は地球人じゃない』

伊智香が小田の正体が宇宙人だったことに驚いていると、倉庫内に再びやって来ていた天堂はブラックキングの卵を撫でる。

「これが霧崎さんの言っていた卵か。さあ、開園の時間だ!」

バレットへと変身した天堂はガトリウム光線を放ちながら地上へと着地する。

「やあ」

「小田さん! 逃げてください!」

バレットに気づいた伊智香は小田に逃げるように告げて駆け出しに行く。

「行こうタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガがアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はバレットへと駆け出して行く。

「ウルトラマン……！」

伊智香がウルトラマンへと変身するところを目撃した小田は自分の中で熱くなるものを感じる。

「フフ、つくづく期待を裏切らない奴らだ！」

「うるさい！」

タイガはスワローバレットを放つと、バレットもガトリウム光線で応戦してくる。互いの光線が相殺されるとタイガはバレットへと跳び蹴りをする。

「あら、危ない」

そのキックを避けるバレット。その2人の戦いを間近で見ている小田と卵の鼓動が更に加速する。

「アアアアア!!」

小田の雄叫びとともに倉庫から飛び出てきたのは用心棒怪獣ブラックキング。ブラックキングは現れるや否や争っている2人のウルトラマン目掛けて熱線を放った。

「おつと危ない。話に聞いていた通り、本当に相棒に忠実な怪獣だな」

タイガを盾にしたバレットは小田にそう告げると闇へと消えていく。タイガはバレットを追いかけようとするも、ブラックキングがその行く手を阻み、タイガをガツシリと掴んだ。

『このままでは力負けする。私に任せろ!』

「頼んだ!」

『カモン!』

「力の賢者!タイタス!」

タイタスのアクセサリーを掴み取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス!』

「又ウン!」

伊智香はウルトラマンタイタスへと変身すると、ブラックキングにアッパーを叩き込む。

「ハアア・・フウン！」

怯んだブラックキングに更に一撃を叩き込むタイタス。ブラックキングは反撃に尻尾を鞭のように振るって攻撃を仕掛けてくるも、タイタスはサイドチェストでその一撃をガードする。

「トオ！ヌウウウ、ハアアッ！」

そしてタイタスはブラックキングを掴みあげて地面に叩きつけた。

「やめろ、止めるんだブラックキング！」

小田の言う事を聞かないブラックキング。小田の心の底に眠る願いの為にウルトラマンと戦おうとしているのだ。

「伊智香！電撃を喰らわせてやれ！」

「うん！」

『カモン！』

伊智香はエックススレットを装着すると、それをタイガスパークへとかざす。

『エックススレット・コネクトオン』

「エレクトロ！バスター！」

「ブラックキングううう?!」

エレクトロバスターが命中したブラックキングが爆発すると、小田はその場に膝をつ

いて何もすることが出来なかったことを悔いる。するとその近くに光が降りてきた。

「小田さん・・・」

変身を解いた伊智香だ。

「そうか。君がウルトラマンだったのか」

少し考えた小田も自分の正体を明かし出す。

「俺はナツクル星人。名前はオデッサだ」

「ナツクル・・・星人」

『戦いを専門にした宇宙人だ。戦闘能力が発達した残忍な種族・・・』

「えっ？そんな人には・・・」

「いや、彼の言ってる事は本当だ」

タイガの声が聞こえていた小田は自分の事を語る。

「若い頃は多くの命を奪ってきた。夕映えの戦士なんても呼ばれて、その名が誇らしかったよ。だけどある夕焼け、俺は一人のウルトラ戦士に敗れた。ある惑星で戦った雄々しく立つ光の巨人。美しかった。ああいうのを本当の夕映えって言うんだろうな。俺は今の自分が虚しくなって、ブラックキングを卵に封印し、戦う事をやめた」

『でも、それじゃどうしてあの怪獣が暴れ出したんだ？』

「あいつは俺の心なんだ」

「まさかまた戦いたくなつたんですか？」

小田は何も言わない。

「違うつて言つてください。でないと・・・でないとおひかるちゃん達が悲しみます！」

「そうだな。あの子達は・・・そういう子だ」

小田はそれ以上何も言わず、夕焼け空へと去つて行く。そして倉庫へと戻つて来た小田は抜け殻となつたブラックキングの卵を撫でるとこれまで公園の絵を手に取つた。そして想いにふけながらもそれを破り捨て一枚の手紙を書いたのだった。

~~~~~

~~~~~

「伊智香〜！」

翌日の放課後、伊智香は帰宅準備をしているとおひかるに声をかけられた。

「どうしたのひかるちゃん？」

「今朝小田さんから伊智香に手紙を預かつて来たんだ。渡しそびれるところだったよ〜！」

「手紙？・・・っ！」

手紙を読んだ伊智香は急いで絵にえがかれていた公園へと駆け出して行く。そこに

はナツクル星人オデッサとして巨大化した彼が待ち構えていた。

《伊智香君。突然の手紙で申し訳ない。今日、俺は全てをかけて戦う。だから頼む。俺とウルトラマンとして全力で戦ってほしい》

「小田さん！何で貴方と戦わないといけないんですか！これが貴方の選んだ答えですか？」

夕焼けに立つナツクル星人オデッサは何も答えない。それどころかまるで戦う理由を作るかのように建物を踏みつけ、破壊する。

『伊智香。迷ってる場合じゃないぞ』

「っ・・タイガ君！」

『カモン！』

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はナツクル星人オデッサと向かい立つ。

《戦いを止めて半世紀。この星でとても楽しく過ごす事ができた。美しい自然や愛というものに触れる事ができた》

ナツクル星人オデッサと取っ組み合いになったタイガはオデッサを投げ飛ばす。

《このままこの星で『人間』として生涯を閉じるのも悪くない。そう思うようにもなっ

た》

オデッサは頭部から光線を放つと、タイガはそれを光を纏った右手で叩き落とす。  
《そしてひかるちゃんとも友達になれた。彼女は俺が宇宙人だと知っても分け隔てなく接してくれた。本当に嬉しかった》

幾度となく取っ組み合いをしては互いに投げ合うタイガとオデッサ。

《しかしこの地球で再び出会ってしまったんだ。遠い昔、俺の誇りを奪い去った君という光の巨人に》

迷いある拳を振るうタイガに対し、オデッサは迷いを捨てた拳で挑んでくる。

《君の雄姿を見る度に本当の強さとは何か、本当の誇りとは何かを自問自答した》

《そしてどうしようもなく、胸が熱くなった》

《そんな自分自身を否定し続けた。俺はもう戦いはたくさんだと言いつつ続けた》

《でも俺の相棒が気づかせてくれたんだ。『お前の本当の望みは何だ?』と》

「もうやめて!小田さん!」

伊智香の呼びかけも届かず、オデッサは容赦なく光線を放ってくる。

「水流で動きを止めるぞ」

「う、うん!」

『カモン!』



伊智香はカイテンの力を宿した指輪を装着すると、それをタイガスパークへとかざす。

『カイテンリング・エンゲージ』

「テロスヒュードル！」

水の渦で動きを止めると、渦による水流攻撃を受けたオデッサは片膝をつく。

《やはり俺は自分の気持ちに嘘をついていた。もう一度あの光の巨人と戦いたい。そして今度こそ勝つ》

「小田さん！今ならまだ引き返せる！だからもう……」

「戦士としての誇りを取り戻す！俺はナツクル星人の戦士オデッサだ！」

伊智香の言葉に耳を貸そうとしないオデッサ。伊智香は仕方なくタイガ・フォトンアースアクセサリーを手取る。

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの……力を手に……」

それを右手に持ち替えるとウイングが展開する。

「バディ・ゴー」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

タイガはフォトンアースへと強化変身を遂げると夕焼けを背にオデッサと再び向かい立つ。

「……さらばだ。帰ってきたウルトラマン」

その姿をみたオデッサはかつて自身と戦った戦士とタイガを重ね見る。

《本当に身勝手ですまない。しかしこれが俺の出した答えなんだ》

「ハアアア……」

「オーラム……っ!」

互いに光線を撃とうと構える両者。

《伊智香君。この事で自分を責めたりしないでくれ》

「ストリウム!!」

光線のぶつかり合いの結果、タイガのオーラムストリウムの方が打ち勝ち、オデッサの胸を光線が貫いた。

《戦いに勝つても負けても俺は遠くへと行く。だからひかる君に伝えてくれ。君にはたくさんの思い出を貰った。あの絵は未完成だけど俺にとっては君とみた夕陽が一番美しかった。それだけで十分だと》

「君達に会えて本当に良かった……!」

最後にそう言い残したオデッサは背中から倒れて爆発する。そして夕陽が沈みよる

となると・・・その夜空にタイガのカラータイマーが赤く点滅していた。

~~~~~

~~~~~

「小田さんまだかな〜？」

「ルン！」

ひかるとララの2人はいつもの時間になったにも関わらず中々来ない小田を待ち続けたが・・・彼はこない。

「タイガ君。どうするのが一番よかったんだろう？」

『俺にだってわかんねえよ。あの時は・・・ああするしかなかったんだ』

「あつ！伊智香〜！」

伊智香とタイガはやるせない思いを胸に抱きながらも家路を辿ろうとすると、伊智香に気づいたひかるが声をかけてきた。

「ひ、ひかる」

「どうしたの伊智香。元気なさそうだけど」

小田が宇宙人だという事は知っていても昨日ウルトラマンに敗れた宇宙人がその彼だということまでは知らないひかるは無邪気な笑顔を伊智香へと向けてくる。

「あのね・・・昨日渡された手紙なんだけど・・・」

伊智香は話した。小田の手紙に書かれていたとおり小田ことナツクル星人オデッサが『遠く』へと行く事になったことを。

「そう・・・なんだ。小田さん、行っちゃったんだ」

「・・・ルン」

帰るべきところに帰つたのだと捉えたひかるは悲しみをこらえながら涙を拭う。

「きつと私達に直接別れをいうのが辛かったんだね」

「ひかる。大丈夫ルン？」

「うん。寂しくないって言えば嘘になるけど・・・小田さんがそうしたくてそうしたんだっていうなら」

「ひかるちゃん・・・」

もしかしたらひかるは昨日ウルトラマンが倒した宇宙人が小田だと察したのかも知れない。しかしそれを追求することは伊智香にはできなかった。

~~~~~

~~~~~

「そうか。薄々感じていた違和感はこれか」

現・ツキカゲメンバー6人の写真を眺めていた天堂はずっと感じていた違和感に気づいた。

「どうしたんですか天堂さん？」

「この体の記憶が正しければ以前のツキカゲのメンバーにはこの2人はいなかったのだ」

天堂は霧崎に伊智香とテレジアの写真を見せる。

「まあ、このテレジアという女とは面識があるようだが・・・1人、この才賀伊智香という女だけはどうにも私の記憶にない。知ってるか霧崎さん？」

「知っていると言えば知っていますが・・・知らないと言えば知らないです」

「ん？どういうことだ？」

「彼女と一体化してるんですよ。タロウの息子とU40、それとO-50がね」

トライスクワッドの3人が伊智香と一体化していることを天堂に話した霧崎。すると天堂も霧崎もあくまで伊智香の事は3人の宿主程度にしか見ておらずさほど気にしてなかった。

「2人ほどいなくなってる人物がいるな。この身体に因縁のある1人・・・半蔵門雪がない」

モモの師匠、半蔵門雪が今のツキカゲにいない事に気づいてしまった天堂は、モモと

の再戦のためその狙いを雪へと定めようとしていた。

## 執念の闇

「桜……っ。大智い……」

仏壇の前。一人の男性は妻と息子の名前を呼びながら涙していた。男性は先日事故で家族を失った。老人の運転する車がアクセルとブレーキを踏み間違えて妻と息子が買い物に出かけていたスーパーへと突っ込んでしまい、あまつさえ妻と息子はその被害に遭い命を落としてしまった。

「「……」」

葬儀に参列する親族達も彼に何も言えずにいるも、葬儀屋の女性は男性へと近づく。

「お父様の悲しみはよく分かります。ですがそろそろ……」

「はい。分かつてはいます……」

男性は悲しみを押さえきれぬまま妻と息子が入った棺から離れる。そして棺が火葬場へと運ばれていき、葬儀が終わるころには男性の涙が枯れ果てていた。

「本日はありがとうございました」

葬儀が終了し、男性は葬儀屋へと頭を下げる。

「いえ。私共にできる事といえばこれぐらいですから」

葬儀屋の人達も撤収していき、家には男性一人となった。

「俺もそっちに行きたいよ・・・」

一人になった途端、更に寂しきや悲しみがこみ上げてきた男性は家族の後を追おうかと考え込んでしまっていると、窓を閉めているはずなのに部屋に風が吹いた。

「今死ぬのは駄目。きつとご家族がそう仰ってますよ」

「えっ？貴女はいつたい・・・いつの間にか家に・・・？」

男性はいつの間にか部屋に入っていた女性に驚く。

「申し遅れました。私は今事件の担当をしている天堂と言います」

天堂は名乗りながら警察手帳を男性に見せる。

「えと・・・警察の方が来たという事は捜査に何か進展があつたんですか？」

「はい。例のお爺さんなのですが・・・」

「ようやく逮捕できたんですか！」

男性の家族を危険運転により殺害してしまった老人は未だ逮捕されていない。犯人所で判明しているのだが中々逮捕への段取りが進んでいないのだ。男性はようやく逮捕されてくれたのかと期待したのだが、天堂は首を横に振った。

「えっ・・・いったいなんで？」

「犯人とも言えるお爺さんは認知症を患っていて危険運転致死傷罪にはなりません。今



「回の場合過失運転致死傷罪となります」

「だったらそれで・・・」

「まだ診断結果が出てないのでという事もありますが、重度の認知症と判断された場合は責任能力がないとされ罪に問われない場合もあり、慎重に動いていたんです」

最悪の場合家族を殺害した老人は逮捕すらされない可能性もある。それを聞かされた男性はガクリとその場に膝をつくと言堂はすぐフォローに入る。

「すみません。少し言葉が足りませんでしたね。その診断結果がようやく警察の方に届いて今日はその事をお伝えに来たんです」

「そ、それで結果は・・・」

「結論的に言えば逮捕は決まりました」

逮捕は決まった。その言葉を聞いて男性はそつと胸を撫で下ろす。

「ただ決まったのですぐ逮捕。という訳ではありません。ここから過失運転の方向で再捜査し、それによつては7年以下の懲役・禁固または100万円以下の罰金で出所となります」

自分の大切な家族を奪った相手がたった7年以下で出てくる。それを聞かされた男性は複雑な気持ちになる。何も寿命が尽きるまで牢屋にいてほしいわけではない。しかしたったそれだけの期間で出所してくるのは幾らなんでもあんまりじゃないかと・・・

「最近の刑務所って高齢者が多くて半ば老人ホームみたいになっちゃってる場所もあるんですよ。認知症のお爺さんとなると間違ひなくそういう場所に収容になると思いますし……ちゃんと反省してくれるかと言われれば微妙です」

「法律って難しいんですね。……嫁と息子の墓の前で何ていえばいいんですかね？」

「ごめんなさい。警察である私ができるのはここまでです」

天堂はペコリと頭を下げて家を後にする。男性は悲しみとやるせなさを感じながらも空腹で冷蔵庫の中身を確認する。

「あれ？こんな惣菜いつ買ったっけ？」

冷蔵庫には日付が今日までになっているスーパーの惣菜が入っていた。男性は買った覚えがないながらも親戚の誰かが何も食べようとしてなかった自分の為に買っていていたのだらうと捉え、男性はひとまずそれを食べることにした。

「桜、大智。……俺、頑張るよ。お前達のような被害者を少しでも減らせるように大勢の人に……呼びかけるよ」

惣菜を食べ終えた男性は墓前で家族にそう約束する。

その願いは間違った形で果たされることとなる。

~~~~~  
~~~~~

「ツキカゲ。ミツシヨンスタート」

今日もツキカゲは暗躍する悪の組織からソラサキを守るため任務をこなしていた。

「刺激的にいかがか!」

「今のアタシは一味違う!」

スパイスをキメた命と楓はその身体能力で組織の人間達が撃ってくる銃撃を巧みに躲し、それぞれクナイと手裏剣で男達を無力化する。

「このっ!」

「きやあつ。えいつ!」

『えっ?うおっ!』

刀が吹き飛ばされた伊智香は咄嗟にフーマのアクセサリーを手に取り、それをクナイのようにして攻撃を弾いた。

『おいおい。確かにこれの形はクナイっぽいかもしれないけど、こういうのはあまりしないでくれよ。心臓に悪いぜ』

いきなりこのことで驚いたフーマは伊智香に自分を武器のように使うなど注意をする。

「ごめんねフーマ」

「……」

何とか無事に今回もミッションを終えてそれぞれ家路を辿っていると、フーマは以前から少し気にしていた事を問いかけてきた。

「なあ、前から気になってたんだけどさ」

「何、フーマ？」

「タイガは君付けで、旦那はさん付けだろ。なんで俺だけ呼び捨てなの？」

実はフーマは気にしていた。伊智香が何気なくタイガを君付けで呼び、タイタスもさん付けにも関わらず、自分だけ呼び捨てだった事を。

「うーん。前にも話したけどタイガ君は年下か同年代っぽいから君付けしてるんだよね。タイタスさんも年上のお兄さんって感じだからさん付けで呼んでるの」

「じゃあ何で俺だけ？」

「フーマはなんとなく少し年上のお兄ちゃんって感じだからかな」

それを聞いたフーマは少しばかり満足そうな反応をする。

「へへっ。そうか、お兄ちゃんって感じか」

「え？俺伊智香的には年下なの？」

一方でタイガは年下扱いを不服に感じていた。

「まあそう気にするなタイ……っ!!」

タイガに気にするなど声をかけていたタイタスは何か強い気配を感じ取る。

「この気配……！まさか……」

「アイツも復活したのか！」

タイガとフーマもその強い気配に気づくと半透明で等身大サイズとなった3人は周囲を警戒する。

「気を付けろ伊智香！この強いマイナスエネルギーは……終わりの闇だ！」

「終わりの……って事はまた終わりの魔獣が復活したの？」

伊智香は終わりの水に続き復活した終わりの闇に驚いていると、終わりの闇の気配が消えて、タイガ達は一旦警戒心を解いた。

「タイガ君達がそんなに警戒するなんて……終わりの闇はよっぽどなんだね」

「ああ。まだ完全復活はしてないみたいだけど、あいつは終わりの魔獣の中でも最悪なやつだ」

タイガ達の『最悪』の意味、それを理解するのはそれからすぐのことだった。

~~~~~

~~~~~

タイガ達が終わりの闇の気配を感じ取った翌日、伊智香は途中で一緒になったモモと共に Wasabi へと向かって歩いていった。

「……………」

「どうしたの伊智香ちゃん？難しい顔して」

伊智香は迫る終わりの闇の脅威を気にしていると、いつも以上に不安そうな表情をしている伊智香に気づいたモモは彼女に問いかけた。

「あつ、いえ……その……心配なく」

自分がウルトラマンだという訳にもいかなない伊智香はモモに終わりの魔獣の事を相談できずにいると2人の前に1人の人物が現れた。

「こんにちは。百地」

「……貴女は！」

ウルトラマンバレット。天堂だ。

「安心しろ百地。今日は忠告しにきてやったんだ」

「忠告？」

天堂を警戒するように睨みつけるモモとそれに動じない天堂。その2人に対して全く状況を飲み込めないながらもモモと敵対してるからと天堂を敵として認識して警戒する伊智香。すると天堂は近くのカフェテラスの椅子に腰を掛けた。

「もうすぐ終わりの闇。ツイオンというが魔獣が復活をする。彗星に人がいくら手を伸ばしても届かないように、その怪獣にお前達ツキカゲは何もできない。近づかないことだな」

「何故アナタがそんな忠告をするの？」

「百地、お前との戦いは闇では役者不足でな。せつかく用意し始めた舞台があるのに、ここで舞台を降りられてはつまらんだ」

そう忠告する天堂に対して、モモは端末を変形させた銃を向ける。

「待って！アナタは私の知っている天堂じゃない。アナタはいったい何者なの？」

「ふむ……。別に隠すつもりはないので教えてやろう」

チラリと伊智香を、正確には伊智香と一体化しているタイガ達に視線を向けた天堂は鉛色の銃を取り出す。

「私の正体は……」

銃で自身の頭を撃った天堂は闇に包まれ、等身大のウルトラマンバレットへと変身した。

「う、宇宙人！」

「宇宙人なのは間違っていないが……遅れながら自己紹介をしよう。私はウルトラマンバレット」

「ウルトラマン？アナタもウルトラマンなの？」

「正しくはウルトラマンを真似て造られた存在で、タイガ達『ウルトラマン』とは厳密には違う。……私を作った人間がそう名付けたのだからな」

そう言い残したバレットは闇に溶けていくかのようにこの場から消えてしまうと2人は警戒を解く。

「師匠……あの人は……」

バレットの事は知っていても天堂との接点は皆無だった伊智香はモモに彼女の事を尋ねる。

「あの人はね。前に私達が倒した組織・モウリヨウの上層部にいた人なの。私達はあのひととの戦いに何とか勝利してソラサキを護ったんだけど……」

あの時天堂は自分が倒した。そして今、ウルトラマンバレットと名乗るウルトラマンはその姿をして現れている。しかもバレットはその体の記憶まで引き出してツキカゲに、モモへと敵意を向けてきている。とはいえウルトラマンが人間に一体化できる事実を知らないモモはバレットが何故か天堂の姿をしていて、そして自分に敵意を向けている理由が理解できなかった。

「ん？初芽さんから連絡？」

初芽から通信が入り、モモと伊智香はそれを受信する。



「はい。こちら百地」

「同じく孫市です。何かあったんですか？」

『ソラサキではないのですが高速で飛行する怪獣が現れたようです。基地へと集まってください』

招集がかかったので2人は急いでツキカゲ基地へと向かうと、すでに他のメンバーも集まっていた。

「集まりましたね。こちらを見てください」

初芽はモニターに出現した怪獣の映像を映し出す。そこには彗星怪獣ドラコによく似た黒い悪魔が空に浮かんでいた。

「あれが・・・ツイオン？」

ツイオンの翼が紫色に発光すると、その下にいる人々がまるで錯乱したかのように暴れ出す。

「おそらく混乱、幻覚作用のある薬物もしくは催眠作用のあるものが散布されているでしょう。できればまだ被害にあっていない人達を救助したいのですが、何せモウリョウの時以上の範囲かつマスクで防げるかもまだ分からないので近づくわけにも行きません。調査が終わるまで今しばらく待機をお願いします」

ツイオンの能力が分からない以上、迂闊に現場へと近づくのは危険と判断されて皆現

地へと向かわぬよう待機となる。

「あの人が言っていたのはこの怪獣の事だったんだね」

モモは天堂が忠告していた怪獣、ツイオンがモニターに映し出されている魔獣の事だと悟る。

「ねえタイガ君。もしかしてこの怪獣が・・・」

『ああ、あいつが昨日話していた終念悪鬼ツイオンだ』

終わりの闇、終念悪鬼ツイオンはその闇のエネルギーによって人を狂わせる能力を秘めている。故にタイガ達は『最悪』の魔獣として警戒していたのだ。

「・・・っ」

トイレに行くフリをしてこっそりツキカゲ基地を抜け出す伊智香。そして伊智香は Wasabi を抜け出すと偶然にも雅美とすれ違った。

「あの子・・・確か・・・」

伊智香に気づいた雅美は彼女の後を付けると、それに気づいていない伊智香は右腕にタイガスパークを出現させた。

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シューア！」

「っ！」

そして右手を空へと突き上げて、伊智香はウルトラマンタイガへと変身するとタイガはツイオンのいる町まで飛んでいく。

「ハアアアアッ！」

町へと飛んできたタイガは右脚に炎を灯して跳び蹴りによる先制攻撃をツイオンへと喰らわせた。

「伊智香！ツイオンとの戦いは長引かせちゃ駄目だ！オーブレットで一気に決めるぞ！」

「う、うん！」

『カモン！』

オーブレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『オーブレット・コネクトオン』

「スプリーム！ブラスタアアア！」

いきなりスプリームブラスターを発動し、それを放射するタイガ。しかし初撃のスワ

ローキックこそ不意を突いた一撃だったので命中したが、今度の光線は不意打ちではない真正面からの攻撃なのでツイオン持ち前のスピードであっさりとそれを避けてしま  
う。

「くっ、早い」

『タイガ！ 変われ！ お前じゃあいつのスピードに追い付けない！』

「任せた！」

『カモン！』

「風の覇者！ フーマー！」

フーマーのアクセサリーを掴み取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

ウルトラマンフーマーに変身した伊智香はそのスピードで高速で飛行するツイオンに追いつくと光波手裏剣を投げつける。するとフーマーと互角のスピードを誇るツイオンはそれに反応して光波手裏剣を叩き落とした。

「チツ、やるじゃねえか！ ならこれならどうだ？」

高速で回転して竜巻を作り出したフーマーはそのままツイオンへと突撃していくと、ツイオンはその目から暗黒光線を放って応戦する。竜巻が撃ち貫かれたフーマーは竜巻の

中には既にいなくなっていて。ツイオンの真上を取っていた。

「セイヤツ！」

まるで雨のように躲しきれないほど大量の光波手裏剣を飛ばしたフーマ。ツイオンは躲しきれないと判断したようでマイナスエネルギーによるバリアを作り出した。

「今だ！」

それをチャンスだと判断したフーマは光波手裏剣を繋ぎ合わせて光の剣を作り出し、バリアへと突っ込むと、そのバリアを光の剣で切り裂く。

『カモン！』

伊智香はビクトリーレットを装着するとそれをタイガスパークへとかざす。

『ビクトリーレット・コネクトオン』

「鋭星光波手裏剣！」

鋭星光波手裏剣を発動して、それを振り上げたフーマはその一撃でツイオンの右肩を斬りつける。

「旦那！チャンスだ！重たいの！叩き込んでくれ！」

『ああ！任された！』

『ウルトラマンタイタス！』

フーマからウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香は動きの鈍って

いるツイオンに重みの乗った拳を叩き込む。

「畳みかけるぞ伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

「ぬお!?!」

エックスレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざそうとするも、ツイオンは闇のエネルギーを全身から放ってタイタスを怯ませる。するとツイオンは高速移動からの体当たりでタイタスを背中から転倒させた。

「くっ・・・！」

すぐさま立ち上がったタイタスは拳を振るうも、フーマと互角のスピードだったツイオンにタイタスでは追いつく事ができず翻弄されてしまう。

「星の一閃！アストロビィイム！」

タイタスの額から放たれた光線、アストロビームはツイオンの左脚に命中する。しかし怯みこそするも『痛み』を感じていない様子のツイオンはタイタスの頭を掴みあげて地面に叩きつけた。

くくくく

~~~~~

ウルトラマン達とツイオンの戦う場所が見える距離にある町。そこはまだ人々がほとんど逃げきれていない地区だった。いやそもそも逃げようとしていないのだ。

「あんな怪物達に町を壊されてたまるか！」

「そうだ！俺達の町は俺達で守るんだ！」

ある者達は自分達で町を守ろうと立ち上がり・・・

「今ならバレないだろ」

ある者は今のうちにと盗みを働こうとする。

「てめえ！何をしようとしてやがる！」

そして盗みを働こうとしていた者はその場で見つかると周囲の人々から必要以上に殴る蹴るの暴行を受けてしまう。一見それぞれバラバラなようにも思えるがすべて『悪感』がなくなってしまうた人たちが取っている行動だ。これはツイオンを倒せばすぐ人々が元に戻るというわけでもなく、その凶暴性はそう簡単には鎮まらず治るにはしばらく時間がかかる。

「それが終わりの魔獣、あの怪物の影響？」

『はい。ツイオンが終わりの魔獣の中でも特に最悪と言われる理由がそれです。僕と一

体化してる雅美こそ平気ですけど、他の人達・・・あの風の部隊という方々は危なかったかもしれない。もちろんすべての人に影響があるわけではないです。今のキミのように何らかの事情でウルトラの光と関わりを持つ者には抵抗力があるみたいです」

故に伊智香と関わりのあるツキカゲメンバーには抵抗力があつたのだが早期決着が急がれる魔獣ということには変わりない。

「ねえスマツシユ。貴方はあの銀色の巨人達と同じ『ウルトラマン』だよ。だつたらあの魔獣を倒すこともできないの?」

『残念ながらそれはできません。前回の戦闘で僕の力が回復しきつてない事が判明したという事もあります。今の僕は戦力としては劣り、せいぜいサポートが限界です。君と一体化したことで回復へと向かっていますが、完全回復してないと君の体から抜けて戦いに参加することはできません』

雅美は内にいるスマツシユに魔獣を倒す事ができるかどうかを尋ねるも・・・スマツシユは今の自分ではできないと言う。

「そう・・・」

この間のように一体化したままでも変身すればいいと考えている雅美は表情を変えずにウルトラマン達とツイオンの戦いを心配するように遠くの空を見上げていた。


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うわああああつ?!」

再びフーマに交代した伊智香だったが、タイタスを張り倒せるパワーと自身と互角のスピードを誇るツイオンにフーマは劣勢になっていた。

「ハア・・・ハア・・・やるじゃねえか」

カラータイマーも点滅し出しよいよ追い込まれるフーマ。

「ダメだよフーマ。一旦引いて体勢を立て直そう」

「そういう訳にはいかねえ。ここで引いたらカッコいい『お兄ちゃん』じゃねえだろ。俺は風の覇者。ウルトラマンフーマだ！」

深呼吸して心を静めたフーマはチャンスを待つ。

「今だ！」

高速で接近してくるツイオンの動きを見切ったフーマは光の剣を振り上げて斬りつけ、一矢報いることに成功するもそこで時間切れが来て変身が解かれてしまった。

~~~~~

~~~~~

「ウルトラサイン？ 誰かが助けを求めている！」

遠い宇宙。1人のウルトラマンが助けを求めている要請に気が付く。

「ギャラクシーレスキューフォース！ ウルトラマンリブット！ 出動！」

宇宙の生命を守護する戦士、ウルトラマンリブットが生命を守るため今、出動した。

風の覇者の覇道が嵐を巻き起こす。

## 嵐を穿つ覇者であれ

「ハア……ハア……」

「くそっ……倒せなかった」

戦いに敗れ変身が解除された伊智香。ツイオンを倒す事のできなかったフーマは悔しそうな反応をする。

「すまねえ伊智香。俺のスピードじゃアイツを振り切ることも出来なかった」

「フーマが謝ることじゃないよ。でも……」

伊智香は戦闘の傷を癒すため地面に着地したツイオンを見上げる。ツイオンの傷は周囲の人々のマイナスエネルギーを取り込むことで再生していき、完全回復にもそれほど時間はかからなそうだった。

「おそらく昨日気配を感じ取った時には他の怪獣のエネルギーを取り込み、完全復活を遂げていたのだろう。悔しいが私ではツイオンのスピードに追い付けん」

「残念ながら俺もだ」

タイガとタイタスではツイオンのスピードに対応できず、不意を突かなければ攻撃すら当てることも敵わない。事実上対処可能なのはフーマだけなのだが、そのフーマです

ら敵わなかった相手に伊智香達は対処を悩んでいた。しかし悩んでいる間にもツイオンの闇のエネルギーは人々の精神を蝕んでいた。

「マズいな。このままじゃこの町の人全員ツイオンの闇のエネルギーでおかしくなっちゃまうぞ」

「そんなの駄目！何とかならないの3人共！」

タイガ達がツイオンの対処方法を考えていると、1つの光が地上へと降下してきた。

「この光のエネルギーは……まさか！」

その光は地上へと到達するとその光の中から赤い巨人が出てくる。ギヤラクシーレスキューフォースのウルトラマンリブットだ。

「終わりの魔獣！しかもツイオンだと？確かツイオンはジードが倒したはず。何故復活したんだ？」

リブットはツイオンが復活している事に驚きつつもツイオンへと駆け出す。

「リモートカッター！」

しかしリブットの攻撃はすべて高速で移動するツイオンには当たらなかった。

「ならばこれでどうだ！ストロングネット！」

ツイオンを球体状の光のネットで包み込み動きを封じたリブット。タイタスはそれをチャンスだと判断する。

「今だ！我々の光のエネルギーで奴の闇のエネルギーの放出を押さえ込むぞ！」

「伊智香！タイガスパークを掲げろ！」

「うん！」

伊智香がタイガスパークを空へと掲げるとタイガ達の光のエネルギーがリップットのネットを包み込む。強力なバリアネットを張ったことでカラータイマーが赤く点滅してしまいうリップットだったが、タイガ達のエネルギーによって強化されたネットによりツイオンの闇のエネルギーはネットの外には漏れなくなる。

「ひとまずこれで1日は持つはずだ」

リップットはこれで1日は保てると判断すると水色の隊員服を着た青年の姿へと変わって伊智香の前へと降りてくる。

「久しぶりだな！助かったぜリップット！」

「タイガ、それにタイガスとフーマも無事だったか」

3人はトレギアにやられてしまったと報告を受けていたりリップットはタイガ達の無事に安堵すると伊智香へと視線を向ける。

「なるほど。今は地球人と一体化しているのか。自分はウルトラマンリップット。この姿の時はテラサワと名乗っている」

「ど、どうも。才賀伊智香です！」

「救助要請を受けてこの地球に来たんだが、どうやら救助要請を出したのは君達じゃないみたいだね」

タイガ達は頷きながらも「いったい誰が？」と反応しているとテラサワは何か気づいていた。

「・・・なるほど。もう一人いたか」

「どうかしたのかりブット？」

「いや、何でもない。ところで見たところ才賀君は何処かの組織の隊員のようにだけど、仲間の元に戻らなくていいのかい？」

「あつ！そうだった！急いで戻らないと！」

伊智香は急ぎツキカゲ基地へと戻っていくと、テラサワは後ろへと振り返る。

「キミだね。救援要請を送ったのは」

「・・・正確には私の中にいるウルトラマンがだけど・・・そう」

テラサワの前へと出た雅美は自分の中にいるスマッシュが救援要請を送ったことに同意すると、スマッシュが雅美の『表』に出てくる。

「初めまして。僕はウルトラマンスマッシュ。貴方のお噂は聞いています。ギャラクシーレスキューフォース、ウルトラマンリブット」

「スマッシュ？もしかすると君は惑星ダブルスの・・・」

「はい。無事に救援要請が届いて助かりました」

互いに噂程度には知っていたリブットとスマツシユ。スマツシユは自身の置かれている状況が状況のためトライスクワッドのサポートすら出来ず、やむなくリブットに救援要請を送った事を話した。

「なるほど。そういうわけだったのか。しかし君にエネルギーを分けたとしても今すぐに君の体を復活させる事はできない。お嬢さん、もうしばらく彼の事を頼むよ」

「それはいいですけど．．．あの魔獣はどうするんですか？」

主導権をスマツシユから戻した雅美はストロングネット内にいるツイオンへと視線を向ける。

「動きを封じている今なら倒せるかもしれないが、自分もタイガ達も必殺光線を放てるほどエネルギーが残っていない。それにあの速度に対抗できるのはフーマだけだろう。エネルギーが回復し次第、フーマと連携して奴を撃破する。これしかこの地の人々の命を守る手段はなさそうだ」

「それで上手くいけばいいけど．．．」

後ろ向きな考えをする雅美はテラサワの作戦が成功してくれるかは半信半疑だった。

「もしスマツシユも戦えたら．．．ウルトラマンが3人戦えれば何とかなるかもしれないのにね．．．」

「……」

雅美の呟いたその言葉をテラサワは聞き逃さなかったが、あえて何も答えなかった。

~~~~~

~~~~~

ツイオンをストロングネットに閉じ込めてから18時間が経過した。ツキカゲはツイオンの対処をどうするか集まっていた。

「ウルトラマンリブット。と名乗る方からメッセージが送られてきました。リブットさんは自分の張ったバリアネットではしばらくは怪獣が人体に悪影響を及ぼすエネルギー波を封じてくれているようです」

「リブットって……青いウルトラマンが負けちゃった時に現れたもう1人のウルトラマン?」

「なんでそんな人がツキカゲにメッセージを……?」

命と楓は怪しいと疑いつつも初芽の話を聞く。

「バリアネットはあと6時間は有効なようですその間に町の人々を非難させてほしいそうです」

正常な人こそ逃げているが、ツイオンのエネルギーに当てられて『罪悪感』を失って



いる人々は町から逃げようとしてもしていない。リブットはそんな人々を安全圏内に逃がしてほしいとメツセージを送って来たのだ。

「宇宙人の罠かもしれないけれど・・・」

「言ってる事は正しいんだよね」

ストロングネットの効力が切れたら町は再び戦場となる。もしそうなれば町に残っている人々は戦いに巻き込まれるかもしれない。それは避けるべきだった。

「メツセージの相手が本当にウルトラマンリブットなのかはこの際置いておきます。ひとまずは人命救助を優先しましょう」

流石に人手が足りないとの事もあり、風の部隊と合同でミッションが行われることとなった。

「っー」

罪悪感がなくなり錯乱している人でも麻酔弾や睡眠弾の類は有効なようで、ツキカゲが銃の狙撃により眠らせた人々を風の部隊が安全圏まで運ぶ。とはいえ町一つぶん近くの人々がツイオンの影響化に陥り、その被害者を安全圏内に運ぶのはたった10人では不可能だった。

「どうすんの？これじゃあのネットが壊れるまでに間に合わないよ？」

ひたすら人々を眠らせ続けて既にもうタイムリミット間近。ツキカゲも風の部隊も

体力の限界が近づいていた。

「っー」

ストロングネットにヒビが入った事に気づいたツキカゲと凧の部隊の一同は止む負えないと救助を中断して撤退をしようとする。

「おやおや。まだ大勢残っていますけど助けていいんですか?」

撤退しようとする凧の部隊の前へと現れた霧崎は彼女達の心を揺さぶるようにそう告げてくる。すると凧の部隊の近くにいたテレジアは記憶消去弾を用意して銃を構えた。

「何者かは分からないが、見られたからには記憶を消させてもらう」

「たぶん無駄だよ。あの人、地球人じゃないから」

一度霧崎と接触してる命はテレジアに銃は無駄だと注意をする。

「ジャーキーで宇宙人切り殺しちゃうようなの。どう考えても地球人じゃないでしょ」  
「それは確かに」

命に同意した凧の部隊は霧崎を取り囲むように四方を押さえると、霧崎はポケットからチョコレートを取り出して食べ始めた。

「私の事など気にしてる場合か。ほら、もうすぐあのネットも壊れるぞ」

ストロングネットを指差す霧崎は指をパチンと叩くと、それを合図に離れた場所にい

る天堂は鉛色の銃でストロングネットを狙撃する。するとその銃弾でストロングネットを包んでいるタイガ達の張ったバリアにヒビが入り、ツイオンの闇のエネルギーが外に漏れ始めた。

「いかん！早くここを離れるのじゃー！」

ツキカゲも風の部隊も町から何とか脱出に成功すると、彼女達の足元に銃弾が飛んできた。

「くっ、何者じゃー！」

「おや、どうやら風の部隊もいるようだな」

銃撃の主は天堂その人で、モモと伊智香以外の全員は彼女を見て驚きの表情を見せる。

「えっ？天堂さん!?生きてたの!?!」

「お前は・・・ああ。ダブルスパイをしていた八千代命だったか?」

「あれ?もしかして私の事忘れちゃった」

「千代女気を付けて。あの人は私達の知ってる『あの人』じゃない」

「何だかよく分からないけど・・・とりあえずそっくりさんみたいに思っただけいいってわけね。了解」

モモの忠告を受けた命は距離を取りつつも天堂へとクナイを投げつけると、天堂はク

ナイを銃撃で撃ち落とす。

「やっぱなんか違うね。モノホンの天堂さんの場合刀で打ち落としてたところだもん」  
「まだあの女の事引きずってるんですか師匠！」

やきもちを焼きながらも手裏剣を投げる楓だが、それも銃撃によって撃ち落される。  
「私的には相手をしたかったのは百地だけなのだがな。いいだろう。まとめて相手をしてあげようではないか」

鉛色の銃、バレットトリガーで自身の頭部を撃った天堂は闇に包まれ、その姿をウルトラマンとしての姿、等身大のウルトラマンバレットへと変える。

「えっ？何アレ？ウルトラマン？」

「人間の体の名は知ってるようだが私の事は知らないようなので自己紹介してやろう。私の名はバレット。ウルトラマンバレット」

ウルトラマンバレット。そう名乗った相手にモモと伊智香以外の一同は驚くと、バレットは両手の指で銃を作ると、その指先から光弾を連射してくる。

「くっ・・・！」

「ハアアアっ！」

飛び交うエネルギー弾の中を駆け抜けたモモとしぶきは同時にバレットへと攻撃を仕掛けようとするも、バレットは自身の足元にエネルギー弾を放って目くらましをす

る。

「生憎だが風の部隊には興味がないのでな。今日はここで帰らせてもらおうとしよう」

「逃がさないよ！」

「わっ!?!」

土煙の中を去っていくバレット。それを追跡しようとする風の部隊だったが突然の揺れで足を止めてしまい、バレットを追いかけることはできなかった。

「どうやらウルトラマンの張ったネットが壊されたようじゃのう」

今の揺れはストロングネットが完全に壊された衝撃が伝わってきたものらしく、ツイオンは怒り狂ったかのように縦横無尽に飛び回る。ドサクサに紛れてその場を離れた伊智香は右腕にタイガスパークを出現させた。

「行くぜ伊智香！」

「うん！」

『カモン!』

「風の覇者! フーマー！」

フーマのアクセサリーを掴み取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

そしてそれを空へと掲げた伊智香はウルトラマンフーマへと変身を遂げた。

「さあ、リベンジマッチだ」

「シユア！」

テラサワもウルトラマンリブットへと変身して並び立つと、2人に気づいたツイオンは高速で迫ってくる。

「ブロッカーエフェクト！」

「セイヤツ！」

小型の盾を巨大化させてツイオンの体当たりをガードするリブット。そしてフーマも尽かさず高速移動でツイオンと並走し、ツイオンに蹴りを1発お見舞いする。

「極星光波手裏剣！」

フーマの極星光波手裏剣は確かにツイオンを捉えていたが、ツイオンは闇のエネルギーを波動として飛ばして極星光波手裏剣を相殺した。

「チツ。そんな芸当もできるのかよ」

「動きを封じる。そうしたら同時攻撃を仕掛けるぞ！」

リブットはストロングネットを放つも、ツイオンはもうその攻撃は喰らわれないと言いたげに高速でそれを避ける。

「オラよ!!」

フーマは無数の光波手裏剣を放つとツイオンを前へと誘導する。そしてリブットも

ストロングネットの軌道を変えてツイオンを包み込む事に成功した。

「今だ!」

「うん!」

『カモン!』

ギンガレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ギンガレット・コネクトオン』

「七星光波手裏剣!」

「ギヤラクシウムブラスタ―!!」

フーマとリブットの必殺光線はツイオンへと命中すると、ツイオンは翼を失う。2人はあと一押しと判断して追撃をかけようとする。『闇』が動いた。

「おいおいツイオン、お前の闇はそんなものじゃないだろお?」

青い仮面をつけた霧崎は闇のオーラとともに等身大のウルトラマントレギアへと変身を遂げると、力尽きようとするツイオンにエネルギーを分け与える。

「あれは……っ!フーマー!済まないがここは任せる!」

「ちよ、おい。何処行くんだよ?」

トレギアに気づいたリブットは同じく等身大サイズへと変わると去って行こうとするトレギアを追いかけていく。

「久しいな。ウルトラマンリブット。まだ無駄な命を守る活動を続けてるのか？」

「命に無駄なものは一つとしてない。かつての任務の続きだ。ここでお前を取り押さえさせてもらう」

「ノンノン。それはできない」

闇に消えていくトレギアを追いかけようとするリブットだったが、トレギアの闇のエネルギーによって強化復活させられたツイオンにすぐさま振り返った。

「うわああああつ!?!」

「くっ．．．今はあつちが優先か」

更にスピードが強化され、フーマですら捉えることが困難となったツイオン。戦いの場に戻ろうとするリブットだったが、フーマのカラータイマーだけでなくリブットのカラータイマーも赤く点滅し出した。

「このままでは．．．」

「逆転の方法ならあるよ」

リブットのもとへとやってきたのは雅美だった。

「スマッシュから聞いたよ。スマッシュとアナタのエネルギーをあの青いウルトラマンに分け与えれば逆転できるんですよ。なら．．．スマッシュ」

「はいー」



等身大のスマッシュへと変身した雅美は光のエネルギーを倒れているフォーマへと分け与える。

「フォーマ。この力を受け取れ」

スマッシュに続きリブットも自身の光のエネルギーをフォーマへと託す。するとスマッシュの『粉碎』の力とリブットの『嵐』の力が一つとなると、フォーマのアクセサリーがオーブリングを模した形へと変化する。

「これは……！伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

「2つの力、お借りします！」

『ウルトラマンリブット！』

『ウルトラマンスマッシュ！』

フォーマ・フュージョンアクセサリーを掴み取った伊智香はそれをダブルリードして右手へと持ち替える。

『トルネードフォージョン！』

「バディ・ゴー！」

それを空へと掲げるとフォーマは青紫のマフラーを纏い、紫色のラインに左腕にクリス

タルが埋め込まれた小型の盾を装備した姿となる。

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

「俺はフーマ。ウルトラマンフーマ・ストームインパクト! 銀河の嵐とともに参上!」

パワーアップしたフーマに領いたリブットは数歩後ろに下がり、ツイオンとの戦いをフーマに任せる。

「後は任せただぞ。ウルトラマンフーマ!」

「応! ニン!」

印を結んでドロロンと消えたフーマはツイオンの真上に現れると回し蹴りでツイオンを地面に突き落とす。

「さあ、月に代わってお仕置きの時間だぜ」

フーマは伊智香の漫画で呼んだ事のある台詞を真似ながらキレのある光波手裏剣を2つ同時に飛ばす。

「つ・・!」

ツイオンはそれを避けようとするも、光波手裏剣のスピードはツイオンを上回り、ツイオンの翼を斬りつけた。

「セイヤツ!」

パワーアップした事で更にスピードが強化されたフーマは通常のフーマと互角だつ

たツイオンの速さを上回り、逃げようとするツイオンの進む先へ回り込んで回し蹴りをする。

「オオ・・シヤア！」

高速移動により5人に分身したフーマは一斉に光波手裏剣を放ち、それが命中させられたツイオンは翼が破壊されて飛行能力を失う。するとフーマはVサインをツイオンへと向けた。

「言っておくがこれはピースマークじゃねえぞ。お前は後2秒で終わりつて意味だ」

頭の上で腕をL字に構えたフーマはその両腕をしたへと振り下ろす。

「真星光波手裏剣」

その腕から放たれた白く輝く光波手裏剣はツイオンを縦に真つ二つにすると、まるで何が起こったかを理解してないかのようにフーマへと振り返ったツイオンはそれと同時に爆発した。

「つと。また指輪か」

爆炎から飛んできたツイオンの指輪を掴み取ったフーマは印を結んでドロンとその場から消えて変身を解く。

「この地球は頼んだぞ。トライスクワッド」

ウルトラマンリブットは巨大化すると伊智香達に地球を任せて飛び去って行く。そ

れを見届けた伊智香は仲間のもとへと戻っていった。

~~~~~

~~~~~

「大丈夫スマツシユ？」

『ええ、少し体を回復させるぶんのエネルギーは消耗してしまいましたがこの程度なら問題ありません』

回復途中だというのにフーマに自身のエネルギーを分け与えたスマツシユは自身の身体を回復させるぶんのエネルギーが減って疲れている様子だった。

「アンタかい。この星にいる何人かのウルトラマンの1人は？」

「えっ?」

雅美は声に振り返ってみると・・・そこには60代後半から70代ほどに見える老婆がそこに立っていた。

「なんで私の中にウルトラマンがいる事を知ってるの?」

「なんで?と聞かれると偶然あんたがウルトラマンにエネルギーを分け与えるのを見たからかな。・・・おっと自己紹介がまだだったね。アタシは津守ヨモギだ。さつきドンパチしてた黒服の娘達がいるだろ。アタシはその責任者みたいなもんかね」

「はあ・・その責任者が何か？」

雅美は何か嫌な予感がすると数歩下がりがりながら嫌そうな顔を向ける。すると彼女の予想通りの答えをヨモギは告げてきた。

「単刀直入に言うよ。凧の部隊に入ってくれないかい？」

## 二者択一

「セイヤツ！」

深夜、ウルトラマンフーマは巨大化した蟬のような顔と大きなハサミが特徴の異星人、バルタン星人と戦っていた。

「流石宇宙忍者って呼ばれるだけはあるな。中々やるじゃねえか。伊智香！フュージョンアップだ！」

「うん！」

『カモン！』

フーマのアクセサリーがフーマフュージョンアクセサリーへと変化すると、伊智香はそれを掴み取って右手に持ち替える。

『ウルトラマンリブット！』

『ウルトラマンスマッシュ！』

「2つの力、お借りします！」

『トルネードフュージョン！』

スマッシュとリブットの2つの力を解き放った伊智香は右手を空に掲げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト！』

フーマは強化形態のフーマ・ストームインパクトへと変わると、高速移動で5人に分身してみせる。

「さあ、忍法対決と洒落込もうじゃんか」

「フオフオツ！」

「フオツフオツフオツ！」

対するバルタン星人も5人に分身してみせると、バルタン星人達は狭からフーマ達へと向けて光線を放ってくる。

「真星光波手裏剣！」

フーマ達は一齐に真星光波手裏剣を飛ばして光線を切り裂くと、それぞれがバルタン星人に突き刺さってバルタン星人は1体に戻る。

「さて仕上げだ！」

両腕を横に伸ばしたフーマはその手先からそれぞれ光の剣を作り出す。

「セイヤツ!!」

神速で駆け抜けたフーマは十字に構えた光の剣を振るい、バルタン星人を十字に切り裂き撃破する。

「へっ、どんなもんだ」

『・・・私も早くパワーアップが欲しい』

バルタン星人を無事倒したフーマはドロンと煙とともに変身を解除してその場から消えていく。すると空に光の文字が浮かび上がった。

「何アレ？」

『あれは・・・大賢者のウルトラサインだ』

変身を解いた伊智香はその文字に気づくとタイタスはU40の最高責任者である大賢者のウルトラサインだと気づいた。

「ウルトラサイン？よく分からないけどなんて書いてあるのタイタスさん」

「良くない風を感じるから心してかかれ。そう書かれていた」

「良くない風？」

伊智香達が大賢者の忠告の意味が分かるのはもう少し後の事だった。

~~~~~

~~~~~

戦いの一部始終を離れたビルの上から眺めていた天堂はため息をつく。

「タイガに続きフーマもパワーアップしてしまったか。私個人としてはウルトラマンは



タイガ以外興味はないのだがな」

タイガ以外に興味がないという天堂ことバレットは変身が解かれて着地していた伊智香に向ける銃を降ろす。

「だが既に種は撒いた。後は実るのを待つだけだ」

~~~~~

~~~~~

「ごほつごほつ・・・風邪かしら？」

青い髪に片目に傷のある女性の名は半蔵門雪。一年ほど前までモモの師匠としてツキカゲで活動し、現在はツキカゲだった頃の記憶を消した彼女は一般人としてソラサキの大学に通っていた。

「雪ちゃんも風邪ですか？気を付けてくださいね。最近流行ってるようですよ」

「そうなの？気を付けないといけないわね」

雪は初芽に風邪かもしれないことを心配される。

この時はただの風邪やただの病気だと思っていた。しかしそれは終わりを振りまく『風』だったことは誰も知る由もなかった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「以上のように現在、原因不明の病気が流行っているんです。皆さんも気を付けてくださいね」

「お〜い」

初芽は最近流行している原因不明の病気のことをツキカゲメンバーに注意喚起をしていると、顔を赤くしながらもフラフラと白虎が近づいてきた。

「あらあら、白虎ちゃんも風邪ですか？」

「そうみたいだ〜」

「何とかは風邪引かないっていうけど、あれは迷信なのね」

楓は『馬鹿は風邪引かない』を迷信だったというも、その言葉を知らない白虎は「流石の白虎様でも風邪は引くんだ」と鼻声で話していた。

「もしかしたら流行り病かもしれないので、向こうで大人しくしていきましょうね白虎ちゃん」

「うう。そうする」

大人しく寝ている事になった白虎は初芽に背負われて運ばれていく。

「さて、病人の白虎ちゃんが運ばれていったことだし、今日のミツシヨンの話をしようか」

初芽に代わってモモがミツシヨンの説明を始める。

「最近ヴィラン・ギルドに動きがあつて、なんだか地球の悪い人達にメダルみたいなものを売りつけているみたいなんだ。そのメダルが何なのかはまだ分かつてないみたいだけど悪用される前に確保しないと」

「ただの宇宙のお金つてわけじゃないんだよね？」

「通貨つてわけじゃないらしいよ。この間のミツシヨンで一枚回収したんだけど、初芽さんがいうには怪獣と同じエネルギー反応が確認されたんだつて」

怪獣の力を秘めたメダル。そんなものがあるのかと驚く一同はもしそんなものが悪用されたらと考え、至急ミツシヨンの準備をしていると白虎を寝かしつけた初芽が戻つて来た。

「これまで取引現場を確認した場所は2カ所あります。今日の取引は午後22時、どちらかの取引現場にて行われるようなのでその片方の現場はZETが押さえてくれるよ。なので、私達はもう片方を押さえます」

どちらか片方の現場で行われる取引。その片方をツキカゲで張り込むことにした一同は一度解散して夜に備える。

「ねえタイガ君。怪獣の力が入っているメダルの事、何か知ってる？」

「残念ながらさっぱりだ」

メダルの事についてさっぱりだと語る10センチタイガは隣でスクワットをしているタイタスの方を振り向く。

「すまない。私も知り得ないアイテムのようだ。おそらくヴィラン・ギルドが作り上げた怪獣の力を封じ込めた道具とみていいだろう。これ単体では機能していないところをみるに、何らかの道具を用いてその真価を發揮するはずだ」

「ループクリスタルとジャイロみたいなもんか」

フーマは自分の知っている道具に例えると、伊智香もハードとソフト程度のイメージをしていると、先を歩いていたモモを見つけた。

「やっぱりお見舞いに行きたいけど……今の師匠に私の記憶はないし……」

「師匠！」

伊智香は何やら悩んでいる様子のモモへと声をかける。

「どうかしたんですか師匠？」

「うん。さつき初芽さんが言ってたんだけどね、私の師匠だった人が急な体調不良で入院する事になったの。お見舞いに行きたいとは思うけど……今の師匠は私の事を覚えてないからどうしようかなくてね」

ツキカゲを引退する時、2つの選択肢がある。1つはツキカゲであった記憶を消して一般人として生きる道。もう1つは記憶を消さずにサポートにまわる道だ。初芽やカトリーナは後者を選んだが、雪は前者を選んだため現在の彼女はモモの事を覚えていない。

「学校の後輩ですつて感じにお見舞いに行つてもいいのでは？」

「そうしたいのは山々なんだけど、今はちよつと難しい状況だからね」

「もしかして・・・バレットのことでですか？」

「うん・・・」

モモが気にしていたのは自身に執着しているバレットこと天堂の事。下手に自分が雪と接触してしまうと彼女が狙われてしまう可能性を恐れてのことだ。

「だからせめてバレットの件が解決するまでは何があつても師匠と・・・」

「いえ・・・やっぱり行つてあげたほうがいいと思います」

バレットの件が解決するまでは行くつもりはないというモモに伊智香は行つた方がいいという。

『トレギアみたいな考え方をしてるバレットの事だ。もしかしたらもうその師匠に接触してるかもしれない』

「バレットの事です。もしかしたら師匠の師匠に既に接触しているかもしれません」

伊智香はタイガに言われたことをそのままモモに伝えると、モモも「そうかも」と頷く。

「そうだね。・・・分かった。明日、師匠のところにお見舞いに行ってみるね」

この時のモモ達は気づいていなかった。既に植え付けられた種は既に実り、風に揺られながら成長していた事を。

~~~~~

~~~~~

午後22時。ツキカゲとZETで張り込みをしていた2カ所はツキカゲの方がヒットして、ミッシェンを始めようとしていた。

「へい、ユー！金は？」

「用意してる」

バルキー星人は取引相手の地球人の男性にお金の用意ができているかを問いかけると、その隣にいるもう1人の男性はアタッシュケースを開いてお金をバルキー星人に見せた。

「OK。これが例のブツだ」

同じくバルキー星人も持っていたアタツシケースを開く。その中にはボール状の機械と数枚のメダルが入っていた。

「これがアバレンボウルと怪獣メダルだぜ。ユー」

アバレンボウルと呼ばれた機械と怪獣メダルと呼ばれた数枚のメダル。1億円ほどが入ったアタツシケースと引き換えにそれが入ったアタツシケースを受け取ろうとしたところにツキカゲはそれを阻もうと出撃する。

「ツキカゲ、ミツシヨンスタート」

モモの合図とともに最初に動いたのは命と楓のコンビ。2人はクナイと手裏剣をそれぞれアタツシケースへと投げつけると、それに驚いたバルキー星人と男性はアタツシケースを落とす。

「金銭回収完了!」

「(こ)ちらも・・・」

「(さ)せるかあ!」

五恵がお金の入ったアタツシケースを確保し、テレジアもアバレンボウルと怪獣メダルの入ったアタツシケースを掴もうとしたのだが、バルキー星人は咄嗟にそれを蹴り飛ばして中に入っていたアバレンボウルと1枚の怪獣メダルがもう1人の男性の足元に転がっていった。

「こ、ここうなったらこれをー！」

足元に転がって来たアバレンボウルに一枚のメダルを拾い上げた男性は、アバレンボウルにメダルをセツトする。

『アストロモンス』

「で、出てこい怪獣！」

「お、おい馬鹿。室内で使ったら・・・」

バルキー星人の制止も聞かず、ツキカゲに焦った組織の男はアバレンボウルを発動させてしまう。するとアバレンボウルが発光し始めた。

「いけない！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

右手を空に突き上げてウルトラマンタイガへと変身した伊智香は瓦礫の下敷きになりそうになるツキカゲメンバーを庇う。

「あれ？無事？」

「師匠、上。上」

「お〜！ウルトラマンタイガ！」

「ありがとう。タイガ！」

お札に領いたタイガは立ち上がるとアバレンボウルによって召喚されたアストロモンスの方へと振り向く。

「こうならヤケだ！邪魔した連中ごとウルトラマンを倒しちゃえ！アストロモンス！」

「はい。ちよつとお静かにしましょうね〜」

命の手刀を受けたバルキー星人はその場に倒れて気絶してしまうと、組織の男達もどさくさに紛れて逃げようとしていた。

「逃がさん」

そこを五恵とテレジアによって取り押さえられるとツキカゲはタイガが戦いやすいようにその場を離れていく。

「シユア！」

駆け出したタイガは右ストレートをアストロモンスへと叩き込む。その拳はアストロモンスの腹部の花にめり込んだ。

「どうだ？」

その一撃に怯まされたアストロモンスは触手を鞭のように振るってタイガを攻撃し

てくる。すると触手はタイガの手足を縛りつけ、タイガは身動きができなくされた。

「伊智香！電気ショックで触手を痺れさせてやれ！」

「うん！」

『カモン！』

デンジュラスリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークにかざす。

『デンジュラスリング・エンゲージ』

「ハアアア!!」

がっしりと触手を掴んだタイガはその手から電撃を放つと、アストロモンスは全身が痺れて触手の力も弱まる。

「植物には炎だ！」

「だったらこれだね！」

『カモン！』

次にエンジョーリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『エンジョーリング・エンゲージ』

「デリヤア！」

火炎放射を浴びせて触手を焼き尽くしたタイガ。そして逃げようとするアストロモンの尻尾を掴んだタイガはそのままアストロモンスを振り回して空中へと投げ飛ば

した。

「決めるぞ！伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

トドメにロツソレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざした。

『ロツソレット・コネクトオン！』

「フレイムプラスターアア!!」

フレイムプラスターの一撃を受けて爆散するアストロモンス。遅れて出たフリをして他のツキカゲメンバーに合流した。

「あつ、もう終わっちゃいました？」

「出てくるのが遅いよ孫市」

「ご、ごめんなさい」

「冗談冗談。さあ、ミッション終了だし帰ろっか」

ミッションを完了させて帰還しようとするツキカゲメンバー。それぞれが帰還していく中、モモは途中で足を止める。

「師匠？」

「……ごめんね伊智香ちゃん。やっぱり私、今からちよつと行ってくるね」

「今からって……もう病院の面会時間は……行っちゃった」

雪の事が心配で伊智香の制止をも聞かずに病院へと走り出したモモ。そんなモモが心配なのと、モモの師匠がどんな人なのかという興味本位で彼女に付いていく伊智香。すると2人は病院の前で意外な人物と遭遇した。

「やあ、奇遇だな百地」

天堂ことウルトラマンバレットだ。

「バレット!」

モモは彼女を見るなり刀に手をかけるも、天堂は「ここでは戦う気はない」とでも言うかのように両手をあげる。

「おいおい、病院の前だぞ。刀を収めたらどうだ百地」

「……どうして貴女がここにいるの?」

渋々刀を収めたモモは何故か病院から出てきた天堂にどうしてここにいるのかを尋ねる。

「なあに。今はここでナースの仕事をしているのでな。今日の仕事を終えてきたまでだ」

「……」

モモと伊智香は「信じられない」と言いたげな視線を向けるも、天堂はそんな視線な

ど気にもせず話を続ける。

「大方、半蔵門雪の見舞いに来たのだろう。だが面会時間は守れよ」

そう言い残し去っていく天堂に、呆気にとられる伊智香とモモ。2人は仕方なく面会時間を守るため、明日改めて半蔵門雪の面会に行く事にした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

翌日。モモと伊智香は雪の入院している病室の前までやってきた。

「いよいよ師匠の師匠に会えるんですね」

「うん。だけど今の師匠は伊智香ちゃんの事だけじゃなく、私の事も覚えていないからそれとなく話を合わせてね」

「はいー」

2人は病室へと入っていくと既に先に来ていた初芽と顔色を悪くしたまま寝ている雪の姿があつた。

「初芽さん、師匠の様子はどうです？」

「今眠ったところです。正直言ってあまり良い容体とは言えませんが」

「そんなに悪いんですか？」

「どうやら雪ちゃんは今まで症例のない病に脅かされているようで治療の余地がないようなんです」

「そんな……！」

モモは医師では治せないと言われた事を告げられて驚きの声を上げる。すると要員の外次々と救急車のサイレンが聞こえてきた。

「さらに問題なのが……それは雪ちゃんだけではなくソラサキを中心として各地でその病が蔓延し始めているらしいんです」

次々と救急搬送されてくる人々。その人々は雪と同じく身体が風化していくかのようになり力が入らなくなる病に苦しめられている。

「初芽さん。モウリヨウの時と同じく毒薬が散布された可能性はありますか？」

「私もその線で考えていました。ですので雪ちゃんの採血結果を拝見させていただいたところ……」

「どうだったんですか？」

「毒ではない。ということだけは分かりました」

毒じゃない。その言葉を聞いたモモはひとまず安心する。

「ですから逆に不自然なんです。となるとなんらかの外来種によるパンデミックと考えるのが自然なのですが・・・ここで最近の事件を踏まえて考えられる外来種といえば」  
「怪獣。ってことですか」

初芽はモモの発言に静かに頷く。初芽の出した答え。それは自分達の『未知』の相手ともいえる外来種の怪獣という答えだった。

「怪獣が振りまく病原菌であれば、その怪獣のサンプルさえあれば何かしらの薬は作れるかもしれませんが、怪獣が姿を現していない以上、対処もできません。雪ちゃん達の回復力を信じるほかありません」

雪の回復力を信じるしかない。その言葉を聞かされたモモは寝ている雪の手を握りしめて彼女の回復を信じる。そして伊智香とともに家路を辿ろうとすると、再び天堂は2人の前に現れた。

「どうだ百地。お前のために用意した舞台はどうだ？」  
「何を言ってるの？」

「風終病魔ヤクサイ。それがお前のために用意した終わりの魔獣の名前だ」  
『ヤクサイ・・・やはりか』

薄々は察していたタイトラスは何処かやるせないように言葉を詰まらせる。

「ヤクサイの振りまく病魔はその病にかかった宿主以外の人間を3日かけてゆっくりと死に至らせる」

「3日で・・・!!はやくしないと皆の命が！バレット！ヤクサイを何とかする方法を教えなさい！」

モモは携帯していた端末型の銃を取り出し、力づくでも聞き出す姿勢を取ると、天堂は「怖い怖い」と笑いながら両手を挙げた。

「ヤクサイは7体の魔獣の中で最弱の魔獣だ。百地、お前1人でもヤクサイは倒せるぞ」人間でも倒す事が可能だと告げてくる天堂にモモは警戒しながらも銃口を向ける。

「随分とあつさり教えるんだね」

「これはゲームだ。ゲームを始める前にルールを説明するのは当然だろう？」

これはゲームだと言う天堂はそのルールを話し出す。

「ルールは簡単だ。制限時間内にツキカゲが終わりの風であるヤクサイを殺せればお前の勝ち。これ以上疫病が広がることはなくなり、人々も回復し出すだろう」

ヤクサイが人間でも倒せるのならとやる気なモモ。しかし次の発言でそのやる気は消え去ってしまう。

「ヤクサイは人間の体内に潜伏している。ヤクサイを殺す手段。それは宿主を殺すことだ」



「えっ・・・？」

流石のモモも見ず知らずの相手の命を奪うかもしれないことには動揺すると、次の言葉が更にモモを動揺させた。

「ちなみに百地。ヤクサイの宿主はお前の良く知る人物だぞ」

そう言った天堂は一枚の写真をわざとらしく足元に落とす。その写真にはモモの師匠であつた半蔵門雪が写されていた。

「さあ、お前が選ぶのだ百地。街の人々のためにかつての師匠を殺すか、かつての師匠のために街の人々を殺すか」

「っ・・・！」

二者択一の決断を迫られたモモ。その手は迷いに震えている。

「バレット!!」

怒りに身を任せた伊智香は銃を天堂に向けて放つも、怒り任せの刃はあっさり天堂に避けられてしまう。

「ふふっ・・・さあお前がどの答えを選ぶのか今から楽しみだ」

等身大のウルトラマンバレットへと変身した天堂は闇へと消えるように姿を眩ませたのだった。

## 英霊の魂とともに

「おそらくウルトラマンバレットの言っていた事は事実です」

モモの話を聞いた天堂の話から雪の中にヤクサイが潜んでいる事は事実だと判断した初芽は顔を赤くしながらも話を続ける。

「雪ちゃんが体調を崩し始めたという時期と謎の病気が流行り出した時期が重なります」

「じゃあやつぱり……」

モモは天堂に言われた2択の事を思い出す。1つは雪を犠牲に街の人々を救うこと。もう1つは街を犠牲に雪を生かすこと。しかしモモは分かっている。後者の方は一時しのぎにすべからず、ヤクサイによる病魔は世界へと広がっていく事を。

「ヤクサイを止めるには雪ちゃんの命を奪うしかない。バレットはそう言っていたのですよね?」

「……はい」

ツキカゲ一同は悩む。もちろん雪は殺したくはない。しかしこのままではヤクサイによる病魔は広がり続けていく一方だ。

「ごめんなさい。私もなようです」

「ごほっ、ごほっ・・・私もか・・・」

「ごめんなさい師匠」

「テレちゃん！それに師匠まで・・・」

「楓！」

とうとう初芽にテレジア、楓までもがヤクサイによる病魔に倒れてしまう。

「カトリーナさん。すみませんけど3人の事を頼みます」

「百地、どこに行くの？」

「私の師匠の事は・・・弟子の私が決めるよ」

立ち上がったモモは病院へと歩みを進めていく。それが心配になった伊智香もモモを追って基地を跳び出して行った。

~~~~~

~~~~~

「ねえ3人も。本当に師匠の師匠・・・半蔵門さんの命を奪う以外に何とかする方法はないの？」

伊智香はタイガ達にもモモの師匠である雪を救う手立てはないのかを尋ねると、タイガ

達はそれぞれ語り出す。

「ないわけじゃない。確かモモの師匠は雪って言ったな。雪の中に入ってヤクサイを倒せばいいんだ」

「どういう事？」

「つまりだ。伊智香の師匠の師匠だっていう嬢ちゃんの内面でヤクサイをぶつ倒しちまえば解決ってことだ」

「ああ。だけどそれにはマイクロ化して彼女の中に突入しないとイケない」

「だったら・・・！」

「だったらその作戦で行こう。伊智香はトライスクワッドの3人にそう進言しようとしたが、3人は何やら悩んでいた。」

「何を悩んでるの？」

「マイクロ化というのはウルトラマンである我々だけでなく一体化している君にも負荷が大きい。もって1分程度が限界なのだ」

「だから俺ら3人の中で誰でいくかって話になるんだが・・・俺はそこまで小さくなる芸当は1回しかやったことねえから自信ねえぞ」

「勝負は短期決戦になるので君が適任だと思ったのだが・・・そうか」

「つてことは俺かタイタスで行くしかないってことになるな」

「タイガ。すまないがヤクサイは君に任せることにする」

タイタスは意外にもヤクサイの相手をタイガに任せると告げてきた。

「それはいいけど、どうしたんだタイタス？」

「今回のバレットのやり方は非常に気に入らん。賢者として冷静さを欠いているところがある。今回の人の中でのミッシヨンに適任ではない」

タイガは拳を強く握りしめるタイタスを見て静かに「分かった」と頷いた。

「さっそく行くよタイガ君！」

『カモン！』

伊智香はさっそく変身して雪を助けに向かおうとするも、タイガは反応しない。

「どうしたのタイガ君？」

「悪い伊智香。すぐに行きたいのは山々なんだけど、ヤクサイがモモの師匠のどこらへんにいるのか分からないじゃ、1分じゃ無理だ。だからまずは位置を特定しないと」

「だったら私とスマツシユの出番だね」

「えっ？」

伊智香は声に振り返ると、そこには風の部隊のスーツを着た雅美が歩いてきた。

「貴女はスマツシユと一体化してる……」

「そう言えば名乗ってなかったね。私は碓氷雅美。色々あつてあの後、風の部隊に入っ

ちやったの。(仮) だけどね。一応コードネームは烏枢沙摩。話はだいたい聞かせてもらったよ」

「あつ、ご丁寧にどうも。私は才賀伊智香、コードネームは孫市です」

「よろしく孫市。それじゃさっそく……行くよスマツシユ」

『はい!』

スマツシユスパークを取り出した雅美は等身大のウルトラマンスマツシユへと変身するとウルトラステルスで透明になりつつ、雪の眠る病室へと忍び込む。

「ウルトラサーチャー!」

スマツシユは相手を探知するウルトラサーチャーを発動して雪の中にいるヤクサイの位置を探る。

『いないね』

「血液循環の多い心臓近くにいないとすると……やはりここですか」

心臓にいないことを確認したスマツシユは次に頭部にウルトラサーチャーの光を当てるとウルトラサーチャーは雪の頭部で反応した。

「脳……ですか。随分と難しい場所ですね」

病室を出ると同時に変身を解いた雅美は伊智香と合流し、脳にヤクサイが潜んでいる事を伝える。

「脳か。随分と戦いにくい場所に居座ってくれてるぜ」

ミクロ化してサイズに合わせた強さになれると、いつてもウルトラマンはウルトラマン。下手に攻撃をすれば、体を内側から傷つけてしまうこととなる。ましてや脳の近くとなれば少しでも傷つけてしまえば大惨事だ。

「危なくてもやるしかないよ」

『私とスマッシュが外側からサポートするから、孫市とタイガは全力で戦って』

『万が一に備えて僕は外からウルトラヒーリングを照射していますので、タイガ君は心置きなく戦って下さい』

「・・・ありがとうスマッシュ！」

タイガはスマッシュにお礼を言うと伊智香はタイガアクセサリーを手取る。

「光の勇者！タイガ！」

アクセサリーを右手に持ち替えた伊智香はその手を空へと掲げた。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

等身大のウルトラマンタイガへと変身した伊智香はそこからミクロサイズへと小さくなる。雪の口から彼女の体内へと入っていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「やはりタイガはミクロ化して体内からヤクサイを倒すという手段に出たか。しかしそれは想定内だ」

ナース服の天堂は雪の体内へと入っていったタイガを見届けて、やはりそうきたかと考える。

「しかし何事もそう簡単にはいかないぞ。タイガ」

「へえ、ウルトラマンタイガが何とかしてくれようと動いているんだ」

そこに現れたのはツキカゲの装備に着替えたモモ。モモは刀を抜くと天堂へと構えた。

「おいおい百地、病院の中だぞ」

「監視カメラなら問題ないよ。初芽さんが何とかしてくれてるから。そもそも貴女がいる病院に安心して師匠を入院させてられないでしょ」

「ふふ、まあ最もな意見だ。それで答えは決まったか百地」

天堂は師匠である雪を助けるか、街の人達を助けるかの二者択一の答えをモモに問う。

「答えなら決まってるよ。タイガを……ウルトラマンタイガを信じる。きっとタイガな

ら師匠を助けてくれる」

「違う違う。そういう答えを聞きたいんじゃないんだよ百地い」

そういう答えを求めていたわけではないと天堂は首を横に振ると、接近したモモは刀を横に振り被った。

「っ！」

天堂はその刃をバレットトリガーで受け止めるとモモは彼女を蹴り飛ばす。すると自動ドアが動きを感じて開き、天堂は外へと追いやられる。

「まさかただの人間一人に外に追い出されるとはな。仕方ない。少し本気を出してやろう」

バレットトリガーで自身の頭部を打ち抜いた天堂は等身大のウルトラマンバレットへと変身すると、光弾をモモへと向けて放ってきた。

「っ！」

それを刀で受け止めたモモだったが、勢いまでは殺しきれずに吹き飛ばされてしまった。

「私はまがいなりにも『ウルトラマン』だ。人間がウルトラマンに挑むというのは蟻が人間に挑むに等しい行為なのだぞ？」

「確かに一人じゃ無理かもしれない。だけど・・・」

「ツキカゲは1人じゃないんだなくこれが」

「っ！」

「ハアアアッ！」

飛んでくるクナイをガトリウム光線で撃ち落とすバレット。そこに五恵が殴りこんでくる。

「ムウ……。なるほど3人がかりか」

五恵の拳を受け止めたバレットはそのまま五恵を地面へと叩きつけようとするも、モモが斬り込んで来てそれを止められる。

「だがそんな刀程度は……。」

「ハアアアッ！」

振り下ろした手刀で刀を叩き折るバレット。しかしモモに気を取られたバレットは命と五恵の同時攻撃を受けて膝をついた。

「くっ、この私が地球人に膝をつけさせられるとは……。」

想定外と言わんばかりの反応をしたバレットは天堂の姿に戻ると服についた埃を掃う。

「私はお前達に負けた。それは認めてやろう。しかしタイガが半蔵門雪を救えるとは思わないことだな」

「師匠！」

「あつ、待つて百地」

そう言い残した天堂は何処かへ歩き去つていくも、雪の事が心配なモモ達は天堂を追いかけることなく雪の病室へと急いだ。

~~~~~

~~~~~

「もうすぐヤクサイのいる脳だ！」

血管を通っていたタイガはもうすぐ脳の部分というところまでやってきたタイガ。

「このまま加速して一気に行くこう！」

「応！ハアアア！うわっ!？」

タイガは加速して一気に脳へと向かおうとするも、その行く手を何者かに阻まれた。

「いったい何？」

「あれは・・・宇宙細菌ダリーだ！」

宇宙細菌ダリー。血液中のフィブリノーゲンを食料とする宇宙細菌の一種であり、寄生した生物を吸血鬼へと変貌させる危険な細菌なのだ。

「たぶんバレットの仕業だろうな」

「もう時間もないし、はやく倒さないと」

ダリーはバレットの仕向けた時間稼ぎだと分かっている伊智香とタイガ。しかし目の前のダリーを倒さなければヤクサイのいる脳へとたどりつけないことも分かっている2人はまずダリーを倒すという考えにいたる。

「シユア！」

外でスマツシユがウルトラヒーリングで治してくれるのは分かっている、下手に光線技を使えないと考えているタイガはキックでダリーを蹴り飛ばす。

「タイガ君。分かっているとと思うけど光線技はトドメの一撃だけにしてね」

「ああ。分かっている！」

分かっているとは言っても既にカラータイマーが赤く点滅を始めたタイガには焦りがあった。その焦りから中々タイガの攻撃はダリーには当たらず、カラータイマーの点滅は加速する。

「もう時間がない。どうしたら・・・」

「落ち着いてくださいタイガ」

外にいるスマツシユの声が聞こえたかと思えば、タイガのカラータイマーの光が赤から青へと回復した。スマツシユがエネルギーを分けてくれたのだ。

「さあ、今です！」

「サンキュー！スマツシユ！」

力を取り戻したタイガに対してダリーは霧状の粘液を放ってくる。

「っ！」

その攻撃をバリアで防いだタイガはできるだけ体内を傷つけないように調整したストリウムプラスターを放ち、ダリーを打ち倒した。

「よし！あとはヤクサイだけだ！」

急いで脳まで飛んでいくタイガ。そこには脳で根を張っている樹木のような生命体
がいた。

「こいつがヤクサイか」

『気を付けろタイガ。奴は脳に根を張ることで、こちらに攻撃をさせにくくしている。
事実、少しでも攻撃が逸れてしまうと脳に障害が残るかもしれないぞ』

「マジかよ・・・」

タイタスの忠告を聞いたタイガは周囲の根を見渡す。その根は脳から血管へとどん
どん成長し、雪の体を侵食していた。

「これ以上は侵食させない！伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

デンジユラスリングを装備した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『デンジユラスリング・エンゲージ』

「電気シヨックで一気に焼き切つてやる！ハアアアッ！」

ヤクサイの根を掴んだタイガはデンジユラスの電撃攻撃で根を焼き切る。

「シユア！」

跳び蹴りでヤクサイを揺らしたタイガはそのままヤクサイを掴むと引つ張つて、雪の脳からヤクサイを引きはがす。

「よしっ！」

「このまま決めるよタイガ君！」

「応！ストリウム・・・ブラスター!!」

投げ飛ばしたヤクサイにストリウムブラスターを命中させたタイガ。ヤクサイはそのまま倒され雪を含めたヤクサイの病魔に脅かされていた人々が回復へと移行した。

「やったねタイガ君！」

『ああ！』

雪の外に出ると同時に変身を解除した伊智香。するとそのタイミングでバレットとの戦いから病室へとやってきたモモ達と遭遇する。

「伊智香ちゃん？どうしてここに？」

「えっと、念のため半蔵門さんの護衛をしようかなって・・」

それとない言い訳をした伊智香。すると病院の外にウルトラマンとしてのサイズとなったバレットが現れた。

「やってくれたなタイガ。せつかくのゲームを台無しにしてくれた罪は重いぞ！」

『何がゲームだ。自分の計画が破綻したからって結局は直接雪を狙いに来たってわけか』

「マズい。ユツキーが狙われてる！」

「大丈夫。きつとウルトラマンが守ってくれる」

ウルトラマンが守ってくれると信じるモモ。ドサクサにまぎれて病室を抜け出した伊智香は再びウルトラマンへと変身しようとする。

『カモン！』

「行くぞ伊智香！」

「力の賢者！タイタス！」

タイタスのアクセサリーを手にとった伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香は病院を守るようにバレッ

トの前へと立ち塞がる。

「許さんぞバレット!」

冷静なタイタスですらバレットに怒りを見せると、タイタスは右腕に光を灯してバレットを殴りつける。

「はっ!?!」

それを避けられなかったバレットは地面を幾度となくバウンドするように吹き飛ばされる。

「ぐっ。おのれタイタス・・・!お前に用は・・・」

「たとえ天が許しても私のウルトラマックスが許さんぞ!」

サイドチェストをしながら怒りを拳に乗せるタイタス。そして2撃目の拳をバレットへと振るう。

「賢者の拳は全てを砕く!」

「ぬあっ!?!」

賢者の拳を受けて吹き飛ばされそうになるバレットは何とか持ち直そうと堪えると不安定な体勢のままガトリウム光線を放ってくる。

「プラニウム・・・バスターアア!!」

ガトリウム光線をプラニウムバスターで撃ち落としたタイタスは爆煙を突き抜けて

3発目の拳を叩き込む。

「くっ、接近戦では圧倒的に私の方が不利だというのに……私の攻撃で怯まない。これが力の賢者、ウルトラマンタイタスか」

「あまり力の賢者を舐めるなよ」

「だがいくら賢者とはいえこの一撃は止められまい。ハアアアア……デストラクションバレット!!」

「っ！いかん！」

ウルトラダイナマイトのように自らを起爆剤とした大爆発を発動したバレット。タイタスは咄嗟にバリアを張って病院を守ろうとする。

「ハハハっ！燃え尽きろ賢者！」

「又ウウウ……私は負けん！私は賢者！ウルトラマンタイタスだ！」

タイタスはバリアを前へと突き出すように力いっぱい拳を振るう。そんな中空から一つの光がタイタスへと飛んできた。

「この光は……」

光はタイタスを包み込むと、真っ白い空間にタイタスと伊智香が並び立ち、そこに一人の戦士が歩み寄って来た。

「ウルトラマン？」

「貴方は……ウルトラマンジョーニアス！」

タイタスと伊智香の前に現れたのはU40最強の戦士、ウルトラマンジョーニアス。ジョーニアスはゆっくりと右手を開き、光輝く『星』をタイタスへと与えた。

「タイタス。大賢者から君に渡すよう頼まれた。受け取れ。新たる力を」

「……感謝します！ウルトラマンジョーニアス！」

光が消えると共にウルトラマンジョーニアスの姿もなくなる。

「フウン！さあ、伊智香！星を輝かせるぞ！」

「うん！」

『カモン！』

爆炎を押し返したタイタスはさっそく伊智香に授けられた力を使うよう告げる。ホルダーのタイタスのアクセサリーが星型に変化した。

「この力は……U40の英霊たちが私に力を貸してくれているのか。感じるぞ、受け継がれていく戦士の絆を」

「行こうタイタスさん！師匠のぶんもそして師匠の師匠のぶんまで魂ごと滾らせて！」

U40の英霊たちの力を感じ取るタイタス。伊智香はその力が宿るアクセサリーをタイガスパークへとかざす。

『エンシエント！』

『ソウル!』

「英霊の魂と共に!」

星形のアクセサリー。スターエンシエントアクセサリーをダブルリードした伊智香はそれを空へと空へと掲げると、スターエンシエントアクセサリーに光が集まった。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

黒かった部分が金色に輝き、両拳に『スター』をつけ、更に筋肉が增强されたタイタス。ウルトラマンタイタス・スターエンシエントへとパワーアップしたタイタスはダブルバイセップスのポーズを取るとバレットへと視線を向け直す。

「まさか力の賢者までもが強化されるとは……ここが引き際か」

ここを引き際だと判断したバレット。しかし逃がす気のないタイタスは先に動いた。

「逃がさん! エンシエントスタープラニウム!」

強化されたプラニウムバスターであるエンシエントスタープラニウムを放つタイタス。バレットはそれを躲そうとするも、避けきれずに左腕に命中した。

「ぐっ……賢者め」

左腕の傷から機械的なものをむき出しにしているバレットは逃げるように闇に消えていく。

「英霊たちよ。感謝する」

タイタスは力を貸してくれた英霊に感謝の意を示すと空へと飛び去って行った。

~~~~~

~~~~~

「どうですか雪ちゃん。調子の方は？」

「ええ。おかげ様でだいぶ調子は戻ったわ。そろそろ退院できるかもしれないってお医者さんにも言われたわ」

一週間後。雪やヤクサイの病魔に脅かされていた人々は無事回復した。

「それは良かったです」

「寝込んでいた間、変な夢を見たの。私は正義のスパイをしていて、弟子がいたの。私がスパイを引退した後、その弟子が自分の弟子を連れて来てくれた夢。．．．ね、変な夢でしょ？」

初芽はヤクサイによつて深層心理から僅かにツキカゲであった出来事を思い出したのではないかと考える。

「それは．．．面白い夢ですね」

「そうね。悪くない夢だったわ。」

悪くない夢。夢のことをそう言った雪は小さく「モモ・・」と呟いていたことに初芽はあえて触れなかった。

星の魔法が消えた午後

午前11時45分。ツキカゲは宇宙人と地球人の闇の取引現場を押さえるため、こんな明るい時間にも関わらずミッシェンをおこなっていた。

「お、お前らまさかツキカゲか」

「私達も有名になったものだねえ。まさか宇宙人さん方にも名が知れているとは」

「チツ、こうなったらお前達を叩き潰してやる。やっちまえ！レッドキング！」

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

「ムウン！」

現れると同時にパワーに優れているどくろ怪獣レッドキングの強化体、EXレッドキングの拳を筋肉で受け止めたウルトラマンタイタス。タイタスは1歩後ろに下がらされてしまうも、重たい一撃を耐え凌ぐ。

「中々のパワーだな。ならば私も全力で行こう」

『カモン！』

『エンシエント！』

『ソウル!』

「英霊たちの魂とともに!」

タイタス・スターエンシエントアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードして右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

タイタス・スターエンシエントへと強化変身を遂げたタイタスはダブルバイセツプスのポーズでEXレッドキングのパンチを受け止める。今度は後ろに下がる事もない。

「次はこちらから行こう。ハアアツ!!」

タイタスの強烈な拳がEXレッドキングへと叩き込まれる。その一撃を受けたEXレッドキングは背中から倒れ込む。

「これが英霊たちの重み。魂の拳だ!」

起き上がったEXレッドキングは両腕を地面に叩きつけて炎を走らせるフレイムロードを放ってくる。

「又ウン!!」

同じく地面に拳を叩きこんだタイタスは光のエネルギーでフレイムロードを相殺するとEXレッドキングへと視線を向ける。するとEXレッドキングは接近戦でと言わ

んばかりに全力の拳を振るってきた。

「ウルトラマッスル！」

EXレッドキングの全力の拳に、同じく全力の拳を叩き込むタイタス。その衝撃でEXレッドキングを従えていたキール星人が転倒すると、その隙をついたテレジアがキール星人を取り押さえた。

「確保だ」

「ハアアッ！」

拳のぶつけ合いはタイタスが勝利し、EXレッドキングは再び転倒をする。パワー勝負を制したタイタスはツキカゲが星人の確保を確認するとサイドチェストのポーズを取った。

「よし！ならばこちらも決めるとしよう！」

再び起き上がろうとするEXレッドキングに対し、タイタスは光球を作り出す。

「エンシエントスタープラニウム！」

タイタスはその光球を殴り飛ばすとEXレッドキングにそれは命中し、EXレッドキングが撃破される。

「あちらも勝負あつたようだな」

ツキカゲメンバーはタイタスの勝利に安堵し、これにて今回のミッションが完了と

なった。

「ミツシヨン完了。みんな、お疲れ様」

『皆さん良かったらこの後お時間ありませんか？今朝シブーストを焼いてみたので皆さんも一緒にどうかと思ひまして』

珍しく夜ではなく昼のミツシヨンを行ったツキカゲ一同。ミツシヨンを終えての帰還中、初芽はケーキを焼いたのでみんなもどうかと誘つてきた。

「……」

人々に見つかからないように散会してWasabiへと向かうツキカゲ一同。伊智香は一人「シブーストってなんだろう？」と考えながら歩いていた。

「シブーストはりんごを使ったケーキです。美味しいですよ」

「えっ？」

声をかけられたので伊智香は「あれ？声に出た？」と思いつつも振り返る。そこには一人の女性が河原に腰かけていた。

「えと……声に出ました？」

「あつ……出て、なかったかもしれないね」

じゃあ何で考えることが分かったのだらうと思う伊智香。すると橋を渡っていた少女が橋の下に帽子を落としそうになってしまった。

「ストマティストウ。エラーティスト」

女性が魔法の呪文のようなものを唱えた途端、帽子はふわりと舞い上がって女性の手元に飛んできた。

「ま、魔法？」

『そんなわけではないだろ。超能力かなんかだろ』

伊智香はそれを魔法だと判断するも、魔法を信じないタイガはその可能性を否定していた。

「はいどうぞ」

「ありがとう」

女性は帽子を少女に手渡す。

「でもよかった。まだちよつとは魔法が使えるみたい」

「魔法？」

「クラスみんなには内緒だよ」

帽子を受け取った少女が去っていくと伊智香は女性に話しかける。

「今のは……超能力ですか？」

「ステハウステ」

女性は伊智香に杖を向けて呪文を唱えるも、何も起こらない。

「や、やっぱり魔法なんだ！それは魔法の杖なんですわ！」

「魔法の杖ってなんだよ」

「それはこれのこと。私のは白川の木でできているの」

「やばっ、俺の声も聞かれてる！」

自分の声も聞かれている事に気づいたタイガは半透明な状態から消えるも、時すでに遅かった。

「君の中にもう一人いるよね。二重人格？あつ、答えなくても大丈夫。キセハウステ」

女性は再び呪文を唱えるも、何も起こらない。

「それ、魔法の呪文ですよね？」

「はあ、記憶消去も駄目か。いったいどうした私」

何やら女性は不調なようで魔法が上手く発動しないようだ。

「あなたは・・・魔法使いなんですか？」

「魔法使いでした。『でした』が正解みたい。現に今、魔法が使えてないし。でも最後にあの子を笑顔にできてよかった」

「本物の魔法使いがこんなところで何を？」

「こんなところって・・・。あそこが私の家だったんだよね」

1本の桜の木を指差した女性はため息をつく。

「魔法で作った家だったから消えちゃったの。．．．まいったなあ。私、宿無しの元・魔法使いになっちゃった。あつ、私はマリア。よろしくね」

マリアと名乗った魔法使いの女性。彼女を中心にまた1つの事件が発生していく。

~~~~~

~~~~~

『東雲です。今朝、複数の男女が樹木の枝のようなものに絡まれた状態で発見され、こちらの病院に救急搬送されました。幸い命に別状はないようですが被害者の1人は木が襲ってきたと話しているそうです』

Wasabi。カトリーナはTVを覗いていると気になるニュースが報道されていた。

「植物がねえ、また怪物か宇宙人の仕業かしら？」

「そうかもしれないね」

カトリーナと共にニュースをチェックする初芽。

『現場からお伝えします。私が立っているこの場所で発見された男女は一樣に虚脱状態にあり、何らかの薬物を摂取した可能性が．．．』

『きじゃああつ!?!』

アナウンサーが話している最中に聞こえてきた悲鳴。その悲鳴の元にカメラが向けられると一人の女性が謎の触手に襲われていた。

『今、我々の目の前で新たな被害者が出た模様です。我々の目の前で……』

その様子を伝えようとしたアナウンサーとカメラマンだったが、彼女達も謎の触手に襲われて映像が途切れた。

「やっぱり怪獣か宇宙人の仕業とみて間違いないようね」

「これ以上被害がでないように皆さんにも調査をしてもらいましょう」

~~~~~

~~~~~

「なるほど。それでまた招集がかかったんですね」

招集がかかりアナウンサー達が襲われた場所へとやってきた伊智香。それに付いてくる形でマリアも現場へとやってくる。

「タイガ君、何か心当たりはある？」

『あつたらすぐに教えてる』

「タイタスさんは？」

『済まない。情報量が乏しく特定ができない』

タイガもタイタスも心当たりはないようだ。

「フーマは・・・知らないよね」

『おい！なんだそのぞんざいさは。いや、確かに分かんけど』

フーマも分らないと告げると女性は被害にあったアナウンサーへと近づいていく。

「危険です。離れてください」

「・・・っ！」

次の瞬間、再び地面から触手が飛び出て来て、救護隊員の首元に巻きついた。

「アフエレテレストウ」

マリアは救護隊員を助けようと呪文を唱えるも、何も発動しない。それどころか魔法の杖はただの木の棒へと変わってしまう。

「危ない！」

「魔法が使えない理由が分かったよ」

モモはマリアを庇うとマリアは魔法が使えなくなった理由を理解する。

「あの变なのが世界から魔法を奪っているの」

「えと、貴女は何が起こってるか分かっているんですか？」

「うん。世界から魔法が消えているの。っていきなり言っても分からないよね。まず宇宙には・・・」

「マリアが説明しようとした瞬間、突如やってきた宇宙船から発せられた光がマリアを包み込む。」

「マリアさん!?!」

「あの変なのをみんなから切り離して!」

「マリアは宇宙船に吸い込まれ、彼女を攫った宇宙船が何処かへと飛んでいく。」

「2人はあの宇宙船を追って!ここは私達で何とかするから!」

伊智香とモモにそう告げた五恵は近くに置かれていた斧を拾い上げると、触手に振り下ろして切断する。

「お願い!」

2人は他のメンバーにこの場を任せてマリアを攫って行った宇宙船が飛んで行った場所へと走っていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

意識が覚醒したマリアは薄暗い辺りを見渡すと、奥から1人の男が近づいてきた。

「いきなりで悪いがちよいと魔法使いが必要になってな!」

「あら残念。私、今は魔法使いじゃないの」

「嘘はいかんなあ」

男はモニターにマリアが魔法を使っていたシーンを映し出す。

「やっと思つけた本物だ。きっちり働いてもらうぜ。俺はゼラン星人のオシヨロだ」

オシヨロと名乗った男はゼラン星人としての姿を一瞬だけ見せると、彼女をつれて宇宙船の外へと出る。

「働くつて……私に何をさせる気なの?」

「手配していた怪獣メダルがようやく届いた。説明書には魔法使いだけがこの怪獣を制御できると書いていたんだが、読み忘れたおかげでさつきはお試し品を制御できなくな……まあそれはいいんだ。さあ、怪獣を操ってもらうぜ」

「私は魔法使いで、怪獣使いじゃないんだけど」

「う、うん。そうだけど。説明書に書いてあるの。だから細かい事は気にするな。まあ、怪獣と面と向かいあつたら何とかなるだろ。あいさつしな」

アバレンボウルを取り出したオシヨロは怪獣メダルをセットしようとする、そうはさせまいと駆けつけた伊智香とモモがオシヨロに体当たりを仕掛ける。

「痛いっ!?!」

「動かないで」



「ふっふっふっ……」

銃を構えた2人だったが、そんなことには動じないと言わんばかりにオシヨロはニヤリと笑う。

「それでも動くぞ俺は！」

気を取り直したオシヨロはアバレンボウルに怪獣メダルをセットすると、アバレンボウルから飛んだ光が離れた場所に飛んでいく。すると光が下りた場所の大地が割れ、そこから怪獣が顔をのぞかせた。地底怪獣パゴスだ。

「あれ？俺の怪獣じゃない？」

地上へと出てきたパゴスにオシヨロは自分の呼び出した怪獣ではないと言い放つ。するとパゴスの蹴り飛ばしたビルの破片が伊智香達へと飛んできた。

「ソディアー！」

魔法で飛んできた破片を消滅させたマリア。彼女はまだ使える力が残っていた事に安堵しているとオシヨロが突つかかってくる。

「お嬢ちゃん。力は使えないと言っただけじゃなかったか？」

「今のは必死だったから」

「アンタを必死にさせれば使えるってことだな！」

オシヨロはマリアを再び攫おうとするも、モモの回し蹴りからのチョップを受けてそ

の場に倒れ込む。

「ぐふっ……お嬢ちゃん、俺は諦めねえぞ！」

1人ではモモと伊智香に敵わないと理解したオシヨロは諦めないと言い残して宇宙船へと戻っていく。

「師匠！彼女をお願いします！私はあれを追います！」

「うん！気を付けてね」

伊智香は宇宙船を追うフリをしてその場を離れるとパゴスと戦うため、タイガスパークを出現させる。

『カモン！』

「行くよタイガ君！」

『オウ！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シューア！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はスワローキックをパゴスへと蹴り込むと、

パゴスの前に着地をする。するとパゴスはタイガを視界に捉えるなり体当たりをぶつけてきた。

「ウワアツ!?!」

その体当たりの力は強烈で踏みとどまろうとするタイガだったが、それもままならず後ろへと押されていく。

「ハアッ!」

飛び上がったタイガはパゴスの上に跨ると背中をドカドカと叩くもあつさりと振り払われてしまう。

「つと……!まずはおの装甲を破るぞ!」

飛びかかり攻撃をバック転をして避けるタイガはまずは堅い装甲を何とかしようとして伊智香に魔獣のリングを使うよう指示する。

「うん!」

『カモン!』

ツイオンリングを装備した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ツイオンリング・エンゲージ』

「ドウインケルハイト!」

闇のエネルギー弾を放つタイガ。その攻撃を受けたパゴスは混乱状態となり足元が

おぼつかなくなつた。

「もう一撃！」

「うん！」

『カモン！』

伊智香は使い慣れたデンジユラスリングを装備するとそれをタイガスパークへとかざす。

『デンジユラスリング・エンゲージ！』

「ブラストサンダー！」

ブラストサンダーで怯ませようとしたタイガだったが、その硬い装甲に電撃は容易く弾かれてしまう。

「えっ!?なんて硬い装甲なんだ！」

『私が力を貸そう！』

『カモン！』

「力の賢者！タイタス！」

タイタスのアクセサリーを手に取つた伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

「ムウン！」

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香はパゴスの体当たり正面から挑みぶつかり合う。その力勝負を制したタイタスはパゴスをホールドして右拳でパゴスを殴りつける。

「そおらあ!!ハイイ！」

そしてパゴスを投げ飛ばしたタイタスは、そのままパゴスに跨るといつものマッスルポーズを決める。

「マッスル！マッスル！スーパーマッスル！」

パゴスを片手で持ち上げたタイタスは連続のチョップを叩き込む。

「パワー勝負なら負けん！」

パワーでなら負けないと宣言するタイタスにパゴスは角の先端にエネルギーを集め、そのエネルギーをドリルのように回転させ始める。

「何っ?」

パゴスの見慣れない現象に驚くタイタス。しかし次の瞬間そのエネルギーのドリルがタイタス目掛けて放たれた。

「ぬあ?」

その一撃を避けようとしたタイタスだったが、右足を掠めてしまい、タイタスは膝を

ついでにしよう。

「すまん！やられた！」

『代われ旦那！俺に考えがある！』

「じゃあお願いフーマ！」

『カモン！』

「風の覇者！フーマ！」

フーマのアクセサリーを手を取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ！』

ウルトラマンフーマへと変身した伊智香は右腕に風を纏わせるとパゴスが次の攻撃をしてくるタイミングを見計らう。

「あらよつと！」

フーマはパゴスが再びエネルギー波のドリルを飛ばしてくるタイミングを見計らって飛び上がる。

「今だ！腹を狙うぞ！伊智香！パワーアップだ！」

「うん！」

『カモン！』

伊智香はフーマの言葉に返事をする、腰に付けているフーマのアクセサリーの形状がオーブリングのようなものへと変化する。

『ウルトラマンリブット!』

『ウルトラマンスマッシュ!』

「2つの力、お借りします!」

フーマフュージョンアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードしてから右手に持ち替える。

『トルネードフュージョン!』

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

2人のウルトラマンの力を借りた強化形態。フーマストームインパクトへと変身を遂げたフーマは無数の手裏剣を繋ぎ合わせ、両腕にそれぞれ一本づつ光の剣を作り出す。

「セイヤツ!」

急降下したフーマは十字にパゴスを斬りつける。するとその一撃を受けたパゴスは涙をこぼしながらその場に倒れ、力尽きた。

「・・・ニンっ」

これにて一件落着と判断したフーマは変身を解除し、伊智香は仲間のもとへと戻って行く。

~~~~~

~~~~~

マリアを連れて五恵達と合流したモモ。すると五恵は彼女に問いかける。

「貴女は魔法使いなんですよね？」

「うん。とは言っても異なる星から来た魔法使いですけど」

「えっ魔法使いや魔女って異なる星の人なの？」

「全員が全員じゃないと思うけど・・・私はそう」

五恵の問いかけにマリアは頷く。

「どの星の生き物も多かれ少なかれ宇宙に満ちる魔法と共鳴しているの。中にはそれと強く共鳴している人もいて・・・」

「それが魔法使いってことなんだね」

「そういうこと。私も、そして貴女も、夢を見る。それ自体が魔法なの。だから本当はみんなが魔法使い。でもその力を触手が奪おうとしているの」

「つまりあの触手は・・・人々の夢を奪っていったってこと？」



命の言葉に頷いたマリアだが、怪獣が倒されたことで事件は解決へと向かい始めた。その場の皆がそう思っていたその時だった。

「っ!!」

パゴスが倒されたにも関わらず再び触手が地面から飛び出てきたのだ。

「えっ? どうしてまた触手が? 怪獣はさつきウルトラマンが倒したでしょ?」

「まさか・・・!」

テレジアは1つの可能性を考えたが、時すでに遅かった。

「あれは・・・!」

突如地面から出てきた怪獣の名は吸血怪獣ギマイラ。オシヨロが本来呼び出そうとしていた怪獣だ。長く枝分かれしている舌を触手のように伸ばしていたギマイラはその触手で人々から魔法の力を吸い上げていたのだ。

『あいつがこの事件の黒幕だったのか!』

『もう一度行くよタイガ君!』

『カモン!』

タイタスに変身していた時に怪我をした右足を押さえながらも、伊智香は再びタイガスパークを出現させ、タイガアクセサリーを手に取る。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ！』

「シユア！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香だったが、まだ体力が回復しきっていないためすぐにカラータイマーが赤く点滅し出してしまふ。

「くっ、伊智香の体力の限界か」

「ごめんねタイガ君」

「いや、いいさ。それより時間がないんだから速攻で決めるぞ」

「うん！」

「シユア!!」

「・・・何処のバカだ。ギマイラを呼び出したのは・・・」

決着を急ごうとギマイラへと駆けていくタイガ。その様子を建物の屋上から天堂が眺めていた。

## それでも宇宙は夢をみる

「シユアー！」

ギマイラへと駆けていくタイガ。しかしギマイラに掴まれたタイガは何度も叩かれて怯まされ、尻尾による攻撃を受けて転倒してしまふ。

「ウワアツ!？」

ダメージの残る右足を押さえながらも立ち上がるうとするタイガ。しかしギマイラはタイガが右足を押さえていた事を見逃さなかつた。

「ヌア!?!ぐっ．．!!」

ギマイラは右足を重点的に攻撃を仕掛けて来て、タイガは再び転倒させられてしまふ。そして倒れているタイガの右足を踏みつけて追い討ちを仕掛けてきた。

「ストリウム．．．プラスター!!」

触手による攻撃を咄嗟にストリウムプラスターで妨害したまではよかつたが、ギマイラは角にエネルギーを集束させて光線を放ってきた。

「ウワアア!？」

その光線まででは対応しきれなかつたタイガは吹き飛ばされながら変身が解かれてし

まうと、伊智香は足を押さえながらも立ち上がる。するとギマイラは地面へと潜つていき、その姿をくらませた。

~~~~~

「野生の生き物が外へと出てくる理由は2つあると言います。1つは食料を求めての行動。もう1つが外来種に自身の居住空間を荒らされて逃げ出す場合。おそらくこの怪獣さんは後者だったんでしょね」

初芽はフーマが倒したパゴスに視線を向けながらそう語る。

「この子は地底をあゝの怪獣に荒らされて逃げてきなのでしょう」

「見慣れない地上に・・・怯えていただけなのね」

マリアは命尽きたパゴスの遺体を撫でる。その様子をツキカゲメンバーは無言で見届けていた。

~~~~~

空崎の地下。オシヨロは冷水に浸かっているギマイラの前で説明書を読んでいた。

「冷水で傷を癒している間はそつとしておく。・・・だと？いつまでだよ!!んな悠長なことやっていられるかよ！」

「だよなあ。傷が癒えるまで数万年とか言われても困るしなあ」

そこに現れた霧崎に対して既に接触済みのオシヨロは「なんだ、アンタか」と反応する。

「何しに来た？」

「この星には魔法と呼ばれる宇宙の力、それを人間から切り離す。そのためにギマイラを使う。その発想は面白いと思ってるね」

「だろお！あとは夢見る力を失った無気力な人間だけになる」

「そうなればこの星を自由にすることも簡単だな」

「ああ、完璧な計画だった。だがギマイラはこんな状態だし、やっと見つけた魔法使いも魔法を失ったみたいだし」

ため息をつくオシヨロは説明書を霧崎へと見せようとするも、霧崎はそれを見ようともしない。

「宇宙に満ちる魔法を喰らうギマイラ。それを飼いならせるのは魔法の力を扱えるもの、つまり魔法使いだけ。そう書いてあるんだろ？」

「よくぞ存知のようで。だけどよお、やっと本物の魔法使いを見つけたのにウルト

ラマンのせいで台無しだ」

「フフツ・・・アツハツハツ！」

「おい、気に食わねえな。何がおかしい？」

「いや、もつと面白い計画を思いついてね。そして私ならたちどころにギマイラを復活させられる」

「アンタ！ギマイラを元に戻せるのか！」

「フフツ・・・」

ニヤリと笑った霧崎は青い仮面をつけて等身大のウルトラマントレギアへと変身するとオシヨロは動揺する。

「トレギア・・・アンタ、あのトレギアだったのかよ!？」

「さあ、選ぶのは君だ。私に協力し、すべて差し出すか。このまま自分一人で進めて、結局すべてを失うか」

「うんうんうん。それじゃあさ、どっちを選んで俺は何も手に入れられねえじゃねえかよー！」

「正解だ」

指をパチンと叩いてオシヨロに電気ショックを浴びせたトレギア。その電気ショックを浴びせられたオシヨロはその場に倒れて気を失うと、トレギアはギマイラの方へと

視線を向ける。

「元に戻す？笑わせる。それ以上のパワーをお前に与えてやる」

ギマイラの浸かる冷水にエネルギーを注ぎ込むトレギア。冷水と共にそのエネルギーをも取り込んでいくギマイラは再び地上へと触手を伸ばし出した。

~~~~~

~~~~~

「力を取り戻さないと」

「えっ?」

「このままじゃこの星の人々から夢を見る力が失われてしまうの」

「そうなたらどうなるんです?」

「夢を失った世界は必ず滅びるわ」

「それは大事だが、本当に魔法があるというのなら怪獣や宇宙人騒ぎも一瞬で解決できるのではないか?」

テレジアの言葉に口をつぐむマリアだが、すぐに言葉を返す。

「そうかもしれないけど・・・今はまず私よりあの怪獣よ!」

駆けていくマリアを追いかけていく伊智香。

「・・・テレちゃん」

「・・・スマン」

今のはデリカシーがなかったと反省するテレビア。とはいえツキカゲメンバーの全員が全員『魔法』を信じているわけではないのも事実であり、彼女の話は半信半疑といった感じだった。

~~~~~

~~~~~

「・・・！」

枯れかかっている花を見つけたマリアはそれに魔法をかける。魔法をかけられた花は一瞬だけ元気を取り戻すも、またすぐに枯れかかりに戻ってしまう。

「こんな簡単な魔法も使えないのに、魔法使いだなんて信じないですよね」

「・・・タイガ君は魔法の事、知ってた？」

『無限の宇宙には無限の神秘があるし、言葉や数値化できない力もある。それを彼女は魔法と呼んでいるって事だろ』

「宇宙には魔法が溢れているってことだね」

宇宙はたくさんの神秘や可能性にあふれている。伊智香はその可能性を考えている



と、マリアは河原の方を眺めていた。

「何を見てるんですか？」

「水の流れていくその先、かな。故郷はここから少し離れてる海の星だった。．．．私、宇宙人なんだ」

『海の星．．．地球から近い場所となると惑星サラサか！』

「ご存知なんですか？」

『生命エネルギーを食いつくす謎の存在に滅ぼされた星．．．』

「そう。魔法が使えても消せない悲劇はあるんです。誰のせいでもない悲しみも」

マリアは既になくなった故郷を思い出しながら語る。

「いつかまた故郷の海が見たい。敵わない夢ですけど．．．」

故郷の海を見る。そんな夢を見る彼女はそう自身の夢を語った途端、大地が揺れて再びギマイラが出現した。

「あれは．．．！」

現れたのはギマイラだけではない。更に2体もの怪獣まで現れたようだ。

「またあの怪獣に住み家を追い出された怪獣？」

『いや、聞いたことがある。吸血怪獣ギマイラには生物を怪獣化させる怪光線を放ち、怪獣化させた生物を意のままに操ることができると』

ギマイラの事を知っていたタイタスは2体の怪獣がギマイラによって怪獣化させられた生物の可能性を示唆する。

『随分と厄介なやつだな。怪獣から元に戻してやる方法はあるのか旦那?』

『残念ながらない。あるとしてもその怪獣が命尽きる瞬間だけだ』

「倒すしかないってことだね」

戦う覚悟を決めた伊智香はタイガスパークを出現させて変身しようとするも、タイガスパークは反応しない。

「あれ?」

「この辺り一帯から魔法の力が消えたせいかな」

「・・・それじゃ変身できないの?」

「かもな」

「かもなって・・・じゃあどうするの?」

「魔法は消えない。消えたと思った時でも、それはいつだってここにある。そう信じて。消されても奪われてもいつもここに。世界に満ちる。それが魔法なんだって!」

「光あれと望めば・・・。闇に光が生まれたのと同じか!」

半透明なタイガと顔を見合わせた伊智香は光を願いながらタイガスパークに手を当てる。

「力は消えない。そう信じれば・・・」

「それが現実になる！」

「できないことなんてない！そう信じれば全てが可能はず！」

信じれば何だつてできる。そう信じながらマリアは杖を空へと掲げようとする。すると何処からともなく光線銃の一撃が杖に命中し、マリアは転倒しそうになる。

「マリアさん!？」

「計画の途中で勝手にウロチョロしてんじゃねえよ！」

再び現れたオシヨロは多少痛めつけても仕方ないと考えているのか、光線銃をマリア目掛けて乱射してくる。

「必死になれば魔法が使えるんだよな？さあ、必死になれば！ギマイラと一緒に世界から魔法を奪い尽くせ！奪った魔法がお前のパワーになるんだ。そう説明書に書いてあったんだ。宇宙最強の魔法使いになれるんだ。悪い話じゃないだろうが!!」

「宇宙最強なんて、私は知らない！」

オシヨロに杖を向けるマリア。その先端は桃色に輝く。

「ほら！必死になれば使えるじゃんか！」

マリアは杖の先端から光を放つと、オシヨロはギリギリのところを避ける。

「おっと・・・俺の夢も現実にしろ!!」

光線銃から放たれた光線を魔法で受け流したマリアは再び杖を空へと掲げる。

「アナスターン！」

その呪文とともにタイガスパークは光を取り戻した。

「今だ！伊智香！」

「ありがとうございます。マリアさん！」

マリアにお礼を言った伊智香はいざ変身しようと駆けていく。その様子を見たオシヨロは自分が劣勢になったと悟り、その場から逃げ出していく。

「うん！行くよタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シユア！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はギマイラにスワローキックを叩き込んで着地する。

「スワローバレット！」

着地と同時にスワローバレットを放ったタイガは両脇にいる二体のタコのような怪物を、タコ怪物ダロンを怯ませる。

「ウオオオオオ!!」

2体が怯んだ隙を突いてタイガはギマイラに駆け出すと、連続パンチからのドロップキックを決め込む。

「うわっ!」

しかし2体のダロンは触手でタイガの動きを封じると、ギマイラは口を開き光線を放ってきた。

「くっ、ブルーレーザー!」

何とかブルーレーザーでダロンを怯ませて触手から逃れたタイガは咄嗟にバリアを張ってギマイラの光線をガードする。

『タコ共が邪魔だな。まずは2体を片付けるぞ!』

「うん!」

『カモン!』

「風の覇者!フーマー!」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフォーム!』

ウルトラマンフォームに変身した伊智香は複数枚の光波手裏剣を3体の怪獣目掛けて一斉に飛ばす。

「ハアアツ!」

高速回転で竜巻を巻き起こしたフォームはその回転でダロンの触手攻撃を弾くとそのまま回転の勢いの乗った回し蹴りをギマイラに叩き込む。

「今だ!」

「うん!」

『カモン!』

今がチャンスだと判断した伊智香はビクトリーレットを装着し、それをタイガスパークへとかざす。

『ビクトリーレット・コネクトオン』

「鋭星・・・光波手裏剣!」

鋭星光波手裏剣を振り上げたフォーム。その斬撃に斬られたダロンはそのまま倒れ込み、ただのタコの姿となって力尽きた。

「良かった。人じゃないんだ・・・」

人ではなかった事に一安心した伊智香は残るダロンへと視線を向け直す。

「お願いタイタスさん！」

『カモン！』

「力の賢者！タイタス！」

タイタスのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

「ムウン！」

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香はタイタス自慢の拳をギマイラへと叩き込む。

「汚名返上だ！ムウン！」

サイドチェストでダロンの触手を防いだタイタスはそのままツクルをダロンへと決め込む。

『カモン！』

ジードレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ジードレット・コネクトオン』

「レッキング・・・バスターアア!!」

レッキングバスターが炸裂するとそれが直撃したダロンは爆発して、元のタコへと戻

り力尽きる。

「タイガ君！」

『カモン！』

『ウルトラマンタイガ！』

再び伊智香はタイガへと変身すると、ギマイラは光線をタイガ目掛けて放ってくる。  
「ウワアッ!?!」

その光線を受けたタイガは吹き飛ばされて背中から倒れ込んでしまうと、ギマイラは舌の触手を伸ばしてタイガの身動きを封じて引き寄せる。そして電撃攻撃でタイガを苦しめてくる。

「ウルトラマン！貴方自身が魔法なの！それを世界に示して！自分の力を信じて！」  
ウルトラマンは魔法。そう叫んだマリアの言葉にタイガは頷く。

「私は魔法を、あの人を信じる！」

「ああ！信じきってやる！」

ギマイラの角から放たれる電撃光線。タイガはそれに対して両腕にエネルギーを集束させる。

「ハンドビーム！」

「エルソテ・シエリス！」



連続して放たれる赤い光線で電撃を相殺するタイガ。マリアはタイガに魔法をかけて支援をすると、ハンドビームの威力が強まりギマイラをなぎ倒す。

「っ!?!」

倒れたギマイラは「お前のせいだ」と言わんばかりにマリアへ目掛けて触手を伸ばすと、マリアは吹き飛ばされてしまう。

「リ・パトリデモ!」

地上へと落下しそうになる最中、マリアは魔法を唱えると空に水が：『海』が広がった。

「ヘアツ!」

タイガはスライディングをしてギリギリのところまでマリアをキャッチするとゆっくりと地上に彼女を降ろす。

「これは・・・故郷の海ですか?」

「うん。最後に見たかった景色・・・かな」

「まだ最後なんかじゃない。伊智香!行くぞ!」

「うん!私達が最後になんてさせない!」

『カモン!』

伊智香の誓いとともにタイガアクセサリーはフォトンアースアクセサリーへと変化

する。

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの力を手に！」

そしてアクセサリーをダブルリードして右手に持ち替えるとウイングが展開し、その力が解き放たれる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

タイガ・フォトンアースへと強化変身してギマイラの光線をもともせず突撃していくタイガ。タイガは連続パンチからアツパーを叩き込むと空へと飛び上がった。

「シユア！」

そしてギマイラの電撃を回転しながら避けると空の『海』の一部を凍りつかせる。

「ウルトラフリーザー！」

氷を弾丸のように飛ばすとそれはギマイラへと命中し、ギマイラは激しく怯まされる。

「これでトドメだ！」

タイガは右腕のタイガスパークにエネルギーとともに魔法の『海』の力を集束させて

いく。

「オーラム・・・ストリウム!!」

切り裂くように振り下ろされたオーラムストリウム。その一撃はギマイラを斬りさき、ギマイラは爆発四散する。

「.....」

タイガが空の『海』を見上げると、海は光の雨となって消えていく。

「なんだよ。なんなんだよお。宇宙のヤロウ！俺の夢も叶えろよお〜！」

宇宙船に入るなりオシヨロは作戦失敗のショックで気絶すると、宇宙船は宇宙へと飛び去って行った。

~~~~~

~~~~~

「まさかギマイラが倒されてしまうとは・・・」

ギマイラの体液を使ってこれまで終わりの魔獣を復活させてきた天堂は、ギマイラが倒されてしまった事にショックを受ける。

「残る終わりの魔獣はあと一体だというのに・・・もつと早く終わりの土を復活させておけば良かったな」

計画に遅れが出る事を懸念するも、隣に立つ霧崎はそんなことなど気にしていなかった。

「もうすぐ。もうすぐだタイガ。君の夢は悪夢に変わる。私の目的はもうすぐ完遂する」

~~~~~

~~~~~

「せっかく魔法使いじゃない私になれたのになあ」

「みんなと同じがいいんですか？」

五恵の問いかけにマリアは頷く。

「だって馬鹿にされたり、怖がられたりやっぱ寂しいですもん」

「それでも私は信じてますよ。世界には魔法が満ちてるって」

「先ほどは済まなかった。魔法がある世界。それも悪くないと思う」

テレジアがマリアに謝罪をすると、マリアは嬉しそうな表情となる。

「じゃあまた。遠くない未来で会いましょう。ツキカゲの皆さん」

杖を魔法の筈へと変化させたマリアはそれに跨って遠くの空へと飛んで行ってしまった。

「あれ？私達がツキカゲって教えたっけ？」

モモは自分達がツキカゲだと名乗ってないにも関わらず、心を読んだことでツキカゲだと知っていた事に驚いていた。

~~~~~

~~~~~

「いやいや、案外強敵だったな。ギマイラ」

「あの魔法の力がなかったら危なかったぜ」

状況終了後、ようやく伊智香達がケーキを食べている頃、トライスクワッドのメンバーは今回の事件を振り返っていた。

「吸血怪獣って名前が怖いもんな」

「分かる。生理的になんかあれだよな。吸血ってさ」

「ギマイラの触手が通らないほどの鋼の筋肉を持てば問題ない。たとえばこの私のようにー！」

マッスルポーズをして筋肉自慢をするタイタスにタイガとフォーマはため息をつく。

「あゝ、はいはい」

「すぐそうやって筋肉の話に持って行こうとするのは旦那の悪い癖だぜ」

「むう。す、すまん」

反省するタイタスにタイガは話を続ける。

「そもそもギマイラってのはさ。ウルトラマン80を苦しめたほどの怪獣なんだぜ。俺が苦戦するのも無理ないって」

「誰それ？お前の先輩？」

「まあ、そんなところ。地球で中学校の教師をやったこともあるんだって」

「なるほど。地球人の、それも未来を担う子供達と向き合うのにこれほど適した職はないかもしれない」

「確か理科の先生だったって言ってたっけ」

「ほおなるほど。まあ私だったら体育かな。理論に基づいた適切なトレーニング方法などを教えられる」

タイタスが体育教師というとタイガとフーマは「それっぽい」という。

「じゃあさじやあさ。俺達はまあいいとしてツキカゲのメンバーが教師になったら何だと思う？」

タイガのふとした意見にタイタスとフーマは真剣に考える。

「初芽って嬢ちゃんも理科か科学の教師っぽくなりそうなんだがな、他が難しいぜ」

「そうか？命はよくギターを弾いたりするし音楽の教師に向いてないか？」

「あく。なるほどなく。旦那はどう思う?」

「ふむ。五恵というお嬢さんは中々の筋肉の持ち主だ。体育教師などが適任ではないだろうか」

タイガとフーマはまた筋肉の話かため息をつきながらも他のメンバーの事を考える。

「ふむ、ここからが難しいな」

「だよなく。スパイって授業どころか剣術も手裏剣も授業の科目としてはないしなあ」

「何となくだけどき、楓は家庭の先生って感じがしね。命と一緒に住んで家事をほとんどやってるらしいし」

「おいおいフーマ。家庭的⇨家庭科の先生ではないのだぞ」

「まあまあタイタス。話が進まないからとりあえず楓は家庭科でいいじゃんか。残りは3人だな」

決まってるないのはモモと伊智香の師弟組とテレジアだ。

「テレジアは歴史の先生って雰囲気がないか?」

「あつ、なんか分かる気がする。あのなんかかたつ苦しそうなところとかほいよな」

「ふむ、残るは2人か」

「なんてかき、この2人は『先生』ってイメージが難しいんだよな」

「だよなあ。伊智香の師匠の嬢ちゃんは親父さんが警察官だったってイメージのせいで警察官になりそうってイメージがあるしな」

「しかしフーマ。警察にも警察学校というものがあつてだな。ここは警察学校の先生と  
いうのはどうだろうか？」

タイタスの意見にタイガとフーマは「なるほど」と納得する。

「残るは伊智香か」

「……っ」

いよいよ自分の番が来て、気になる伊智香はチラチラとタイガ達の方へと視線を向け  
る。

「伊智香はやっぱり……」

「ああ。伊智香は……」

「うむ、伊智香は……」

「先生ではないな」

「っ!!」

3人揃って伊智香は先生向きではないと意見をして、伊智香は思わずズッコケそうに  
なる。

「よく言えば可能性の塊。可能性に満ち溢れていると言えるな」



「悪くいえば先生向きじゃないってことだけどな」

好評と酷評を聞かされて伊智香は「はは・・・」と苦笑してしまふ。

「まあどんな未来が待ってるにしても・・・そんな未来が訪れるように俺達はこの地球を守ろうぜ。だって俺達は・・・」

「「トライスクワッド」」

「だからな」

地球の未来を守る。その誓いのもとタイガ達は再度この星を守るといふ決意を固めていた。

# トライスクワッドファイル

ウルトラマンタイガ

身長 50メートル

体重 4万トン

年齢 4800歳

飛行速度 マッハ10

走行速度 マッハ2.4

ジャンプ力 800メートル

腕力 6万トン

握力 4万5千トン

得意技 ストリウムブラスター

光の勇者、ウルトラマンタイガはウルトラマンNo.6であるウルトラマンタロウの息子です。バランスの取れた能力値の持ち主であり宇宙で修行をしている過程でタイタス、フーマと出会いトライスクワッドを結成しました。地球人というと中学3年〜高校1年生ほどの年齢とウルトラ戦士の中ではかなり若く少年らしいフランクかつお調子者

な性格をしているようです。光線技を得意としており、父親から教わった多彩な光線技で怪獣達と戦います。

ウルトラマンタイガ・フォトンアース

身長 50メートル

体重 5万5千トン

飛行速度 マツハ8

走行速度 マツハ1.5

ジャンプ力 600メートル

腕力 10万トン

握力 7万トン

得意技 オーラムストリウム

ウルトラマンタイガが太古から眠っていた神秘の力で強化変身した姿、それがフォトンアースです。鎧を纏っているためスピードは低下しているものの、その分攻撃力や防御力は上昇していて、この形態でも魔獣のリングの力を発動できるようです。

ウルトラマンタイタス

身長 55メートル

体重 5万トン

年齢 9000歳

飛行速度 マツハ7

走行速度 マツハ1.5

ジャンプ力 500メートル

腕力 15万トン

握力 9万6千トン

得意技 プラニウムバスター

力の賢者、ウルトラマンタイタスはタイガと同じくトライスクワッドの一員です。ウルトラマンジョーニアスの故郷惑星U40の出身で異例の若さで賢者となったようです。賢者の名の通り健全な精神の持ち主であり、礼儀正しい紳士的な性格をしています。自分の肉体に相当の自信があるようで時折ボディービルディングのようなポージングを取る癖もありますが、これは身体能力を一時的に向上させるという効力があります。

ウルトラマンタイタス・スターエンシエント

身長 55メートル

体重 5万3千トン

飛行速度 マツハ7

走行速度 マッハ1.5

ジャンプ力 500メートル

腕力 21万トン

握力 12万トン

得意技 エンシエントスタープラニウム

タイタスがウルトラマンジョーニアスからU40の英霊たちの力を授けられ魂を覚醒させた姿、それがスターエンシエントです。増強された筋肉もありスピードに変化こそないもののパワーは強化されています。

ウルトラマンフーマ

身長 49メートル

体重 2万5千トン

年齢 5000歳

飛行速度 マッハ15

走行速度 マッハ6

ジャンプ力 900メートル

腕力 4万トン

握力 2万8千トン

## 得意技 極星光波手裏劍

風の覇者、フーマはタイガ、タイタスと同じくトライスクワッドの一員です。惑星O―50、戦士の頂で力を授かったウルトラ戦士であり人間であった姿もありますが、とある理由からその姿に戻らないようにしています。性格は荒つぽいが義理堅く若者らしくどこか軽い調子の雰囲気です。喧嘩っ早いですが脳筋という訳ではなくむしろ切れ者でありトリッキーな戦術を得意としています。

ウルトラマンフーマ・ストームインパクト

身長 49メートル

体重 2万5千トン

飛行速度 マツハ21

走行速度 マツハ10

ジャンプ力 1200メートル

腕力 5万トン

握力 3万トン

得意技 真星光波手裏劍

フーマがウルトラマンリブットとウルトラマンスマッシュから力を分け与えられ、その2つの力をトルネードフュージョンさせた形態。それがストームインパクトです。

更に加速できるようになったフーマは質量を持った残像による分身をも作り出すほどの速さとなりました。

ウルトラマンスマツシユ

身長 48メートル

体重 4万8千トン

年齢 5500歳

飛行速度 マツハ6

走行速度 マツハ2

腕力 8万トン

握力 6万トン

得意技 シューティングスマツシユ

惑星ダブルスの出身であるウルトラマンスマツシユは『赤いあいつ』と有名なレッドマンを師としたウルトラ戦士です。合理的かつ利己的性格をしており一体化している雅美も当初は信頼しようとしなかったほどです。本来は光のナイフや投げ槍といった刺殺系の武器を得意としています。サポート能力も多彩で対象を透明にするウルトラステルスや対象の位置を特定するウルトラサーチャーも得意としております。

ウルトラマントレギア

身長 50メートル

体重 3万7千トン

年齢 12000歳

飛行速度 マツハ9・9

走行速度 マツハ4

ジャンプ力 850メートル

腕力 9万トン

握力 7万5千トン

得意技 トレラアルテイカイザー

青い仮面のウルトラマン、トレギアは様々な宇宙に干渉しては人の心に漬け込んで星々を滅ぼしてきた存在です。紳士的な口調で表面上は物腰柔らかな態度を取っていますが、その本質は残忍かつ冷酷です。かつてはタロウの親友であり彼もまたM78星雲出身のウルトラマンであり科学者だったようですが、善悪の真理を探求する内に闇に魅入られたとのことでした。

ウルトラマンバレット

身長 48メートル

体重 4万5千トン



年齢 製造開始から25年（完成から14年）

飛行速度 マツハ7

走行速度 マツハ2

ジャンプ力 600メートル

腕力 6万トン

握力 4万トン

得意技 ガトリウム光線

鉛色の戦士、ウルトラマンバルレットは終わりの魔獣に対抗すべく西部惑星バルレットで製造された人造ウルトラマンです。元々は純粹だったため終わりの魔獣の影響を強く受け、暴走状態になったところを一度はスマッシュによって倒されましたが、トレギアによって修復・改造されて自我を得ました。地球にたどり着いてからは天堂クララの死体に憑依して様々な職業を転々としつつ終わりの魔獣の復活を企てています。

## 鉛の銃弾 前編

「行け！終わりの土、終地震撼グラツキ！」

ギマイラの一件から数日後。最後の終わりの魔獣である終わりの土が、グランドキングにも似た魔獣の終地震撼グラツキがソラサキの隣街で破壊の限りを尽くそうとしていた。

「ギマイラが倒されて一時は復活ができなくされたと焦ったが、前もって人間に注入していたライマギエキスで偶然にも覚醒してくれて助かったな」

天堂はグラツキの復活を喜んでいると街を壊すようグラツキは前進していく。その歩いた場所はどんな建物や植物も砂と化していた。

「グラツキは全てを土に還す。さあ、どうするウルトラマンタイガ？」

「行くよタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

現場へとやってきた伊智香はタイガアクセサリーを手に取り、それを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

タイガへと変身した伊智香はグラツキの前へと立つ。

「グラツキはグランドキング並の装甲を持つ魔獣だ。生半可な攻撃は通用しないぞタイガ！」

「分かってるって。父さん達ウルトラ6兄弟が苦戦させられたグランドキングの亜種だ。全力で行くっての！伊智香！魔獣の力だ！」

「うん！」

『カモン！』

終わりの風。ヤクサイの力が宿るリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

「ヤクサイリング・エンゲージ」

「ハアッ！」

ヤクサイの風の力を解き放つと、一筋の風がグラツキに浴びせられる。その風を浴びたグラツキは関節部が軋んで動きが鈍り出した。

「病は気からだ！気を付けな！」

『タイガ！パワーにはパワー。私が行こう』

「待ってくれタイタス。もう少し俺で行かせてくれ」

『何か策があるのか?』

「父さんが苦戦した相手だ。俺の力を試すチャンスなんだ!ハンドビーム!」

タイガは自分の力を試すチャンスだと言ってタイタスの交代を拒否するとハンドビームでグラツキを牽制する。

「ハアアツ!デリヤアツ!」

連続パンチからのドロップキックを叩き込むも、グラツキはまるで動じない。

「くっ、硬い。伊智香!もつと魔獣の力だ!」

「う、うん!」

『カモン!』

「あれ?」

伊智香は装着したエンジョーリングにいつもと違うような違和感を感じながらもそのリングをタイガスパークへとかざした。

『エンジョーリング・エンゲージ』

「デリヤアアア!」

タイガはエンジョーの熱線でグラツキを攻撃するも傷一つつかない。

「伊智香!パワーアップだ!」

「うん！」

『カモン！』

タイガアクセスサリーがフォトンアースアクセスサリーへと変化すると、伊智香はそれを手取る。

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの力を手に！」

フォトンアースアクセスサリーを右手に持ち替えるとウイングが展開し、力が解放される。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

「ハアアアツ!!」

フォトンアースへと強化変身したタイガは連続パンチを叩き込むもグラツキはまるで怯む様子もない。

「っ！なんて硬さだ！」

タイガはフォトンアースでもビクともしないグラツキの装甲に驚いていると、グラツキは胸部のクリスタルから強烈な光線を放ってきた。

「ウワツ!?」

タイガは光線を回避すると、その一撃はビルに風穴を開けてしまった。

「なんて貫通力・・・」

「当たったらひとたまりもないな」

光線を警戒しつつも何度も攻撃を繰り返すタイガ。しかしタイガの攻撃ではグラツキは怯む様子もない。

「シユア!」

再び光線を放たれそうになった瞬間、避けられないと判断したタイガはバリアでそれをガードしようとした。

「オオオオ!!」

光線が放たれタイガはそれをバリアで受け止める。それは偶然にもグラツキの光線を反射して、グラツキの角へと命中した。

「これだよタイガ君!」

「ああ!見つけたぞグラツキの攻略法!」

グラツキの攻略法に気づいたタイガはそのチャンスを誘うかのように距離を取る。するとグラツキは再度光線を放ってくる。

「シユア!」

バリアを張ったタイガはそのバリアの角度を調整してグラツキのクリスタル部分へと跳ね返す。自身の光線で装甲に穴が空いたグラツキに対してチャンスと判断したタイガはエネルギーを集束させる。

「オーラムストリウム!!」

タイガのオーラムストリウムがグラツキの穴へと命中すると、グラツキは内側から爆発する。すると爆炎から1つの光が飛んできてそれは指輪として伊智香の手に収まった。

「これで7個目の指輪・・・だね」

「やった! グランドキングを倒せた! 俺の力で倒せたんだ!」

指輪に不穏なものを感じ取った伊智香だったが父親の苦戦した相手を自分も倒せたと喜ぶタイガの前では何も言えなかった。

~~~~~

~~~~~

「これで終わりの魔獣7体すべてが倒されたか。ここまでは計画通りなのだろう。霧崎さん」

戦いを最後まで見ていた天堂は同じく戦いを近くで見ていた霧崎の方へと視線を移

す。

「ああ、計画通りタイガは7つ全ての指輪を集めてくれた。後はその時がくるのを待つだけだ」

「そうか・・・」

「ここまで全てが計画通りに進んでいる霧崎に対して、天堂は面白くなさそうな反応をする。」

「おやおや、どうしたんですか天堂さあん。面白くなさそうな顔をして」

「いや何。このまま計画通りに行ってしまう前にもう一戦タイガに勝負しておこうとおもってね」

「・・・まあせいぜい頑張ってください」

霧崎は止めなかった。既に3人とも強化形態を得たトライスクワッドに単身で挑んだところで勝ち目はないのを知っているにも関わらずだ。

「バレットは元々終わりの魔獣を倒すために作られた存在。意思を与え、それを復活させる存在に変えたところで所詮は機械人形か」

~~~~~

~~~~~



「『宇宙人による犯罪被害の実態調査』……なんですかこれ？」

最近風の部隊に入った碓氷雅美はレポートを発見し、しづき達に尋ねる。

「ああ。それね。普通の保険って人的保険や災害に対する保険が対象でしょ？」

でも最近宇宙人による犯罪被害が増加傾向にあったり怪獣による損害も増加してるからそれに対する保険を国の方で立ち上げるんだってさ」

「それでうちに実態調査が回って来たってわけ」

「それで……何か調査対象になりそうな事例はあるんですか」

雅美は丁度いい事例か何かあるのかと尋ねると、しづきとは当然と言わんばかりにもう一枚の案件を手取る。

「そんなの分かりやすいのがあるだろ」

「そうじゃな」

ゆらに同意したしづきはその案件を雅美へと見せる。

「ヴィラン・ギルド？」

「そういえばまだ雅美はヴィラン・ギルドの関係する事件はまだだったね。ついこの間もあつたんだよ。あの時は頭でっかちで身体のところろが細い変なのが動物の遺伝子を弄っていてね」

「確かチブル星人とかいってましたよね」

チブル星人マブゼ。その名前を憶えていた雅美はついつい口走ってしまふ。

「そうそう。チブル星人！……ってあれ？なんで知ってるの？あの場に雅美はいなかったよね」

「あつ……そ、そうでしたね」

「もしや雅美。あの場でしづき達を付けていたのはお主なのではなからうな？」

「……………」

素直に「はい。そうです」と言えない雅美はダンマリを決め込む。それがしづき達にとつての「YES」だった。

「そうか。あの時の気配はお主じゃったか。しかしどうやって透明になっておったんじゃ？」

「それは……私の中にいるスマツシユの技で周りに見えなくしていたんです」

雅美は正直にスマツシユがやってくれた事を皆に話す。元々『ウルトラマンだから』という理由でスカウトされた雅美はメンバーに自分がウルトラマンと一体化している事を知られている。なので正直にスマツシユがやってくれたと言えたのだ。

「まったくお主は……その頃はまだ風でもない一般人じゃったろうに無茶をしおつて」「ウルトラマンと一体化してる人を一般人って呼ぶのはちよつと難しい気がするけどね」

「まあ過ぎた事じゃし今はこれ以上は問い詰めんでおこう。それよりもヴィランギルドの件じゃ。ヴィラン・ギルドは簡単に言えば宇宙人達の犯罪集団じゃな。闇の商人や怪獣を用意する者、様々おる」

しぶきは雅美にヴィラン・ギルドの事を簡潔に説明すると今回のミッション資料を全員に見せる。

「そして今回のミッションなのじゃが・・・ツキカゲと合流してから説明するかの」  
「ぎやあああ!？」

風の部隊が外へと出た途端、何処からともなく悲鳴が聞こえた。彼女達が悲鳴が聞こえた場所へと向かうと、1人の女性が黒いマスクをつけた2人の男に襲われている姿があった。

「何をしてるんだてめえら!」

真っ先に男の1人を殴りつけるゆら。するとゆらのパンチで倒れ込んだ男は宇宙人としての顔へと変化した。

「この人達、宇宙人だ!」

葉栖美はすぐさま2人共宇宙人だと判断して回し蹴りでもう1人もダウンさせる。

「くそ、こいつ等強いぞ!」

「一旦引くぞ!」

風の部隊に勝てないと判断した宇宙人達は引いていく。

「大丈夫ですか？」

「は、はい。ありがとうございます」

「いったい何で宇宙人に狙われていたんですか？」

「それが・・・心当たりがなくて」

心当たりがない。襲われていた女性はそう言ったが、雅美以外の風の部隊は宇宙人達がバググをひつたくろうとしていた事を見抜いていた。

~~~~~

~~~~~

「ふっふっふっ、もうすぐ。もうすぐですよ」

とある工場。チブル星人マブゼはまたもベリアル因子を使い、怪獣を生み出そうとしていた。

「チブル。今回はどの怪獣とどの怪獣を合わせようとしてるんだよ」

「今回は初挑戦ということでオーソドックスな『怪獣』のバーニング・ベムストラでしたが、今回は少し冒険をしてみました。今回はこの2体の遺伝子です！」

ホログラムは2体の怪獣を写す。1体は白い体に黒模様が特徴的な怪獣エレキング。

もう一体はウルトラマンエースを倒すために作り出されたロボットのエースキラーだ。

「え、エースキラー？エースキラーってロボットでしょ？遺伝子ってあるの？」

「チブル的天才である私に不可能はありません！」

「???.まあ、いつか！」

よく分からなかったザラブ星人は考えるのをやめた。

「えっ？いいのかわ？」

「良い訳ないと思うが. . .俺達にもよく分からないしそれでいいんじゃないか？」

スラン星人とゴドラ星人もよく分からなかったようで、深くは考えない。

「とにかくです。さあ、2体目の培養合成獣の誕生ですよ！はい、スランさん！スイッチ

をー！」

「えっ？俺？はいはい. . .ポチっとな」

スラン星人がスイッチを押すと怪獣の合成が始まる。

「さあ後は仕上がるのを待つだけですな」

~~~~~

~~~~~

チブル星人マブゼ達が新たな培養合成獣を作り出している頃、雅美達は先ほど宇宙人

に襲われていた女性から話を聞いていた。女性の名は行方麻衣子。狙いは彼女のバッグの中にある何かだと気づいていた凧の部隊は犯人を捕まえるまで彼女の護衛をすることにしていた。

「ハアアツ！」

「危ない！」

槍のような武器で襲い掛かって来た男の攻撃を飛粋はワイヤーで縛り付けて阻むとゆらが男を殴りつける。その攻撃を受けた男は本当の姿に戻ると、先ほどの宇宙人の一人だった。

「ここは私達に任せてみんなはその人を！」

「任せた！」

この場を飛粋とゆらに任せて凧の部隊は麻衣子を連れてその場を離れようとする。するともう一人の宇宙人が銃のような武器を持って現れた。

「聖獣の守り人よ。お前のタリスマンを渡せ」

「タリスマン？ いったい何の事？」

本当に何の事か知らない麻衣子。そんな事など構わない言わんばかりにと宇宙人はタリスマンを奪おうと襲い掛かって来た。

「何の事かは知らないけど……」

「奪わせんわ!」

しぶきと葉栖美はタリスマンを奪わせまいとキール星人と戦闘を始める。するとそこに偶然通りかかったザラブ星人がその戦いに気づいた。

「あつ!あそこで同業者が何か争ってるよ!」

「構うな。あれはあいつ等の仕事だ。俺達は俺達の仕事をすればいいのさ」

ザラブ星人の隣を歩くスラン星人はそんな事は気にしなくていいと自分達に任せられた仕事を全うしようとする。

「怪しい人達!」

「えっ!?怪しくないよ!通りすがりのヴィラン・ギルドだよ!」

「おい、バカ!」

自らヴィラン・ギルドと名乗ってしまったザラブ星人の頭を叩いたスラン星人。そしてそれを聞き逃さなかった雅美は2人を取り押さえようと向かっていく。

「や、やばいよ!」

「ああ、お前のアホのせいだな!でもまあ俺達にはこれがある!」

何処からともなくアバレンボウルを取り出したスラン星人は怪獣メダルをそれへとセツトする。

「おつ!さっそくチブルが作ったのを使うんだねスラン!」

「当然だ。こういう状況で使うもんだろ」

『サンダーキラー!!』

アバレンボウルを起動したスラン星人はチブル星人マブゼが創り出したエレキングとエースキラーの培養合成獣サンダーキラーが出現した。

「か、怪獣!?!」

『行きましよう雅美さん。だいぶ回復しつつある今なら少しは戦えるはずですよ』

「分かった!」

スマツシユスパークを取り出した雅美はそれに右手をかざす。

「スマツシユ!!」

「サアアツ!!」

ウルトラマンスマツシユへと変身した雅美。風の部隊は「あれが雅美の変身したウルトラマン」とそれぞれ反応しているとサンダーキラーはスマツシユへ向けて電撃を放ってきた。

「ジュア! スマツシユファイ!」

バック転で電撃を避けたスマツシユは光のナイフを作り出しながら構える。

「あいつ、ウルトラマンだったのか。．．．まあいい。逃げるなら今のうちだ!」

「じゃあね〜!」



スラン星人は今のうちにと判断してザラブ星人とともに逃げていく。

「あいつ等、余計な事をしやがって！」

同じヴィラン・ギルドと言っても所属が違うため、何も知らなかったキール星人達は慌てながらも光線銃の引き金を引くと、その光線はしづき達ではなく麻衣子の方へと飛んで行つた。

「きゃあ!？」

幸いその光線は麻衣子には当たらなかつたが、転倒してしまつた麻衣子はバッグの中から香水瓶のようなものを落としてしまふ。

「やっぱり持つてるじゃないか！タリスマン！」

「これがタリスマン？」

香水瓶がタリスマンだとは知らなかつた麻衣子を脅すようにキール星人は光線銃を向けようとする。

「させん！」

しづきと葉栖美はそうはさせまいとキール星人に向かつていこうとするも、キール星人は半ばヤケ気味に光線銃を乱射して2人は踏み込めなくされてしまふ。

「このっ！お前らがいなければもつと計画は順調だったはずなのに！」

計画が順調に進まなかつた事をしづき達に八つ当たりするように光線銃を乱射する

キール星人。するとその一発が麻衣子の持つていた香水瓶に当たってしまった。

「しまった!？」

香水瓶から溢れ出した光は近くの噴水の水を吸い上げてタツノオトシゴのような顔をした怪獣へと姿を変える。水異怪獣マジヤツパだ。

「2体目!？」

「あれの中身って怪獣だったの?」

「し、知りませんでした。お婆ちゃんから肌身離さず持つてる。決して開けてはいけな  
いって言われてただけで・・・」

サンダーキラーと戦闘中だったスマッシュはマジヤツパの登場に驚いていると騒ぎを聞きつけてやってきた伊智香がタイガスパークを出現させた。

「な、なんか2体もいるよ」

『俺のスピードでかく乱してやる!』

「分かった。行こうフーマ!」

『カモン!』

「風の覇者!フーマ!」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフーマー!』

ウルトラマンフーマへと変身した伊智香は光波手裏剣を飛ばしてマジヤツパの注意を惹きつける。するとスマッシュはサンダーキラーに光のナイフを突き刺して怯ませた。

「助かりました。ウルトラマンフーマー」

「フーマでいいぜ。ところでお前はどっちと戦う?」

背中合わせに話すフーマはどちらと戦うかをスマッシュへと尋ねる。

「乗りかかった船です。こちらの方は僕に任せてください」

スマッシュは乗りかかった船だと言ってサンダーキラーと戦う事を決めるとフーマはマジヤツパの方へと向き直す。

「OK。そつちは任せませ」

サンダーキラーをスマッシュに任せたフーマは高速で移動しながら光波手裏剣を連続してマジヤツパへと飛ばす。

「おらおら、どうした?俺はこつちだぜ」

高速移動をしながらマジヤツパを挑発するフーマ。そちらに気を取られるマジヤツパは少しずつサンダーキラーとの距離が離れていく。

「スマッシュアロー!」

光の槍を作り出したスマツシユはそれをサンダーキラーへと投げつけるも、その槍はサンダーキラーの鋭い爪に切り裂かれてしまう。

「こいつ。．．強い。ならこれならどうだ！」

光のナイフを作り出したスマツシユはそれでサンダーキラーへと斬り込もうとする  
と、サンダーキラーは周囲に電撃を見境なく放つ。その一発はマジヤツパへと直撃し、それに怒ったマジヤツパがサンダーキラーへと接近し、せつかくフーマが2体の距離を離そうとしていたのが無駄になってしまった。

「えっ？マジかよ」

「す、すみません」

「面倒だな。スマツシユ！こうなりや同時攻撃だ！2体まとめて一気にぶった切つてやる！」

「はい！」

『カモン！』

ギンガレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

「七星光波手裏剣！」

「シューティングスマツシユ！」

2人のウルトラマンの必殺技が放たれると、その瞬間マジヤツパは保護色で透明とな

り攻撃を避け、2人の必殺技によってサンダーキラーのみが倒される結果となる。  
「やったぜ！」

「いえ。あの鼻の長いほうは透明になって攻撃を回避しました。今も・・・うわっ!？」  
背後からマジヤツパの攻撃を受けたスマツシユはその場へと倒れ込む。

「いったい何処に?ぐおっ・・・!？」

同じくフーマも透明なマジヤツパの攻撃を受けてしまうと、マジヤツパは保護色を解いて有毒ガスによる攻撃をフーマへと浴びせてきた。

「なんなのこれ?甘い臭い?」

「これは・・・身体が痺れる・・・っ」

体が痺れて動けなくなったフーマは再び透明になったマジヤツパから攻撃を受け続ける。

「くっ、ウルトラサーチャー！」

スマツシユは相手の居場所を特定するウルトラサーチャーを発動すると、マジヤツパの居場所を見切る。

「フーマ!後ろです！」

「オオラ!!」

後ろだと言われたフーマは咄嗟に背後に蹴りを入れると本当にいたマジヤツパの保

護色が解かれてその場に転倒する。

「サンキューー!!」

お礼を言われたスマツシユはそこでエネルギーが尽きて変身が解かれてしまう。

『フーマ。君も下がれ。後は私が行こう』

「悪い。任せるわ」

『カモン!!』

「力の賢者! タイタス!」

タイタスのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス!』

「ムウン!」

マジヤツパを掴みあげたタイタスはそのままジャイアントスイングで投げ飛ばす。すると伊智香の体力も限界が近づいてきたようでカラータイマーが赤く点滅し出す。

「これ以上時間はかけない。伊智香! 全力で行くぞ!」

「うん!」

『カモン!』

『エンシエント!』

『ソウル!』

「英霊たちの魂とともに!」

タイタス・スターエンシエントアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードして右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

タイタス・スターエンシエントへと強化変身を遂げたタイタスは渾身の拳をマジヤツパへと叩き込むとマジヤツパは毒ガスを噴射してくる。

「フンっ!」

それを拳圧で吹き飛ばしたタイタスはアツパーでマジヤツパを空へと飛ばすと光球を作り出す。

「決めるぞ。エンシエントスタープラニウム!!」

エンシエントスタープラニウムが炸裂し、それが直撃したマジヤツパが倒されるとタイタスは空へと飛び去って行く。

「ふう、結局2体ともトライスクワッドの力を借りちゃったね」

『仕方ありません。さあ雅美さん。皆さんの元に戻りましょう』

「そうだね・・・」

雅美はしづき達のもとへと戻っていく。しづき達は既に宇宙人達を確保した後だった。

「おつかれじやったな」

「まあ、はい。皆さんもお疲れ様です。ところで麻衣子さんは？」

「戦いに巻き込むわけにはいかんからのう。不動が避難させておる」

「そうですか。良かった」

ひとまず無事に事件が解決して一安心していると一人の足音が近づいてきた。

「お疲れの様子だな。凧の部隊」

「貴様は・・・バレット!」

凧の部隊の前に現れたのは銃を片手に持った天堂だった。

「バレット?」

『まさかウルトラマンバレット!』

スマッシュは自分の前に再びバレットが現れた事に驚くと、天堂は雅美に銃を向けてくる。

「まさかお前も復活していたとはなあ。ウルトラマンスマッシュ」

『目的は・・・僕への復讐ですか?』

「復讐か。復讐などには興味はないがウルトラマンタイガやツキカゲと遊ぶのに邪魔な



お前には消えて貰いたいとは思っているな」

そう言った天堂は銃の引き金を引くも、その銃弾は雅美には当たらなかった。

「・・・っ！」

しづきが庇ったからだ。

「しづきさん！」

「だ、大丈夫か？」

「私なんかよりもしづきさんが・・・！」

「よか・・・った」

意識を失うしづき。激怒した雅美は自身の銃を天堂へと向ける。

「貴女だけは許さない！」

「復讐心。いいぞ！お前は中々いい表情をしてくれるじゃないか！地球には百地とタイガ以外に面白そうなのはいないと思っていたがもう1人いたな。いいだろう。お前も遊び相手にしてやる」

「スマッシュ!!」

互いに等身大のスマッシュとバレットへと変身する雅美と天堂。2人のウルトラマンが今再び戦い出した。

## 鉛の銃弾 後編

怒り任せに変身した雅美ことウルトラマンスマッシュとそれをあざ笑うように変身したウルトラマンバレット。2人の拳と拳がぶつかり合う。

「ハアアア!!」

「フンっ・・・」

主導権が雅美となっていて冷静さを欠いているスマッシュの動きは完全にバレットに見切られ、スマッシュの攻撃は軽く受け流されてしまう。

「このっ!」

光の弓を作り出したスマッシュはスマッシュアローを矢としてバレットへと放つも、バレットはガトリウム光線でそれを撃ち落とす。

「落ち着いてください雅美さん!冷静になってください!」

「でも・・・しづきさんが!」

「しづきさんは無事です。今すぐウルトラヒーリングをすれば大丈夫です」

スマッシュにそう言われた雅美は我に返り、すぐさましづきのもとへと駆け寄ろうとするとバレットはその間に割って入る。

「させると思うか？」

「させてもらいますよ！」

スマツシユは必殺光線であるシューティングスマツシユを放つと、それを避けなかったバレットは持ち前の防御力でそれを難なく耐え凌ぐ。

「やはり僕の光線ではバレットの装甲を貫けないか」

「どうした？再びあの技を使えばいいじゃないか。私を一度は倒したあの技を」

バレットは一度は自分を倒した必殺の一撃を使えばいいと挑発してくる。しかしそれはかの『ウルトラダイナマイト』同様に命を削りかねない大技。現にスマツシユはその技を発動した事で10年以上行動不能にまでなっていた。

「スマツシユ。あの技ってというのは？」

「奥の手です。今は・・・使うことはできません」

もし雅美と一体化している状態で使えば最悪取り返しのでつかない事となるので使用できないとスマツシユは考えていた。

「はあ・・・全力でかかってこない相手など戦つてもつまらん」

ため息をついたバレットは「もう終わりにしてやろう」と光線技を撃つ構えをすると、そこに霧崎が現れた。

「まったく好き勝手してくれているな」

霧崎は電撃をバレットへと放つと、電撃を受けたバレットは天堂の姿へと戻って霧崎を睨みつけた。

「何の真似だ？」

「それはこつちの台詞だ。お前が挑もうとしていたのはタイガだろう。何を勝手に目標を変更している」

「そんなことは私の勝手だろう。・・・まあいい。今回はここまでにしてやろう」

「逃がすと思ってるの！」

「冷静になってください雅美さん。今優先するのはバレットではありません」

この場は引く事にした天堂。それを追いかけようとする雅美だったが、スマッシュ自身身がそれを静止させる。

「・・・そうだね。今はまずしぶきさんの方だったよ」

我に返った雅美はすぐさましぶきのもとへと駆け寄ってウルトラヒーリングでしぶきを治療する。

「申し訳ありませんしぶきさん。私のせいで」

「しぶきの事は気にするな。それよりも奴じや」

ウルトラヒーリングを受けているしぶきは自分の事よりも未だにいる霧崎に気をつけるよう告げてくる。

「貴方は何者ですか？」

「何者か・・・と聞かれると『悪魔』と答えるべきかな」

スマッシュの問いに悪魔と答えた霧崎は指をパチンと鳴らすと何処からともなくチョコクレープを出現させた。

「甘いなあウルトラマンスマッシュ。お前が一体化してる人間に気を遣いさえしなければ、今度こそバレットを完全に倒せたかもしれないものを・・・」

「人間の命を守ってこそそのウルトラマンです」

「お前もそんなありきたりな答えをするんだなあ。赤いあいつと畏れられたレッドマンから何を教わった？ 敵は徹底的に倒せと教わったんじゃないのか？」

「そうですね。ですが教わったことをどのように実行するかは僕の勝手です」

しぶきの治療を終えたスマッシュは霧崎に対して光のナイフを構える。

「おお、怖い怖い。さて、今回は軽い挨拶のつもりだったのでこれにて失敬するよ」

クレープを食べながら歩き去っていく霧崎。凧の部隊は怪しい人物だとは思いながらも、今のところ何かをしたわけではないので警戒こそしつつも追跡はしなかった。

「何者なのじゃ。あやつは？」

「分かりません。分かりませんが・・・もしかしたら・・・いえ、何でもありません」

スマッシュは霧崎がトレギアの可能性も考えたが、確かな情報ではない上に、仮にト

レギアだったとして凧の部隊で挑んで勝てる相手ではないので今はまだ話さない事にした。

「今はあの男性よりもバレットの方です。今のバレットは何をしでかすか分からない危うさを感じられました」

そう言ったスマッシュは変身を解いて雅美の姿へと戻る。

「確かに……。なんか前にあった時より攻撃的になつてるといふか、ヤバくなつてたよね」「何ていうかもう後がないって感じで焦つてるみたいにも見えたかな」

葉栖美と飛粋はバレットがまるで後がなくて攻撃的になつていたのでとは意見すると、スマッシュはもしやと勘づく。

『既に復活した7体の終わりの魔獣は全てトライスクワッドの皆さんが倒しました。おそらくその事で焦りを感じているバレットはこのような行動を取ったのかもしれない』

「そっか。魔獣達はあつちのウルトラマンが倒したもんね」

『バレットの目的は分かりかねますが、少なからず計画が破綻したため行動を起こしたと考えるべきでしょう』

実際のところはトレギアこと霧崎からすれば魔獣達が全て倒されるのも含めて計画のうちなのだが、それがあまり好ましくないバレットは自ら動き出して行動に出てき

た。しかしながらバレットの計画は事実破綻しているので遠く間違っているわけではない。

「まずはあの者を探すぞ。話はそこからじゃ」

立ち上がったしづきは天堂を探すよう指示をしてくる。

「しづきち、まだ動かない方が・・・」

「流石ウルトラマンの技じゃ。もう動いても問題ない」

皆はそれを強がりだと見抜いていたがあえて何も言わなかった。

「とはいえ1人2人で挑んで勝てる相手ではない。ツキカゲにも協力を要請せねばあるまいな」

しづきはツキカゲに協力を要請し、凧の部隊は天堂ことウルトラマンバレットの探索を始めた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「まさかそつちから来るだなんてね。バレット」

天堂を見つけたのはモモだった。一度風の部隊と合流しようとしていた矢先、天堂の方からモモへとやってきたのだ。

「でも探す手間が省けたよ。今度こそ決着をつける」

刀を構えるモモに対して天堂はバレットトリガーの銃口を向ける。

「以前は悔った結果、お前達に膝をつかされ負けを認めたが……今回はどちらかの命尽きるまで戦おうじゃないか」

今回は膝をつく程度では負けを認めないと言う天堂。そこに急ぎ駆けつけてきた雅美がやってきた。

「バレット!」

「またお前か。お前にはもう用はないのだがな」

「貴女に用がなくてもこっちはあるの。行くよスマッシュ」

『はい!』

「……いいだろう。百地の前にお前ともう一度遊んでやろう」

自身の頭部を撃ち抜き巨大な姿のバレットへと変身する天堂。それに対して雅美もスマッシュスパークを取り出す。

「ツキカゲの人ですね。……この事はなるべく他言無用でお願いします。スマッシュ!」
モモに他言無用と頼んだ雅美はウルトラマンスマッシュへと変身する。

「あの娘も・・・ウルトラマン・・・！」

雅美がスマツシユに変身した事にモモは驚くも、ここには戦いに巻き込まれるとすぐさまこの場から距離を取った。

「お前との遊びももう飽きた。これでお前とは終わりにしてやろう」

「望むところです。スマツシユファイ！」

同時に動き出したスマツシユとバレットは拳と拳をぶつけ合う。そのパワー勝負はバレットが制し、スマツシユは後退してしまう。

「スマツシユナイフ！」

「スパークルバレット！」

光のナイフを作り出したスマツシユはそのナイフでバレットへと斬りかかる。するとバレットは光の刃を連続して射出してスマツシユを寄せ付けられないようにしてきた。

「くっ、スマツシユアロー！」

今度は光の槍を作り出すスマツシユ。スマツシユアローを高速で回転させてスパークルバレットの刃を弾く。

「ほう、そうきたか」

スマツシユアローを防御手段として使ってきたことを素直に賞賛すると、スマツシユはそのまま距離を詰めてスマツシユアローで突きかかる。

「おっと・・・!」

それを受け流したバレットは至近距離からの光弾でスマツシユを吹き飛ばそうとすると、スマツシユは光弾が撃たれる前に距離を取った。

「何度貴方と戦っていると思ってるんですか？ 貴方の考えは読めています」
「読めていたとしても対処できるかどうかは別の話だろう？」

バレットはガトリウム光線を放つと、スマツシユは空を飛んでそれを回避する。

「ハアアア!!」

空中で静止したスマツシユは光の弓を作り出すとスマツシユアローを矢として放つ。

「そんなもの・・・ッ!」

スマツシユアローの矢を避けたバレットだったが、その矢はバレットを追尾するように旋回する。

「何っ・・・!?!」

自身を追ってくる矢から逃れようとするバレットだったが、その矢を避けきれずに直撃する。

「ハア・・・ハア・・・どうです?」

カラータイマーが赤く点滅し始めたスマツシユは地上へと降り立つ。すると爆炎からは肩の装甲にわずかながらヒビの入ったバレットが出てきた。

「中々やるようになったが・・・残念だったな。お前の攻撃では私を倒すことはできん」

『おいおい。お前達、主役を忘れてないか?』

タイガの声とともに駆けつけてきた伊智香はタイガスパークを出現させる。

「行くよタイガ君!」

『カモン!』

「光の勇者!タイガ!」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ!』

「シユア!」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はバレットにスワローキックを叩き込む。

「来たかタイガ!」

「ああ、お望み通り来てやったぜ。前にゼロが言っていたぜ。『主役は遅れてくるものだ』ってな」

着地をしながらもタイガは誘いに乗ってやったことを告げると、歓迎のあいさつと言わんばかりにバレットはガトリウム光線を放ってくる。

「つとー！」

その攻撃をバツク転で回避したタイガ。するとバレットはタイガへと接近して拳を振るってくる。

「遅い！」

その拳を避けたタイガは脇腹にキックを決め込むも、硬いバレットは怯まない。

「相変わらず硬いな！」

「そう思うのなら本気でかかってくるのだな」

「言ったな！後悔するなよ！」

『カモン！』

『アース！』

『シャイン！』

「輝きの力を手に！」

タイガアクセサリーが変化したタイガフォトンアースアクセサリーを手に取った伊智香はそれダブルリードして、右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

光の鎧を身に纏ってタイガ・フォトンアースへと強化変身したタイガはその拳を叩き

込むと、流石のバレットも後退する。

「ははっ！流石だタイガ。やはりお前は面白い」

「こっちはドン引きなんだよ！ハアアアアッ!!」

「ハハハっ！」

殴られて笑うバレットにタイガは引きながらも、最接近して連続パンチを叩き込む。

しかしそれでもバレットは笑う。

「ああ、もう！気持ち悪い！こうなりや魔獣の指輪だ！伊智香！」

「えっ、でもあれ・・・」

「いいから早く使え！」

伊智香はグラツキとの戦闘で指輪に違和感を感じたので使うのを躊躇うも、タイガは使うように言ってくる。

「・・・っ！」

『カモン!』

終わりの土、終地震撼グラツキの力が宿るグラツキリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『グラツキリング・エンゲージ』

「ダイヤア！」

「遅いー！」

貫通力のあるグラツキの光線を放ったタイガだったが、光線の弱点の1つである『溜め』を知っていたバレットはその光線を避けてガトリウム光線を放ってくる。

「うぐつ!？」

ガトリウム光線が直撃したタイガだが、フォトンアースの鎧の防御力を生かしてガトリウム光線の弾幕を突き抜けていく。

「ハアアアア! シュアア！」

「ぐつ、ダアア!!」

タイガは弾幕を突き抜けてバレットを殴りつける。するとその一撃で怯んだバレットは反撃のキックをタイガへと打ち込んできた。

「ぬあ!？」

互いに硬い装甲を誇るタイガとバレット。その勝負は技の威力が物を言う。

「スワローバレット！」

「ガトリウム光線！」

技の威力はタイガの方が上回っており、スワローバレットはすべてのガトリウム光線を撃ち落としつつもバレットへと命中する。

「ぐあ．．!？」

「もう諦めろバレット！お前じゃ俺に勝てない」

膝をついたバレットにタイガは自分にはもう勝てないと告げるも、それでもバレットは立ち上がる。

「勝てる勝てないの問題は些細なことだ。重要なのは私が楽しめるかどうかだ。機械人形である私は誰かに『遊ばれる』存在ではなく自ら『遊ぶ』存在でありたいのだよ」

自らを機械人形と例えたバレットは遊ばれる存在ではなく遊ぶ存在でありたいとタイガに告げるも、その言葉の意味を理解出来なかったタイガは首をかしげる。

「よく分からないけど……これ以上お前の遊びには付き合う気はない！今日ここで決着をつけてやる！」

「いいだろう。かかってくるがいいウルトラマンタイガ！」

互いに必殺光線の構えをする両者。その光線は同時に放たれた。

「バレットウディザスター！」

「オーラム……ストリウム!!」

互いの必殺光線がぶつかり合う。その光線勝負もタイガが制し、バレットウディザスターを打ち破ったタイガのオーラムストリウムはバレットへと直撃する。

「ぐはっ!？」

その一撃に倒れたバレットは全身から火花を散らしながらもタイガの方を見る。

「まだだ。まだ遊び足りない私はまだ」

まだ遊ぶのを止めようとしないうにバレットだったが、既にカラータイマーはヒビ割れて巨大な姿を維持するのも困難となっていた。

「もう充分遊んだだろ。これで本当に終わりだ」

再度オーラムストリウムを放とうとするタイガ。それを手を添える形でスマツシユが止める。

「待つてくださいタイガ。最後は僕にやらせてください」

「・・・分かった」

トドメをスマツシユに任せたタイガ。するとスマツシユはタイガの前へと出て腕を十字に構える。

「これでトドメです！シューティングスマツシユ!!」

「・・・っ!？」

スマツシユの放ったシューティングスマツシユはヒビ割れているバレットのカラータイマーを打ち貫くと、バレットは爆発する。

「やったねスマツシユ」

「ええ。これで・・・」

スマツシユとバレットの因縁の戦い。その戦いはバレットの敗北という形で決着が

ついた。

~~~~~

~~~~~

「くっ・・・何とか生き残れたか」

スマッシュとの戦いに敗れたバレットだったが、ボロボロながらもかろうじて生き残ったようで、等身大サイズで足を引きずりながらも歩いていった。

「またしばらく人間態で回復に専念するしかないか」

天堂の姿へと変わったバレットだったが、天堂の肉体はとうに限界を迎えていて左腕が灰となって崩れ落ちる。

「くっ、この肉体も限界か」

バレットは天堂の肉体から抜け出ると、その場に倒れ込んだ天堂の肉体は灰となって崩れ去る。

「それなりに動きやすい肉体だったが仕方ない。次の人間の肉体を探すとするか」

次の地球人の肉体を探し始めたバレットだったが、自身の体もダメージにより限界が近かったようでその場に膝をついてしまう。

「くっ、人間の肉体だけでなくこちらも限界か」

「どうやらしぶとく生き残ったようですね。ウルトラマンバレットさん」

そこに現れた霧崎はバレットへと歩み寄っていく。

「トレギアか。丁度いい。新しい地球人の肉体を用意してくれ」

「いえいえ、その必要はありません」

霧崎はバレットに手を貸して立ち上がらせると、青い仮面を取り出す。

「バレット。お前に意識というものを与えたのは正解だったよ。お前は中々面白い人形だった」

そう言った霧崎は等身大のウルトラマントレギアへと変身すると、手刀でバレットのカラータイマー部分を貫いた。

「ぐあ……!? な、なにを……」

「勝手に良く動く面白い人形になってくれたが……もうお前は遊び飽きた」

「私を……人形と……呼ぶな」

バレットは胸部を貫かれながらもトレギアの肩を掴むも、トレギアは貫いている右手から電撃を放つ。その一撃で爆発したバレットは首から上のみとなり地面に転がった。

「私は……人形では……」

「さようなら。人形さん」

その頭部を踏みつぶしたトレギアは霧崎の姿へと戻るとそのまま何処かへと歩き

去つていく。そしてその場にはバレットだったものの残骸のみが残される事となった。

~~~~~

~~~~~

「これでバレットと決着がついたんだね。スマツシユ」

『ええ。ようやく本当に決着をつけることができました』

変身を解除した雅美はスマツシユとともに因縁の相手を倒せた事を喜ぶ。

『体の方もだいぶ回復をしました。これならもう雅美さんと分離しても大丈夫そうです』

「そう・・・なんだ」

もう分離しても問題ないと話すスマツシユに雅美はどう言葉をかけるべきか悩む。助けてもらった身である自分が引き留めるわけにも行かないと考えていた雅美は引き留めない選択を選ぶ決断をする。

「スマツシユは・・・これからどうするの？」

雅美は今後どうするつもりなのかをスマツシユへと尋ねると、スマツシユは雅美が予想していなかった返しをしてきた。

「それなのですが・・・もうしばらくこのまま雅美さんの身体を間借りさせていただけないでしょうか？少し気になる案件があるので」

スマッシュが気にしていたのは霧崎の事であり、それを放置したままこの地を去ることができないと考えたスマッシュはもうしばらく雅美と一体化したままで良いかを尋ねてきた。

「・・・私が風の部隊にスカウトされたのはスマッシュと一体化してるからだし、抜けたら風の部隊を辞めないといけないかもだから・・・うん。もうしばらくいいよ」

素直に「いい」と答えることの出来なかった雅美はそう答える。それを少し離れたところからしづき達他の風の部隊が見ていた。

「スマッシュの奴が何を言ってるのか分かんねえけど、なんか出て行きそうな話でもしたのか？」

「別にもう雅美たちは仲間だからスマッシュがいなくなったらなんて考えなくてもいいのにな」

「そうですね！雅美ちゃんはまだ私達の大切な仲間ですよー！」

「とはいえどちらもまだ抜けないように安心じゃな」

しづき達は雅美もスマッシュも自分達のもとを去らないことを安心し、笑い合う。

「これでようやく決着をつけることができました。師匠。長穂さん」

その近くにいたモモもこれでようやく本当に天堂と決着をつけることができたと安心していた。

護る力と闘う力

「タイタス？フーマ？何処だ？」

闇が満ちる世界。タイガはただ一人たたずむ。するとタイガの中で何かが脈を打つ。

「うっ、俺の中で激しい感情が・・・伊智香、伊智香！伊智香ああ！」

闇の世界でタイガが叫ぶと、タイガの意識が現実へと戻る。

「夢・・・か」

「どうしたのタイガ君。うなされてたよ。最近具合でも悪いの？」

「な、何でだ？」

「最近私の頭の中で変な音がするんだよね」

「お、俺は関係ないだろ」

伊智香は最近頭の中で変な音がするのはタイガのせいだと考えるも、タイガはそれを否定する。

「伊智香！後ろだ！」

「えっ？」

タイガの注意も虚しく、伊智香は突如背後から襲撃してきた相手の手にかかってし

まった。

~~~~~

~~~~~

「遅いですね。伊智香ちゃん」

招集がかかかってしばらくの時間が経過した。他のメンバーが集まったにも関わらず伊智香のみがまだやってきてなかった。

「モモちゃん。何か分かりませんか？」

「流石に学年が違うので・・・楓ちゃんは何か事情を知ってる？」

「クラスが違うから知らないわ」

楓もクラスが違うので分からないという。

「通信も圏外になっていきますし怪しいですね。何らかの事件に巻き込まれたと考えるべきでしょう」

「何らかって・・・まさか私達がツキカゲだと分かかって狙ってきた組織の仕業・・・！」

「その可能性は充分に考えられます。ですがGPSは大まかな位置は捉えています」

「私、行ってきます！」

「ちよっと待って。私も行くわよ！」

「楓が行くなら私も・・・！」

モトと命。そして楓の3人はGPSが示すその場所へと急ぎ向かっていった。

~~~~~

~~~~~

「・・・」は？」

意識が戻った伊智香は周囲を見渡してみる。そこは薄暗い何処かの工場の中だった。するとコツコツと足音が伊智香のもとへと近づいてきて、伊智香はその音が聞こえた方向を振り向いた。

「誰ですか？何故こんなことを？」

「ごめんね。こんな手荒な真似をして」

「ごめんねって・・・。タイガ君！タイタスさん？フーマ？」

伊智香は3人に呼びかけるも、反応がない。

「呼んでも無駄だよ。預からせてもらっているよ。今使われると困るからね」

「何を・・・知ってるの？」

目の前の男の手にはタイガ達のアクセサリーが握られていた。

「質問その1。巨大な兵器を手に行っていることをどう思う?」

「巨大な兵器?」

「質問その2。その兵器を制御できると思っている?」

「さつきから兵器とか制御とか何なんですか! タイガ君達は物じゃない! 私の大切な仲間です!」

タイガ達の事を仲間といった伊智香に対して男は納得したように笑う。

「私の名はイルト。君のことは信用できそうだね」

「だったらそれを・・・」

「そうはいかない」

イルトと名乗った男はアクセサリーをエネルギーの粒子へと変換し、自身のガントレットへと取り込ませる。

「君達にはもう少しの間、大人しくしてもらおうよ。あいつが現れるまでね」

「あいつ?」

「それにしても君のお仲間は優秀だね。結構便利だよ。これ」

イルトが見ていたのは初芽のドローンによる監視映像。どうやら初芽のプログラムをハッキングしたようだ。

「あいつの気配は・・・まだなしか」

「あいつ? あいつって言うのはいったい? それになんでこんなことを・・・」

「そうだね。君にも理由を知る権利はあるね。じゃああいつが現れるまで遠い星の昔話を聞かせてあげよう」

サングラスを外したイルトは語り出す。

「ここから遠い銀河系の話。その星では怪獣災害が続いており、人々は怪獣から自分達を守ってくれる存在を求めていた。そこに旅の科学者が訪れて、人々を護るためならと巨大な防衛マシンを作りました。人々は大いに感謝し、そのマシンを守護神と呼んで大切にしました。すると他の星の人々も守護神を欲しがりました。科学者は人々を護るためならと次々と守護神を作りました。やがて怪獣災害はなくなり、銀河系に平和が訪れました。科学者は満足して他の星へと旅立っていきました」

「・・・いい話・・・ですね」

「ここまではね。科学者は100年後、同じ銀河系に戻ってきました。そこで科学者が見たのは制御不能に陥った守護神同士の戦いと、破壊され廃墟となった星々の姿でした。守るはずの力が星を破滅に導いた」

「守るはずの・・・力・・・」

伊智香は脳裏にタイガを思い浮かべてしまう。

「後悔した科学者は同じ悲劇を繰り返さないために自分が作り上げた守護神を一体一体

探し出し、封印し、回収して周る旅に出たのでした。おしまい」

科学者の物語を語り終えたイルトは伊智香の方に振り返る。

「あいつが現れて回収が終わるまで、邪魔しないでもらいたい」

「もしかしてあいつって・・・その守護神。そうなんですね？」

伊智香の発言にイルトはゆっくりと頷く。

「ギガデロスは地球にいる」

~~~~~

~~~~~

「うちの初芽ちゃんにハッキングを仕掛けるなんて敵さんも中々じゃない。初芽ちゃん！返り討ちにしてあげなさい！」

「はい師匠！」

初芽はカトリーナに激昂されてハッキングし返していると少しずつだがハッキングをした場所を絞り込んでいく。

「見つけました！今、座標を転送します！」

ハッキングし返した初芽はその座標をモモ達へと送信する。元々絞り込まれていた場所を探していたモモ達は初芽から送られてきた座標に急ぎ向かっていった。

~~~~~

~~~~~

「スロー、クイッククイック。スロー、クイッククイック」

「アイツか」

「ちよつと君!」

初芽がハッキング相手の居場所を特定しようとしていた頃、道端でダンスを踊っていた霧崎は警察に職務質問をされていた。

「ちよつといいかな?あのね、通行の邪魔になっっているからって通報がありましたね」

「ほら道塞いじやつてるでしょ?あつちに広い広間があるからさ」

「聞いてるのか?」

警察の話の聞こえともしない霧崎はダンスを続ける。

「スロー、クイッククイック。スロー、クイッククイック」

いきなりストップして傘を空へと掲げた霧崎。彼が「BOM」と告げた瞬間、地面から巨大な剣が突き出てきた。

「ウワアアア!?!」

人々が逃げていく中、剣の下から現れたのは黒いロボットの怪獣。イルトが言ってい

た『守護神』である惑星守護神ギガデロスだ。

「ようこそ地球へ」

~~~~~

~~~~~

「ギガデロス！」

ギガデロスが現れた事に気づいたイルトはモニターにその映像を映し出す。

「私を解放してください！街を守らないと！」

「ダメだ。今の君の力はこの星で最も危険なんだ！」

街を守りにいきたい伊智香だったがイルトはウルトラマンの力は危険だと解放を拒否する。

「人々を救えなきやなんのための力なんですか！科学者つて貴方の事ですよね？貴方もそう思ったからその守護神を作ったんじゃないんですか？」

伊智香の言葉にイルトは黙り込むと複数の足音が聞こえてきた。

「孫市！」

初芽が場所を特定した事によりたどり着けたモモ達だ。

「流石に優秀だね。もう場所がバレたか。だけど邪魔はさせないよ」

イルトは伊智香を連れてテレポートをするとモモ達はその場に取り残されてしまう。「こちら、百地。孫市を連れれた相手がテレポートか何かをして何処かに消えちゃいました」

『確認してます。位置座標がいきなり変わりましたね。今現在の座標を送ります。．．．しかしここは．．．』

初芽は現在の伊智香の座標をモモ達へと送信する。

「……って……」

その場所はよりにもよってギガデロスの足元だった。

~~~~~

~~~~~

「キミに剣なんて持たせるべきじゃなかった……!」

「行かせてください!人々を、みんなを助けないと!」

伊智香はアクセサリーを返すようイルトへと迫るも、それでもイルトは返そうとしな
い。

「ギガデロスは私が止める!」

あくまでもギガデロスは自分が止めると言い張るイルト。すると一発の電撃がイルトに命中した。

「うわっ!?!」

「イルトさん!?!」

「ふむ……それか」

電撃の先に立っていた霧崎はもう一撃イルトに向けて電撃を放つと、それは腕輪へと命中して3つの光が霧崎の元へと飛んでいく。霧崎はそれを掴み取るとタイガ達のアクセサリーがその手に収まっていた。

「貴方は……報告にあったビーフジャーキーの人?」

「霧崎だ。君を助けたくてね」

伊智香に名前を名乗った霧崎はアクセサリーを彼女に手渡す。

「ありがとうございます」

「ダメだ!君達にギガデロスは倒せない!うわっ!?!」

イルトはウルトラマンではギガデロスは倒せないと告げるも、霧崎は彼に電撃を放つて妨害する。

「私は……目の前の皆を助けたいんです!」

「いつてらっしやい」

駆けていく伊智香に対して霧崎は軽く手を振ると、イルトは「最悪だ・・・」と呟く。「何故ギガデロスをこの星に?」

霧崎がギガデロスを地球に呼んだ事を見抜いていたイルトは彼にそう尋ねると、霧崎はニヤリと笑いながらイルトに振り向いた。

「もう少しで完成するんだよ」

「完成?」

「実にいいサンプルだった。君の作ったギガデロスは素晴らしく従順だね。私の感情を埋め込むのに苦労はしなかった」

「お前の感情だと?まさか!」

イルトは気づいた。ギガデロスを破壊の守護神と変貌させたのは目の前の霧崎であるということに。

「守護神の力で1つの銀河が消えるのはあつという間だった。実に愉快だったよ」

「全部、お前の仕業だったのか!!」

激怒するイルトに対して霧崎は「良い顔だ」と言いながら拍手をする。

「平和のための力なんて甘い夢を見ていた奴が夢に裏切られた。そして今は自分の夢の後始末に追われている。・・・実に良い!」

「お前えええ!!」

イルトは霧崎へと殴り掛かろうとするも、その拳はあっさり止められてしまう。

「お疲れ様でした」

「うわっ!？」

殴り飛ばされたイルトは霧崎を睨むも、霧崎はそんな事など気にせずその場を立ち去って行った。

~~~~~

~~~~~

「行くよタイガ君!・・・あれ?」

伊智香はタイガに呼びかけるも、タイガは反応しない。

「タイタスさん。フーマ?」

タイタスとフーマにも呼びかけるも、2人とも反応しない。

『伊智香?』

「やつと声が聞こえた」

タイガの声が聞こえた事に伊智香はひとまず安心すると、伊智香はギガデロスを見上げる。

『おっと早くいかねえとやべえな』

「うんー！」

『カモンー！』

「風の覇者！フーマー！」

フーマーのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

「セイヤっ！」

ウルトラマンフーマーへと変身した伊智香は竜巻を纏ってギガデロスへと突撃していき、ギガデロスはその竜巻を両断する。

「中々の剣捌きじゃねえか。腕がなるぜ」

ドロンとギガデロスの背後に現れて剣捌きを評価したフーマーは回し蹴りを叩き込む。

「へへっ、こっちだこっち！」

挑発しつつも連続でチョップをするフーマー。するとギガデロスは反撃と言わんばかりに左腕の銃口から銃弾を連射してくるのをフーマーはバック転で回避した。

「おっと・・・！さて、遊びは終わりだ。一気にカタをつけるぞー！」

「うんー！」

『カモンー！』

フーマのアクセサリーがフーマフュージョンアクセサリーへと変化すると、伊智香はそれを手に取る。

『ウルトラマンリブット!』

『ウルトラマンスマッシュ!』

『2つの力、お借りします!』

『トルネードフュージョン!』

アクセサリーをダブルリードした伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフーマ! ストームインパクト!』

フーマ・ストームインパクトへと強化変身したフーマは即座に光波手裏剣の構えを取る。

「喰らいな! 真星光波手裏剣!」

フーマの真星光波手裏剣が炸裂してギガデロスが爆発すると、フーマはその爆発に背を向ける。

「呆気ねえな」

「待って! あれは!」

伊智香に言われてフーマは爆発へと振り返ってみると、そこには2体となったギガデ

ロスが立っていた。

「なっ!?マジかよ!?!」

驚いたフーマだったが即座にこちらも2人へと分身して対応する。

「いったいどうなってやがる?」

「分からないよ。倒したと思っただら増えてたんだもん」

「ウワアあ!?!」

「ちっ、動きが読まれてる」

分身のフーマが2体の同時攻撃により倒されてしまうと、フーマは動きが読まれている事に気が付く。

「私が行こう!」

「いや、俺が行く!伊智香!俺に代われ!!」

タイタスが出撃しようとしたが、タイガが自分が行くと主張し出した。

「う、うん。お願いタイガ君」

『カモン!』

「光の勇者!タイガ!」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ!』

「シユア!」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香は1体のギガデロスを蹴り飛ばすとすぐさまもう1体の方へと振り返る。

「ストリウム・・ブラスタター!!」

そのもう1体にストリウムブラスタターを浴びせると、爆炎の中から出てきたギガデロスはさらにもう1体増えていた。

「ダメだ。光線を撃ってはいけない。ギガデロスは光線のエネルギーを逆利用して分身する。撃てば撃ただけあいつは増え続ける!」

「そんな・・・じゃあどうやってあいつを倒せば・・」

「ウワアア!?!」

3体のギガデロスの一斉射撃を受けたタイガはカラータイマーが赤く点滅してしま
う。

「イラつかせやがって。伊智香!。パワーアップだ!」

「うん!」

『カモン!』

「輝きの力を手に!」

『アース！』

『シャイン！』

フォトンアースアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードする。そして右手に持ち替えるとウイングが展開し、力が解放される。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

フォトンアースへと強化変身したタイガはギガデロスに連続パンチからのアッパーカットを決め込むと、接近してきたもう1体を蹴り飛ばす。

「鬱陶しいな。伊智香！魔獣の力を使え！」

「えっ？でも大丈夫なの・・・？」

「いいから使え！」

伊智香はまた調子が悪くならないかを心配するも、タイガはそれでもと言ってくる。

「そうだ。私の指輪を使って怪獣の力を封じろ！」

それを眺めている霧崎は指輪の力を使えと告げてくる。

『カモン！』

ツイオンリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ツイオンリング・エンゲージ』

「ハアアア!!」

闇の波動を放つと、それを浴びたギガデロスは混乱状態となり1体へと戻る。

「あつ、闇の波動で制御を奪って1体に戻したんだね」

「それでいい」

「そうか。お前の狙いはあのウルトラマン」

霧崎の狙いに気づいたイルトだったが、霧崎は「後はよろしく」と言つてその場を去つて行つてしまった。

「ハアア!!」

1体となったギガデロスに挑んでいくタイガだが、明らかに冷静さが欠かれているタイガの攻撃はあっさりを受け流されてしまう。

「くそつ、1体に戻ったのにしぶといヤロウだ!」

『聞こえるかい伊智香君』

「イルトさん?」

そんな中、伊智香のもとにイルトの声が聞こえてくる。

『私がギガデロスと同機してシャットダウンをかけるから、その間に破壊するんだ』

「分かりました!タイガ君!」

伊智香はイルトの作戦に従おうとするも、タイガはがむしやらにギガデロスを殴り続

ける。

「聞こえてるのタイガ君!? 攻撃を止めてギガデロスから離れて!」

それでもタイガは止まらない。

「大丈夫だよタイガ君。・・・冷静になってタイガ君!」

「・・・伊智香?」

ようやく伊智香の声を聞いたタイガはようやく冷静さを取り戻して「何をしていたんだ?」と言わんばかりに自分の行動に動揺しながらギガデロスから離れる。

「ごめんねギガデロス」

自分で作ったギガデロスに謝罪の言葉を告げたイルトはギガデロスをシャットダウンすると、ギガデロスの動きが停止した。

「今だよタイガ君!」

「オーラム・・・ストリウム!!」

動かないギガデロスに対してオーラムストリウムを放つタイガ。その一撃で爆発したギガデロスは今度は分身しなかった。

「タロウの息子よ。お前はもう少しでウルトラマンの歴史に名を刻む」

戦いの一部始終を見ていた霧崎はそう言い残して日傘を広げるとその場を立ち去って行った。


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「これからどうするんですか？」

「旅を続けるよ。ギガデロスを全て回収するまではね」

戦いを終えた後、伊智香はイルトに今後どうするつもりなのかを尋ねると、彼はこれからギガデロスの回収を続けると告げた。

「これまで多くの星が廃墟となるのを見てきた。君が今当たり前に見ているこの景色が明日も続くとは限らない」

「タイガ君も感情を制御できなかったんです。こんなのは初めてで……私達もギガデロスみたいに……」

「伊智香君。君の相棒に伝えて欲しい。『仲間を信じろ。伊智香を信じろ』ってね」

「イルトさん……!」

「伊智香ちゃん!」

イルトの言葉に感銘を受けた伊智香。すると背後から自分を探していたモモの声が聞こえてきた。

「無事だったんだね伊智香ちゃん!」

「師匠！はい、大丈夫です」

伊智香はモモの元へと駆け寄っていくと自身の無事を告げる。

「あつ、紹介します。イルトさんです」

「えっ・・・誰かいたの？」

「あれ？」

振り返るとイルトは既にその場からいなくなっていた。

「それで結局敵が孫市を攫った理由ってなんだったのよ？」

「それは・・・えっと、なんでですかね？」

自分がウルトラマンだったからと素直に言えない伊智香は楓の問いを適当にごまかしてしまう。

「とはいえ相手はツキカゲにハッキングをしかけたようなとんでもない相手だよ。初芽さん対策に燃えそうだね」

「は、はは・・・そうですね」

伊智香は仲間達と基地へと帰還していく最中も、イルトに最後に言われた言葉をずっと気にしていた。

## キミの声が聞こえない

「……は……?」

真つ暗な空間にただ一人、伊智香のみがいた。伊智香は辺りを見渡すとそこには一枚の鏡があり、伊智香はその鏡を覗きこむ。

「……っ!」

その鏡にはピエロの仮面をかぶった伊智香とは異なる人物が写っていた。

「貴方はいつたい……?」

伊智香が尋ねると鏡の向こうの相手は仮面を外す。そこには霧崎が写っていた。

「っ!……夢?」

目が覚めた伊智香はさきほどのことは夢だったと認識する。

「なんか嫌な夢を見た気がする」

夢をはつきりと覚えてない伊智香はひとまずそれを考えるを止めて登校する準備をし出した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『諸君、準備は整った。今こそ革命の時だ』

地球へと来ているバルタン星人たちのボス、バルタン星人グレッツはその場にいる同胞たちにそう告げた。

『いよいよ計画を実行に移すんですね』

『これでこの地球を我らのものに』

その目的はヴィラン・ギルドとは違い、地球を自分達のものにするためなようだ。

『ですがリーダー。この地球にはウルトラマンがいますよ』

『だからこそウルトラマンを倒す。我々が生き残るにはもうそれしかないのだ』

既にバルタンの星が滅び、既に後がないバルタン星人たち。バルタン星人達は生存戦略として地球を欲しているのだ。

『少し前に先走った同胞がウルトラマンに敗れましたが・・・勝てるのでしょうか？』

『勝てる勝てないの話ではない。勝たねばならないのだ。今や我々バルタンはこの場にいる者だけとなってしまった。故に必ず勝利を掴み、バルタンの未来を守らねばならぬのだ！』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「そういえばこの間のさ、バルタン星人って言ったつ。あれ、なんかまた最近目撃されてるらしいのよ」

「えっ？ そうなんですか!？」

「うんうん。かくいう命さんもその目撃者の1人でね・・・」

ツキカゲ基地に集合するなり、命は伊智香にまたバルタンの目撃例がある事を伝えてきた。

「うちの楓も見たらしくて一応2人でその後を付けてみたんだけどね・・・」

「それで、どうなったんですか？」

「なんかいつぱいバルタンがいたんだけど、はっきり言って何を言ってたのか私達にはさっぱり分かんなかったのよこれが」

『バルタンの言語は地球人には分かりにくいからな。仕方ないって』

『んなこと言ってる場合か！悪さをする前にぶつ潰すぞ！』

フーマは地球人にはバルタンの言語が分からないのは仕方ないと反応するも、何やらタイガはイライラした様子でバルタンのところに行こうと言い出した。

『タイガ、最近らしくないぞ』

『は？らしくないってなんだよ』

自覚のない様子のタイガにタイタスとフーマは不安を募らせていると、他のツキカゲメンバーも集まってくる。

「皆さんもう集まっていますね。では今回のミツシオンを説明します」

最後にやってきた初芽は今回のミツシオン内容を説明する。今回は違法カジノを摘発するというミツシオンだった。

「とうわけで今回のミツシオンは違法カジノの摘発です。以前にも行ったことがある内容ですが、お客さんに顔を覚えられている可能性もあるので今回は命ちゃんにお願いしますね」

「了解ツス」

「以前は風の部隊からも葉栖美さんが潜入していましたが、今回は新しく所属した碓氷雅美さんが潜入するそうです」

「えっ？雅美さんがですか！」

「おや、伊智香ちゃんはまだもう雅美さんに会ったんですか？」

「ええ、まあ・・・」

知り合った経緯が経緯なので素直に言い出せなかつた伊智香は適当にはぐらかす。

「たしか前の時、風の部隊は薬物の案件で潜入していたんだよね。もしかしてまた、カジ

ノで一服盛られてる系だったり？」

「カジノを経営しているオーナーこそ違えど手口は同じようですね。同じミッションをしたことがあるからと言っても油断しないようお願いしますね」

~~~~~

~~~~~

潜入開始から1週間が経過した。そして今日はいよいよ違法カジノを検挙する予定の日となった。

「よし！このまま行ってやる！10万カラーアップ！」

「次の勝負に30万賭けるわ！絶対勝つ！負ける気がしないわ！」

「うくん。あの辺の人達、怖いくらいに軒並み勝つ続けてるね」

「先輩のアドバイスで簡易キットで調べましたけど・・・グラスに薬物を盛られた形跡はありませんでした」

雅美は葉栖美のアドバイスでグラスを調べてみたが薬物反応はなかった。

「つてことはこの場の空気で金銭感覚がおかしくなってるってことなの？それにしてもなんだかみんなの様子がどこかおかしいけど・・・」

人々はまるで何かに憑りつかれたかのようにお金を賭けていて、命達は何処かそれに違和感を感じていた。

「ギャンブル依存って考えればそこまでだけどき、なくんかそれだけじゃない気もするんだよね〜」

「とりあえずカジノ方面の違法性の証拠ははっきりしてるんだけど・・・」

「ここの人達は軍資金を集めるために操られてるの」

「えっ?」

話しかけられるまで気配に気づけなかった命達はすぐさま話しかけてきた相手に振り向く。そこには命達と同じ年ぐらいの少女が立っていた。

「貴女は何者なの? 何を知ってるの? なんでその事を私達に話すの?」

雅美は他のお客に気づかれなないように少女の背中に銃を突き付ける。すると少女は素直に真実を話し始めた。

「私はバルタン星人のレキア。地球人は私達の言語を理解できないからこの人間の体を借りて話してる。バルタン星人の計画を知ってる。私はその計画を貴女達に止めてほしいから教える」

レキアと名乗ったバルタン星人は地球人の少女の体を借りて命達と会話しているように、彼女はその計画の内容を止めてほしいと自身の意思を伝えてくる。



「バルタンはここで軍資金を集めて怪獣のメダルを買おうとしている。その怪獣を召喚してバルタンは革命を起こそうとしている」

「革命？」

「地球を自分達の星にする。それがバルタンの総意。……ってことになってる」

「珍しく侵略者系の宇宙人さんってわけね。でもそんな大それた計画が何でコソコソと？」

命もレキアに質問すると、レキアは素直にそれに応える。

「さっきも言った通り軍資金集め。怪獣メダルをバイヤーから買うには地球のお金が必要だから」

「だからここでコツコツと資金集めをねえ。それでカジノってわけ」

「そうみたい。ここに来てるお客さん達はバルタンの技でお金をより賭けやすくなっている。私達のボスはオーナーの体を借りてここを経営してる」

「まあ、聞きたいことはだいたいわいたよ。でも肝心なことをまだ聞いてない。どうして貴女は計画を止めてほしいの？ 貴女もバルタンでしょ？」

雅美は彼女もバルタンなのにどうして計画を止めて欲しいのかを尋ねる。

「確かに私は地球人と仲良くしたいって甘い考えじゃない。そんなのこの地球じゃ難しいことだし。……この作戦は必ず失敗する。ボスも薄々は気づいてる。だって地球に

はウルトラマンがいるから。だけでもう引くに引けなくなってる、私は同胞をみすみす見殺しにしたくない。ウルトラマンに倒される前に止めてあげたい。それだけ」

「だいたい分かったよ。私は貴女の言葉を信じる」

「んじや命さんも信じてみることにしますか」

「ボスは・・・オーナーは今の時間あそこにいるはず。付いてきて」

レキアの言葉を信じ、銃をしまった雅美。命も信じることを告げると早速レキアはオーナーのいる場所へと案内してくれた。

「おおレキア。丁度いいタイミングに来たな。たった今我らの革命に必要な怪獣メダルを手に入れたところだ」

「では今後も御贖員に」

オーナーの体を操るグレッツは丁度マーキンド星人との取引を終えたところだったようで、オーナーは自慢げにレキアに怪獣メダルを見せてくる。

「ボス、やっぱり作戦は中止にしよう。ウルトラマンに勝てるはずがないよ」

「何を弱気になってるレキア。我々はもう後には引けんのだ」

「・・・引くなら今のうちだよ。ウルトラマンはここにいる」

ウルトラステルスを発動してオーナーの背後に立った雅美はそう告げると様子を見計らっている命に「入ってきて」と合図を送る。その合図に合わせて命も突入すると

オーナーはため息をついた。

「計画を止めるためにわざわざウルトラマンを連れてきたか。……レキア、お前の気持ちも分かる。我々の計画は失敗すると多くの同胞を一気に失うからな。だがな、もう後には引けんだ」

「ウルトラマンがどこにいるのか知らないけどさ、止めといたほうがいいよ。この地球にはウルトラマンが4人もいるんだから」

「たかが4人だろう。そんなものねじ伏せてくれる。ゼットオオオオンー！」

『ゼットン』

オーナーはアバレンボウルを起動すると、1枚の怪獣メダルをセットする。すると数いる怪獣の中でもかなりの強さを持つ宇宙恐竜ゼットンが外に召喚された。

「見よ。これが革命の姿だ」

「『フオツフオツフオツ！』」

「ゼットオオン」

オーナーからグレッツが離れるとゼットンにバルタン星人達が一齐に一体化し、それぞれの特徴が混じった怪獣、ゼットンバルタン星人が誕生してしまった。

「行くよタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

外で待機していた伊智香はタイガアクセサリーを手に取り、それを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はゼットンバルタン星人の前に降り立つ。

「そこまでだ！ゼットンバルタン星人！」

ゼットンバルタン星人へと駆け出したタイガは回し蹴りで先制攻撃を仕掛ける。するとゼットンバルタン星人は鋏を振るい反撃をしてきた。

「っ！ダアアアっ！！」

その鋏を掴んだタイガはそのままゼットンバルタン星人を振り回し、投げ飛ばす。するとゼットンバルタン星人はテレポートでタイガの背後へと移動し、火球を放つてきた。

「っ!？」

『ウルトラマンタイタス！』

「ムウン！」

火球を受ける直前にウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香。タイ

タスはゼットンバルタン星人の火球をダブルバイセップスで耐え凌ぐと渾身の拳を叩き込む。

「っ・・!!」

その一撃を受けたゼットンバルタン星人は片膝をつくと鉢から光線を放ってタイタスを攻撃してきた。

「伊智香!」

「うん!」

『カモン!』

ジードレットを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『ジードレット・コネクトオン』

「レッキングバスター!!」

光線をレッキングバスターで相殺したタイタスはもう1度拳を振るおうとすると、立ち上がったゼットンバルタン星人は3体に分身してみせた。

「やはりバルタン星人の能力も据え置きか」

バルタン星人同様、分身能力が備わっている事に動揺しないタイタス。タイタスは冷静に5体のゼットンバルタン星人を見渡す。

「流石バルタン星人の分身だ。目視ではどれが本物かどうかからん」

『旦那！俺に代わってくれ。こういうのはまとめてぶった切るのが一番だ』

「確かにまとめて倒すのが最適か。任せるぞフーマ」

『ウルトラマンフーマ！』

「セイヤツ！」

タイタスからウルトラマンフーマへと変身する伊智香。するとフーマは数枚の光波手裏剣を一齐に飛ばして5体全てを切り裂いた。

「フオッフオッフオッフ」

「てめえか！」

そのうちの1体はアブゾーブで光波手裏剣の光線エネルギーを吸収していた。それが本物だと判断したフーマはその1体に蹴りかかると、その一撃はバリアによって防がれた。

「つと、ゼットンの能力にバルタンの忍術か。こりゃ一筋縄じゃいかねえな」

相手が一筋縄ではいかないと判断したフーマ。すると伊智香のホルダーに付いてるフーマのアクセサリーがフーマフュージョンアクセサリーへと変化した。

「あっちが合体ならこっちも合体の力だ。いくぜ伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

『ウルトラマンリブット!』

『ウルトラマンスマッシュ!』

「2つの力、お借りします!」

フーマフュージョンアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードすると、右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

フーマ・ストームインパクトへと強化変身したフーマは高速移動からの回し蹴りを決め込む。その速度に対応しきれなかったゼットンバルタン星人はバリアを張ることも間に合わずにその場に転倒した。

「ようはお前が反応しきれない速さでこつちが攻撃すりやいってことだろ? 余裕だぜ」

フーマは指をパチンと叩くと5人に分身し、そのままゼットンバルタン星人を取り囲むと一斉に光波手裏剣を投げつける。

「フォッフオッフオッフ!」

全方位バリアで光波手裏剣を弾いたゼットンバルタン星人はバリアを張ったまま高速回転し、そのままバリアをドリルのようにしてフーマへと突撃して来た。

「「「マジか!?」」」

その攻撃手段に驚いたフーマ5人は光波手裏剣を投げつけてその攻撃を阻もうとするも、ゼットンバルタン星人は止まらない。

「ニンっ!」

4体の分身がその一撃に敗れたフーマは印を結んで残像を残して攻撃を回避するも、ゼットンバルタン星人の回転攻撃は止まっていない。

「真星光波手裏剣!」

フーマは真星光波手裏剣で回転するゼットンバルタン星人を斬り裂こうとするも、逆に真星光波手裏剣の方が砕かれてしまった。

「おいおい。冗談じゃねえぞ」

『フーマ!俺に代われ!』

「なんか策があるのか。いいぜ」

『ウルトラマンタイガ!』

『ウルトラマンタイガ・フオトンアース!』

再びウルトラマンタイガへと変身した伊智香はそのままフオトンアースに強化変身させると、タイガは回転して向かってくるゼットンバルタン星人の真正面に立つ。

「行くぜ伊智香!グラツキの力だ!」



「うん！」

『カモン！』

グラツキリングを装着した伊智香はそれをタイガスパークへとかざす。

『グラツキリング・エンゲージ』

「スエロフィン！」

グラツキの光線を放ったタイガはゼットンバルタン星人のバリアを討ち貫くと、タイガは地面に落下してきたゼットンバルタン星人を掴みあげる。

「伊智香！電撃を喰らわせてやれ！」

「う、うん」

『カモン！』

伊智香は荒い口調で話すタイガに違和感を感じつつも、それに従いデンジユラスリングをタイガスパークへとかざす。

『デンジユラスリング・エンゲージ』

「痺れる！」

捕まれた状態で電撃を浴びせられたゼットンバルタン星人はそのまま地に臥せる。ダメージのせいでもう動ける状態ではなくなっている。

「オラ！オラ！オラ！オラ！」

ゼットンバルタン星人に跨ったタイガは何度も何度も殴りつける。抵抗力が無くなっていくゼットンバルタン星人の顔を蹴り飛ばしたタイガはトドメを刺そうとエネルギーを集束させる。

「オーラムストリウム！」

「やめてウルトラマン！」

対処する力も残っていないゼットンバルタン星人にオーラムストリウムが命中し、レキアの声も虚しくそのままゼットンバルタン星人は爆発四散した。

「俺は、俺は何をしているんだ？」

「ハハハハっ！」

我に返ったタイガは自分がしでかしたことに驚いているとそれを見ていた霧崎は青い仮面をつけてウルトラマントレギアへと変身し、タイガの前へと現れた。

「お疲れ様でした」

「トレギア!!」

タイガはトレギアを見るなり殴り掛かるも、タイガの拳は軽く受け流されてしまう。

「おやあ、どうしました？」

「このっ！デヤアアアッ！」

タイガは何度もトレギアへと殴り掛かろうとするも、その全てが軽く受け流されて、

タイガの攻撃はトレギアへと届かない。

「何処か具合でも悪いのかい？」

「五月蠅い!!」

トレギアの挑発に乗ってしまうタイガは完全に冷静さを失っており、すべての攻撃はトレギアに当たらない。

「ちよつと心配だなあ」

「余計なお世話だ!」

「フンっ!」

回し蹴りを受けて膝を付いたタイガ。そのカラータイマーは赤く点滅し出す。

「伊智香! 魔獣の力だ! もつと魔獣の力を!!」

「待ってタイガ君、何か様子がおかしいよ」

伊智香の意思とは関係なく指輪が出現し、装着される。それを不審がる伊智香だったが、伊智香の意思は関係なく手は動き、タイガスパークは指輪を認識する。

『デンジュラスリング・エンゲージ』

「これでも喰らえええつ!!」

タイガの手から放たれた魔獣の力。その電撃はトレギアへと命中する。

「やったか!」

「痛えなあ。・・・フハハハ！」

それをなんともないように耐えていたトレギアは不気味に笑う。

「ありがとう。今のでゴールに到達した」

「何がどうなって・・・うつ!？」

タイガの中、インナースペースに現れたトレギアの手。その手から放たれた電撃を浴びせられると、タイガと伊智香はインナースペースの中で分裂する。

「ぐああああつ!？」

暗雲が立ち込めると苦しむタイガは大地に倒れてしまう。

「何の代償もなく力を使えると思ったのかい？」

「何?」

「使えば使うほど、君の魂は闇に堕ちていく仕掛けさ。ご利用は計画的に」

「この野郎!!」

すべてはトレギアの罠だった事を気付かされたタイガは何度もトレギアを殴りつけるも、トレギアはただタイガをあざ笑う。

「そうだ。もつと怒れ。残忍になれ。そうすれば君は私になれる」

「タイガ君!」

『落ち着けタイガ!』

『怒りに？まれるんじゃない！』

伊智香達の説得が聞こえていないタイガはただひたすら怒り任せにトレギアを殴りつけようとする。

「私の声を聞いてタイガ君！これまで一緒に頑張ってきたじゃない！戻ってきて！君と私との絆は……」

「絆ア。二言目には絆絆五月蠅いんだよ。地球人風情に何ができる」

タイガの首を絞めながら伊智香にそう告げたトレギアは一方的にタイガを攻撃する。するとタイガの体は指輪の闇に包まれ始める。

「ウヴァアアア!?!」

「フハハハハっ！聞こえるかNo.6。闇がお前の息子を蝕んでいるぞ！ウルトラマンタロウの息子を！」

「俺はタイガだあああ!!」

立ち込める暗雲の雷に撃たれたタイガは通常形態へと戻り立ち尽くす。

「……………」

「じゃあ指輪は返してもらおうね。ご苦労さん」

7つ全ての指輪がトレギアの手元へと渡ってしまおうとタイガはトレギアの人差指に押され、その場に膝をついてしまう。するとインナースペースのタイガは伊智香達から

引きはがされる。

「タイガ！」

「タイガアア!!」

「フーマ！タイタス!?伊智香ああ!!」

闇に消えたタイガの意識。するとそれと連鎖するようにタイタスとフーマもインナースペースから意識が消失してしまう。

「みんな!」

遠のく意識。意識が戻った伊智香のホルダーからはタイガアクセサリーが無くなっていた。

「タイガ君?」

見上げるとそこには倒れるタイガの姿があった。その右腕にはタイガスパークはなく、カラータイマーは赤いまま点滅しない。

「昨日までのタイガは死んだ。新しいタイガの誕生だ」

起き上がるタイガにそう告げたトレギアはゆっくりと近づく。

「もう君は地球人がいなくとも変身できる。新しい相棒は闇のエネルギーというわけだ」

トレギアはゆっくりとタイガの頬を撫でる。

「キミとボクとでバディ・ゴー。フハハハっ！」

「光が・・・消えていく」

タイガを見上げる伊智香はタイガの光が消えていくのを感じると命と雅美、そしてレキアが彼女のもとへとやってくる。

「大丈夫孫市？」

「たとえ雲が覆ったとしてもそのもとで太陽は輝いている。太陽は・・・いつも輝いている」

レキアはそう告げると少女から分離して何処かへと飛び去って行く。

「なんか意味深なことを言っ借りてた体を置いてかないでよ。孫市！ひとまずここを離れるよ！」

命は女性を担いでこの場を後にしていくも伊智香は呆然とそのまま立ち尽くしている。雅美は伊智香の肩を掴む。

「落ち着けないのは分かるけど今は堪えて。必ずウルトラマンを助ける方法はあるはずだから」

「・・・はい」

伊智香は雅美とともにこの場を離れてツキカゲ基地へと帰還していく。その間もトレギアは闇に染まったタイガを撫でながら終始笑っていた。

## 我らは1つ

「良い子だ・・・」

「タイガ君を・・・タイガ君を助けなきゃ!」

タイガを撫でるトレギア、伊智香は雅美の制止を振り切つて変身しようとする。

「タイタスさん!」

しかしタイタスは反応しない。

「フーマー!」

フーマも反応しない。

「どうしたの2人共! 答えてよ!」

2人が答えてくれない事に焦りと苛立ちを感じる伊智香。そんな中トレギアはタイガに顔を近づける。

「しぶといねえ。どうだい? 闇は気持ちいいだろう? おおつと」

トレギアに最後の抵抗をするようにに殴り掛かるタイガ。それをあつさりとトレギアは避けてしまうと、タイガはゆっくりと立ち上がった。

「あくらら。温室育ちはこれだから」



しかしタイガは軽く突かれるだけでビルに倒れ込んでしまう。

「まあいいさ。次に太陽が差し込む頃には新しいタイガが誕生する」

そう言い残して笑いながら闇に消えていってしまうトレギア、次の瞬間伊智香と雅美の背後に霧崎が現れた。

「っ！」

いきなり伊智香のタイガスパークを掴んだ霧崎はその匂いを嗅ぎだす。

「ほのかに光の匂いがする」

「何を言って・・・うっ!？」

突如伊智香を襲う急激な頭痛。伊智香はその痛みに倒れ込んでしまう。

「孫市！しっかりして孫市！」

遠のいていく伊智香の意識。雅美は伊智香に向かって何度も呼びかけるも、伊智香はそのまま意識を失ってしまった。

~~~~~

~~~~~

「っ！」

真つ暗な空間に1人佇む伊智香。彼女のホルダーにはタイガ達3人のアクセサリ―

がない。

「ハアア・・・ここは最高だあ」

闇の中に立つタイガに気づいた伊智香。しかしタイガの様子は何処もおかしい。

「力が体中にみなぎってくる」

「タイガ君？何言ってるの？一緒に帰ろう」

「うるせえ地球人！お前は誰だ？俺の中から出て行け!!」

伊智香へと闇の波動を飛ばしてくるタイガ。

「どうしちゃったのタイガ君？私だよ！伊智香だよ！」

「いち・・・か」

「いやあく、絆って美しくて儂いものだね。反吐が出る」

タイガに呼びかけようとする伊智香の前にトレギアが現れた。

「トレギア！タイガ君をどうするつもりなの!!」

「おや？絆とか大層な事を言っておきながら他の仲間は何処だあ？」

トレギアは辺りを見渡すも、そこにタイタスとフーマは現れない。

「見捨てられちゃったのかな？」

「俺は・・・見捨てられた？」

「違うよ！そんな事は・・・」

「ハハハハハっ！」

そんなことはない。伊智香がタイガにそう告げようとするのとトレギアは高笑いをする。

「安っぽい仲間ごっこは終わりにしよう。父親を超える力を手に入れたんだ。私と一緒に光の国に戻ろう。そうしたら父親にその力を見せてやるんだ」

「トレギアの言葉に耳を貸しちゃ駄目！」

「せっかく手に入れた力を手放すか？あとはお前次第だ。タロウの息子よ。いや、ウルトラマンタイガ」

「うっ・・・!?!」

そう言い残したトレギアは闇へと消えていくと再び頭痛が伊智香を襲う。

「俺はタイガ・・・。父親を、タロウを超える力！」

タイガは再び闇の波動を伊智香へ向けて放ってきかた。

「やめて。私が・・・私が絶対に助けるから」

眠りながらもタイガを助けようとする伊智香。ツキカゲ一同はそんな伊智香を心配そうに見守る。

「伊智香ちゃん。貴女は私の弟子でしょ。私の声、聞こえないの？」

モモは眠り続け、うなされてる伊智香にそう呼びかける。しかし伊智香は目を覚まそうとしない。

「百地……」

「伊智香ちゃんは何かを訴えようとしている。だから伊智香ちゃんに私の声を届けてあげないと」

「頭の中に声を届ける……。できる？スマツシユ」

『成功するかどうかは当人たち次第ですが、やってみる価値はありますね』

隠す事を止めてその場で等身大のスマツシユに変身した雅美は、伊智香の額に手を振れる。

「貴女。ウルトラマンだったの……」

「……時間が勿体ないですから今はその事は後にしてください。それよりも僕の右手に触れてください。今から皆さんの意識を孫市の意識の中へと送り込みます」

時間ももつたいたないからと自分の話題を後にしてもらうスマツシユ。今はスマツシユの事を信じるしかないかと判断したモモはスマツシユの右手に手を添える。

「百地！弟子を助けに行ってください！」

モモの左手を楓が掴む。

「しょうがないわね。弟子仲間だし私も行ってあげるわ！」

「楓が行くなら私も！」

楓が行く判断をすると命も向かう判断をする。

「もちろん私も行くよ」

「となるともうこれは全員での流れだな」

「分かりました。私はこちらでできる限りのサポートをします」

五恵とテレジアも向かうと告げると、初芽は現実で可能なサポートをすることを決める。

「行きますよー！」

こうして伊智香の意識の中に5人の意識が向かっていった。

~~~~~

~~~~~

「力こそすべてだ。弱い者など必要ない！」

闇に？まれつつあるタイガは弱い者など必要ないと言い張る。

「ダメ。私一人じゃ・・・私じゃタイガ君を救えない」

伊智香が諦めかけていたその時、伊智香の前に『光』が現れる。伊智香はその光に手を伸ばすと闇が晴れて、ツキカゲ基地となる。

「えっ?」

突然のツキカゲ基地に伊智香が驚いていると、彼女の目の前にモモ達5人が現れる。

「迎えにきたよ。伊智香ちゃん」

「さっさと戻って来なさいよ孫市!」

「ほら、ツンデレの楓がデレてるんだから戻ってくるなら今だよ」

「伊智香ちゃん!」

「戻って来い伊智香!」

5人が伊智香へと呼びかけている間にもツキカゲ基地内に『闇』の侵食が進んでくる。

「く、来る!」

「大丈夫だよ伊智香ちゃん。伊智香ちゃんは誰にも負けない心を持っている。私の師匠から、その師匠の長穂さんから、もっと前のツキカゲから受け継がれてきた心、魂が伊智香ちゃんにも宿ってる」

「もしも1人じゃ無理だと思うのならそれは大きな間違いよ」

「そう、孫市は1人じゃない」

「私達がいるよ」

「初芽や白虎達もいる」

ツキカゲの仲間達の言葉で諦めかかっていた伊智香の心が再び滾り出す。

「オオオオ！」

「フンツ！」

フーマとタイタスの声に振り返ると、そこには闇を押さえこまんとするフーマとタイタスが現れた。

「やつと私達の声が届いたようだな」

「ああ、随分と時間がかかっちゃまったぜ」

「タイタスさん、フーマも・・・」

「伊智香！君には私達も付いている！」

「そういうこつた。タイガを救うんだろ！」

2人の言葉で伊智香は完全に気力を取り戻す。

「うん！」

「待っているから戻ってきて。伊智香ちゃん！」

モモ達5人の差し伸ばしてきた手を掴む伊智香。すると掴んだ右手に再びタイガスパークが出現する。

「いち・・・か」

「タイガ君！」

タイガスパークを通してタイガの意識を感じ取った伊智香。次の瞬間、現実世界に伊

智香の意識が戻った。

「私は……」

「伊智香ちゃん！良かった！」

「師匠。みんな……！」

「まったく、心配かけるんじゃないわよ馬鹿孫市」

目が覚めると伊智香はツキカゲと凧の部隊の面々に囲まれていた。そこにはカラータイマーを赤く点滅させているスマッシュもいる。

「これは……！」

その面々の喜ぶ声に反応しつつも伊智香は左手に装着されている見知らぬプレスレットに気づく。

「いや〜。二度と目を覚まさないかと思ったよ」

「本当によかった」

「全くだ」

みんなが伊智香の復活に一安心しているのもつかの間、カトリーナが深刻な表情で話しかけてくる。

「みんな、伊智香ちゃんの復活に喜んでいるところ悪いけど、ここ空崎一帯が特別災害地域にされたわよ」



モニター画面に映るのはビルに倒れ込んでいるタイガ。するとモモは伊智香へと振り向く。

「伊智香ちゃん。誰か助けたい人がいるんでしょ？それが誰であろうと、助けたいなら何が何でも助けてあげなさい。それが私達、正義の組織ツキカゲでしょ？」

「師匠・・・はい！」

伊智香はタイガを助けるため、ツキカゲ基地を後にしていく。

「さてみんな！私達もツキカゲとしてできることをするよ！」

「[[[了解！]]]」

~~~~~

~~~~~

暗雲が消えて再び空が青空となると、闇のタイガが顔を上げた。

「さて、そろそろエンディングといこうか」

ポップコーンを食べている霧崎がそう告げた途端闇に支配されつつあるタイガが立ち上がる。タイガが立ち上がるのをビルの屋上から眺めた伊智香は左腕のブレスレットに視線を向けた。

「このブレスレットからタイガ君の鼓動を感じたの。これを媒介に私達とタイガ君の魂を重ねる事ができるかもしれないの」

「あいつの頭の中にカチコミをかけるってことか。面白れえ！」

「危険な賭けだ。それでもやるか。伊智香？」

「うん。私は小さい時、タイガ君に助けてもらった。今度は私がタイガ君を助ける番だよー！」

小さい頃にタイガに救われた話を思い出した伊智香はタイガスパークを右腕に出現させる。

『カモン！』

「風の覇者！フーマー！」

フーマのアクセサリーを手を取った伊智香はそれを右手へと持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

「よつと・・・」

ウルトラマンフーマへと変身した伊智香はタイガの前に降り立つ。すると霧崎は2つの指輪を取り出した。

「さあ、スペシャルゲストの登場です」

2つの指輪が闇に包まれるとタイガの左右に2体の怪獣が現れる。最凶獣ヘルベロスと悪夢魔獣ナイトファングだ。

「来やがったな。俺のスピードに付いてこれるのかよ！」  
『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

ヘルベロスとナイトフアングの出現に動揺しないフーマはストームインパクトへと強化変身すると竜巻を纏って向かっていく。するとヘルベロスは赤い斬撃を飛ばし竜巻を切り裂いた。

「「「ハアアッ!」」」

竜巻から出てきたフーマは5人に分身すると2人はヘルベロスを取り押さえ、もう2人もナイトフアングを取り押さえ、フーマ本体はタイガのもとへと向かっていく。

「タイガ、お前と初めて会った時は生意気ないけ好かないヤロウだとは思っていたけどよ、今や俺達は一心同体。お前1人が欠けちまったら駄目なんだ。これまでも、これからも、いつも一緒だぜ!」

ヘルベロスの棘攻撃によって2体の分身がかき消されると、もう2体の分身もナイトフアングの闇の波動によってかき消されてしまう。そしてタイガに向かおうとしていたフーマの行く手を阻むようにヘルベロスは雷撃を放ってきた。

「くそっ・・・!」

2体に振り返ったフーマは真星光波手裏剣を放つと、ナイトフアングはそれを光線で相殺する。

「オオオオオ!!」

『ウルトラマンタイタス!』

爆煙から出てきたフォーマはタイタスへと交代すると、タイタスはその拳でナイトフアングを叩き伏せる。

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

「フウウン!」

スターエンシエントへと強化変身したタイタスはサイドチェストでヘルベロスの斬撃を防御すると片手でナイトフアングを持ち上げて、ヘルベロスへ投げつける。

「君の無駄な熱さに呆れながらも、その心に胸打たれた。タイガ! 私達は信じている。君はこんな闇には屈したりしない!」

2体にタツクルを決めたタイタスはそのままたイガへと手を伸ばす。

「思い出せ。私達の出逢いを! 私達の旅路を! そして、私達との誓いの言葉を!」  
「光の国へ攻め込むための第一歩だ。やれ、タロウの息子よ!」

霧崎がそう告げた途端、タイガは自身へと手を伸ばしているタイタスへと跳び膝蹴りを叩き込む。

「ぬお!?!」

突然の攻撃に動揺したタイタスは後ろに引き下がると。タイガは敵味方の区別すら

ついていないように近くでいたヘルベロスも攻撃する。

「ううううう!!」

「目を覚ませ。タイガ!」

タイタスの首を絞めるタイガ。それに必死になって呼びかけるタイタスだが、タイガはそれでも目を覚まさない。

「諦めんど。諦めるわけにはいかんのだ!」

諦めないタイタスはタイガから何度も攻撃を受けながらも、何度もタイガへと手を伸ばし続ける。

「私達は1つ!」

「1トライスクワッドだ!」

「オオオオオ!!」

タイガのストリウムブラスターを光を纏わせた拳で相殺したタイタス。

「後は任せたぞ伊智香!」

『ウルトラマンフォーマ!』

そして攻撃の相殺と同時にタイタスからフォーマへと交代すると、フォーマは空へと飛び上がる。

「俺達の熱い想いをタイガにぶちかましてやれ!」

変身解除する瞬間にフーマが風で作った道を伊智香が飛んでいく。

「タイガ君!!」

そして伊智香はそのままブレスレットをかざしながらタイガのカラータイマーからその意識の中へと突入していく。

「目を覚まして! タイガ君!」

タイガの意識の中へと入った伊智香は鞘に収めたままの刀を振るい、タイガを全力で叩く。

「君の求めていた力はこれ? 闇の力なの?」

「闇の・・・力・・・」

「そんな力でお父さんに勝てると思っちゃダメだよ! 本当の力には誰かを助けたいって  
いう強い思いがこもってるはずでしょ」

伊智香はタイガの両肩を掴んで立ち上がらせる。

「君は1人じゃない。君が私で、私が君だよ!」

伊智香のその言葉とともにタイガの意識の中の『闇』が晴れ、伊智香のホルダーにタイガアクセサリーが戻ってくる。するとその空間にタイタスとフーマも現れた。

「伊智香・・・タイタス、フーマも・・・」

「生まれた星は違っていても・・・」

「共に進む場所は一つ」

「永遠のキズナと共に！」

「我ら四人！」

「『トライスクワッド！』」

『カモン！』

タイガ達3人が手を重ね合わせると伊智香もブレスレットのついている左手を重ねる。そしてタイガスパークでそのブレスレットの真の力を解き放った。

『トライスクワッドレット！』

『トライスクワッド・ミラクル！』

キズナのブレスレット。トライスクワッドレットの力を解放すると湧き上がる炎とともに一本の剣が現れる。

「これは・・・っ！」

伊智香がその剣を掴み取ると、現実のタイガの右腕に再びタイガスパークが現れる。俺はタイガ！ウルトラマンタイガだ！

名乗りとともにカラータイマーも青へと戻り、光の勇者、ウルトラマンタイガが完全復活を遂げる。

「なん・・・だと・・・？」

タイガの復活に驚く霧崎だったが、次の出来事が更に霧崎を驚かせる。

「行こう！タイガ君！」

「ああ！伊智香！」

「タイガトライブレード！」

炎の剣、タイガトライブレードのスイッチを押した伊智香は柄の回転盤を回転させる。

「燃え上がれ！仲間と共に！」

「「バディ・・・ゴー!!」」

4人が重なり合い、タイガトライブレードを空へと掲げた伊智香はそのトリガーを引く。するとタイガ、タイタス、フーマの3人の『光』が1つとなってキズナの炎を燃やす光の巨人となる。

「セイヤ！」

「フンツ！」

「シユア！」

渦巻く炎の中から出てきた炎の巨人。

「俺はタイガ！」

「「トライストリウム!!」」



その名はウルトラマンタイガ・トライストリウム。4人の心と体が1つとなったタイガ最強の姿だ。

「っ！」

その劇的復活劇に怒りを燃やす霧崎。その怒りに呼応するようにヘルベロスとナイトフアングは同時にタイガへと攻撃を仕掛ける。

「ハアアッ！」

2体の攻撃をトライブレードで薙ぎ払ったタイガは爆炎の中から飛び出てくると、ヘルベロスへと接近し一太刀を決めこむ。そして続けざまにフーマのような素早い身のこなしで隣のナイトフアングに連続斬りを決めた。

「タイタス！」

トライブレードのスイッチを2回押した伊智香は回転盤を回転させて、その刃にタイタスの光の力を集束させる。

「タイタス！バーニングハンマー！！」

剣先に現れた黄色い火球をハンマー投げの要領で振り回してヘルベロスへと飛ばす。その一撃を受けたヘルベロスが爆発四散すると、動揺している霧崎はトレギアに変身すると同時に怒りに身を任せたかのようにタイガへと駆け出した。

「トレギア!？」

突然の奇襲にタイガは驚きつつも、その攻撃を受け止める。

「やめろ。今のお前では俺達の絆には勝てない」

「まだ絆を語るのか。反吐が出る！」

トレギアの攻撃を捌き切るタイガはトレギアに一撃蹴りを決めると、それに怯んだトレギアは後退する。

「弱者が！貴様らが宇宙の番人だと誰が決めたああ!!」

「お前は負けるんだ！俺達の！」

「光に！」

「トライスクワッド！」

トライブレードのスイッチを4回押した伊智香は回転盤を回転させ、トライスクワッドの力を解き放つ。

「トライストリウム・・・バアアスト!!」

ウルトラマンタイガ・トライストリウムの必殺光線、トライストリウムバーストがトライブレードの剣先から放たれる。

「何が光だ！貴様らに私の何が分かる！」

対するトレギアはトライストリウムバーストに自身の光線技で対抗しようとするも、タイガ達の絆の力に押し負けたトレギアはトライストリウムバーストが直撃し、爆発す

る結果となった。

「あのさ、もう二度と闇に染まつちや駄目だからね。助けるの、結構苦労したんだからね。相棒」

「相棒・・・か。いい響きだな！」

戦いが終わった後、伊智香は隣に立つ半透明な等身大のタイガに『相棒』と告げる。

「私も相棒なのか？」

「俺もか？」

タイタスとフーマも自分達も相棒なのか尋ねてくると伊智香は「当然」と頷く。

「これからもよろしくね。みんな」

~~~~~

~~~~~

「うう・・・アツハハハハ!!」

タイガ・トライストリウムのトライストリウムバーストを受けながらも無事だったトレギアこと霧崎。彼は泣きながら歩いているといきなり大声で笑い出した。

「才賀・・・伊智香！」

そして霧崎はその狙いの矛先をタイガからトライスクワッドの新たな絆の基盤である伊智香へと変えたのだった。

# 超えるぜ！時空！

「あいたつ?!・・・どこだここ?」

彼女の名は三ノ輪銀。とある世界にてウルトラマンジードともに戦った勇者の一人である。彼女はウルトラマンゼロのウルトラカプセルの能力を発動させることで次元を超える事ができるのだが、今回は偶然にもタイガ達のいる伊智香の世界へと来てしまったようだ。

「香川・・・じゃなさそうだな」

空崎の町を知らないながらも香川ではない事を理解した銀はスマホを取り出す。

「電波は・・・あるな。みんなに通じればいいけど」

「薄々は違う世界だと感づきながらも銀はスマホで仲間に連絡をできるかを試みる。だが予想通り仲間と連絡は出来なかつた。

「やっぱりダメか」。さてと、簡単に帰ることができればいいんだけど。ここは助けを待つ方が無難かな」

カプセルの能力自体はこの世界でも使うことができるようだが、うまく元いた世界に帰ることができるかは不安と考えた銀は潔く仲間の助けを待つ事を決めて辺りを探索

し始める。

「空崎か。やつぱり知らない町だな。．．．あつ、ごめんなさい」

この町が『空崎』だと知った銀は知らない町だと思いつつも辺りを探索していると、その途中で1人の少女と偶然にもぶつかってしまう。

「こちらこそごめんなさい。怪我はない?」

「はい。大丈夫です」

銀がぶつかってしまった少女の名は高坂信。ツキカゲの一員として活躍し、現在は前線を離れてサポートとして活動しているのだが、そんな彼女が偶然にも銀と出会ったようだ。

「このっ!」

「きゃあ!?!ひ、ひったくり!?!」

そんな時だった。2人の近くを歩いていた女性からバッグをひったくったのだ。

「待つ．．．」

「待てええええつ!!」

信が追いかけてだすよりも早く、銀が先に動いた。ツキカゲの中でも身体能力の低かった信よりも動ける銀はあつという間にひったくり犯に追いつくとバッグを取り戻そうとする。

「そのバッグを離せ！」

「や、やなこつた！」

男は銀を振り払うとその正体を現す。男の正体は異星人、バット星人だった。

「こいつ宇宙人か！」

変身用の端末機器である勇者端末を取り出した銀はそれを起動して赤い勇者衣装を身に纏う。

「変身した．．!?」

その変身に驚いた信だったが、そんな事を気にせず銀はバット星人へと掴みかかる。変身して身体能力を更に強化している銀は容易くバット星人を取り押さえるも．．バット星人はまだ動かせる手を何とか動かしてアバレンボウルを取り出した。

「こつのお。こつなつたら．．．」

「ん？なんだそれ？」

「今教えてやるよ！」

『アーストロン！』

呼び出されたのは凶暴怪獣の異名を持つアーストロン。

「か、怪獣が!？」

アバレンボウルの事は報告には聞いていたが、実際に怪獣が召喚されるのは初めて見

た信はアーストロンの出現に驚くも、銀はまるで動揺せず巨大な斧を二振り出現させる。

「アースロンか。前に戦ったことあるつての!うりやあああああつ!!」

跳びあがった銀は全力で斧を振るい、アースロンに一撃を入れる。その一撃で角が折られたアースロンは怯み、背中から倒れ込んだ。

「えっ?何今のジャンプ力?それに怪獣の角までへし折つちやうなんて・・・」

信は勇者である銀の戦闘力に更に驚かされていると騒ぎに気づいた伊智香がウルトラマンフォームに変身して駆けつけてきた。

「セイヤツ!おつ、なんか強い嬢ちゃんがいるな」

「関心してる場合じゃないよフォーム。確かにあの子。とっても強いっぽいけど、それでも怪獣相手なんだから・・・」

「みなまで言うなつて。分かっているつての。んじやまあサクツと決めちまうか。俺のスピードについてくれるかよ」

高速で駆け出したフォームは目にも止まらない連続攻撃をアースロンに与える。

「セイヤツ!」

「凄い!あの青いウルトラマンめっちゃ早いな!」

「あれ?もしかして知らないの?」



この世界では既にそれなりに有名なはずのトライスクワッド達3人のウルトラマン。銀はそのウルトラマンを知らないような反応をしていた事を信は聞き逃さなかった。

「仕上げだ！」

『カモン！』

『ギンガレット・コネクトオン』

「七星光波手裏剣！」

フーマの七星光波手裏剣が直撃したアーストロロンが爆発すると、フーマは飛び去っていく。

「さあ、怪獣はウルトラマンに倒されたぞ。観念しろ！」

「くっ、覚えてろ！」

銀はバット星人に斧を向けた途端、バット星人は悔しそうな反応をした後、テレポトでその場を後にした。

「逃げられちゃったか。……ていうかテレポト出来る奴が何ひったくりなんかしてたんだよ」

テレポトができたバット星人に呆れながらも銀は変身を解除すると、それを近くで見っていたギャラリーが集まってくる。

「いっつけね。目立ち過ぎたな」

目立ち過ぎた事を反省した銀は急いでその場を離れると偶然見かけたカレーのお店『Wasabi』に入った。

「いらつしやいませ〜!」

カトリーナは銀へとお水を出すと、銀は財布を確認する。

「財布事情は・・・うん。流石に普通のにしておこうかな」

「おすすめはハチミツぬきガラムマサラましましたよ」

「そんなのメニューに・・・えっ?」

まるで透明人間が目の前で見えるようになったかのように、気づかないうちに目の前に座っていた信に驚かされた銀。

「えっ・・・えと。なんかめっちゃ辛そうツスけど・・・」

「おすすめはハチミツぬきガラムマサラましましたよ」

「は、はい。すみませ〜ん。ハチミツ抜きガラムマサラましました」

無言の圧力を感じた銀は渋々そう注文をすると、一連のやりとりを聞いていたカトリーナは信に耳打ちをする。

「信様。何故この女の子をツキカゲに招き入れようとするのですか?」

「信じて貰えないかもしれないけど。さっきこの子、変身して怪獣と戦っていたんだよ。だから事情を聞きたいなって思ってたね」

「信様の言うことなら信じられます。分かりました。今彼女をご案内致しますね」

信は先に地下のツキカゲ基地へと向かうと、銀もカトリーナによつてツキカゲ基地へと案内されていく。

「へえ。地下にこんな場所が・・・」

「あまり驚かないのね」

「確かに驚いてはいませんが、似たような場所を知ってますから」

あまり驚いていない銀は似たような施設を知っていると返すとカトリーナは他の組織の人間の可能性を疑う。

「事情は伺いました。その子が変わ身して怪獣と戦ったという女の子ですね」

「そうらしいわ」

「あく。さっきの変身を見て警戒してるんスね。そういうパターンツスね」

ツキカゲメンバーと合流したカトリーナはさっそく銀への聴取を始める。

「あなた。何処かの組織の人間？」

「組織・・・うん、どういえばいいのかな。アレが組織と言われるとそうかもしれないけど、違うかもしれないし」

銀は元いた世界で『勇者部』という部活動に所属はしているのだが、それが組織と言われると何か違うようなのだと捉え考え込む。

「じゃあ単刀直入に聞いわ。アナタの所属するチームはどんな活動をしているの?」

「普段はボランティア活動をしていますけど、有事の時には悪い怪物や宇宙人とは戦ったりしてる感じですよ。って言ってもこことは違う地球の話ですけど」

「ちよつとごめんね」

銀は正直にその事を話すと、モモは銀の手の甲を一舐めした。

「えっ? いきなり何この人!」

「どうやら嘘はついてないみたい」

モモは相手を舐めることで相手の体調や、嘘を言ってるかどうか判別できる能力があり、銀が嘘を言っていないと判断する。

「つまりアナタはこことは違う地球、平行世界から来たってこと?」

「最近をよくある話じゃないですかね」

「いや、普通信じられるわけじゃないじゃない。というかそもそもあんた人間なの?」

「真正正銘地球人ですよ。平行世界から来ましたけど」

楓はそもそも銀が地球人なのかを疑うも、銀は地球人だと告げる。

「じゃあ変身したっていうのはどういうこと?」

「そういえば自己紹介がまだでしたね。あたしは三ノ輪銀。勇者やっています」

「ゆ、勇者?」

「勇者つてのは元々バーテックスつていう怪物と戦うための変身ヒーローみたいなものなんですけど・・・まあ色々あつて今は怪獣や宇宙人と戦うのがメインみたいなものになってますね」

銀の話に初芽は「どうやって変身しているんですか？」などと興味深々となり、銀は試しにと目の前で変身してみせると、初芽はさらに彼女を質問攻めにした。

~~~~~

~~~~~

「そういうわけだからこの金で強い怪獣を売ってくれ！」

チブル星人マブゼのもとを訪れたバット星人はマブゼに事情を説明し、盗んで集めた金を提示する。

「いいでしょう。今回は作ったばかりの新作のテスト運用も兼ねて格安で提供してあげますよ」

バット星人の金を受け取ったマブゼは一枚の怪獣メダルをバット星人へと渡した。

「この怪獣は？」

「私がゼットンとキングジョーの遺伝子で培養合成したペダニウムゼットンです」

「おお!あのベリアル融合獣で有名なあの怪獣か!買った!」

ペダニウムゼットンの怪獣メダルをマブゼから購入したバット星人は町へと向かうとさっそくそれを使おうとする。

「さつきは変な地球人の妨害にあったが・・・今度の怪獣はそうはいかないぞ」

バット星人はアバレンボウルを起動して、それに怪獣メダルをセットしようとしたその時だった。

「ジュア!」

『ウルトラマンジード・マイティトレッカー!』

「ヴァアアッ!」

ウルトラマンジードの形態の1つ、ダイナとコスモスの力を使ったマイティトレッカーとなっているジードとジードダークネスが空に現れた。

「あ、あれはウルトラマンジード!?それとも1体は・・・黒いジード。噂に聞いたことのあるジードのダークネスか?」

ジードダークネスの事を知っていたバット星人は一度ペダニウムゼットンの召喚を止めにし、戦いに巻き込まれないようその場を離れる。すると・・・

「うわああっ!?!」

ジードダークネスの攻撃で地面へと落下したジードは基本形態のプリミティブへと

戻ってしまう。するとそこにジード・ダークネスが追撃の斬撃技、レッキングリッパーを放ち、それが直撃したジードは変身が解除されてしまった。

「くっ……。やっぱ強い……」

少年の名は園崎リク。勇者である三ノ輪銀の仲間であり、ウルトラマンベリアルの子、ウルトラマンジードとして数々の敵と戦ってきた少年だ。

『見たか伊智香！今のウルトラマンを！』

「タイガ君、今のウルトラマンを知ってるの？」

『今のはウルトラマンジード。別世界のウルトラマンだ』

初芽のドロロンが撮影した映像を視た伊智香はすぐさま基地の外へと出て行こうとすると、同じく映像を視た銀も外へと駆け出して行く。

「銀ちゃんまでどうして？」

「どうしてってリクさん……。あのウルトラマンはあたしの仲間だからだよ」

2人は戦いの場所へと到着すると、銀はすぐさま倒れているリクのもとへと駆け寄る。

「リクさん！大丈夫ですか？」

「う、うん。なんとかね」

「もしかしてあなたがさっきのウルトラマンですか？」

「うん。僕は園崎リク・・・もしかして君も・・・?」

リクの言葉に頷いた伊智香は右手にタイガスパークを出現させる。

「えっ? 孫市さんもウルトラマン!?!」

「この事はみんなには内緒でお願い」

ツキカゲのみんなには内緒にするようお願いした伊智香は立ち上がったリクと並び立つ。すると銀の存在に気づいたバット星人は3人の前に現れた。

「貴様、さつき俺の邪魔をした奴!」

「あつ! そういうお前はさつきの奴!」

「ここであつたが100年目だ。ここで復讐を果たす!」

『ペダニウムゼットン!』

培養合成獣ペダニウムゼットンを呼び出したバット星人。それに対して3人はそれぞれの変身アイテムを用意する。

「あの宇宙人はあたしに任せてください。2人は怪獣たちの方を・・・!」

「分かった。宇宙人は任せたま銀!」

「はい!」

勇者衣装に身を包んだ銀はバット星人へと駆け出す。

「行くよタイガ君!」



「応！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手へと持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

伊智香がウルトラマンタイガへと変身すると、隣にいるリクもホルダーからカプセルを取り出す。

「ユウゴー！」

まず起動したのはウルトラマンの力が宿るウルトラマンカプセル。

「アイゴー！」

次に起動したのはウルトラマンベリアルが宿るベリアルカプセルだ。

「ヒィアウィーゴー！」

そしてその2つのカプセルをナツクルへとセットすると、それを変身アイテムであるジードライザーでスキャンする。

「決めるぜ！覚悟！ジィィィィィド！」

『ウルトラマン』

『ウルトラマンベリアル』

『ウルトラマンジード!プリミティブ!』

そしてリクもウルトラマンジードへと変身した。

「さあ行こうタイガ!」

「ああ、ジード!ヒィアウイーゴ―!」

ジードは「それ、僕の台詞」と呟きながらも2人はジードダークネスとペダニウムゼツトンの2体と向かい立つ。

「シユア!」

「ヴアアツ!」

同時に駆け出したタイガとジード。タイガはペダニウムゼツトンへとスワローキツクと叩き込むと、ジードもジードダークネスに跳び膝蹴りを決め込む。

「ユウゴ―!」

起動したのはベリアルカプセル。

「アイゴ―!」

そしてもう1つはウルトラマンキングの力が宿るキングカプセルの2つ。

「ヒィアウイーゴ―!」

『我、王の名のもとに』

キングの力が宿る杖、キングソードを掴み取ったリクはそれにキングカプセルをセツトする。

「変えるぜ！運命！ジイイイイド！」

『ウルトラマンジード！ロイヤルメガマスター！』

ジードはウルトラマンキングとウルトラマンベリアル。最強の光と闇を併せ持つ姿、ロイヤルメガマスターへと変身を遂げるとキングソードでジードダークネスに一太刀を入れた。

『タイガ。私に代わってくれ』

「分かった！」

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

「賢者の拳は全てを砕く！」

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香は渾身の拳をベダニウムゼットンへと叩き込む。その一撃で転倒した。

「さあ、反撃といこうか。伊智香！」

「うん！」

『カモン!』

『エンシエント!』

『ソウル!』

「英霊たちの魂とともに!」

タイタス・スターエンシエントアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードして右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

タイタス・スターエンシエントへと強化変身を遂げたタイタスは魂を込めた力強い拳をペダニウムゼットンへと叩き込もうとすると、ペダニウムゼットンはバリアを展開する。

「そんなもの、賢者の拳の前には・・・無意味だ!」

バリアを容易く砕いたタイタスはそのままペダニウムゼットンへと叩き込む。

「これが賢者の拳だ」

「流石、力の賢者だなあ」

その拳の破壊力にジードも驚いていると、それでもと言わんばかりにペダニウムゼットンは立ち上がる。

「思いの外タフなようだな」

「タイタスさん。僕の力を受け取ってください」

タイタスが受け取ったのはジード・ロイヤルメガマスターの力が宿るブレスレット。

「ジード。感謝する」

『カモン！』

伊智香はさっそくそのブレスレットを装着すると、タイガスパークにかざす。

『ジード・ロイヤルメガマスターレット・コネクトオン』

ジード・ロイヤルメガマスターの力が宿るブレスレットの力を解き放った伊智香。その力を宿したタイタスは光球にジード・ロイヤルメガマスターの力を纏わせる。

「ロイヤル・・・バスターアア!!」

ロイヤルバスターが直撃したペダニウムゼットンはそのまま爆発四散すると、それを見届けたジードはジードダークネスへと向き直す。

「さてと、こつちも決着をつけないとね」

『アン！ドゥ！トロワ！』

「ロイヤルエンド！」

ジード・ロイヤルメガマスターの必殺光線であるロイヤルエンドが炸裂すると、ジードダークネスは爆発し、闇のエネルギーが四散した。

「それにしてもいったいどうしてまたダークネスが現れたんだろう? もうダークキラーは倒したはずなのに・・・」

ジードは何故自身のダークネスが復活したのかを疑いながらも変身を解除すると、同じく変身を解除した伊智香が駆け寄ってくる。

「リクさん。ありがとうございます。おかげで助かりました。自己紹介がまだでしたね。私、才賀伊智香つていいいます」

「よろしく伊智香」

「ところで銀ちゃんの方はいいんですか?」

「銀なら心配いらぬよ。強いし・・・ほら」

リクが指さす先へと伊智香は視線を向けてみると・・・既にバット星人を追い詰めている銀の姿があった。

「怪獣は倒されたぞ! いい加減観念しろ!」

「だ、誰がするか!」

バット星人は光弾を放って銀を攻撃すると、銀はその攻撃を斧でガードする。

「ちよこざいな」

「えい!」

そこに現れた信は義手から銃撃を放ちバット星人を怯ませると、その隙をついた銀は

一気に距離を詰める。

「しまった!？」

「でえええい!！」

斧を振り下ろした銀はその平たくなっている面でバット星人を叩くと、叩かれたバット星人はそのまま気を失った。

「援護ありがとうございます。ていうかその義手……」

「あ、これはね」

「カッコいいですね!！」

痛々しいなどの心配ではなく素直な感想を言ってくれる銀に「でしょ!！」と笑い返す信。

「ひとまずこれで一件落着だね。銀!そろそろ帰るよ。みんな待つてる!！」

「はい!分かりました!それじゃあたしはこれで……」

「ジイイイド!！」

『ウルトラマンジード・ノアクティブサクシード!』

ジードは次元を超える事ができる形態のノアクティブサクシードへと変身すると銀を手のひらに乗せる。

「またね〜!銀ちゃん!！」

銀を乗せて飛び去って行くジードに信は見えなくなるまで手を振り続けていた。



## 風来坊と夜明けのコーヒー

タイガのいる宇宙。とある戦士が1体の強敵と戦っていた。

「オオオオオシユアー！」

「ジユウワツッ！」

聖剣オーブカリバーを武器に戦う戦士、ウルトラマンオーブ・オーブオリジンが戦うのは闇のエネルギーで作られた存在、ウルトラマンオーブダークネスだった。

「まったく……。お前さんはなんで復活しやがった？」

「……………」

「まあ答えてくれるわけないか」

オーブは質問に答えようとしないオーブダークネスにため息をつくときオーブカリバーを振るって一撃をお見舞いする。

「オーブフレイムカリバー！」

「ジユウツァー！」

怯ませたところに尽かさずオーブは炎属性の攻撃であるオーブフレイムカリバーを放つと、オーブダークネスも対抗してフレイムカリバーを飛ばしてくる。その炎同士が

ぶつかり合い爆発を巻き起こすと、爆炎を突き抜けてオーブダークネスが刃を振るってきた。

「っ！シユア！」

オーブはカリバーによる攻撃をカリバーで受け止めつつも、回転盤を回転させて風属性の力を解き放つ。

「オーブウインドカリバー！」

「っ!？」

竜巻攻撃に吹き飛ばされたオーブダークネスは体勢を立て直しつつ八つ裂き光輪を飛ばしてくると、オーブはそれをカリバーを振るい叩き割る。

「オーブスプリーム・・・カリバアアアア！」

必殺光線であるオーブスプリームカリバーを放つと、その一撃が命中したオーブダークネスは爆発四散して、闇のエネルギーは消滅した。

「あばよ」

オーブダークネスとの戦いが終わり、オーブは変身を解除して人間の姿となる。彼の名はガイ。宇宙を旅する風来坊だ。

「さてと一仕事終わったことだし、ひとつ風呂と洒落込むか」

一仕事終えたからとガイは近くの町の銭湯へと足を進めていく。そんな中彼が向

かった町というのが空崎だった。

~~~~~

~~~~~

ジードとの共闘から1週間後、まもなくクリスマスマスが近づいてきた頃、ツキカゲ達は見回りをした後、Wasabiへと戻って来た。

「お疲れ。そっちは何か怪しそうなことはあった？」

「もうすぐクリスマスだから警戒はしてたけど、これといって怪しいのはなかったよ」

帰って来たモモと伊智香は少し前に戻って来たばかりの命と楓に異常はあったかどうか尋ねたが、異常はなかったようだ。

「あとは初芽さんに報告をして今日は終了だね」

4人は地下に降りて初芽に報告をしようとしたその時だった。

「セキュリティ対策が甘いなあツキカゲ。俺より優秀な宇宙人なんて五万といるぞ」  
「誰！」

指令室で男の声が聞こえたのでモモと伊智香はすぐさま銃を構えて声の主へと向ける。そこにはモジャつとした髪に黒いスーツを着た1人の男性がいた。

「貴方は何者？」

「俺はジャグラス ジャグラー。ある事を伝えてやるためにお前らの基地までわざわざ来てやったんだ。感謝しな」

『ジャグラスジャグラー・・・この人が・・・』

どうやらタイガ達トライスクワッドはジャグラーのことを知っているようだ。

「知ってるのみんな？」

『ジャグラスジャグラー。ウルトラマンオーブとライバル関係にある闇に魅入られた戦士だ。だけど一概に闇の戦士ってわけじゃなくて、場合によってはオーブやジードと一緒に戦うこともあるって聞いたことがある』

伊智香は闇の戦士だからと言っても一概に悪い人でもないんだと思いつつも、他のメンバーは警戒心を解かないまま聴取を続ける。

「・・・目的？」

「それは私からご説明いたしますね」

ひよっこりと現れた初芽はジャグラーと名乗った男の隣に立つ。

「先ほども自己紹介をしていましたがこの方はジャグラーさん。宇宙人です」

「う、宇宙人！」

楓は咄嗟に身構えるも初芽は「まあまあ」と宥める。とは言っても初芽もまだ警戒を解いてはいないようだ。

「自己紹介はこれぐらいにして本題に入るぞ。・・・俺の大事な道具。ダークリングが盗まれた」

「何。さつき『感謝しな』って言うておいてまさか自分の道具を取り戻してほしいなんて言う気？」

強気に出た楓にジャグラーはねつとりとした笑いを崩さないまま続ける。

「別に盗まれたこと自体はそんなに問題じゃねえんだ。なんだかんだあつてもダークリングはいつも最後には俺のところに戻ってくるからな」

「それで・・・？どうしてわざわざここに来たの？」

「この俺から盗んだのは他の宇宙人じゃなくてこの星の人間だからだ」

「っ!？」

ツキカゲ一同は盗んだのが人間だと聞いて驚く。

「この町では有名なスリらしいんだが、生憎俺はこの町の人間じゃないからそういう奴の情報に疎い。そこで俺はある事を思いついたんだ。お前らツキカゲを利用してみようってな」

「・・・ツキカゲは便利屋じゃなくて、秘密の組織なんだけど・・・」

気軽な気分で自分達を利用しようとするジャグラーに五恵は複雑な気持ちを抱く。するとジャグラーは一点して真面目な表情となる。

「お前達は知らないだろうが、今やお前達ツキカゲはこの星の宇宙人の間ではそこそこの名が通っている。この星の防衛組織の1つとしてな」

「防衛組織って……そんな大げさな……」

「お前達は曲りなりにもウルトラマンバレットとかいうトレギアのヤロウと吊るんでいた人造ウルトラマンを退けた。『ウルトラマン』を退けたってだけで宇宙で名を売るには充分だろ」

ツキカゲ一同は「それは……まあ」と渋々その事実を納得をする。以前バレットが言っていたように人間がウルトラマンに挑むということは蟻が人間に挑むのと同じことだ。人間が勝つのは相当難しいことだ。

「まあ私達のところに来た理由は分かったけど……今、話に出てきたトレギアって誰よ？」

「なんだお前ら。トレギアの事も知らないのか？」

「もしかしてこの間、タイガが倒していた青いウルトラマンのこと？」

「知ってるじゃないか。そいつの名はウルトラマントレギア。光の国のウルトラマンのくせして、闇の力に溺れちまったいけない奴だ」

ジャグラーもトレギアの事は気に入らない様子だ。

「まあ今はトレギアの事はいいだろ。とつとつとダークリングを取り返して来い」

「だからなんでアンタが命令してんのよ。ていうかそもそもダークリングってどんなものなの？ そんなに大切なものなの？」

「大切なものと言えば大切なものだな。事実他の奴の手に回ると面倒なことになるのがパターンだな」

「面倒なこと？」

「一緒に盗まれた怪獣カード。それをダークリングにかざされたりでもしたら、そのカードに宿る怪獣が実体化する」

既にアバレンボウルと怪獣メダルで怪獣が召喚される前例があったツキカゲメンバーはさほど動揺せずはその話を受け入れる。

「随分と物騒な物を盗まれてくれたな」

「ジャグラーさん。この町で有名なスリの方々を調べてみたのですがこのリストの中にいらっしやいますか？」

犯人候補をリストアップした初芽はモニター画面にその候補者たちを映し出す。するとジャグラーは痩せ型の1人の男に反応した。

「こいつだな」

「蒲田ヤスノリ。最近釈放されたばかりの方ですね」

「犯人はヤスってわけね」

ツキカゲメンバーはさっそくヤスノリを捕まえに出撃していくとジャグラもそれに同行していく。

「見せてもらうぜツキカゲ。お前らの実力とやらをな・・・」

~~~~~

~~~~~

「あのスーツの男が大事そうに持ってやがったんだ。きつと値打ちものに違いねえ」

男の名は蒲田ヤスノリ。空崎でそれなりに有名なスリであり、つい先日まで牢に入っていたのだが、最近出所した常習犯だ。ヤスノリはさっそくダークリングを売り飛ばして金にしようとしていた。

「ていうかそもそも、これはなんだ？ガキの玩具ってわけじゃなさそうだが・・・」

ヤスノリはダークリングの使い方が分からないまま質屋へと向かおうとすると、既に住所を特定した私服のツキカゲ達を通りかかる。当然伊智香達がツキカゲだと知らないヤスノリは平然と彼女達とすれ違い、その一瞬で財布を盗み出そうとするもその手を止める。

「ダメだな。こいつ等は・・・」

伊智香達のガードは堅いと判断したヤスノリは彼女達から財布を盗むのを止めてお



くと、わざと遅れてやってきたジャグラーがヤスノリへと近づいていく。

「あいつは……!」

流石に盗んだ相手がやってきたことには驚いたヤスノリはあくまで平静を装いつつやり過ぎそうとする。

「おい、お前……。俺から盗んだものがあるだろ?とつと返せ……。いいか。もしピンチになったら俺の言った通りにしろよ」

あろうことかジャグラーはヤスノリへと話しかけ、人気のないところに行ったヤスノリからダークリングを取り戻す作戦を台無しにしてしまった。

「あの馬鹿。何考えてるのよ」

「作戦の内容はちゃんと教えたはずなのに……!」

ツキカゲメンバーはジャグラーの予想外の行動に少し動揺してしまうが、すぐさま作戦を変更してヤスノリの周囲を取り囲む。

「ちっ、お前らグルか!どけ!!」

ヤスノリは一番弱そうな伊智香を突き飛ばして逃げようとするも、伊達にツキカゲとして鍛えられていない伊智香は突き飛ばされるフリをして後ろに下がり、即座にヤスノリの腕を締め上げる。

「ぐあぁっ!」

「さあ、盗んだものを早く返してください」

「わ、分かったよ!」

降参したヤスノリは盗んだものを取り出そうとすると、ダークリングを地面にわざとらしく落とす。

「おっとっと」

ダークリングを拾い上げたヤスノリはただの先ほどジャグラーに耳元でささやかれたことを実行すべく盗んだ怪獣カードをダークリングへとかざした。

『ゼットン!』

『パンドン!』

「ん?」

自分より圧倒的に年下の少女達にやられるのが癪にさわったヤスノリが本当にただの嫌がらせのつもりでダークリングにかざした2枚のカード。それがダークリングに反応すると、2枚のカードに宿っていた力がダークリングから溢れ出してヤスノリを包みこんだ。

「な、何じゃこりゃ!?!うわあああつ!?!」

闇のエネルギーに?みこまれたヤスノリはゼットンとパンドンの闇の力を併せ持った合体魔王獣、ゼツパンドンへと変貌してしまった。

「あちやく！やっぱりこうなるのね！」

「アンタのせいよジャグラー！」

楓はジャグラーの事を責めるも、ジャグラーはまるで気にしない。

「とにかく今は怪獣から逃げるよ」

ひとまず逃げる事を優先したツキカゲメンバーは急ぎその場を離脱していくと、伊智香のみが途中で足を止める。

「行くよタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

そしてウルトラマンタイガへと変身した伊智香はゼツパンドンにスワローキックを叩きこんでから着地をした。

「ほう、この宇宙にはタイガがいたのか。ってことはトライスクワッドが……〇―50の後輩のフーマもいそうだな」

ガイは「お手並み拝見」と言わんばかりに戦いを見上げる。

「シユア！」

ゼツパンドンに回し蹴りからの連続パンチを叩き込むタイガ。するとゼツパンドンは反撃と言わんばかりに火球を飛ばしてくる。

「おっと！これでどうだ！」

それを飛んで回避したタイガは空からスワローバレットを放つもゼツパンドンは2枚のバリアでそれを防いだ。

「ストリウムブラスタアア！」

タイガはバリアを真正面から打ち破ろうとストリウムブラスターを放つも、二重に貼られたバリアは破れなかった。

『代われタイガ！俺がぶっちぎる！』

『カモン！』

「風の覇者！フーマ！」

フーマのアクセサリーを取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ！』

伊智香はウルトラマンフーマへと変身すると、その戦いを見ていたガイが反応する。

「フーマ。あいつもタイガと同じ奴と一体化してたのか」

「バリアを張るよりも先に攻撃をぶつけなければいんだろ。セイヤっ!」

フーマはバリアが張られるよりも早く攻撃すればいいと言って光波手裏剣を飛ばす。それは宣言通りバリアが張られるよりも早くゼツパンドンに到達し、確実にダメージを与えていく。

「中々やるじゃないか。さてと・・・そろそろ俺も手を貸してやるか」

自分も戦う判断をしたガイはカードホルダーを開いて2枚のカードを取り出す。

「久しぶりにお願ひしますよ。先輩方」

そう言ったガイは変身アイテムであるオーブリングを構える。

「ウルトラマンさん!」

『ウルトラマン!』

1枚のカードをオーブリングにかざすと、そのカードに宿るウルトラマンの力が解き放たれる。

「ティガさん!」

『ウルトラマンティガ!』

もう1枚のカードをオーブリングにかざすと、そのカードに宿るウルトラマンティガの力が解き放たれた。

「光の力、お借りします!」

『フュージョンアップ!』

2人のウルトラマンの幻影がガイへと重なると、ガイは光の戦士へと変身する。

『ウルトラマンオーブ・スペシウムゼペリオン!』

「シユア!」

ウルトラマンオーブ・スペシウムゼペリオン。栄光の初代ウルトラマンとティガの力を宿すバランスの取れた形態だ。

「オオオシユア!」

体を赤く光らせたオーブは跳び回し蹴りをゼツパンドンに叩き込むとフーマに手を差し伸べる。

「大丈夫か後輩?」

「アンタは・・・ウルトラマンオーブ!」

オーブの登場に驚いたフーマは彼の手を掴んで立ち上がる。

「どうしてアンタがここに?」

「ちよつと野暮用でな。そんなことより、とつとどこいつを倒すぞ」

「応!」

「スペリオン光輪!」

「極星光波手裏剣!」

オーブが光輪をゼツパンドンへと投げつけると、フーマもそれに続けて極星光波手裏剣を投げつける。するとゼツパンドンは2枚のバリアを重ね合わせるようにして2人の同時攻撃をガードした。

「ガードをぶち破るぞ！」

「ああ！」

「ゾフィーさん！」

『ゾフィー！』

「ベリアルさん！」

『ウルトラマンベリアル！』

「光と闇の力、お借りします！」

『ウルトラマンオーブ・サンダーブレスター！』

ガードを破ると宣告したオーブはジードにどことなく似ている筋肉質な姿へと変わると力強いパンチでバリアを叩き割る。

「今だ伊智香！」

「うん！」

『ギンガレット・コネクトオン』

「七星光波手裏剣！」

「ゼットシウム光線!!」

バリアが破られたところに七星光波手裏剣を与えると、オーブは両腕をクロスさせて必殺光線のゼットシウム光線を放つ。その連続攻撃を受けたゼツパンドンは何とか耐え凌ぐと、フーマとオーブは追撃をかけようとさらに姿を変える。

「セブンさん!」

『ウルトラセブン!』

「ゼロさん!」

『ウルトラマンゼロ!』

「親子の力、お借りします!」

『ウルトラマンオーブ・エメリウムスラッガー!』

オーブはウルトラセブンとウルトラマンゼロの力をフュージョンアップさせたオーブ・エメリウムスラッガーとなる。

『カモン!』

「2つの力、お借りします!」

『ウルトラマンリブット!』

『ウルトラマンスマッシュ!』

『トルネードフュージョン!』



フュージョンアクセサリーをダブルリードした伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト！』

フーマもフーマ・ストームインパクトへと強化変身してオーブと並び立つ。

「よっしゃあ！サクツと決めるぜオーブ！」

「その前に……こいつをお前に渡しておく」

オーブが1つの『光』をフーマへと託すと、伊智香の右腕に1つのブレスレットが装着された。

「エメリウムスラッガーの力が宿ったブレスレットか！伊智香！さっそく使ってみようぜ！」

「うん！」

『カモン！』

『オーブ・エメリウムスラッガーレット・コネクトオン』

「剣星光波手裏剣！」

「超ウルトラノック戦法だ！」

3つの光の刃を飛ばしたフーマはその刃でゼツパンドンを切り裂くと、それに続けてオーブも超ウルトラノック戦法で切り刻む。

「さあトドメだ！真星光波手裏剣！」

「エメリウムスラッグースペシウム！」

もはやオーバーキルと言わんばかりの必殺ラツシユをゼツパンドンへと浴びせると、流石に対処しきれなかったゼツパンドンは爆発し、ゼツパンドンに変身していたヤスノリも元の姿へと戻った。

「これにて一件落着つてか」

「フーマ。この地球にはまだ強敵がいるのは知ってるな」

「ああ。あれであいつを倒したとは思えねえからな」

フーマはトレギアの事を言われているのだ理解しつつ、オーブの言葉に頷く。

「気を付けろよ。お前ら」

「分かっているって！」

「フツ、軽く返してくれるな。あばよ」

遠くの空へと飛び去って行くオーブを見送ったフーマは変身を解除すると、そこにはジャグラーが立っていた。

「やっぱりお前がウルトラマンだったか」

「気づいてたんですね。ジャグラーさん」

「まあな・・・」

ジャグラーは何処か羨ましそうに伊智香に視線を向ける。するとジャグラーは何処からともなく刀を取り出して構えた。

「構えろ」

「えっ……?」

伊智香はいつたい何で? と思いつつも刀を構えた瞬間、ジャグラーはいきなり抜き、攻撃を仕掛けてきた。

「きやあっ!」

その一撃を刀で受け止めた伊智香は威力を抑えきれずにその場に尻餅をつく、ジャグラーは刀を収める。

「蛇心抜刀斬だ。覚えとけ」

そう言い残したジャグラーはため息をつきながらその場を去って行くこうとする。するとジャグラーの前にガイがやってきた。

「珍しいな。お前さんから誰かに剣を教えるなんて」

「お前、見てやがったのか」

ジャグラーは「見られたくないやつに見られちゃった」と呟きながらその場に落ちているダークリングを拾い上げる。

「どうしてこんなあいつ等を試すような真似をしたんだ?」

「何言ってるやがる?」

「お前さんがみすみす地球人に大事なものを盗まれるわけないだろ。わざと盗ませて、あいつ等を試した。違うか?」

「.....」

ジャグラーはガイの問いかけに答えず去っていく。

「やっぱりジャグラーもトレギアがどう動くか警戒してるのか」

ガイはジャグラーの真意を一人理解しつつも、ハーモニカのような楽器を奏でながらその場を去って行った。

## 最高のユナイト

「ここだなエックス」

『ああ。おそらくこの場所がこの辺りで最も技術力が高い』

「でもここ。カレー屋だぞ」

Wasabiの前に立つ青年の名は大空大地。専用デバイスの中にいるウルトラマン。ウルトラマンエックスとユナイトすることで数多くの敵と戦ってきた別宇宙のウルトラ戦士、ニュージエネレーションズの1人だ。

『試しにこのエリアのスキャンしてみるといい』

「・・・分かった」

大地はエックスに言われるがままWasabi周辺をスキャンしてみると、その解析データに違和感を感じた。

「確かに地形データが改ざんされてるんだな。地下に基地みたいな施設があるみたいだ」

『おそらくこの世界の防衛隊、もしくはそれに順するものの基地と考えていいだろう。ひとまず店内へと入ろう』

「他にできることもなさそうだしね」

地下に基地があることに気づいた大地はひとまず Wasabi の店内へと入ってみる。

「とりあえず何か食べようかな」

この世界に来てからまだ何も食べてなかった大地はまずは腹ごしらえをしようとしてメニューを確認する。

「とりあえずカツカレーに・・・」

大地はカツカレーを注文しようとしたまきにその時だった。

「っ!?! いったい何が・・・!」

辺りに地響きが轟いたので、大地は慌てて店の外へと出て確認をしてみると、そこには以前タイタスが打ち破ったセグメゲルが現れていた。

『セグメゲル! また復活したのか!?!』

『いや、おそらく違う個体だろう。ここは毒に耐性のある私が・・・』

「待ちな旦那。せっかくな来たリベンジチャンスだ。俺に行かせてくれよ」

「行くよフーマー!」

『カモン!』

「風の覇者! フーマー!」

「あの子、まさか・・・」

そこで大地は偶然にも伊智香が変身しようとする瞬間を目撃してしまう。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー！』

ウルトラマンフーマーへと変身する伊智香を目の当たりにした大地は「やっぱり」と冷静な反応をする。

「やっぱりウルトラマン。それもトリスクワッドのフーマだったなんて・・・」

『大地、私達も・・・』

「いや、俺達は昨日の戦いのダメージが残っているから、あの相手はフーマに任せよう」  
大地は伊智香がウルトラマンフーマーに変身した事に少し驚きながらも、先日の戦いのダメージが残っているからとこの場はフーマに任せた。

「セイヤっ！」

高速で接近したフーマは光を纏わせた右足で回し蹴りを叩き込むと、その一撃に怯んだセグメゲルは転倒する。

「おらおらどうした。そんなんで俺のスピードについてこれるのかよ！ニンツ！」

兆発したフーマはドロンと消えたかと思えばセグメゲルの真上に現れてかかと落としを叩き込む。

「さてと、トドメはコイツで行くぜ！伊智香！」

『カモン！』

「2つの力、お借りします！」

『ウルトラマンリブット！』

『ウルトラマンスマッシュ！』

『トルネードフュージョン！』

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト！』

フーマはフーマ・ストームインパクトへと強化変身をすると、5人に分身してセグメゲルを攪乱する。

「「「「おらおらどうした？俺はここだぜ」」」」

戸惑うセグメゲルを光の剣で斬りつけるフーマ達。高速で移動するフーマにセグメゲルの体液は付かず、圧倒していると伊智香はトドメを決めようとする。

『カモン！』

「トドメはこれで！」

『オーブ・エメリウムスラッガーレット・コネクトオン』

「おっしやあ！剣星光波手裏剣！」



3つの光の刃を飛ばす必殺技、剣星光波手裏剣を受けたセグメゲルは爆発した。

「どうやらフォーマが勝ったみたいだなエックス」

『そうみたいだな』

大地とエックスはフォーマの勝利に一安心すると再び店内へと戻る。

「すみません。注文いいですか？」

大地はそのままカツカレーを注文すると、その待ち時間店内を再びエクスデバイザーでスキヤニングする。

『店の奥の方に地下に続く道があるようだな・』

防衛チームXi oのラボチーム所属の研究者である大地はプロテクトされている基地内のデータを解析する事に集中してしまっているとその背後をカトリーナに取られてしまう。

『大地！後ろだ！』

「えっ？」

「あなたは何者？何故ここを調べているの？答えによつては・・・」

「ま、不味いよエックス！どうしよう！」

『ここは正直に質問に答えたほうがいいかもしれないな』

大地は目隠しをされた状態で基地へと連行されていくと、そこには既にモモが待機し

ていた。

「まずは1つ目の質問よ。あなたは何者？」

「お、大空大地つて言います。信じられないかもしれませんが、別の宇宙の地球から来ました」

「・・・どうやら本当みたいです」

カトリーナは「また別の宇宙から」と驚きつつも、モモは大地の手の甲を舐めてそれが真実だと確認する。

「なんの目的でここを探っていたの？」

「えっと・・・ここがこの辺で一番技術力のある施設だと判断したからです。今この宇宙に來てる強敵を倒すにはサイバー怪獣の力が必要なんですけど、この地球でその力を使うにはデバイスと外部アンテナの調整が必要で・・・」

「本当みたいです」

「俺達と言ったわね。仲間は何処にいるの？」

「ここです」

『初めまして。私はウルトラマンエックス』

ウルトラマンを名乗る声が聞こえてきたデバイスに驚いていると、少し遅れて初芽がやってくる。

「ウルトラマンエックスさんですね。今あなたは何処にいらっしやるんですか?」

『このデバイスの中だ。私は現在自らの体をデータ化して大地のデバイスの中に入っている』

「自らをデータ化! ちよ、ちよつとこのデバイスを解析、分解してみたいですか!」

「解析はいいけど、分解はやめてくれないかな。・・・あとそろそろ俺を解放してくれない?」

身の潔白を証明した大地は無事解放されると、さっそく自分がこの世界へとやってきた理由を説明し出す。

「俺達が折って来た強敵っていうのはウルトラマンエックスダークネス。俺とエックスが一度は倒した相手が蘇ったんだ」

「蘇ったって・・・どう言う事?」

「蘇った理由は分からないままだけど、蘇った原因がこの地球にあるってところまで突き止めて、ここにやってきたんだ」

「蘇った理由が・・・この地球に?」

「エックスダークネスは以前戦った時よりも強くなっていた。倒すにはサイバー怪獣の力が必要なんだ」

「そのサイバー怪獣というのは何なのですか?」

警戒心を解き、既に興味と好奇心が上回っている初芽はサイバー怪獣とは何かを尋ねると、大地はサイバーゴモラのカードを取り出す。

「サイバー怪獣つてのは俺の所属する防衛チーム『X i o』が作り出した怪獣の力を借りるために開発したシステムなんだ。このサイバーカードを使うことでエックスはモンスアーマーを纏ってパワーアップしたり、サイバー怪獣を召喚して一緒に戦うこともできるんだ」

「それは凄いい技術ですね！ぜひともその技術を教えてくださいませんか！」

目を輝かせるながら教えて欲しいと懇願する初芽。なおも大地は話を続ける。

「だけどここの地球ではサイバー怪獣を呼び出すことができない。そこで技術力の高かったこの施設にその中継ポイントの役割をして欲しかったんだ」

「それは・・・」

「いいですよ」

カトリーナが渋るのを他所に初芽はその許可をしてしまう。他のメンバーは苦笑しながらも「まあ初芽が許可してしまったのなら」と納得すると大地はさっそく初芽と協力してその調整に入った。

~~~~~

~~~~~

「なるほど。今度はウルトラマンエックスがこの地球へとやってきたか」

エックスが自分のいる地球にやってきた事に気づいたトレギアこと霧崎はセグメゲルの力が宿る指輪を磨く。

「さて、別に私はエックスに興味はないのだが・・・今行おうとしてる計画の邪魔をされては困るからね。彼は君に任せる事にするよ」

霧崎は近くに不法投棄されていた壊れたパソコンの画面を見つめると、そこには自身をデータ化しているエックスとダークネスが映っていた。

「なんだ？まだエックスとの戦いで負ったダメージが残っているのか？しょうがない奴だな」

指をパチンと鳴らした霧崎は自身の闇のエネルギーをエックスとダークネスへと分け与える。するとエックスとダークネスはエックスとの戦いで受けたダメージをたちまち回復させた。

「さあ行け。ダークネス」

「イイイイサアッ!!」

モニター画面から飛び出るように実体化したエックスとダークネスは出現と同時にゴモラーアーマーを見に纏った。

~~~~~

~~~~~

現れたエックスダークネスはサイバゴモラアーマーを一瞬だけ身に纏うと、そのアーマーをパージする。するとアーマーはサイバ怪獣であるサイバゴモラによく似た怪獣、サイバゴモラダークネスとなった。

「あれがサイバ怪獣ですか？」

「ああ。元々モンスアーマーの技術までコピーしていたエックスダークネスはさらに強化されて、サイバ怪獣の召喚までできるようになっていったんだ」

『エックスダークネスは強い。サイバゴモラの力を借りたい。初芽、残りの調整は任せたぞ』

サイバ怪獣の召喚までできるようになったのだと説明した大地。そしてエックスも残りの調整を初芽へと任せると、大地はすぐさま外へと出て行く。そして騒ぎに乗じて伊智香もひっそりと外へと出て行く。

「君は・・・確か伊智香ちゃんだったね」

「はい。私もお手伝いします」

「ありがとう。一緒に戦おう」

伊智香がタイガスパークを出現させると、大地は頷く。

「行くぞエックス！」

『ああ！ユナイトだ！』

エックスのスパークドールズを手に取った大地はそれをエクステバイザーにリードする。

『ウルトラマンXとユナイトします』

「エックススウウウウ！」

『エックス・ユナイテッド』

そして大地はエックスとユナイトし、ウルトラマンエックスへと変身を遂げた。

「私達も行くよタイガ君」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香はエックスと並び立ち、エックスダークネス

とサイバーゴモラダークネスの前に向かい立つ。

「イイイサアア！」

エックスダークネスにパンチを叩きこむエックス。それに合わせるようにタイガもキックを叩き込む。

「イイイサツ！」

対するエックスダークネスは大の字に手足を広げてアタッカーエックスのダークネス版、アタッカーダークネスエックスを放ってくる。

「っ!!」

『サイバーベムスターアーマー・アクティブ』

ベムスターの力を鎧にしたベムスターアーマーを纏ったエックスはその盾でアタッカーダークネスエックスの炎を吸収すると、その炎を返すように盾から炎を放つ。

「ジュアア！」

しかしエックスダークネスはゼットンのを鎧にしたゼットンアーマーを纏ったエックスダークネスは火球でその炎を相殺した。

「以前戦った時はゴモラアーマーしか使えなかつたはずなのに、今のあいつは俺達が使えるすべてのモンスアーマーを装備できるようになっている。気を付けて」

「あつちが怪獣の力ならこっちはウルトラマンの力だ！伊智香！」



「うん！」

『カモン！』

『オーブレット・コネクトオン』

「スプリームブラスタ―!!」

オーブレットの力を解き放った伊智香。そしてタイガはその力を宿したスプリームブラスタ―をエックススタークネスへと放つも、エックススタークネスはゼットンシャッターによるバリアでその一撃を防いだ。

「モンスタ―マーはゼットンのバリアも使えるのか。うわっ!?!」

ゼットンのバリアも使えたことに驚いたタイガはサイバーゴモラダークネスの尻尾による一撃を受けて転倒してしまう。

「くっ、だったら鎧には鎧だ！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

タイガ・フォトンアースへとなって起き上がったタイガはサイバーゴモラダークネスにアツパーを叩き込みながら立ち上がると、エレキングアーマーを纏ったエックススタークネスは電撃光線でタイガを狙ってくる。

「危ない！」

「ぐああっ!?!」

エックスはタイガの前に出て電撃光線をガードしようとするも、電撃なのでベムスターアーマーで吸収する事が出来ず、ダメージでアーマーが解除されてしまう。

「大空さん!?! きゃあっ!?!」

エックスと大地を心配する伊智香に対し、エックスダークネスはタイガへと追撃を仕掛けてくる。

「くっ、スワローバレット!」

タイガは追撃の光弾をスワローバレットで撃ち落とした。

『伊智香。私にウルトラチェンジだ。奴のまがい物の鎧など賢者の拳で打ち砕く』

「分かったよ」

『カモン!』

「力の賢者! タイタス!」

タイタスのアクセサリーを取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス!』

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香はエックスダークネスの電撃光線を拳で払いのける。

「こつちもパワー勝負だエックス!」

『サイバーゴモラアーマー・アクティブ』

ゴモラの力を鎧にしたゴモラアーマーを見に纏ったエックスはタイタスと並び立つと同時にエックスダークネスへと駆け出す。

「タイタス！ プラネットハンマー！」

右腕に赤い電撃、左腕に青い電撃を宿したタイタスはその両腕を組んで黄色い電撃を発生させ、3色の電撃を纏ったダブル・スレッジ・ハンマーを叩き込む。

「ゴモラ振動波！」

その一撃に怯んだエックスダークネスに尽かさずゴモラ振動波を決め込むと、そのダメージでエックスダークネスのエレキングアーマーが解除された。

「よしー！」

『大空さん。聞こえますか？』

そこに初芽からの通信が入る。

「この声、初芽？」

『調整が完了しました。これでサイバーゴモラの召喚が可能なはずですよ』

「ありがとう！・・・よし行くぞゴモラ！」

『リアライズ』

大地はさっそくと言わんばかりにエクステバイザーに再度サイバーゴモラのカード

をインストールすると、ゴモラアーマーが解除されて、タイタスの隣にゴモラのサイバー怪獣、サイバーゴモラが現れた。

「ここからが本番だぞエックス！」

『ウルトラマンエックス・パワーアップ』

「エクシード！エックス!!」

虹の剣、エクスラッガーを出現させた大地はその力を解き放つとエックスは強化形態であるウルトラマンエクシードエックスとなる。

「こつちもパワーアップだ伊智香！」

「うん！」

『カモン！』

『エンシエント！』

『ソウル！』

「英霊たちの魂とともに！」

タイタス・スターエンシエントアクセサリーを手に取った伊智香はそれをダブルリードして右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント！』

タイタス・スターエンシエントへと強化変身を遂げたタイタスはダブルバイセツプスのポーズをしてサイバーゴモラダークネスの超振動波を正面から受け止めると、拳を振り上げてサイバーゴモラダークネスにアッパーを叩き込んだ。

「タイタス。これを使ってくれ」

エクシードエックスはタイタスに『光』を託すと、その光はブレスレットとなつて伊智香の右腕に装着される。

「行くよタイタスさん！」

『カモン！』

『エクシードエックスレット・コネクトオン』

エクシードエックスの力が宿るエクシードエックスレットの力を解放した伊智香。するとタイタスは虹色に輝く光球を作り出す。

「エクシード・・・バスターアア!!」

その光球を殴り飛ばすタイタス。その光球はサイバーゴモラダークネスへと命中し、爆発四散する。

「こつちも決めるぞエックス！」

「ああ！大地！」

額にエネルギーを集束させていくエクシードエックス。すると先にサイバーゴモラ

が動いた。

「ゴモラ！サイバー超振動波だ！」

サイバーゴモラの必殺技。サイバー超振動波を受けたエックスダークネスはふらつき、膝をつく。そこにチャージを終えたエクシードエックスが光線を放つ。

「エクストラッガーショット！」

エクシードエックスの必殺の一撃。エクストラッガーショットがエックスダークネスを撃ち貫く。その一撃でエックスダークネスは爆発すると闇のエネルギーが霧状になって消えていった。

「結局どうしてあいつは復活したんだろうな」

「おそらくこの地球にアイツがいるからなのかもしれないな」

「アイツって・・・まさかトレギアか？」

「そうとしか考えられない」

エックスはトレギアがいるからだと言ひ、大地もその可能性に納得する。

「ともあれアスナ達が心配しているだろうし、一度俺達の地球に戻ろう」

『ウルティメイトゼロ・ロードします』

『ウルトラマンゼロアーマー・アクティブ』

エクシードエックスは通常のエックスの姿へと戻ると、ウルトラマンゼロの力を模倣

したカードをロードしてウルティメイトゼロの鎧『ウルティメイトイージス』を身に纏う。

「俺達は一度元いた地球に帰るよ」

エックスが空に時空を超える穴を広げようとすると、初芽が基地から外へと出てきた。

「大空さん！エックスさん！」

「初芽、協力ありがとう。君達のおかげでエックスダークネスを倒すことができたよ」

「ぜひまたいらしてください。今度はもっと大空さん達の科学技術を教えてもらいたいです」

「ああ、近いうちにまた来るよ」

初芽に近いうちにまた来るよ約束した大地。するとエックスは空間に穴を広げる。

「トライスクワッドのみんな。気を付けろ。分かっているとは思いますがトレギアはエックスダークネスよりも強敵だぞ」

『分かっている。だけど俺達は負けない！トライスクワッドの絆の炎はあんな奴に消されやしないさ』

「絆の力か。君達も最高のユナイトを見つけたようだな」

キズナの力を『ユナイト』と表現したエックスは時空を超えて元の世界へと帰ってい

く。「こうしてはいられません。今回は急ピッチだったので一回かぎりの召喚しかできませんでしたが、いつ大空さん達が来てもいいようアンテナを再調整し直さなくては！」

初芽はいつ大地たちがやってきてもいいようアンテナの調整をすると意気込んで基地へと戻っていく。

「そしていつか、サイバー怪獣を私達も呼び出せるようにしてみたいですね」  
いつかサイバー怪獣を呼び出せるようにしたいという大きな夢を抱いて。



## 自分色に染めあげて

「てええええい！」

ウルトラマンロツソとウルトラマンブルのいる地球。そこではウルトラウーマングリージョこと湊アサヒがかつて自分達が倒したスネークダークネスによく似た怪獣と戦っていた。

「ハア・・ハア・・この町は絶対に私が守ってみせます」

1人町を守ろうと戦うグリージョにスネークダークネスによく似たドラゴンのような怪獣、ドラゴンダークネスは破壊光線を放つ。グリージョはバリアを張ってその光線を防ごうとするも、光線を防ぎきったグリージョは死角から襲ってきた尻尾の攻撃によつて転倒してしまう。

「きやあつ!？」

倒れるグリージョに向かって再び放たれるドラゴンダークネスの破壊光線。そんなグリージョのピンチに2人の戦士がやってきた。

「行くぞイサミ！」

「ああ、遅れんなよカツ兄！」

「俺色に染め上げろ！ループ！」

2人組の兄弟、湊カツミと湊イサミは同じ変身アイテムであるループジャイロを取り出すと、それぞれ違う属性を持つクリスタルも取り出した。

「セレクト。クリスタル」

『ウルトラマンタロウ』

『ウルトラマンギンガ』

「纏うは火！紅蓮の炎！」

「纏うは水！紺碧の海！」

ループジャイロにそれぞれクリスタルをセットした2人はレバーを3回引いてその力を解放する。

「シユア！」

『ウルトラマンロツソ・フレイム！』

「シユアアアッ！」

『ウルトラマンブル・アクア！』

そしてカツミはウルトラマンロツソ・フレイムへとイサミはウルトラマンブル・アクアへと変身した。

「カツ兄！イサ兄！帰ってたんですか!?!」

「大丈夫かアサヒ？」

「丁度帰ってきたタイミングでこれだもんな」

久しぶりに綾香市に帰って来た2人は帰って来て早々に怪獣が現れたことにため息をつきつつも、早期決着をしようとする。

「イサミ！久しぶりにあれを行くぞ！」

「あれ？ああ、あれね！」

「フレイム！」

「アクア！」

同時にエネルギーを集束させたロツソとブル。ロツソは火球を放ち、ブルは直線状の光線を放つ。

「ハイブリッドシュート！」

ロツソとブルの合体光線、ハイブリッドシュートがドラゴンダークネスへと命中する。しかしドラゴンダークネスはまったくダメージを受けていなかった。

「効いてない!?!」

「カツ兄！クリスタルチェンジだ！」

「セレクト！クリスタル！」

「纏うは土。琥珀の大地！」

『ウルトラマンロツソ・グランド!』

「纏うは風。紫電の疾風!」

『ウルトラマンブル・ウインド!』

ロツソは琥珀色の姿をした土のエレメントの戦士、ロツソ・グランドに、ブルは紫色の姿をした風のエレメントの戦士、ブル・ウインドに姿を変える。

「イサミ! もう一回だ!」

「ああ! 今度はさつきより強めにな!」

「グランド!」

「ウインド!」

「ハイブリット・・・」

2人はもう一度ハイブリッドシュートを放とうとしたが、その合体光線よりもはやくドラゴンダークネスが長い尻尾を振るってきた。

「ぐあっ!」

「ぬおっ!」

足を狙われて転倒する2人。当然合体光線も不発に終わってしまうと、ドラゴンダークネスの頭上に紫色の魔法陣が出現した。

「カツ兄! あれって・・・」

「ああ。たぶんあれは・・・」

その魔法陣に見覚えのあつたロツソとブル。そう、その魔法陣とはウルトラマントレギアの力によつて作られた魔法陣だったので。過去何度かトレギアと接触した2人にとつて忘れられないものだったのですぐに気づいた2人はまたトレギアが来るのかと身構えていると、ドラゴンダークネスは長い尻尾でグリージョを巻き付けて、魔法陣を潜り抜けていった。

「アサヒ！」

ロツソとブルはグリージョを助けようとドラゴンダークネスを追いかけようとすも、魔法陣は消えてしまいグリージョはドラゴンダークネスとともに消えてしまった。

「くそつ、アサヒは何処に行ったんだ？」

「そうだ！アイゼンテックのアレだよカツ兄！」

「あれ？そうか！アレか！でもあれは・・・」

2人の言うアレとは探知機のこと。以前カツミがはるか遠い宇宙に飛ばされた時は異なる世界の住人のダークゾーンという力を利用して連絡を可能としたが、今回は同じようにいかない。

「そうだった。あれはダークゾーンの理論を応用しないといけないんだった」

「他に方法があるとすれば・・・そうだ。光の国だ！」

「それだ」

以前ウルトラダークキラークという強敵がグリーンジョを攫った際、光の国に行ったことがあった。2人はそれを思い出したのだ。

「あそこに行けば何か手がかりが分かるかもしれない。急ぐぞイサミ」

「ああ！」

2人のウルトラマンは「そうと決まれば」と早速光の国へと飛んでいく。

「アサヒ・・・無事でいてくれ」

「絶対にお兄ちゃんたちが助けてやるからな」

~~~~~

~~~~~

「あいたたた。ここは何処でしょう?」

目が覚めるとアサヒは見知らぬ町の原っぱに寝そべっていた。上半身を起こして辺りを見渡したアサヒはそこが綾香市ではない事をすぐに理解する。

「確か私はあの怪獣と戦ってて・・・何だか怖そうな魔法陣に・・・」

どうして自分がここにやって来たのかを思い出したアサヒはひとまずこれからどうするべきかを考える。

「とりあえず何か食べましょう！」

戦った後でお腹が空いていたアサヒはひとまず腹ごしらえをしようと歩き出す。

「そのカワイイお嬢ちゃん。コロツケ食べていけない？」

コロツケ屋の店主に話しかけられたアサヒはその香りに誘われて数分後にはそのコロツケを購入していた。

「さてと……この後どうしましょう？」

コロツケを食べ終えたアサヒはこの後の事を再び考える。ここが自分が住んでいた世界とは違う場所だということはうつつすらと気が付いている。しかし自分ではどうする事もできないのも同時に理解していた。とはいえアサヒに焦りはなかった。自分にどうする事が出来ないにしてもきつとカツミとイサミが何とかしてくれると信じていたからだ。

「カツ兄とイサ兄が来てくれるとは信じてますけど、そうすぐに来てくれるかは分かりませんし、計画的にいかない」と

計画的にと言いながらアサヒは財布の中を確認する。高校を卒業したばかりのアサヒは家の手伝いをしてそれなりのお小遣いは貰っているがバイトはしていないので手持ちが特別多いわけではない。せいぜい1日2日は節約すればどうにかなる程度の金額だった。

「お金の事も心配ですけど．．．もっと心配なのはあの怪獣ですよね」

残金も心配だがそれ以上に心配なのはおそらく自分と一緒にこの世界に来ているであろうドラゴンダークネスの事だ。ドラゴンダークネスをこの世界にのさばらせておくわけにはいかないと考えたアサヒはその手がかりを探し始める。

「うーん、中々手がかりがみつかりません」

街を歩く人に「怪獣を見かけませんでしたか？」などと聞くわけにもいかないアサヒはどうしようか迷っているところ、一人の宇宙人がこちらに向かって走って来た。

「邪魔だどけ！」

「ぎゃあっ」

走って来た三面怪人ダダはアサヒを跳ね飛ばして何かから逃げて行こうとすると黒服の少女達に取り押さえられた。

「確保じゃー！」

「観念しやがれ！」

「ダメだ。 風の部隊は強い．．．」

風の部隊であるしぶきとゆらに抑え込まれたダダは顔を変えながらもこれ以上抵抗する事を諦めると雅美が尻餅をついているアサヒに手を差し伸べる。

「大丈夫？ 怪我はない？」



「は、はい。大丈夫です」

「そう。良かった。スマツシユ」

怪我はないかを確認した雅美は左手だけをスマツシユに変身させると指をパチンとならす。スマツシユが風の部隊の仲間になったことで新たに編み出した記憶操作の技だ。

「・・・？」

「あれ？」

本来ならばそれを発動したら相手は気を失うはずなのだが、アサヒは意識を失わなかった。それもそのはず。その技は普通の地球人にも通用する技であり、ウルトラマンであるアサヒには通用しなかったのだ。

「どういうことスマツシユ？」

『この人、まさか・・・』

スマツシユはアサヒがただの人間ではないことを察すると他の風の部隊が集まってくる。

「烏枢沙。ちゃんと記憶を消した？」

「いえ・・・。この人の記憶は消せませんでした」

「えっ？どういうこと？」



スマツシユの言葉で警戒心を解いた風の部隊は何故彼女がこの地球に来たのか事情を聞き始めた。

「私の2人のお兄ちゃん・イサ兄の同級生の辰巳竜也さんって人が私の目の前で怪獣に変身しちゃったんです」

「怪獣に? どういう事?」

「以前私達の地球にはウルトラマントレギアという悪いウルトラマンが現れた事がありました。トレギアは一番上の兄のお友達を怪獣にしちゃったことがあったんです」

『トレギア。やはり彼が絡んでましたか』

スマツシユはトレギアが事件に絡んでいた事を予想していたようで「やはり」と反応する。

「怪獣の姿が見えないという事はたぶん辰巳さんは今は怪獣の姿じゃないのかもしれない」

「元の姿に戻って活動しておるといふことか。その男の特徴は分かるかの?」

「今、似顔絵を描きますね」

アサヒは辰巳竜也の似顔絵を描き始めるが・・・その似顔絵はまるで子供の落書きのような絵だった。

「これはまあ・・・独創的な絵だね」

「いやこれ、下……」

ゆらは下手と口走ってしまいそうになるも飛粋にその口を塞がれる。

「何か特徴はないの？」

「特徴ですか？ 頬にドラゴンの入れ墨シールを貼ってるってイサ兄が言っていました」

「頬にドラゴンの入れ墨……。分かりやすい特徴で助かるよ。よし、その人を探そう」

凧の部隊はさっそく散会してドラゴンの入れ墨という特徴のある辰巳竜也を探し始める。アサヒも雅美に同行する形で共に探し始めた。

「あの、烏枢沙さんでしたっけ？ あなたもウルトラマンなんですよね？」

「うん。まあ……そうだね」

スマツシユの力を自分の力だと考えてない雅美は少し不機嫌になる。

「私はスマツシユに身体を貸してるだけで、私自身がウルトラマンってわけじゃないのだから……」

だからあなたとは違う。そう告げようとするとアサヒは雅美の手をギュツと握る。

「私のこの力は大切な友達から受け取った大事なものなんです」

アサヒは思い出す。その力を受け継いだ時のことを。

「人々のために戦える。それだけでウルトラマンなんです。だから大丈夫。あなたも立派なウルトラマンですよ」

「私も・・・ウルトラマン。そっか・・・私はこれでも良かったんだね」  
「そうです。自分らしい色でいていいんですよ！」

雅美はアサヒの言葉に納得すると、ちょうどパチンコ店に入ろうとする辰巳竜也を見つけた。

「いました！あの人です！」

「っ！しまった！」

アサヒに気づいていた辰巳竜也は慌ててその場から逃げようとする、雅美はすぐさま駆け出して取り押さえようとする。

「くそっ、こっぴなつたら・・・ウオオオオオ!!」

辰巳竜也は雄叫びを上げながらドラゴンダークネスへと変身すると、雅美はスマッシュスパークを取り出す。

「ありがとうアサヒ。おかげで少し私も変われるような気がしたよ。・・・行くよスマッシュユ！」

『はいー!』

「私も行きますー！」

雅美はスマッシュスパークを掲げてウルトラマンスマッシュユへと変身を遂げると、アサヒもルーブジャイロを取り出してウルトラウーミングリージョへと変身を遂げる。

「スマツシユファイ！」

スマツシユは跳び回し蹴りをドラゴンダークネスへと叩き込むと光のナイフを作り出して、ドラゴンダークネスの首元を斬りつける。しかし頑丈な外皮をしたドラゴンダークネスにその刃は届かなかつた。

「てえええい」

グリージョも加勢してドラゴンダークネスにパンチやキックを決め込むも、元々身体能力があまり高くないグリージョの攻撃では怯む素振りも見せない。

「シユーテイングスマツシユ！」

スマツシユは苦し紛れに必殺光線を放つと、対するドラゴンダークネスも口から光線を放ってくる。その2つの光線はぶつかり合うも、スマツシユの光線の方が押し負けそうになってしまう。

「私だって・・・ウルトラマンなんだ！」

雅美の覚悟に呼応するかのようスマツシユの光線技の威力が増していくと、スマツシユの光線がドラゴンダークネスの光線に撃ち勝ち、ドラゴンダークネスへと命中する。その一撃でドラゴンダークネスは転倒すると、エネルギーを大量に消耗したスマツシユのカラータイマーが赤く点滅する。

「今、エネルギーの回復を・・・」

「いえ、いいです。丁度交代要員が来たようですから」

「行くよタイガ君！バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

変身を解除するスマッシュ。そしてスマッシュと入れ替わるように伊智香はウルトラマンタイガへと変身し、グリージョの前に現れた。

「スワローバレット！」

スワローバレットでドラゴンダークネスを攻撃したタイガはすぐさま距離を詰めて連続パンチを叩き込む。

「どうだ！」

少しはダメージを受けただと反応するタイガだったが、ドラゴンダークネスは全く怯んでないどころか熱線を放ってタイガを攻撃してくる。

「危ない！」

グリージョは咄嗟にバリアを張って光線を防ごうとするも、その光線の威力に押し負けそうになってしまう。

『ウルトラマンロツソ・ウインド！』

「シユア！！」

『ウルトラマンブル・フレイム！』

「ダアアッ!」

そんな2人のピンチに駆けつけたのは2人のウルトラマン。ロツソとブルだった。ロツソは風のエネルギー弾を投球モーションでドラゴンダークネスへ投げつけて牽制し、そこにブルが炎を纏わせたキックを叩き込む。その一撃で破壊光線が妨害されたドラゴンダークネスはロツソとブルを睨みつけた。

「怒ってるみたいだが・・・怒ってるのはこっちだっての」

「大丈夫かアサヒ。それにタイガ」

「カツ兄!イサ兄!」

再開を喜ぶグリージョ。するとロツソとブルの2人はドラゴンダークネスの方へと視線を向け直す。

「よくも可愛い妹を虐めてくれたな」

「この借りはしっかりと返させてもらおうぜ」

「纏うは極!金色の宇宙!!」

『ウルトラマンルーブ!』

ロツソとブル。2人のウルトラマンが金色のオーラを纏いながら1人のウルトラマンへと変身する。ロツソとブルの合体したウルトラマン。ウルトラマンルーブだ。

「シユア!」



ループは投球のモーションでドラゴンダークネスにパンチを叩きこむ。そしてそのまま回し蹴りを決めるとループは自身の最強武器であるループコウリンを出現させた。

「ループコウリン・ブル！」

「ループ！」

「コウリンショット！」

「シユア！」

ループの必殺光輪、ループコウリンショットに合わせてタイガも光輪を飛ばす。タイガの光輪は弾いたが、ループのコウリンショットは弾けなかったドラゴンダークネスはその尻尾が切り落とされる。

『代われタイガ！同じOー50のウルトラマンが揃ってんだから、俺にもカツコつけさせろ』

「しようがねえなあ」

「行くよフーマ」

『カモン！』

「風の覇者！フーマ！」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー!』

ウルトラマンフーマーへと変身した伊智香はすぐさまフーマフュージョンアクセスサ  
リーを手にする。

「パワーアップしていくよフーマー!」

『カモン!』

「応よ!」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

「受け取れフーマー!」

変身した直後にフーマ・ストームインパクトへと強化変身した伊智香。するとフーマ  
の隣に並び立ったループはフーマに光を託す。

「サンキュー。そんじゃさっそく使わせてもらおうぜ」

『カモン!』

伊智香はループから受け取ったプレスレット、ループレットをタイガスパークへとか  
ざしてその力を解き放つ。

『ループレット・コネクトオン』

「双星光波手裏剣!」

火と水。二つの属性を宿す2枚の光波手裏剣を飛ばしたフーマ。その2枚の光波手

裏剣に切りつけられたドラゴンダークネスは膝をつく。

『もういいだろフーマ。ここは合体同士、トライストリウムで決めるぞ』

「ええ、せつかくいいところなのによお」

『もう十分カツコつけただろ？ほら、代われ代われ』

『カモン！』

『ウルトラマンタイガ！』

「タイガトライブレード！」

再びウルトラマンタイガへと変身した伊智香は炎の剣、タイガトライブレードのスイッチを押して、柄の回転盤を回転させる。

「燃え上がれ！仲間と共に！」

「[[[[バディ・・・ゴー!!]]]]」

4人が重なり合い、タイガトライブレードを空へと掲げた伊智香はそのトリガーを引く。

「[[[[ウルトラマンタイガ・トライストリウム！]]]]」

そして炎の巨人。タイガ・トライストリウムへと強化変身するとループもロツソとブルへと一旦戻る。

「それじゃここから3兄妹揃ってといくか」

「「纏うは真！不滅の真理！」」

『ウルトラマングループ！』

「「シユア！！」」

ロツソとブル。そしてグリーンジョの3人のウルトラマンが1つとなって神秘の巨人、ウルトラマングループへと変身を遂げるとタイガの隣に並び立つ。

「これで決めるぜ！」

伊智香はタイガトライブレードのスイッチを4回押して回転盤を回転させる。

「「トライストリウムバースト！」」

「「グルービウム光線！」」

タイガとグループ。2人の必殺光線を受けたドラゴンダークネスは爆発四散すると怪獣にされていた辰巳竜也は元に戻る。

「やったな！」

「「っ！」」

そしてその無事を確認したタイガとグループは互いの健闘と称えるように握手をした。

~~~~~

~~~~~

「風の皆さん。色々ありがとうございます」

変身を解除した湊兄妹は戦いを見守っていた風の部隊にお礼を告げる。

「うちの妹がご迷惑をお掛けしました」

カツミも風の部隊へと頭を下げる。

「ドラゴンダークネスになってた辰巳は俺達連れて帰るから安心してくれよな」

「それじゃあ皆さん、また機会があればここに来ますね」

別れの挨拶を済ませた3人は再びウルトラマンへと変身すると辰巳竜也を連れて、遠く空へと飛び去っていった。

「行っちゃったね」

『しかし近いうちに会える。そんな気がします』

近いうちにまた会える。そう確信した雅美達は再開を信じつつもグリーンジョー達が見えなくなるまで空を眺めていた。

## この銀河の果て

「ウルトラタツチッ！」

ウルトラマンギンガとビクトリーのいる世界。彼らは今日も地球を守るため、地球に脅威をもたらさんとする敵と戦いを繰り返していた。

「ギンガビクトリー！」

ギンガとビクトリーが1つとなった究極のウルトラ戦士、ウルトラマンギンガビクトリー。その戦士を倒さんと敵が率いる怪獣軍団が一斉に向かっていく。

「ウルトラマンマックスの力よ！」

「マクシウムカノン！」

ウルトラマンギンガビクトリーは力を授けてくれた10勇士たちの力を使う事ができる。ギンガビクトリーは最強最速のウルトラマン、ウルトラマンマックスの力を発動し、その光線技で3体もの怪獣を一撃で撃ち倒す。

「ウルトラマンネクサスの力よ！」

「オーバーレイシュトローム！」

続けて発動したのは絆を繋ぐ英雄、ウルトラマンネクサスの力。ネクサスの光線技で

続けざまにスペースビーストを消滅させたギンガビクトリーは怪獣達の親玉である  
ダークキラードeltaと向かい立つ。

「お前で最後だ。ダークキラードelta」

ダークキラードelta。一度はニュージェネレーションズが力を合わせて倒したはず  
のウルトラダークキラードeltaが何者かの策略により復活し、パワーアップしてしまつた姿  
だ。

「またしても貴様らか。ウルトラマン共め」

「それはこっちの台詞だ」

「何でまた復活した。二度と復活できないように倒したはずだぞ？」

ギンガビクトリーのインナースペースにいる変身者の礼堂ヒカルとシヨウは自分達  
が復活しないように倒した事を気にしていた。するとダークキラードeltaは素直にそ  
の理由を語り出す。

「多少、あいつからの協力こそあったが・・・お前達ウルトラマンへの怨念の力だ」

「あいつ・・・ああ、あいつか」

ギンガビクトリーはダークキラードeltaの言う『あいつ』がトレギアの事だと理解す  
ると、それ以上聞くことはないと言力を集束させる。

「これが人間とウルトラマンの絆の力だ！」

「ウルトラフュージョンシュート！」

「ぐあああああつ!？」

ウルトラ10勇士すべての力を集束させた最強の必殺光線ウルトラフュージョンシュートが炸裂し、ダークキラードeltaが爆発すると、その闇のエネルギーが空へと飛んでいく。

「あいつ、また何処かで復活する気か。追うぞショーウ！」

「ああー！」

ギンガビクトリーはその闇のエネルギーを追いかけて空へと飛び去って行った。

~~~~~

~~~~~

ウルトラマンタイガが伊智香達のいる地球。ここでは今日も平穏ではない事件が巻き起こっていた。

「よつと、さあ悪党ども。これ以上逃げても無駄だよ」

敷島来夢、コードネーム『ノブナガ』は今日も犯罪者たちを捕まえるべく無敵甲冑を身に纏い、縦横無尽に空を飛んでいた。



「この！撃ち落とせ！」

悪の組織達は来夢を撃ち落とさんとするも、来夢には当たらない。

「畜生！こうなつたらこれで！」

「させませぬ」

1人の男はアバレンボウルを取り出そうとすると、来夢の頼れる仲間、機械仕掛けのボディのアミイことコードネーム『ヒデヨシ』がアバレンボウルを握る手を押さえた。

「このっ！離せ！」

「それを使用すれば怪獣が何処からか転送されてくる仕組みなのは把握しております」

ツキカゲや凧の部隊と情報を交換し合っているZETはアバレンボウルの危険性を知っている。そのためそれを封じたのだ。

「どう致しまする？」

「ひとまずデータを取りたいからアバレンボウルは回収ね」

「了解致し申した」

来夢はアバレンボウルの回収をアミイに指示すると、アミイは男を電気ショックで気絶させてアバレンボウルを回収した。

「ほう。あの2人中々強いようだな」

「それに1人は・・・マナと同じアンドロイドか」

その戦いの様子を見ていたヒカルとシヨウは2人が帰還していくのに付いていった。

~~~~~

~~~~~

「ヒデヨシ。気づいてるよね？」

「はい。付けられております」

「人数は2人。おそらく先ほどの戦いも見られていたと」

ヒカルとシヨウの尾行に気づいている来夢とアミイは戦いが見られていたことにも気づいていて、あえて尾行させていた。

「どういたしますか？」

「今のところ敵意は感じないし、ここらで一度話を聞いてみるのもいいかもね」

立ち止まった来夢は振り返ると隠れている2人の方に視線を向ける。

「あのさ、ちよつとお話しない？」

「なんだ。気づかれてたのか」

「・・・フン」

ヒカルとシヨウは潔く来夢達の前に姿を現す。

「俺はヒカル。んでこつちがシヨウ。お前らが後輩達の言つてたツキカゲだな？」

「えっ？ 違うけど」

どうやらヒカルは来夢達がツキカゲだと思つて尾行していたようだ。

「・・・マジ？」

「マジマジ」

「・・・まあいいか。たぶん大丈夫だろ」

間違えていたことをあまり気にしなかったヒカル。しかし間違えられた来夢の方は『ツキカゲ』の事を知っている2人について警戒心を強めていた。

「単刀直入に聞くとよ。あんたら2人は何者なの？ UPG・・・知らない組織ね」

来夢は2人の来ているジャケットに記された組織の名前に注目する。来夢が知る限りこの地球にそう言った組織は存在していないので、なおの事2人を怪しんだ。

「知らないのも無理はねえよ。俺らこの地球の人間じゃねえし」

「えっ？ まさか宇宙人？」

身構える来夢に対してヒカルは「違う違う」と首を横に振る。

「平行宇宙。俺らの間ではマルチバースって言われてんだけどさ、違う世界の地球から来たんだよ。俺ら」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「つてなわけで俺とシヨウはダークキラードeltaを追つてこの地球にやつて来たつてわけだ」

敷島グループの社長でもある来夢は社長室に2人を招き、2人から話を聞くことにした。

「正直言つて信じがたい話ですわね」

来夢の妹である真瑠瀬、コードネーム『ミツヒデ』は2人の話すマルチバースのことを信じがたい話と捉え鵜呑みにはしていなかった。

「そもそも貴方達2人がウルトラマンだという証拠が何処にあるのです」

「証拠か。証拠ならここにある。なんなら変身してやつてもいいんだぞ」

「待て待てシヨウ。落ち着けて」

そう言つたシヨウは変身アイテムを取り出そうとするも、ヒカルに止められる。

「だがヒカル。こうでもしないとこいつ等は信じないぞ」

「そういう問題じゃねえんだよ。まあとにかく俺らが別の地球から来たってことは別に信じなくてもいいから、この世界にダークキラーデルタってやつが来てるってことは信じてくれないか？」

「・・・分かったわ。私はあなた達2人の言ってる事を信じる」

「お姉様!!」

来夢はヒカルとシヨウの話を感じる事にして、その上で尋ねる。

「そういえば私とあった時にツキカゲかどうかを聞いてきたわよね。いったいどういった要件でツキカゲに接触するつもりだったの？」

「ああ、そういやそうだったな。この世界にもウルトラマンがいるのは知ってるだろう？」
この地球にいるウルトラマンといえば伊智香に宿っているトライスクワッドの3人と、雅美に宿っているウルトラマンスマッシュ。そして闇のウルトラマンであるウルトラマントレギアの5人だ。

「ええ。知ってるわ。それがどうしたの？まさかツキカゲにウルトラマンがいるってでも言いたいなの？」

「まあ、そのまさかなんだけどな」

「・・・やっぱりそうなのね」

来夢もその可能性に薄々は気づいていた。ツキカゲのピンチに高確率で現れるウル

トラマン達。誰がどのウルトラマンまでかは流石にわからないが、以前からその可能性自体は疑っていた。

「そのウルトラマンに協力を頼みに来たってわけ？」

「協力っていうか、注意喚起だな。ダークキラードeltaは強い。タイガ達じゃ勝てないだろうからな」

「それで自分達が戦うから、ウルトラマンタイガには下がっててもらおうってわけ？そこまで心配しなくても大丈夫よ。ウルトラマンタイガだって強くなってるんだから。ついこの間だって真つ赤な炎のような姿にパワーアップをしてて・・・」

「へえ、タイガの奴が・・・」

ヒカルとショウはタイガがパワーアップしていると聞いて少し驚くもそれでも今のままのタイガではダークキラードeltaの相手は厳しいと考えた。

「ツキカゲの事を知っているという事はお前達は少なからずツキカゲとやり取りをしている組織なのだろう。なら伝えておけ。手は出すなとな」

強気な口調でそう告げるショウに、来夢はまるで自分達も足手まといだと言われているような気持ちになり、少しムツとしていると、ヒカルは話題を変えるつもりでアミイの方へと視線を向ける。

「ところで・・・ずっと気になっていたんだけど、そこにいるのってアンドロイドだよな

「？」

「ええそうよ。アンドロイドのアミー。コードネームはヒデオシよ。前は敵組織の言いなりだったけど、色々あってうちで改修して今では私達の大切な仲間なの」

「へえ、うちにも似たような境遇なアンドロイドがいるんだ。マナって言うんだけどな、前は宇宙人の言いなりになってた奴だったんだけどいつしか自分の意思を持って、俺達の地球を救うために一度は壊れちまったんだけど、俺の仲間にも優秀なやつがいてな。そいつが修理してくれて、今では俺達の大切な仲間になったんだ」

「へえ、そっちにもアンドロイドの仲間が……」

「興味深いですね」

来夢達はそのマナというアンドロイドに興味を抱いていると外の空がどんどんと黒い雲に包まれ始めた。

「来たか……!」

ヒカルとシヨウはダークキラードeltaがここに来てしまった事を察して立ち上がるとうとすると、来夢も席を立つ。

「ここは私達の地球よ。私達も出来ることはしないと。行くわよアミー!」

「承知」

無敵甲冑を身に纏った来夢はアミーと共に暗雲の中心へと飛んでいく。

「無茶する女だ」

「何処の世界にも無茶をしようとする奴がいるのは変わらないな」

「フツ。そうだな」

その行為を咎めるつもりのない2人はクスリと笑い合おうとダークキラードeltaと戦うため外へと駆け出して行った。

~~~~~

~~~~~

「さあ、来るなら来なさい。ダークキラードelta！」

来夢がそう告げた瞬間だった。青白い雷と共に闇の巨人、ダークキラードeltaが現れたのだ。

「人間だって出来ることはあるのよ！」

ウルトラマンでなくてもできることはある。そう言いながらダークキラードeltaへと攻撃を繰り出す。普通の怪獣ならまだしも、相手は闇の巨人。来夢の攻撃はまったくと言っていいほど通用しておらず、見向きもされていなかった。

「てりやあああ!!」

「目障りな・・・」

ようやく来夢の攻撃に反応したダークキラードelta。ダークキラードeltaは闇の波動を周囲に放って、その衝撃で来夢とアミイは撃墜されてしまう。

「行くよタイガ君！」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香は墜落しそうになっている来夢とアミイをキヤッチするとゆつくりと地上へと下ろす。

「いてて……。あ、ありがとうウルトラマンタイガ」

「感謝致しまする」

お礼を言われたタイガは頷くとダークキラードeltaの方へと視線を向ける。

「ウルトラマンか……」

「俺はタイガ！ウルトラマンタイガだ！」

名乗りを上げたタイガはスワローバレットでダークキラードeltaを攻撃するも、やはり怯む素振りはない。

「だったら！」

『カモン!』

『ロツソレット・コネクトオン!』

「フレイム! ブラストター!!」

フレイムブラスタターでダークキラードeltaを攻撃しようとする、流石のダークキラードeltaもその光線を手で払い除ける動作をする。

「この光の感覚。キサマ、タロウの息子が」

「ああ、俺はタロウの息子! タイガだ!」

『ウルトラマンタイガ! フォトンアース!』

タイガはフォトンアースへと強化変身をする、と角からの光線であるブルーレーザーを放つ。爆煙の中から出てきたダークキラードeltaはエネルギー弾を飛ばしてくる。

「オーラムストリウム!」

対するタイガもオーラムストリウムでエネルギー弾を撃ち落とすも、続けざまに放たれた闇の光線を受けてその場に転倒してしまう。

「これがタロウの息子の実力か?」

「ま、まだまだ!」

立ち上がったタイガはスワローキックからの連続パンチを叩き込むも、ダークキラードeltaはまったくと言っていいほど動じる素振りもない。

「何っ!?俺の攻撃が全然通じない」

「もう終わりか?ならばこちらから行くぞ」

タイガは距離を取ろうとするも、対応が間に合わずダークキラーデルタの放った闇の波動に吹き飛ばされてしまう。すると地面に叩きつけられたタイガに追い討ちをかけるかのように、ダークキラーデルタはエネルギー弾を連発してくる。

「くっ!」

バリアでその攻撃を防ぐタイガだが、一撃一撃が強力なダークキラーデルタの攻撃にタイガはどんどん後ろへと下がらせられる。

『タイガ!ここはパワー勝負だ!私に交代しろ!』

『いや、この攻撃は回避するべきだ!俺の方がいい!』

「えっ?えっ?どっち?」

伊智香はどちらに交代するか判断に迷っている間にもタイガは追い詰められていく。そんなタイガのピンチに2人の男が駆けつけた。

「さてと。俺達の倒し損ねたのを後輩に押し付けるってのは良くないよなショウ」

「当然だな」

ヒカルとショウはそれぞれの変身アイテムであるギンガスパークとビクトリーランサーを取り出す。

「行くぜギンガ！」

『ウルトラライブ！ウルトラマンギンガ！』

「ギンガアアアアッ！」

ギンガのスパークドールズを出現させたヒカルはそれをギンガスパークでライブして、ウルトラマンギンガへと変身する。

「行くぞ」

『ウルトラライブ！ウルトラマンビクトリー！』

「ハアっ！」

ビクトリーのスパークドールズを出現させたシヨウはそれをビクトリーランサーでライブしてウルトラマンビクトリーへと変身する。

「シヨオラっ！」

「ズイア！」

ギンガとビクトリーは同時にダークキラードeltaを殴りつけると、ギンガは光の槍であるギンガスパークランスを、ビクトリーは聖剣シエパードンセイバーを手にして、同時にダークキラードeltaを斬りつける。

「ギンガ！それにビクトリーも！」

「立てるかタイガ？」

「はい！」

タイガは2人が駆けつけてくれた事に驚いた反応をしていると、ギンガはタイガを立ち上げさせる。

「さあ、ここからが本番だ！」

『ウルトラマンタロウ！』

『ギンガに力を！』

『ギンガストリウム！』

「これで決める！」

『ウルトランス！ウルトラマンヒカリ！』

『ナイトティンバー！』

『放て！聖なる力！』

ギンガはウルトラマンタロウの力の一部と一体化したウルトラマンギンガストリウムへと、ビクトリーは聖なる剣、ナイトティンバーの力を解き放ち、ウルトラマンビクトリーナイトへと強化変身する。

「こつちも行くぞみんな！」

「タイガトライブレード！」

タイガトライブレードを出現させた伊智香はそれを掴み取る。

「燃え上がれ！仲間とともに！」

スイッチを押し、回転盤を回転させると伊智香にトライスクワッドの面々が重なる。

「「バディ・・・ゴー！」」

トライスクワッドの心と体が1つとなって、炎のウルトラマン。ウルトラマンタイガ・トライストリウムへとタイガは強化変身を遂げた。

「行くぞ後輩！」

「はい！」

スイッチを3回押し、伊智香は回転盤を回転させて、フーマの力を解き放つ。

「風真！烈火斬！」

「ナイトビクトリウムスラッシュ！」

タイガトライブレードを逆手に持ったタイガは炎の斬撃を飛ばすとビクトリーもナイトインバーからV字の斬撃を飛ばす。

「ウルトラマンエースの力よ！」

「メタリウム光線！」

続けてギンガもウルトラマンエースの力を再現し、メタリウム光線を放つと、3人の必殺技がダークキラーデルタへと直撃する。

「我は怨念の集合体。このような攻撃では・・・」

「嘘でしょ。私達の攻撃が効いてないなんて・・・？」

「いや。効いてない訳じゃない。俺達の必殺光線で一気に決めるぞ！」

「ガレット！」

「はい！」

ギンガの言葉に頷くビクトリーとタイガ。そして3人はそれぞれ必殺光線の構えをする。

「トライスクワッド！」

スイッチを4回押した伊智香は回転盤を回転させてトライスクワッド3人の力を解き放つ。

「トライストリウム・バアアアアストオ！」

「ギンガクロスシュート！」

「ナイトビクトリウムシュート！」

3人の必殺光線が命中すると大爆発を巻き起こすダークキラードelta。しかしそれでもダークキラードeltaは倒れない。

「まだ倒れないのか！」

「いや、不完全な復活をしたあいつは流石に限界みたいだぜ。タイガお前が決める」

ダメージによって崩れかかっている身体に気づいたギンガは自分の光をタイガへと

分け与えると、続けてビクトリーも光を与えてくる。

「タイガ。今のお前ならそれを使えるはずだ」

その2つの光はタイガの中で新たなプレスレットとなり、新たなギンガのプレスレットが伊智香の左腕に装着される。

「これは・・・ギンガストリウムの力か！」

「決めるよタイガ君」

『ギンガストリウムレット・コネクトオン』

さっそくギンガストリウムレットをタイガスパークへとかざして、その力を解き放つ伊智香。するとタイガの背後にウルトラ6兄弟の幻影が出現する。

「コスモミラクル・・・ブラスタアアア！」

タロウの力を宿すギンガストリウムの最強光線。コスモミラクル光線を再現したコスモミラクルブラスタアアが放たれ、それが直撃したダークキラードeltaは爆発し、闇のエネルギーも消滅していく。

「よくやったタイガ」

タイガの背中をバシッと叩いたギンガはギンガストリウムから通常のギンガへと戻ると、同じくビクトリーナイトもビクトリーへと戻る。

「さてと、もう一回あいつ等に顔を出してから帰るとするか」

「そうだな」

変身を解いたヒカルとシヨウは地上で戦いを見守っていた来夢とアミイのところへとやってくる。

「よかった。無事だったみたいだな」

「伊達に無敵甲冑を頑丈に作ってないわよ。つて言ってもあんなに大見得切つてすぐ撃墜されちゃったけどね。やっぱり人間の力じゃこんなものか」

笑いながらも何処か悔しそうにしている来夢に対してヒカルは告げる。

「そんな悔やむことねえよ。お前が出撃してなかったら俺達も到着まで遅れていたし、タイガの奴も到着が遅かったかもしれないんだからさ」

「でも結局はウルトラマンタイガに助けられちゃったし」

「気にすんなって。・・・俺らウルトラマンもさ、色々な人の助けがあるから戦えているんだ」

「どういうこと?」

「言葉通りの意味だけ。人間だつて完璧なのがないみたいに、ウルトラマンだつて完璧じゃないってことだ」

「そういう・・・もんなの?」

「そういうもんだ」

「まあ、慰めの言葉として受け取っておくわ……だけどまあ、次に2人に会う時にはあなた達ウルトラマンの力になれるぐらい強くなってやるんだから」

「楽しみにしてるぜ」

来夢とアミイの2人と別れを告げたヒカルとシヨウは再びギンガとビクトリーへと変身し、元の世界へと帰って行った。

ウルトラビッグマツチ

「はやくウルトラマンタイガを何とかせねば！」

「まあまあ落ち着けよ。今や俺達の商売の邪魔をしてるのはタイガ達トリスクワッドだけじゃないだろ」

「トレギアか。あいつは俺達なんか眼中にないって感じだよな」

スラン星人達のアジト。彼らはそこで自分達の商売の邪魔をするウルトラマン達をどうするか作戦会議をしていた。

「いつそ、ウルトラマン達全員を一扫できればな」

「おつ、それダジャレですか」

「ちげえよ。全然ちげえよ」

「それじゃあ僕が変身して偽タイガに・・・」

「お前には無理だ」

ザラブ星人は自分が偽物のタイガに変身して人々を騙す事を提案するもゴドラ星人は無理だと否定する。

「えー、なんでだよ」

「一人でウルトラマン達と戦って勝てるのか？」

「あつ……。それは……」

「それにあいつらを消そうとして光の国の連中に目を付けられたらどうするつもりだ？」

「それは大丈夫だ。トレギアは光の国も恐れる存在だ。あいつを倒すことができれば、そう簡単に手を出すこともできなくなるはずだ」

「ならいつそさ、VIP待遇するとかどうか？好きな食べ物とか調べてさ」

「ザラブ！お前は話にならない！許可が出るまで黙ってる！」

「まあまあ……。落ち着けよ」

『私に考えがあります』

怒るゴドラ星人をスラン星人は宥めているとチブル星人マブゼから通信が入った。すると通信機からホログラムのチブル星人マブゼが出現した。

「光の国を恐れさせるのに一番ふさわしい存在があります」

「相応しい存在？」

「ウルトラマンベリアルです」

「べ、ベリアルだ?!?あいつはウルトラマンジードに負けたはずじゃ……」

「とっておきの秘策があるのですよ。そちらの機械をごらんください」

3人はマブゼが用意していた機械に視線を向ける。

「これは？」

「それはベリアル因子です」

「なんだと!?!ベリアル因子!?!」

ベリアル因子を見せられて3人はそれぞれ驚く。

「こんなもの本当に使って平気なのか?」

「ハツハツハツ!これまでだつて培養合成獣を何体も作ってきたでしょう。さあスラン君。スイッチをポチッと押しちやってください」

「おいおい、本当にやるのか?」

「やるしか・・・ないだろ!」

覚悟を決めたスラン星人はスイッチを押すと機械が起動する。

「これで・・・ウルトラマン達を排除できるのか?」

「それにどうやってウルトラマン達を呼び出すんだ?」

「「「「・・・」」」」

チブル星人達は沈黙する。誰もそこまでは考えていなかったようだ。

「あつー!いいこと思いついた!」

何かを閃いたザラブ星人は撮影機器と電波ジャックのための機材を用意する。

「なるほどその手があったか」

「だけどそんなんでいけるのか？」

「知らないんですか？電波ジャックと言えばザラブなんですよ。この機材だつてウチの名物です」

機材の準備を終えたザラブ星人。そして撮影が始まり、それは各メディアへと配信される。

「あゝテストス、映つてる？」

「おい馬鹿！もう映つてるつての！」

カメラの前から寄せられるザラブ星人。気を取り直したマブゼは世界へ向けて発信する。

「ごきげんよう諸君。この度我々の存在を脅かすウルトラマンを、奴らの同胞の力を持つて抹殺することに致しました！」

マブゼがそう告げるとスラン星人達はベリアル因子を解き放つ。解き放たれた因子は1体の闇の巨人に・・・ウルトラマンベリアルの姿となる。

「さあ、ウルトラマン狩りの始まりだ！」

~~~~~

~~~~~

「あつ、雅美さん！」

「伊智香。あなたももしかして中継を観て？」

「はい。風の部隊もですか？」

マブゼ達の中継を観た伊智香と雅美、そして他のツキカゲや風の部隊のメンバーはマブゼ達が行動を起こす前に確保しようと飛び出たのだが、そこで偶然にも伊智香と雅美が出会った。

「っ!!」

なにか巨大なものが着地した激しい振動を感じ取った伊智香と雅美はその振動の先へと視線を向けると、そこにはウルトラマンベリアルのような何かが立っていた。

「ウオオオラアア!!」

ニセモノのベリアルは両手から電撃を放ち、周囲の建物を破壊すると、高笑いをする。
「きやあああつ!!」

逃げ惑う人々の間をかき分けて伊智香と雅美は現場へと駆けていく。

「タイガ君。あのウルトラマンは？」

「あれはベリアル。父さん達が昔手こずらされた光の国の大罪人だ」

「行くよタイガ君！」

『カモン!』

「光の勇者! タイガ!」

タイガアクセサリーを手に取った伊智香はそれを右手に持ち替える。

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ!』

「スマツシユ!」

伊智香はウルトラマンタイガへと変身をすると、隣にいた雅美もスマツシユスパークを掲げてウルトラマンスマツシユへと変身する。

「タアアアアツ!!」

「ハアアツ!!」

タイガとスマツシユは同時にニセベリアルへとキックを決め込もうとするも、鋭い爪から放たれた斬撃に迎撃されてしまう。

「うわっ!」

「ぐっ!」

地面に叩きつけられたタイガとスマツシユ。それに歓喜したスラン星人達はウルトラマン達が苦戦する姿を動画に収めようとする。

「おっ、大迫力〜!」

「スツゲ〜」

間近で見るタイガとスマツシユ、そしてニセベリアルとの戦いに興奮するスラン星人達。そこに立体映像ではないマブゼが現れた。

「当然です！私も見に来ましたよ！」

「おつ、チブル！お前も来たのか」

「ええ。私の最高傑作とも言える存在をこの目で見てみたくなりましたねえ」

マブゼがニセベリアルを最高傑作と自画自賛すると、タイガとスマツシユは起き上がる。

「こいつ、本当にベリアルなのか？」

「ベリアルであつてベリアルでないもの。言うなればニセベリアルと言つたところですかね？」

スマツシユが冷静にニセベリアルを偽物だと判断していると、ニセベリアルは駆け出して拳を振るってくる。

「シユア！」

『ウルトラマンタイタス！』

タイガの拳とニセベリアルの拳がぶつかる瞬間、伊智香はウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジしてニセベリアルと拳をぶつけ合う。

「パワー勝負なら負けない！ウルトララララララッ!!」

「ベリベリベリベリベリベリ!!」

タイタスとニセベリアル連続の拳のぶつけ合い。互いのパワーが互角の中、ニセベリアルはタイタスの両手を掴み、手を捻らせて動きを封じると、タイタスを蹴り飛ばした。

「なんと!?!ぐあつ?!」

転倒したタイタスは即座に体勢を立て直す。

「ならば……!」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント!』

「これで行こう!」

『カモン!』

パワーアップしたタイタス。そして伊智香はすぐさまジード・ロイヤルメガマスターレットを装着する。

『ジード・ロイヤルメガマスターレット・コネクトオン!』

「ロイヤルバスターアア!!」

「ウウウウアア!!」

タイタスのロイヤルバスターとニセベリアルのデスシウム光線がぶつかり合う。そ

の2つの必殺技は相殺しあい、爆煙の中からニセベリアルが突き抜けてくる。

「オオオラアッ！」

「っ！」

『ウルトラマンフォーマー！』

ニセベリアルの攻撃を空を飛ぶ事で避けたタイタスはウルトラマンフォーマーへと交代すると、フォーマーは光波手裏剣を連続して放つ。

「フンっ！」

それを弾いていたニセベリアルだったが、そのうちの1枚を背中に受けて怯む。それをチャンスだと判断したスマツシユは光のナイフを構えて斬り込もうとすると、ニセベリアルは近くのビルを持ち上げて盾にしてしまった。

「何っ!?!」

流石にビルを斬るわけにはいかないと手を止めてしまうスマツシユ。するとニセベリアルはスマツシユにビルを投げつけてきた。

「っ!・・・ぐあっ!?!」

咄嗟にビルをキャッチしたスマツシユだったが、ニセベリアルのドロップキックを受けてその場に転倒してしまう。

「ハハハハハッ！」

「この野郎!!」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト!』

『カモン!』

フーマはストームインパクトへと強化変身を遂げると、伊智香は即座にルーブレットを装着する。

『ルーブレット・コネクトオン』

「双星光波手裏剣!」

「オオオラアツ!!」

そしてフーマは双星光波手裏剣を飛ばすと、ニセベリアルはそれを八つ裂き光輪で相殺する。

「隙だらけだぜ!」

すると今度はフーマが先に動き、ニセベリアルに連続の回し蹴りを叩き込んだ。

「どうだ!ぬおっ!」

しかしその蹴りでニセベリアルは怯まず、逆にフーマの足を掴むと、フーマを地面に叩きつけた。

~~~~~

~~~~~

「へえ、ベリアルのは偽物を作っちゃうなんてチブル星人も面白いことするじゃん。だったら私も……このゲームに参加しちやおっかな」

ニセベリアルと戦うフーマとスマッシュを見上げる紫髪の少女は以前バレットが使用していたのと同様のウルトラビークルを取り出す。

「2対1じゃゲームっぽくないし、ゲームらしく2対2にしてあげないとね」

青いウルトラビークルのバンパーを叩いた少女はそのウルトラビークルを空へと放り投げる。するとそのウルトラビークルは黒いマントを右肩につけて、片目が赤く変色しているウルトラマンバレットへと変化した。

「バレットのリペア品。バレットトリペアつてところかな。天才なお姉様と違って私が修復したのだから強化まではできてないと思うけど、それでも限りなく本来のバレットに近い性能は持つてるはずだよ。さあどうくるウルトラマン達？」

「なっ……！バレットだど!？」

「どうしてバレットが復活したんですか？」

フーマとスマッシュは突如現れたバレットトリペアに驚いていると、バレットトリペアは初撃からいきなりガトリウム光線をフーマめがけて放ってきた。

「ニンっ!」

ドロンと姿を消してガトリウム光線を回避するフーマ。するとガトリウム光線の標準をスマツシユへと変えてきた。

「くっっ！」

光の槍を作り出したスマツシユはそれを高速で回転させてガトリウム光線をしのぎ切ると、スマツシユはその槍をバレットトリペアめがけて投げつける。

「フウン!!」

しかしその槍はニセベリアルが掴み取り、へし折ってしまった。

「フハハハハっ！」

へし折った槍を投げ捨てたニセベリアルは背後から奇襲をしかけようとしているフーマに気づいていて、後ろにいたフーマを殴りつける。

「うわっ!?!」

「ヌーン！」

怯んでいるフーマにバレットトリペアは回し蹴りを決め込む追い打ちをしてきた。

「フハハハハハっ！」

そしてニセベリアルはスマツシユの頭をつかみ上げると地面に叩きつける。

「おやおや? 懐かしい顔がいますねえ」

ニセベリアルとバレットトリペアに苦戦させられるフーマとスマツシユ。それを眺め

ていた霧崎はトレギアアイを手に笑い出す。

「ハツハツハツ！・・・おいおい、まさかあんな劣化品達に手こずるとはなあ」

トレギアアイを開き、顔にかざした霧崎はウルトラマントレギアへと変身すると、ニセベリアルにアッパーを叩き込む。

「トレギア！なんで・・・!?」

「順番が違うんですよ。こんな木偶の坊の劣化品達に私のゲームの侵攻を妨害されては困る」

「バレットの贋作はともかく私のまで木偶の坊の劣化品だど!?私の作品を愚弄するか！トレギア！スラン！もつとベリアル因子を注入だ!!」

自分の作品を侮辱されたマブゼはそれに激怒するとスラン星人にさらにベリアル因子を注入するよう命令する。

「おいおいマジか!」

「だ、大丈夫なのかよ?」

「五月蠅い五月蠅い!私に指図するな!」

スラン星人は「どうなつてもしらないぞ」と呟きながらも命令通り更にベリアル因子をニセベリアルへと注入すると、ニセベリアルは赤く禍々しいオーラを放ちながらトレギアへと攻撃を仕掛ける。

「むっ……」

「どけ！俺がやる！」

トレギアはその攻撃を受け流すと、フーマは自分がやると言いながらトレギアを退かした。

「僕も！」

スマツシユも光の弓矢を構えるも、フーマの素早い動きのおかげで標的が定まらずにいた。するとフーマはまたも足を掴まれてしまうと、トレギアが軸足を蹴りつけてフーマを転倒させる。

「今だ！」

フーマが避けたことでスマツシユは弓矢を放つとそれはニセベリアルの右肩を射抜きダメージを与えた。

「ぐおっ!？」

「ぬっ!？」

しかしニセベリアルはただでは転ぼうとはせず、トレギアへと向けて爪を振るうと、それを受けたトレギアに爪痕がつく。

「痛いなあ。まったく、品がないのは飼主そっくりだな」

「ハハハっ！負け惜しみか？見苦しいぞトレギア！」

「・・・フツ。コンニチワ」

マブゼに負け惜しみと言われたトレギアはマブゼ達がいるビルを「コンニチワ」と言いながらのぞき込む。

「そしてサヨウナラ」

「ハアアッ!」

トレギアはニセベリアルルの攻撃をひらりと避けると、ニセベリアルルはマブゼ達がいいたビルを破壊してしまった。

「うわっ!?!あぶな!?!」

今まさにそのビルに乗り込もうとしていたツキカゲと凧の部隊は寸前のところで助かったが、マブゼ達はそのまま瓦礫の下敷きとなってしまった。

「フツフツ。飼い主がいなくなってしまうましたね」

「フハハハ!!」

マブゼ達がいなくなってもなお暴れるニセベリアルル。フーマはタイガへと交代して、タイガはスワローキックを決め込もうとするも、ニセベリアルルはその攻撃を避ける。

「まだだ!」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース!』

タイガ・フォトンアースへと強化変身したタイガは連続パンチをニセベリアルルとバ

レットトリペアへと叩き込むと、ニセベリアルは先ほどスマツシユが射抜いた右肩を押さえる。

「まったく、ニセモノの割には楽しませるじゃないか」

「こっちは全然楽しくねえっての！うわあああつ！」

ニセベリアルへの反撃を受けたタイガは地面に伏せると、ニセベリアルはタイガ目掛けて八つ裂き光輪を放ち、レットトリペアもガトリウム光線を放ってくる。

「しまっ!？」

その攻撃に「避けられない」とタイガが思った瞬間、何処からともなく飛んできた2つの刃がニセベリアルへの八つ裂き光輪を切り裂いた。

「だらしないゼタイガ」

2つの刃の主が現れる。その主こそ様々な次元宇宙を行き来し、数多くの悪と戦ってきたウルトラ戦士。ウルトラマンゼロだ。

「まったく、妙な気配を感じたかと思えば、趣味の悪いことをする輩もいたもんだぜ。シユア！」

ゼロが額から放った緑色の光線。エメリウムスラツシユがガトリウム光線を相殺すると、ゼロはゆっくりとタイガたちへと近づいてくる。

「ゼロー！」

タイガはゼロの参戦に驚きつつも、ゼロはタイガとスマッシュの真ん中に並び立つ。

「タイガ君。このウルトラマンは？」

「ウルトラマンゼロ！最高の助っ人だ！」

「とりあえず凄い助っ人ってことはわかったよ。ならこっちも！」

伊智香はタイガトライブレードを呼び出すとそのスイッチを一度押し、回転盤を回転させる。

「燃え上がれ！仲間とともに！」

「「バディ・ゴー！」」

タイガはウルトラマンタイガ・トライストリウムへとパワーアップをする。

「まったくよお、ジードがせっかく成仏させたつてのに余計なことしやがって」

「これはこれは……。問題児様のお出ました」

「てめえにだけは言われたくねえよトレギア」

「フツ、手合わせは……。初めてでしたね」

「「ハアっ！」」

タイガとスマッシュはニセベリアルとバレットリペアに挑み、ゼロとトレギアが交戦し出す。

「ハアっ！」

「ティヤ!!」

タイガはトライブレードを、スマツシユは光のナイフを振るってニセベリアルとバレットトリペアを攻撃すると、ニセベリアルは剣を避けきれずにそれを受け、膝をつき、バレットトリペアも黒いマントが引き裂かれて、完全に修復されていない右腕が露見する。一方でゼロとトレギアは互いの攻撃を受け流しあっていると、トレギアはゼロに語り出す。

「生命とは迷い悩むからこそ美しいもの」

「アア?なに言ってるやがる?」

「意にそぐわない者がいれば、よく考えもせずに牙を剥く。だから私は・・・君にときめかない」

「訳わからねえこと言いやがって!」

ゼロはゼロスラッガーを飛ばしてトレギアを攻撃しようとするも、トレギアはその刃を蹴って跳ね返す。

「ゼロ。戦ってより理解した。君が心底つまらないと」

「この俺に軽口を叩くとはな。2万年早いぜ」

「行くよタイガ君!」

『カモン!』

伊智香は先日ビクトリーから受け取ったビクトリーナイトレットを装着する。

『ビクトリーナイトレット・コネクトオン』

「ナイトビクトリウムブラスタ―！」

「ワイドゼロショット！」

「シューティングスマッシュ！」

V字に剣を振るったタイガはV字に輝く蒼い光線を放つと、ゼロも必殺光線のワイドゼロショットを、そしてスマッシュもシューティングスマッシュを放つ。対するトレギアとニセベリアル、バレットトリペアもそれぞれ光線を放つと6つの光線がぶつかり合う。

「うわっ!？」

「ぐっ……」

その爆風はゼロとトレギア以外のウルトラマン達を転倒させるも、スマッシュは真つ先に立ち上がる。

「近くにはまだしぶきさん達がいる。これ以上の被害は出すわけにはいかないよスマッシュ」

「分かっています。絶対に守り抜きましょう」

「……おいスマッシュとか言ったな。これを受け取れ」

ゼロは光をスマッシュへと授けると、雅美の右腕には青い刃のようなアイテムが握られていた。

「ウルトラゼットライザーだ。ヒカリがお前に渡せっていうから持ってきてやったぜ。こいつとウルトラメダルで今こそパワーアップだ」

「ありがとうございます！・・・雅美さん！」

「うん！」

インナースペースの雅美はウルトラゼットライザーを構えるとその手には一枚のカードが出現する。

「これは・・・こうするのかな？」

『masami access granted』

カードをライザーにセットした雅美は同時に出現した腰のホルダーを開く。

「この3枚は・・・そういうことだね」

手に取った3枚のメダルを1枚ずつライザーのブレードにセットして、ブレードをスライドさせる。

『ultraman』

『tiga』

『tiga』

「これは・・・時代を繋ぐ戦士達の手だね」

「行くよスマツシユ」

「スマツシユファイト！」

『ultraman smash lightning generation』

スマツシユの姿はタイガのような青いプロテクターをまとった赤と紫の戦士へと変身を遂げる。

「ウルトラマンスマツシユ！ライトニングジェネレーション！」

スマツシユ・ライトニングジェネレーション。栄光の初代ウルトラマンと古代の超戦士ウルトラマンティガ。そして光の勇者タイガの力の宿るウルトラメダルでウルトラフュージョンしたスマツシユの強化形態だ。

「ジユウア！」

スマツシユの光をまとった右ストレートがバレットリペアに直撃すると、バレットリペアが怯み、後退する。

「シユア！」

怯むバレットリペアは反撃と言わんばかりにガトリウム光線を放つてくるとスマツシユは光輪を投げ飛ばしてガトリウム光線の光弾すべてを撃ち落とした。

「何あれ！なあゼロ、俺にもあれくれよ〜！」

「ああ？んなのヒカリに言えよ」

「そんなこと言わずにさあ〜」

「しようがねえな。これで我慢しろ」

ゼロはため息をつきながらもねだってくるタイガに光を与えると、伊智香の右腕にプレスレットが装備される。

「プラスマゼロレットだ。この俺の力が宿ってるすげえものだけ」

「ええ〜。俺もゼットライザーが良かった〜」

「このっ！そういうなら返せ!!」

「いやーだー！もうもらいましたー」

「っ！くるよタイガ君！」

『プラスマゼロレット・コネクトオン』

まだゴネるタイガにニセベリアルが迫ると、とっさに伊智香はプラスマゼロレットを起動してスイッチを押す。

「タイガエメリウムスラッシュ！」

タイガは額から緑の稲妻を帯びた光線を放つと、その一撃に怯んだニセベリアルは、スマッシュを睨みつける。

「決めようスマツシユ！」

「これで決めます！」

スマツシユはエネルギーを集束させてパワーアップしているシューティングスマツシユを放つ。

「シューティングスマツシユ!!」

「タイガ！ダイナマイトシユート！」

それに合わせてタイガもプラズマゼロレットによる必殺技を放つと、トレギアは近くにいたニセベリアルを盾にし、ニセベリアルとバレットトリペアはその光線を浴びせられる。

「ヴあああああつ!?!」

その同時攻撃を受けたニセベリアルとバレットトリペアは爆発すると、ニセベリアルを盾にして攻撃を防いだトレギアも僅かながらダメージを受けていた。

「・・・主催者様の用意した玩具がなくなったのであつては、今日のイベントは終わりです
すね」

「逃がさねえ！」

魔法陣を展開したトレギアはこの場を去ろうとすると、ゼロはゼロスラツガーを胸に装備して光線を撃つ構えを取る。

「ゼロツインシュート！」

「フフっ・・・」

ゼロの放ったゼロツインシュートはこの場を後にしたトレギアには当たらず明後日の方へと飛んで行ってしまう。

「チツ、逃がしたか」

「・・・っ」

流石に消耗しきったタイガとスマツシユはほぼ同時に膝をつくど、2人はほぼ同時にその変身が解除されてしまう。

「お前らー！」

伊智香と雅美をキャッチしたゼロはゆっくりと近くのビルに2人を降ろす。

「今はお前がタイガに体を貸してるのか」

「さ、才賀伊智香です」

「そんなもってお前がスマツシユにだな」

「雅美」

「伊智香。それと雅美。トレギアはベリアルより何を考えているか分からない食えねえ奴だ。気を付けろ」

「はっ」

「それとタイガ。協力してくれている仲間を守れ。そして必ず勝つんだ」
『はい！』

タイガはゼロの言葉にハイと答えるとゼロは少し考え込む。

「ベリアル因子を利用して悪事を企む輩は他にもいるかもしれない。俺はそれを探しに行く。ここはタイガ。……いや、お前達に任せませ」

ゼロはこの地球はタイガ達に任せると告げると、ウルティメイトブレスを輝かせて銀色の鎧、ウルティメイトイージスを身に纏う。ウルティメイトゼロだ。

「じゃあな」

ウルティメイトゼロは空間に穴を開けてそこに向かって飛び去って行く。伊智香と雅美はそれを最後まで見送っていた。

「ハツハツハツ。タイガあ……やつぱりお前は面白い。だからこそ、才賀伊智香の壊しがいる」

そして標的を伊智香に決めていた霧崎はタイガをあざ笑いながら次の計画を実行すべく何処かへと歩き去っていった。

「あゝ、やつぱりあんな急ごしらえの修理じゃダメだったかゝ」

そしてもう一人、謎の少女もその戦いを見届けたのち、バレットリペアの破片を一つ回収してどこかへと去っていった。

悪の美学

ウルトラマンゼロが来訪し、3対3となった激闘から2週間が経過した。あれからそれなりに平和な日々が過ぎ、ツキカゲも任務のない日々が続いていると命は楓にある提案をしてきた。

「ねえ楓。前から考えていたんだけどさ、そろそろ弟子を取る気ない？」

「え？弟子？私がですか？」

自分の師匠である命に弟子を取らないかと提案された楓は返答に困っていたが、命は構わず続ける。

「実は最近ツキカゲにいいかもって逸材がいてね、スカウトしてみたんだ。入団テストも合格して誰の弟子にしようかって初さんと話し合ってた、命は楓がいいんじゃない？って

推薦してみたんだ」

「そんな勝手に。私が師匠になったら師匠はどうするつもりなんですか？」

「安心して。そうすぐに引退するってわけでもないから。少なくとも楓が一人前の師匠をやるようになるまでは引退はしないって！」

「・・・そういうことを聞きたいんじゃないんですよ。まあいいです。それで私の弟子になるかもしれないってのはどんな子なんですか？」

「かなり優秀な子らしいよ。百地との試験も難なくクリアしたって聞いたし、剣の腕も流石に百地ほどじゃないけど、孫市よりは高いつて聞いているね。一度訓練を見たけれど手裏剣の腕前も中々だったよ。正直あまり教えることがないかもね」

「そんなにですか・・・」

普段は強気で自分に自信がある方である楓だったが、自分の弟子になる可能性のある人物がそこまで優秀となると流石に不安になってしまふ。

「まあ、そこは頑張つて。命は楓を信じて推薦したんだから。楓ならできるよ」

「師匠がそこまで言うなら・・・」

「てなわけで明日さつそくその子と会ってみる話になっているから。そのつもりでね」

「えっ？ずいぶん急な話ですね。・・・まあ師匠が勝手に話を進めるのは今に始まったことじゃないので、まあいいですよ」

命の勝手な判断で弟子候補と会うことになった楓。そして当日である次の日。楓は命とともに Wasabiへと足を運ぶと、既に弟子候補である少女が初芽の隣に座っていた。

「初めまして。このたびツキカゲに所属することになった錦戸茜（にしきどあかね）で

す。よろしくお願いします!」

「あなたが私の弟子候補の茜ね。 同い年を弟子にするってのはちよつと変な気分だけど、よろしく頼むわ」

「はい!よろしくお願いします!」

楓は茜と挨拶を交わすとさっそく地下にあるツキカゲの基地へと彼女を招き入れる。

「試験やらで結構いい結果を残しているって聞いたけど、一応この目で確かめさせてもらうわね」

「はい!」

茜の実力を直接見ておきたかった楓は剣術、格闘訓練。射撃や投合術を彼女にやつてもらい、その実力を確かめる。

「驚いたわ。本当に万能なのね」

「恐縮です!」

すべての実力が評価B+以上といった万能型だったことに驚かされた楓。だからこそ楓は茜に対して疑問が浮かんだ。

「それにしても不思議ね。初芽さんが調べてくれた経歴を見る限りだとそこまでの実力がつくような生活は送ってなかったはずなのに、訓練なしでその身のこなし。どういうことかしら?」

楓は『普通』の生活を送っていたであろう茜があまりにも身体能力が高いことに疑問を抱く。

「それ初芽さんにも言われました。『普通』すぎて少し怪しいって。だから正直に言いますね。って言ってもまだ楓さんに話してないだけで、他の方には話しているんですけど……」

「何よ。もったいぶって。話してみなさい」

「私は初芽さんと同じく技術面の方が得意で、今もパワードスーツともいえるインナーを着込んでいるんですよ。眼鏡もA-Iのサポート付きです」

「そう言いながら茜は自身の眼鏡を外して楓に見せてくる。

「……なるほどね。それで身体能力を補っていたと」

「もちろん試験するときにあたってそれは他の方も了承済みですよ」

「まあ、ツキカゲではそういう技術面も求められているし、そこは気にしないでいいわ。ただ道具に頼れない状況下もツキカゲをやっていく上では必要になってくるわ。これから厳しく指導していくから覚悟しておきなさい！」

「はいー」

こうして楓は茜を『弟子見習い』として認めて彼女を鍛えていくことを決めた。そして楓が茜を鍛えるようになって早くも一週間が経過した。

「あく。もうダメ。師匠になるってこんなに大変な事だったのね」

「楓ちゃん。しつかり」

Wasabiの席でぐったりしている楓は珍しく弱音を吐いていた。

「百地、アンタよく孫市の師匠をやっていられたわね。弟子を四六時中確認しつつ、師匠として弟子に悪いところは見せないように常にカッコつけてるだなんて生活。いざやってみると大変だわ」

「そ、そんなことないよ。私は別にカッコつけてなんて・・・」

「そうだよ。命も弟子に対してカッコつけてだなんていないでしょ？自然体が一番だよ！」

楓とモモの会話に乱入してくる命。すると楓は命の顔を見るなりため息をつく。

「目の前にいるダメなところを見せまくりな師匠みたくなりたくないから、こうして弱音を見せないようにしてるんじゃないですか」

「ダメなところってなんだ。命がダメなところを見せまくりなら、命の師匠の方が師匠としてダメダメだったぞ」

変なところでとぼつちりを受ける信。とはいえ信はこの場にはいないので預かり知らぬところなのだが。

「まあ冗談はこれぐらいにして。・・・どう？師匠としてうまくやれそう？」

「正直微妙なところですね。一応彼女の前では弱いところを見せないように心がけてはいますけど、そのぶんいいところを見せれているかと問われると・・・」

「いいところをあまり見せれていないかもって心配になると」

「・・・はい」

「まあ、師匠として悩むのは良いことだよ。そして命が師匠として1つアドバイスをし
てあげるよ!」

「アドバイス? 師匠がですか?」

楓はどうせ大したこともないアドバイスを言うのではないかと半信半疑な気分で聞
こうとすると、命は楓の耳元でささやく。

「あの茜つて子。あまり信用しないほうがいいよ」

「えっ? それってどういう?」

「さあて、命さんは今日は用事があるのでこれにてドロクさせてもらいますね」と

口笛を吹きながらその場を後にしていく命。それと入れ違いで茜が W a s a b i へ
と入ってきた。

「お疲れさまです! 今日もうろしくお願いします! 師匠!」

「・・・え、ええ。さっそく今日も訓練をするわよ」

楓は命に言われた言葉を気にしつつも今日も茜と訓練をする。そして訓練終了後、茜

は地下のツキカゲ基地へと足を運ぶと、初芽のいるモニタールームへと足を運んだ。

「お疲れさまです初芽さん」

「お疲れさまです茜ちゃん。今日の訓練は終わっただんですね」

「はい！ところで初芽さんは何をしていますか？」

「今は今週風の部隊から届いた資料を確認中です。ツキカゲのみんなが集めてくれた資料と照らし合わせて、今後の作戦を考える大事な作業ですよ」

「初芽さんはそういう作業もするんですね」

「前線から離れましたけど、こういうことはできますからね」

「へえ、前線を離れたのに色んな事をして凄いですね」

「そうそう！初芽さんは凄いのだぞ〜！」

初芽と茜の会話に混ぜてきた命。その後ろにはモモと五恵、そして楓もいる。

「あれ？どうしたんですか皆さん揃って」

「スパイは嘘つきですけど、そろそろ嘘は終わりにしませんか。茜ちゃん」

茜の方を振り向いた初芽。すると命は数枚の写真と資料を茜の足元に投げ捨てる。

「中々ボロを出してくれないから資料を作るのに苦労したよ。単刀直入に言うよ。茜はウチに何かを調べるために潜入してきたスパイのスパイだよ。スパイだね？」

命は楓が渋い顔をしながらも真面目な顔をしながら話を続ける。

「調べていたのはこれまで出現した怪獣のデータに、初芽さんが独自に研究を続けていたサイバー怪獣をリライズする方法。そして私達ツキカゲのそれぞれの個人情報。まさか初芽さんがいないタイミングは盗まずに、いるタイミングの時だけ盗んでいたとは思わなかったよ」

「・・・あゝあ。バレちゃしようがないか」

ため息をついた茜は敬語をやめて素の喋り方になる。

「いるタイミングの方が怪しまれずにデータを盗めると思ってたのに、やっぱりお姉様みたたくうまくはいかないわね。自己採点は32点」

そんな茜に対して楓は怒りと悲しみの混じった何とも言えない表情で彼女に視線を向ける。

「信じたかったのに・・・どうして？」

「信じる？スパイがそんな簡単に人を信じちゃダメでしょう。師匠、0点ですよ」

心にもない言葉を言われ、楓は怒りの表情を見せつつ、手裏剣を取り出そうとすると、それよりも早く命がクナイを茜の首元に突き付けた。

「答えて。茜の目的は何？」

「流石大師匠。92点のいい動きね。いいわ。答えてあげる」

両手を挙げながらもまるで動揺していない茜は正直にその目的を語り出す。

「私が欲しかったのはサイバーワールドに存在する怪獣をリアライズさせるための手段。ウルトラマンX、大空大地からそのデータを与えられたこの組織なら多少は進んでいるだろうと思って潜入したってわけ。悪くないところまで進んでいるみたいで安心したわ。一から自分で作るのは面倒だもん」

「そんな理由で……!」

「だけどリアライズする設備は整っているけど肝心なサイバー怪獣のプログラムがまだみたいね。点数を付けるなら68点つてところかしら?」

茜は初芽の研究データに点数をつけると師匠格3人と楓の包囲網をすり抜けてモニタールームの外に出してしまう。

「は、早い!」

「悪いケドもうここには用はないの。てなわけで私、ツキカゲ辞めます。アデュー」

ツキカゲ基地を出て外へと出ていく茜。すると茜はモモの指示で待機していた伊智香と遭遇する。

「あれ?伊智香ちゃんじゃないですか」

「……さつき通信が入ってきました。茜ちゃん。どうしてこんなことを?」

「その質問。0点ね。目的はあるけどその前に……。才賀伊智香。あなたがウルトラマンだということは、いえ正しくはウルトラマンと一体化しているということは知ってる

わ」

「ど、どうしてそれを!? それにあなたはいったい?」

「そういえば本当の自己紹介がまだだったわね。私の名前は茜。悪こそ最高の美学と謡うシノビラーの魂を宿した怪獣娘、小鳥遊忍。お姉様の弟子。とある世界の言葉を借りるならシュツツエンゲルってやつよ」

「シノビラー? 小鳥遊忍? いったい誰の事?」

伊智香はシノビラーの事も小鳥遊忍という人物の事も当然知らなかったが、タイタスには心当たりがあったようだ。

『小鳥遊忍か。根も葉もないウワサだと思っていたが事実だったとはな』

『知ってるのか旦那?』

『様々な多元宇宙を移動し、様々な星で悪事を働き、時には星をも破壊したと逸話のある正真正銘の地球人だ。世界は違えど数々のウルトラ戦士が信じた地球だ。そこに住む地球人にそこまでの悪人はいないはずと信じていなかったが・・・』

タイタスは地球人にそこまでの悪事を働くものが実際にいた事を悲しく捉えていると茜と名乗った少女は白い銃のようなアイテムを取り出した。

「っー!」

伊智香は銃で攻撃してくると身構えると、茜はさらにキーを手に執って、それを起動

した。

『ULTRAMAN ZERO・DARKNESS』

『ゼロダークネスだど!』

タイガはその名が聞こえてくると驚く。無理もない。その名はかつてゼロを苦しめた因縁の相手であるベリアルが、ゼロを取り込んだ時の姿とゼロ本人から聞いていた姿の名だからだ。

「私自身は『ウルトラマン』でも怪獣娘でもないからこうしないと変身して戦えないの」
『BOOTUP・EMERIUM』

もう一度キーのスイツチを押した茜はそれを銃のようなアイテムにセットした。

「ゼロダークネス!バトル・ゴー!」

そして銃口を開き空へと掲げると、その銃から変形させたアイテムから闇のエネルギーがあふれ出し、茜を包み込んだ。すると茜はウルトラマンゼロを模した闇の巨人、ゼロダークネスへと変身を遂げていた。

「才賀伊智香。一緒に遊んでもらおうかしら?」

『ゼロの姿で悪さなんかさせない!行くぞ伊智香!』

「うん!光の勇者!タイガ!」

タイガのアクセサリーをつかみ取った伊智香はそれを持ち替えてタイガスパークを

装備している方で握りしめ、空へと掲げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「シユア！」

ウルトラマンタイガへと変身した伊智香。タイガはまずは牽制技にとスワローバレットを放つもゼロダークネスはその俊敏さから即座に後ろに飛び下がって回避する。

『プラズマゼロレット！コネクトオン！』

「タイガ！エメリウムブラスター！」

続けてタイガはエメリウムブラスターを放つも、ゼロダークネスは2つのゼロスラッガーを振るい、光線を切り裂いた。

「70・・・いえ、な65点と言った具合かしら。馴染み具合は」

「あれで65点だなんて」

「ハツタリだ！」

伊智香は65点の馴染み具合という言葉に警戒心を強めるも、タイガはハツタリだと言いきり、次の技を繰り出そうとする。

「ハンドビーム！」

ハンドビームで牽制しつつ、距離を詰めたタイガは殴りかかると、からめとるように

タイガの右腕を掴んだゼロダークネスはゼロスラッガーでタイガを斬りつけようとしてきた。

「輝きの力を手に！」

『ウルトラマンタイガ・フotonアース！』

黄金の鎧を身に纏いフotonアースへと強化変身したタイガはその鎧の強度でゼロスラッガーを弾くと即座に蹴りを決め込みつつ、もう一撃パンチを重めの叩きこむ。

「超至近距離！オーラムストリウム!!」

そしてタイガは至近距離からのオーラムストリウムを放つ。

「判断は悪くないけど、『溜め』が足りないわね」

ゼロダークネスは至近距離からの光線に即座に対応し、胸のカラータイマーにゼロスラッガーに合体させ、強力な光線技であるダークネスゼロツインシュートをぶつけてきた。

「うわっ!？」

ぶつかり合う光線。その爆風でタイガは怯んでしまうと、ゼロダークネスは闇のエネルギーを纏ったキックでタイガを蹴り飛ばした。

「ぐっ!？」

『タイガ！俺と交代しろ！連撃で攻めれる俺の方が確実だ！』

「分かった！」

「風の覇者！フーマ！」

フーマのアクセサリーを手に取った伊智香はそれを持ち替えて空へと掲げる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマ！』

タイガから交代してウルトラマンフーマへと変身した伊智香。フーマは連続で光波手裏剣を投げつけながら一瞬でゼロダークネスとの距離を詰める。

「隙だらけだぜ。光波剣！大蛇！」

フーマは光の剣でゼロダークネスに一撃をお見舞いしようとするも、ゼロダークネスはそれを予め予想していたのか、ゼロスラッグガーの1本でガードしていた。

「チツ。やるじゃねえか！伊智香！テンポアップだ！」

『ウルトラマンフーマ・ストームインパクト！』

フーマはさらなる速さを求めてフーマ・ストームインパクトへと強化変身を遂げると両腕に光波剣・大蛇を展開して二刀流の剣戟でゼロダークネスを責め立てる。

「くっ……。これは中々……」

流石のゼロダークネスもその連撃には対応しきれなかったようで何度か攻撃を防ぎきれずに攻撃を受けつつ、距離を取ろうと後ろへと下がろうとする。

「逃がすかよ！真星光波手裏剣！」

フーマは追撃の真星光波手裏剣を放って追い打ちを仕掛けると、ゼロダークネスは怯んで動きを止める。

「旦那！任せるぜ！」

『ああ！任された！』

「力の賢者！タイタス！」

タイタスのアクセサリーをつかみ取った伊智香はそれを持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイタス！』

フーマからウルトラマンタイタスへと交代、変身した伊智香。タイタスはそのまま怯んでいるゼロダークネスに拳を振るう。

「賢者の拳はすべてを砕く！」

タイタスの必殺の拳、ワイズマンズフィストが炸裂する。その拳を受けたゼロダークネスはその場に倒れ込みつつも、ダークネスエメリウムスラッシュを放ってタイタスを攻撃してくる。

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント！』

タイタスもタイタス・スターエンシエントへと強化変身し、その装甲でダークネスエ

メリウムスラッシュを弾くと目の前に光弾を作り出す。

「エンシエントスタープラニウム！」

タイタスのエンシエントスタープラニウムを叩きこまれたゼロダークネスはそのまま吹き飛ぶと、流石に苦しうにしながらも立ち上がる。

「いったあ……。賢者さんは女の子に加減できないの？」

「悪いが悪の力を振るう者に対して加減をするほど私は優しくはない」

「あつそ。今のままじゃ勝てないってことは理解したわ」

「良かった。諦めてくれるんだ」

「だから作戦変更ってやつ」

そう言ったゼロダークネスは諦めてくれたと思った伊智香とは裏腹にエネルギーを溜めていつでも光弾を放てるという右手をツキカゲの基地がある *Wasabi* へと向けた。

「貴様!!」

卑怯なやり方に怒りを覚えたタイタスは拳を強く握るも、ゼロダークネスは「ノンノン」と言ってくる。

「おっと動かないで。動くと今すぐにでも基地が吹き飛ぶよ」

「卑怯な」

「お姉様の言葉を借りるなら……。悪こそ最高の美学ってやつ。さあ、基地が吹き飛ばされたくなかったら変身を解除して」

「そうは……」

『私達が』

『させない!』

「スマッシュ!!」

そこに駆け付けてきたのはスマッシュスパークとウルトラゼットライザーを手にした雅美だった。雅美はスマッシュユスパークを空へと掲げてウルトラマンスマッシュへと変身すると、ゼロダークネスの手に向けてキックを叩きこみ、それを打ち消した。

バトル・ゴ―！

「雅美さん！」

「スマツシユ！助かった！」

「遅れてすみません。それにしてもゼロダークネスが何故？」

「それは後で説明する。今はあいつを倒すぞ」

事態を把握しきれていないスマツシユはゼロダークネスに疑問を抱くもタイタスに後で説明すると言われて頷く。

「2対1って卑怯だとは思わないの？」

「卑怯な手を取る貴様が何をぬかすか」

「それならそれで私にも考えがあるけど」

ゼロダークネスのインナースペースにいる茜は怪獣ビークルを2つ取り出して、そのバンパーをぶつけ合った。

「キングジョー！ギャラクトロン！」

茜は怪獣ビークルの力を解き放ち、宇宙ロボットキングジョーとシビルジャツジメンターギャラクトロンを召喚してきた。

『Masami access granted』

対してスマッシュのインナースペースにいる雅美もウルトラアクセスカードをゼットライザーにセットする。

「時代を繋ぐ光の戦士!ウルトラマン!ティガ!タイガ!」

3枚のウルトラメダルをゼットライザーに装填した雅美はそれをスキャンする。

『Ultraman』

『Tiga』

『Taiga』

「スマッシュフアイト!」

『Ultraman smash lightning generation』

スマッシュもスマッシュライトニングジェネレーションに強化変身をする。ゼットライザーを出現させ武器にする。

「ジュー!」

ゼットライザーでギャラクトロンを斬りつけるスマッシュ。ギャラクトロンは魔法陣のようなバリアでそれをガードすると、スマッシュはゼットライザーの刃にエネルギーを注ぎこみ刃を光で巨大化させる。

「ライトニングギガスマッシュ!」

バリアを力づくで破壊したスマッシュは即座に光線を撃つ構えを取る。
「シューティングスマッシュ！」

必殺光線、シューティングスマッシュをギャラクトロンに浴びせたスマッシュだったが、ギャラクトロンは半壊しながらもまだ倒れようとはしなかった。

「こいつ、まだ動くの？」

「貰ったメダルは3枚だけではありません！雅美さん、その力を使う時です！」

「うん！大地震撼、無敵の剛力！」

インナースペースで雅美はホルダーから更なるウルトラメダルを取り出す。

「パワー！ガイア！タイタス！」

『powered』

『gaia』

『taitas』

「スマッシュファイ！」

『ultramansmash crashenergy』

パワー。ガイア。タイタス。3人の力が宿るウルトラメダルをゼットライザーでスキャンすると、スマッシュの身体は赤と青のボディに黒いラインの入った筋肉質なものと変化した。ウルトラマンスマッシュ・クラッシュエナジーだ。

「この一撃ですべてを砕くー!」

スマツシユは拳にエネルギーを集めると、その拳を勢いよく振るい、ギヤラクトロンを粉碎する。スマツシユ・クラツシユエナジーの必殺技、ブレイキングスマツシユだ。

「やるな。実にいい筋肉だ」

『関心してる場合じゃないぞタイタス!』

タイガに注意されたタイタスは目の前に立つキングジョーへと視線を戻す。

「宇宙ロボットキングジョー。歴戦の戦士達も幾度となく苦戦を強いられた強固な装甲を持つペダニウム製のロボット。お相手願おうか」

真正面からキングジョーに向かっていったタイタスはまずはその拳を振るい、ワイズマンズフィストを叩きこむ。いくら硬い装甲といえどもタイタスの強烈な拳には堪えられず、一撃で装甲が吹き飛んだ。

「さすがキングジョー。並の怪獣ならば一撃で粉々にできる一撃を叩きこんだつもりだったのだが、殴った箇所が吹き飛んだだけとは」

『それでも十分やばい威力だと思いがな』

タイガはボソリとタイタスにツツコミを入れつつも、タイタスはトドメの一撃を放とうとする。

「伊智香。エクシードエックスレットだ」

「うん！」

『エクシードエックスレット・コネクトオン』

「エクシードバスター!!」

エクシードエックスの力を宿した一撃でキングジョーを粉碎したタイタス。そして2人のウルトラマンは残る敵であるゼロダークネスへと視線を向けた。

『タイタス！トドメは全員で行くぞ！トライストリウムだ！』

「招致した！」

『ウルトラマンタイガ！』

タイタスから再びタイガへと交代した伊智香はタイガトライブレードを手取る。

「燃え上がれ！仲間とともに！」

「「バディ・ゴー!!」」

タイガはタイガ・トライストリウムへと強化変身をする、剣を回転させて必殺技を解き放つ。

「トライスクワッド！」

「「トライストリウムバースト!!」」

必殺光線。トライストリウムバーストを避けずにあえて受けたゼロダークネスは爆発して茜の姿へと戻ると、茜をツキカゲと凧の部隊の面々が取り囲んだ。

「茜ちゃん、大人しく捕まってくれないかな?」

モモは茜に刀を向けるも、茜は動揺せず両手をあげる。

「流石にウルトラマン達と戦って消耗しているのに、この人数と戦おうだなんて事はしませんよ」

そういつた茜は大人しくツキカゲメンバーと風の部隊にその身柄を確保されると、手持ちの武具は解析のためにツキカゲの元に、そして茜本人の身柄は風の部隊に預けられた。

茜の裏切りから数日後、楓は信用していた弟子候補の茜に裏切られた事を気にしつつも今日もツキカゲへと足を運ぶと、何やら初芽のラボの方が騒がしかった。

「凄いです!この光線銃!怪物やウルトラマンのエネルギーをキーとして保存することでその力を再現することができるとはですね!」

「あく初さんスイッチ入っちゃったよ。これは後で色々お試しさせられるぞ」
「し、師匠。どうかしたんですか初芽さん?」

「まあ、おおよそ見ての通りだよ。茜から押収した光線銃に色々なギミックがあるって知って、技術者としてのテンションが上がっちゃってる感じかな」

茜の使用していた光線銃『バトルスパークレンス』はとある次元世界に存在する『G

UTSスパークレンス』というアイテムを模倣したアイテムなのだが、初芽にとつてそれは当然未知のアイテムであり、興奮せずにはいられなかった。

「茜さんはこれを使用してウルトラマンを模倣した存在に変身していたようですけど、そこまでは再現できなくても、怪獣の力のみを行使したり、応用次第によってはサイバー怪獣のリアライズもこれを媒介にさえすればどこでも可能なはずです！」

「・・・茜は本当に技術面で凄かったんですね」

スパイのスパイとして潜入してきた茜の技術が本物だったことに複雑な気持ちを抱いていると、初芽の隣に立っていたテレジアが振り返って楓のほうを振り向いた。

「楓、今、いいか？」

「どうしたのテレジア。珍しいわね」

2人で外へと出て楓と一対一で対話をしようとしてきたテレジアに珍しがっている、テレジアは遠くの空を見上げる。

「あいつの裏切りを気にするなどは言わない。だが私たちがスパイである以上割り切る覚悟は必要だ」

「そんなの・・・分かってるわよ」

楓は一度師匠である命に裏切られたことがある。最もその裏切りも敵を欺くためのダブルスパイで厳密にはツキカゲを裏切ったわけではないのだが、それでも一度は裏切

りによって絶望させられた。故に裏切られたときの覚悟は少なからずしていたつもりだったが、それでもやはりくるものがあったのだ。

「風の部隊の報告によると茜には他の組織と繋がる痕跡はなく、事実上の単独犯ということまでは調べがついたそうだ」

「単独犯?でも伊智香が聞いた話だとあいつには本当の師匠が……『お姉様』がいるって言うてたらしいわよ」

「ああ。だが今はその『お姉様』と呼ばれている人物と長らく会えていないらしい。本人曰く『お姉様はこの世界にはいないから』らしいぞ」

「この世界にいない?死んだってこと?」

「分からん。そもそもあいつの経歴がすべて嘘だったと判明したからな。あいつがこの世界に存在していたという記録そのものが一切ないんだ」

「何それ?消されただけなんじゃないの?隠すために」

「いや。初芽や風の部隊がいくら調べても記録が存在していた形跡がまるでないんだ。まるで別の世界から来たかのようにな」

「別の世界って……そんなのありえないでしょ」

別の世界があることを信じようとしない楓はテレジアが提示した可能性にため息をつく。しかし内心では自称平行世界から来たという大空大地などのウルトラマンや宇

宙人すら存在したのだから自分が知らない『別の世界』も存在しているのではと疑ってはいた。

「住んでいた環境が違えばその思想も違う。私もかつてはそうだった。しかし初芽や五恵のおかげで変わることができた。茜ももしかすれば・・・変わるかもしれない」
「そう・・・ね。そうよね。ありがとうテレジア。少し吹っ切れたわ」

「そうか。それはなによりだ」

テレジアのおかげで気持ちを切り替えることができた楓。すると2人の元に初芽から通達が届いた。

『大変です皆さん。茜ちゃんが風の収容所から脱走したと報告が届きました』

「何ですって!？」

風の収容所は並大抵の犯罪者では脱獄することなどできない嚴重な収容所だ。そんな場所で脱獄をしたのだから当然驚かれる。

「脱走したとなると・・・いったい何をしてくるのやら」

「茜は初芽の研究を盗んで何かを作り上げるのが目的だった。何かを作る事が目的ならば、きつとそれを作り上げるラボのような施設があるはずだ」

『テレちゃんの言う通りです。きつと茜ちゃんは何かを作り上げるために何処かの施設を利用してはいます』

すると初芽からツキカゲメンバーと風の部隊全員にラボとして利用できそうな施設をピックアップしたファイルが送られてくる。

『皆さんは何人かに分かれて施設を当たってみてください。こちらも搜索を続けます』

「ここからならこの施設が近いようだな。楓。共に行こう」

「そうね。行きましょう」

楓はテレジアとともに一番近い今は無人の施設へと向かっていく。命もモモとともに楓達とは反対方向の施設へと向かい、伊智香も五恵とツキカゲ基地から比較的近い施設へと向かう。

「どうする? 手分けをして探す?」

施設に到着した楓とテレジアは手分けをして探すかを考えるも、テレジアは首を横に振る。

「いや、師匠格が揃っている状況で逃げることに成功したような手練れだ。1対1で押さえるのは難しいだろう。ここは分かれての行動は得策ではないな」

「確かにね。・・・そういえば珍しいわね。アンタと2人だけで行動するなんて」

「そうだな。私はいつも五恵か初芽と一緒にいるし、お前も命にベツタリだからな」

「ベツタリって。そんな・・・!」

「いやいや。師匠は中々に大師匠にベツタリですよ!」

茜の声が聞こえてきた方向に2人はすぐさま手にしていた麻醉銃の銃口を向けると、茜もバトルルスパークレンスのガンモードを片手に暗闇から姿を現した。

「任務お疲れさまです。ミッション内容は大方私の確保つてところですか？」

「分かつてるじゃない。大人しく捕まってくれないかしら？」

「ごめんなさい。私、今ここを動くわけにはいかないの。サイバーワールドから最高の玩具をお取り寄せするためのキーができるまではね」

「ならその計画ごと潰すまでだ」

テレジアが茜へと駆け出すと、楓はそれをサポートするべく手裏剣を投げつける。

「悪くない連携。72点」

茜はバトルルスパークレンスで手裏剣を撃ち落としつつ、前に前進してテレジアを迎えうつ。身体能力こそテレジアの方が上だが、茜はインナースーツや特殊な眼鏡で身体能力を補っているため、テレジアと互角の格闘を繰り広げる。

「道具のサポートがあるとはいえ、それに瞬時に対応できるのは流石だな」

「お褒めの言葉ありがとう。お褒めついでに・・・逃がしてもらおうかしら」

1歩後ろに下がり指をパチンろ鳴らす茜。すると煙幕が周囲を包み込み、茜は奥へと駆け出していく。

「相変わらず逃げるのだけは一人前ね」

「追うぞ」

楓とテレジアは逃げていく茜を追いかけていくと、茜が利用しているラボへとたどり着く。

「完成！ タイミングバツチリ！ 100点満点！」

すると茜はタイミングよく完成していたキーに歓喜の声を上げていた。

「アンタ。それを作ることが目的だったのね」

「正解！ 100点です！」

バトルスパークレンスで天井を撃ち抜き外へと飛び出ていく茜。その手には完成したばかりの赤いキーが握られている。

『DYNAZENON!』

バトルスパークレンスを片手に赤いキーを起動した茜はキーのスイッチをもう一度押す。

「ACCESS・CHORD! BLACK!」

茜がキーのスイッチを押すと、茜の後ろに巨大なサイバーゲートが開く。するとそのゲートから黒い4機のマシンが勢いよく飛び出てきた。1機は竜の顔をした人型のロボット。1機はステルス機のような飛行マシン。1機は車型のマシン。そして最後の1機が潜水艦型のマシンだ。

「ブラックダイナゼノン！バトル・ゴー！」

そしてバトルスパークレンスにキーをセットすると、その4機が1つに合体してウルトラマンと同等のサイズの巨大なロボットとなる。

「暗黒竜人ブラックダイナゼノン！」

4機のマシンが合体した巨大ロボット。ブラックダイナゼノンがその地に足をつけるとタイタスはその姿を見て驚く。

「あれはまさか・・・ダイナゼノンか」

「知ってるのかタイタス？」

「ああ。実物は見たことはないが、とある世界には怪獣たちと戦う赤き機人。合体竜人ダイナゼノンが存在するという。おそらくあの黒い機人はそれを模して造られた偽物だろう」

「また偽物ってわけか。伊智香！俺に変身しろ！あんなパチモンロボット速攻でスクラップにしてやるぜ！」

「うん！風の覇者！フーマー！」

五恵と距離を置いた伊智香はフーマのアクセサリーを手に取るとそれをタイガスパークを装備している右手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンフーマー!』

そして右手を空へと掲げると、伊智香はウルトラマンフーマへと変身した。

「疾風怒涛! お前なんか速攻でスクラップだ!」

竜巻を身に纏って突撃していくフーマ。するとブラックダイナゼノンは両腕にエネルギーの刃を形成して竜巻を×字に切り裂いた。

「中々やるじゃねえか。だったらこれならどうだ!」

フーマは連続で光波手裏剣を投げつけるもブラックダイナゼノンはそれを一切避けようとしなない。その鋼の装甲にはそんな攻撃など通用しないと判断されたからだ。

「グレート! 流石私の作ったブラックダイナゼノン! 100点満点のいい出来!」

「ちっ、俺の手裏剣じゃパワー不足ってわけか。旦那頼む!」

「任された!」

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイタス!』

ウルトラマンタイタスへとウルトラチェンジした伊智香。そしてタイタスはその強烈な拳をブラックダイナゼノンも拳を振るってくる。

「ムウン!!」

タイタスの拳とブラックダイナゼノンの拳がぶつかり合う。そのパワーは互角でお

互い後ろに下がってしまおう。

「パワーもウルトラマンタイタスと同等。できれば上であって欲しかったから82点」
「大人しくしなさい！」

屋上でブラックダイナゼノンを遠隔コントロールする茜のもとに楓とテレジアが上がつてくる。

「もう逃げ場はないわ。大人しく投降しなさい」

「逃げる必要なんてないわ。今の私にはブラックダイナゼノンがあるんだもの」

茜がそう告げるとブラックダイナゼノンはその視線を楓とテレジアへと向けると、全砲門を展開した。

「ブラックダイナゼノン！フルバースト！」

「いかん！ぐおおおっ!？」

ブラックダイナゼノンフルバーストから楓とテレジアを庇ったタイタスはその場に背中から倒れ込む。

「あいつ、ウルトラマンタイタスが我々を庇うことを予想して・・・」

「この火力なら流石のウルトラマンタイタスもダメージはあるはずだしね」

「大丈夫タイタスさん？」

「くっ。この程度で倒れてしまうとはまだ私も鍛え方が足りないようだ」

「言ってる場合か! 代われタイタス!」

「バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ!』

「ハアアツ!」

伊智香はウルトラマンタイガへと変身すると、タイガは即座に起き上がってブラックダイナゼノンにキックを叩きこむ。しかしその装甲にはまるで通じず、タイガは地面に落下してしまう。

「なんて硬さだよ。だったら・・・伊智香!」

「うん!」

『ロツソレット・コネクトオン』

「鉄なら熱に弱いだろ! フレイムブラスター!」

タイガはウルトラマンロツソの力を宿したプレスレットを発動し、フレイムブラスターでブラックダイナゼノンに攻撃を決めると、即座に次の手に移る。

「前に使った作戦で行くぞ伊智香!」

「うん。あれだよね」

『ブルレット・コネクトオン』

「アクアブラスター!」

続けてウルトラマンブルの力を使ったアクアブラスタで急激にブラックダイナゼノンを冷やすと温度差でブラックダイナゼノンにヒビができる。

「そんな!?!私のブラックダイナゼノンにヒビが!?!」

「もう一発熱いのをかまずぞ」

「オウよ!」

「今こそ全員之力、合わせる時だ!」

「燃え上がれ!仲間とともに!」

「「バディ・ゴー!」」

タイガはタイガ・トライストリウムへと変身を遂げると、伊智香はタイガトライブレードを回転させる。

「タイガ!」

「タイガ!ブラストアタック!」

ヒビ割れたところに剣を突き刺したタイガ。すると、その炎に耐えられなかったブラックダイナゼノンは突き刺された部分のみが爆発し、ほとんど原型を残しながらその機能は停止した。

「そんな……。私の最高傑作が……」

自身の最高傑作であったブラックダイナゼノンが敗北したことにショックを受けた

茜はその場に膝をつく。楓とテレジアがその隙をついて押さえ込む。

「捕まえたわよ!」

「大人しくしてもらおうぞ」

「フフ、まあいいわ。次の作品の資料は十分集まったし」

まるで自分に言い聞かせるようにそう告げた茜は閃光玉を地面に叩きつけて目くらましをするとその場から逃げ去っていく。

「逃げられたか」

「まあ2人だけで押さえられる相手じゃないのは分かっていたことだし、仕方ないわ」

楓とテレジアは茜の身柄を確保できなかったことに対してある程度妥協しつつ、初芽に報告を入れる。するとその日のうちに中破しているブラックダイナゼノンはある組織によって回収されたのだった。

帰つてきた雪

茜が収容所から逃亡。取り逃がしてから1月ほどが経過しようとしていた。小さい事件こそありながらもトレギアや茜が巻き起こす事件に絡むことのない日々を過ごしていたツキカゲの面々はラボにこもって何かをずっと作り続けている初芽以外や気が抜けてしまっていた。

「は〜。暇だあ〜」

初芽がラボにこもってしまっていて遊び相手がない暇な白虎はWasabiでだらけながらもカレーライスを食べていると、学校が終わったモモ達が出来てきた。

「お疲れさまでーす」

「よお前ら〜」

「白虎〜今日も暇してるな〜。おつ、お暇な時間は終わりみたいだね」

命はだらけきっている白虎をからかっていると、ツキカゲメンバーのスマホに召集メールが送信されてくる。モモ達は地下のツキカゲ基地へと向かうと、初芽はさっそく今回のミッションの内容をメンバーに説明する。

「今回のミッションはマフィアとメトロン星人による麻薬売買犯の確保です。作戦なの

ですが……」

「ちよつと待つて初さん。どうしてももう絡んでいる宇宙人の種類が特定されてるの?」
「ツキカゲと協力関係に当たる組織からの情報です。信憑性は十分かと」

「ふーん。協力関係の組織ねえ」

命は異星人も牢屋に収容している風の部隊だろうと考え、それ以上の追求はせず、他のメンバーもそれほど気にしないままに初芽はミツシヨンの説明を終える。ミツシヨンはいつも通りの内容。取引予定先に潜入してその現場を押さえる簡単なものだ。しかし1年前までのものと違うのは異星人の活動がより表向きかつ活発化したこと。今回のミツシヨンにも異星人が絡んでいることだ。

「まあ今回もサクツと解決しちゃいますか」

しかし彼女達は『いつも通り』のミツシヨンという事と油断しきっていた。

「たあつ!」

2日後の夜。ツキカゲメンバーは取引現場を押さえて売買人達を確保しようとしていた。

「どりやどりやどりやああッ!」

今回のミツシヨンには『詭つている身体を動かしたい』ということで白虎も同行して

いて、次々と黒服の男たちをトンファーでなぎ倒していく。

「はっはっはっ！どうだ！これが白虎様の実力だ！」

「まったくもう。白虎はもう少し大人しく戦えないのかしら？まるでスパイらしくないわ」

「白虎様は傭兵だぞ？そんなの些細な問題だ。うおっ!?」

楓がため息をつきながらダメ出しをしていると、最近現場に出ていなかったせいで本当に体が訛っていた白虎は近くの鉄パイプを踏んで転んでしまう。

「隙あり！」

「危ない！」

その隙をつかれた白虎はメトロン星人に光線銃を向けられ、モモはすぐさま白虎を庇おうとする。

「師匠！」

モモのピンチに伊智香はとっさにフーマのアクセサリーをつかみ取った次の瞬間……。

「ぐへっ……」

メトロン星人は背後から奇襲をしかけてきた謎の人物の攻撃によって気を失い、その場に倒れ込んだ。

「えっ?」

「自分の命を優先しなさいってあれほど教えたでしょう」

倒れたメトロン星人の背後から現れた人物にモモは言葉を失ってしまふ。その人物はモモ達がよく知る人物だったのだから。

「とはいえ・・・久しぶりね。モモ」

「師匠!」

モモのピンチを助けてくれたのはモモのかつての師匠、半蔵門雪その人だった。

「あれ?でも師匠はツキカゲに関する記憶がなくなつたはず・・・」

かつて雪のツキカゲに関する記憶をモモの手によって消している。その事をはつきりと覚えているモモは目の前にいる雪が本人であるかを警戒していると、初芽から通信が入ってきた。

『安心してください。目の前にいる雪ちゃんは正真正銘本物の雪ちゃんですよ』

ツキカゲ基地帰還後、初芽はさつそく雪の説明を始める。

「病の怪獣、ヤクサイの影響によって記憶を封じ込める薬の効き目が打ち消されてしまった雪ちゃんは度重なる宇宙人犯罪や怪獣災害を見て見ぬフリはできないと判断し、

元ツキカゲだった人物や、ツキカゲ協力者だった人物で構成された特殊災害X課に所属することになったんです」

「ええ。表向きは大学生だけど特災X課の隊員として少し前から活動しているの。今はドルテも所属しているわ」

「ドルテさんですか！最近お店で見かけないから何をしてるんだろうなって思ってたんですけど、まさか師匠と同じ組織に所属してたなんて」

筋肉質の女傭兵ドルテも今は雪と同じ組織である特災X課に属していると明かされ、一同は驚く。

「まあ、世間話はこれぐらいにして。今日私がここに来た本題を話すわね」

「えっ？雪さんは師匠を助けたついでにここに寄ったわけじゃないんですか？」

「モモの戦いぶりを見ていたのは事実だけど、ここに来たのは他にも理由があるわ」

てつきりモモを助けたついでにツキカゲ基地へとやってきたと思っていた伊智香だったが、雪はそんな天然な反応をする伊智香に笑みを浮かべつつ本題に入る。

「私、半蔵門雪は本日特殊災害X課の隊長代理として参上いたしました。これより特災X課はツキカゲ及び風の部隊、Z E Tと連携をして宇宙人事件や怪獣災害に対して対処行動をさせてもらうことになりました」

「それってつまり……！」

「ええ。また一緒に頑張らしましょう。モモ」

「はいー!」

雪が差し伸べてきた右手を両手でがっしりと握り返したモモは嬉しさのあまり涙を流す。

「モモ。私はもうツキカゲではないのだから師匠はやめなさい」

「師匠はいつまでも私の師匠ですよー!」

「あなたももうその子の師匠でしょう」

「・・・分かりました。雪先輩」

モモはかつての師匠である雪をこれから『雪先輩』と呼ぶことを決めると、楓は「そういうえば」と雪の右太ももに装備されている白い銃に視線を向ける。

「その銃、茜が使っていたものと同じですよね?」

「ええ。茜から押収したバトルスパークレンズを初芽が解析して模倣した光線銃よ。あと3つ製作したらしくて、ツキカゲと凧、ZETにそれぞれ1丁ずつ試験配備されることになったの」

「そういうわけですから・・・ここは雪ちゃんの弟子であるモモさんがお使いになるべきです」

初芽はモモにバトルスパークレンズを1丁手渡す。

「えっ? いいんですか私で?」

モモは気を使って楓の方に視線を向ける。

「あたしは構わないわよ。百地が使いなさい」

楓はモモにバトルスパークレンスを使うよう告げると、素直にモモはそれを受け取ることにする。

「それと・・・これも預けておきますね」

初芽はバトルスパークレンスの他に赤いキーをモモに手渡してくる。

「これは?」

「ブラックダイナゼノンとハイパーキーを解析して作り上げたダイナボルトハイパーキーです。それをバトルスパークレンスに装填することでダイナボルトを制御できるようにする予定です」

「ダイナボルト?」

「爆電竜人ダイナボルト。ブラックダイナゼノンを改修して作り上げようとしている巨大戦力です。茜ちゃんは一人でブラックダイナゼノンを操っていましたが、彼女が特別なだけで普通は操縦に4人必要になります。そのキーを起動することでサイバーデータ状になっているダイナボルトにアクセスし、バトルスパークレンスにセットすることでそれを媒介にダイナボルトの各構成マシンをリアルタイムできるといわけです」

ハイテンションの初芽にモモは取り残され気味になりながらも大まかには理解していたようで、バトルスパークレンスとキーを交互に見る。

「これが新兵器のカギになるアイテムだということは理解しました。けどなんで私なんですか？初芽さんの方が理解があるはずなのに・・・」

「ダイナボルトのコントロールは脳波による遠隔コントロールです。つまり反射神経や反応速度が重要になっているんですよ。今のツキカゲでそういった『感度』が最も高いのはモモちゃんだと判断した結果というのがありますけど・・・」

「けど？なんですか？」

「ほとんどは私情ですね。特殊災害X課に配備されたボルトウイングの担当が雪ちゃんだと決まった時からツキカゲの担当はモモちゃんにしようって決めてたんです」

笑顔でそう答えた初芽の言葉に雪もフツと笑みを浮かべると、モモはうつすらと涙を浮かべながらも嬉しそうに「はい！」と答えていた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

モモ達ツキカゲが新しく雪が所属する特災X課と正式に協力関係を結ぶことになっ

た頃、茜は新たなラボにて新しいダークネスの力を宿すキーを作っていた。

「よし！完成！」

彼女が作り上げたのは3つのキー。そこには黒い姿のタイガ、タイタス、フォームが描かれていた。

「ほう。今度はタイガ達トリスクワッドのダークネスキーですか」

茜の背後からいきなり現れた霧崎は3つのキーを手に取ろうとすると、茜にそれを阻まれる。

「これはこれは・・・誰かと思えばウルトラマントレギアさんじゃないですか。今回はどういったご用件で？」

「地球人風情が『ダークネス』の力を再現し、それを利用していると聞いてね。・・・気に入らないから邪魔してきたよ」

気に入らない。それだけの理由で茜の邪魔をしにきた霧崎は衝撃波を放ってくる。

「くっ・・・！」

その衝撃波を堪えた茜だったが、霧崎はその一瞬で茜の背後に回り込んで3本のキーをつかみ取る。

「悪くそ最高の美学？最高の美学は混沌にこそあるだろう」

「はあ・・・。せっかく作ったのにあなたの手に渡ったら、もう取り戻せないじゃない」

ため息をついた茜はキーを取り戻せないと悟り、それを潔く諦めるとポケットから別のキーを取り出す。

「はあ、もう少しこの世界で色々と作って遊びたかったけどトレギア相手じゃ私の作品は『玩具』にすぎないし、あなたを相手にするのは私じゃ無理ね」

『BOOTUP!GATE!』

自分にトレギアを相手をするのは無理だと判断した茜はキーを起動するとブルトンの能力を再現した平行世界間ゲートを発生させる。

「賢明な判断だ。このキーの駄賃として、今回は見逃してあげよう」

「ありがとうございます。いつでも言えればいいのかしら？まあ、あなたと再会しないことを祈っておくわ」

この場は見逃された茜はそのまま平行世界間ゲートを潜り、この世界を後にしていく。

「さて、邪魔者は去ったことだし。さっそくこの玩具で遊んでみようか」

『ULTRAMANTAI GADARKNES』

『ULTRAMANTAITASDARKNES』

『ULTRAMANFUMADARKNES』

3つのウルトラマンの力を宿すキーを起動したトレギアはそれに自身のエネルギー



を込めながら地面に捨てる。すると3つのキーから『闇』があふれ出し、それは3人の闇の巨人となった。

「さあ、人間が作った玩具だが少しは楽しませてくれよ。トライスクワッドのダークネス達」

「シユアー！」

1体は光の勇者ウルトラマンタイガのダークネス。闇の勇者ウルトラマンタイガダークネス。

「ムウンー！」

2体目は力の賢者ウルトラマンタイタスのダークネス。暴力の賢者ウルトラマンタイタスダークネス。

「セヤツ！」

3体目は風の覇者ウルトラマンフーマのダークネス。暴風の覇者ウルトラマンフーマダークネスだ。3体の闇の巨人は無差別な破壊をし始めると、当然ツキカゲや風の部隊はその事態に気づいた。

「今回はタイガ達の真っ黒いのが暴れますなあ」

「ただいま風の部隊から通信が入って、ウルトラマンスマッシュこと雅美さんが現地へと向かったそうです」

「1体はタイガが相手をするとして、1体はスマッシュが戦うんだよね？ だけど相手は3体だよ。どうするの初さん」

「もちろん。そのためのダイナボルトです。ついさつき最終調整を終えたのですが・・・雪ちゃん達にはぶつつけ本番で対応してもらうことになるかと」

「へえ、それはちよつとした冒険ね」

「まあ、何とかなるじゃろ」

ダイナボルトの初陣に緊張するモモ達の前へと現れたのは同じくダイナボルトのコントロールキーを渡されている来夢としぶきだった。

「しぶきさん！ それと・・・」

「こうして会うのは初めてだったわね。私はZETの敷島来夢。コードネームはノブナガよ。よろしくね」

来夢はツキカゲメンバーに簡単に挨拶をするとバトルスパークレンスとダイナボルトのコントロールキーを取り出す。

「ダイナボルトをリアライズする方法は簡単よ。それぞれのキーを起動することで4つに分離しているダイナボルトの構成マシンを現実世界にリアライズさせられるの。キーの起動の仕方だけ・・・見てもらった方が分かりやすいわよね」

『DYNAVOLT!』

キーのスイッチを押した来夢はそれをバトルスパークレンスにセットする。

『ACCESSCHORD・VOLT DIVER』

「アクセスコード！ボルトダイバー！」

来夢がバトルスパークレンスのトリガーを引くと、サイバーワールドから潜水艦型のマシン、ボルトダイバーがリアライズする。

「ね？簡単でしょ？」

「なるほど。こうじゃな？」

『DYNAVOLT！』

『ACCESSCHORD・VOLT STRIKER』

「アクセスコード！ボルトストライカー！」

見よう見まねでしぶきもキーを起動すると車型のマシン、ボルトストライカーをリアライズさせる。

「行けるわねモモ」

「はい！雪先輩！」

『『DYNAVOLT』』

『ACCESSCHORD・VOLT WING』

『ACCESSCHORD・VOLT SOLDIER』

「アクセスコード！ボルトウイング！」

「アクセスコード！ボルトソルジャー！」

雪が戦闘機型のマシン、ボルトウイングをリアライズすると、モモも竜人型のマシン、ボルトソルジャーをリアライズさせる。

「呼び出すまでは問題ないの。問題はここからよ。それぞれのマシンは私達の脳波で遠隔コントロールできる設定なんだけど……まずは現地向かいましょうか」

「脳波で……えつと……こんな感じでしょうか？」

モモはボルトソルジャーが走るイメージをしてみると、ボルトソルジャーはモモのイメージ通りに走り出す。するとそれぞれのマシンもトライスクワッドのダークネスが暴れる現地に向けて動き出す。

「みんな呑み込みが早いわね。流石よ。とはいえそれぞれのマシンを合体させるには4人の気持ちを一つにしないとイケないの」

「気持ちを一つに？」

「ええ。合体自体は『合体』をさせるイメージが合致しないとイケないの」

「合体をイメージ……」

4人は4機が合体し、ブラックダイナゼノンのようなフォルムのロボットになるイメージをする。すると4機の機体はオレンジと黄色のカラーリングをしたウルトラマ

ンよりもやや大きめのロボットに合体した。

「これが……」

「ええ。爆電竜人ダイナボルトよ」

4機のマシンが合体して爆電竜人ダイナボルトとなると、それはトライスクワッドのダークネス達の前に着地する。

「……よし、ここなら。光の勇者！タイガ！」

モモ達がダイナボルトの合体のレクチャーを受けていた間に、どさくさに紛れて人気がないところに移動していた伊智香はタイガスパークを出現させるとその手にタイガアクセスリールを握りしめる。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

伊智香はウルトラマンタイガへと変身を遂げると、ようやく現地に到着した雅美も3体の闇の巨人を見上げる。

「行くよスマッシュ」

「ええ。最初から全力で行きましょう！」

雅美はウルトラゼットライザーを取り出すとそれにアクセスカードをセットする。

『masami access granted』

「時代を繋ぐ光の戦士！ウルトラマン！ティガ！タイガ！」

3枚のウルトラメダルをゼットライザーに装填した雅美はそれをスキャンする。

『ultraman』

『tiga』

『taiga』

「スマッシュファイト！」

『ultraman smash lightning generation』

ウルトラマンスマッシュ・ライトニングジェネレーションに直接変身すると、スマッシュもタイガ・ダイナボルトと並び立つ。

「これで3対3。各個撃破で行きましょう！」

スマッシュの言葉にタイガが頷くと、一番最初に動いたのはダイナボルトだった。2人のウルトラマン達よりもパワーに優れているダイナボルトは真正面からタイタス・ダークネスと力比べの勝負をし始める。

「ちよ、初陣でいきなりパワー勝負!？」

「問題ない！」

最初に主導権を握ったしぶきはダイナボルトでタイタス・ダークネスと力と力のぶつかり合いをする。純粋なパワーは互角。互いに一步も譲らない。するとタイタス・ダー

クネスは星状の光線、ダークネスアストロビームを放ち、ダイナボルトの力を鈍らせる  
とそのまま殴り飛ばした。

「くっ、卑怯な……」

「本物のタイタスならしないような卑怯な戦術ね。なら次は私が！」

来夢が主導権を握ると、ダイナボルトの全砲門が展開する。

「ダイナボルト！フルバースト！」

全身の砲門からミサイルや雷撃光線を放つダイナボルト。その攻撃にタイタス  
クネスは背中から倒れ込む。

「次は私が行くわ」

続いて雪が主導権を握るとダイナボルトは両腕を束ね、一振りの巨大なエネルギーの  
刃が形成される。

「サンダーブレードストライク！」

電撃を纏わせた刃でタイタス、ダークネスを斬りつけると、その一撃で斬られた箇所か  
ら『闇』が抜け出ていく。

「百地！」

「はい！」

モモが主導権を握ると、両腕にエネルギーの刃が形成され、二振りの刃でタイタス

ダークネスを×字に斬りつける。防ごうとしたタイタスダークネスだったが体内の『闇』が減っていたため、勸善には防ぎきれず大ダメージを与えることに成功した。

『皆さん。合体形態を変更。ボルトドラゴンでフィニッシュです!』

「ボルトレックス? 何ですかそれ?」

『ダイナボルトのもう一つの合体形態です。合体変更は1人のイメージでも可能なので、今回は来夢さん。お願いします』

「任されたわ! 合体電竜! ボルトレックス!」

来夢のコマンドで4機の機体が一度分離するとドラゴンのような姿に再合体を果たす。

「これが・・・もう一つの合体形態なのね」

ボルトレックスに驚きを隠せない来夢以外の一同。もとより開発側として知っていた来夢は必殺技を放とうとしているタイタスダークネスに気づき、こちらも必殺技を放とうとする。

「みんな! フィニッシュは必殺技で行くわよ」

「必殺技? ウルトラマンの光線みたいなものもあるんですか?」

「もちろん。必殺技は『必勝大雷撃レックスサンダー』よ! せーのでいくわよ。はいせーの!」



「打ち合わせもなしに・・・」

「いきなりですか？」

「流石に無理じゃろ・・・」

モモ達3人はタジタジになりながらも来夢にタイミングを合わせようとする。

「二」必勝大雷撃！レックスサンダー！「二」

何とか4人のタイミングが合うとポルトレックスの口から強力な雷撃光線が放たれる。対するタイタスダークネスもダークネスプラニウムバスターを放ってくるが、レックスサンダーはそれを打ち破ってタイタスダークネスを撃ち貫いた。

「・・・ッ!？」

その一撃でタイタスダークネスは爆散する。残るはタイガダークネスとフーマダークネスの2体だ。

## 師匠の師匠 紡がれる絆

ダイナボルトがタイタスダークネスを撃破した頃、スマッシュはフーマダークネスのスピードに翻弄されていた。

「ジュアー！」

パワー特化のクラッシュエナジーとは違い全体的なスペックを強化しているライトニングジェネレーションはもちろんスピードも基本形態のスマッシュと比べて強化はされているのだが、それでもフーマダークネスにはスピードは追いつけずにいた。

「地球の言葉でいうなら……まさに雲泥の差といったところででしょうか？」

「言ってる場合じゃないよスマッシュ。どうするの？」

「やはりここは……使うべきでしょうね。第3の強化形態を」

「あれだね。分かった」

インナースペースの雅美は3枚のウルトラメダルを取り出す。最強最速の戦士ウルトラマンマックスのメダルとウルトラマンゼロのメダル。そしてフーマの力を宿したメダルだ。

「宇宙最速！疾風の如く！マックス！ゼロ！フーマ！」

『MAX』

『ZERO』

『FUMA』

3枚のウルトラメダルをウルトラゼットライザーでスキャンした雅美。するとゼットライザーは3枚のメダルの力を解き放った。

「スマッシュファイ！」

『Ultraman smash tornadodash』

スマッシュはスピード戦士達の力が宿るメダルで蒼い戦士、ウルトラマンスマッシュ・トルネードダッシュへと強化変身を遂げる。

「疾風迅雷！」

残像を残すほどの超スピードで駆けたスマッシュはフーマダークネスを上回る速さの超スピードで翻弄する。

「セヤツ！」

フーマダークネスは何とか攻撃を当てようと光波手裏剣を乱射するも、今のスマッシュにはまるで当たらない。

「最光剣・零式」

光の剣を作り上げたスマッシュは瞬時にフーマダークネスの背後を取る。その瞬間

には既に決着がついていた。

「っ!？」

既に斬られていたフーマダークネスは爆発し、闇のエネルギーが四散していく。残るダークネスは1体。タイガダークネスのみだ。

「勝負だ！俺の偽物！」

タイガは小手調べにとスワローバレットを放つと、タイガダークネスもダークネススワローバレットを放ち、互いに技を相殺しあう。

「タイガ。僅かながらに相手の方が威力は上だぞ」

「みたいだな。だったら俺も火力アップだ！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

タイタスのアドバイスにタイガはフォトンアースに強化変身をする。タイガダークネスはダークネスストリウムプラスターを放ってきた。

「オーラムストリウム！」

対するタイガもオーラムストリウムを放ってダークネスストリウムプラスターを打ち破るとタイガはすぐさま爆煙を潜り抜けてタイガダークネスに殴りかかる。

「ハアアアっ！」

「ッ!!」

タイガダークネスも対抗して拳を振るってきた、互いの拳がぶつかり合う。通常のタイガのダークネスであるタイガダークネスはタイガより光線技は強いようだが、パワーはタイガ・フォトンアースに劣るようで力負けする。

「やつぱりな。フォトンアースの力までは真似てないみたいだ」

「油断すんなよタイガ。光線の威力はフォトンアースでだいたい互角だぞ」

「分かってる」

フーマに相手の光線技がフォトンアースでようやく上回る程度だと指摘されたタイガ。タイガはそれを理解しつつ、格闘戦に持ち込もうとする。

「シユアー！」

パワーや防御面ではタイガ・フォトンアースの方が上だが、鎧を纏っていないぶんスピード面ではタイガダークネスに分があるようで、タイガが後手に回りつつあった。

「くっ、フーマほどじゃないがこいつ。速いな」

「何やってんだタイガ！スピードが足りてねえぞ。おい伊智香！俺に代われ！」

後手に回っているタイガを見かねたフーマは自分に変身するよう伊智香に要求するも、伊智香は首を横に振った。

「ううん。ここはタイガ君のままで行こう」

「・・・なんか考えがあるってことか。いいぜ」

「タイガ君。君の力はフォトンアースだけじゃない。その力、偽物に見せつけてやろう」  
「オウとも！」

「まずはこれから！」

『オーブレット・コネクトオン』

「スプリームプラスター！」

タイガはオーブレットの力を発動して光線を放つと、ニュージエネレーションズから授けられた腕輪のないタイガダークネスは咄嗟に回避行動を取る。

「やっぱりあいつはニュージエネレーションズの力を持ってないんだ。伊智香！」

「うん！」

『ロツソレット・コネクトオン』

「フレイムプラスター！からの……」

『ブルレット・コネクトオン』

「アクアプラスター！」

さらにタイガはロツソとブルのレットを続けざまに発動して連撃を仕掛ける。その2つの属性攻撃は混ざり合いハイブリッドの一撃となると、それはタイガダークネスに命中した。

「っ……！」

その一撃でかなりのダメージを負ったはずのタイガダークネスだがまだ倒れる気配はない。そう判断した伊智香はさらにレットを腕に装着する。

「今度はこれだよ！」

『ビクトリーナイトレット・コネクトオン』

「ナイトビクトリウムブラスタ―！」

「せっかくの玩具を簡単に壊さないで欲しいなあ」

ビクトリーナイトの力を借りた光線で追い打ちを仕掛けるタイガ。するとそこにトレギアが現れてその光線を弾いた。

「トレギア―！」

「この玩具は既にこの世界からおさらばした人間から貰った大切な玩具なんだ。簡単に壊されちゃ面白くない。だから……」

トレギアが指をパチンと鳴らすと、タイタスダークネスの闇の残留粒子とフォーマダークネスの残留粒子がタイガダークネスを包み込む。するとタイガダークネスの姿はトライストリウムを模した闇の姿、トライストリウムダークネスへと姿を変えた。しかしその違いは見た目が黒いこと以外にもあった。タイガ・トライストリウムの絆の象徴であるタイガトライブレードを持っていないのである。

「光も闇も、善も悪も……その混沌の炎で蝕んでしまえ」

「くっ……うわあっ!?!」

トライストリウムダークネスはトレギアの指示でタイガへと襲い掛かる。手刀から闇の炎を放つトライストリウムダークネスの一撃をタイガはガードするも、その威力を殺しきれずに鎧が吹き飛んでしまう。

「そんな絆のないトライストリウムに私達は負けない! そうだよねタイガ君!」

「ああ! みんなで行くぞ!」

「うん! タイガ! トライブレード!」

タイガはみんなだと告げると伊智香はタイガトライブレードを出現させる。

「燃え上がれ! 仲間とともに!」

「「バディ・ゴー!!!」」

タイガはトライストリウムへと合体変身するとトライブレードを構え、必殺の一撃を振るう。

「風真! 烈火斬!」

炎の斬撃を飛ばしたタイガ。するとトライストリウムダークネスはダークネスストリウムブラスターでそれを相殺する。

「タイタス! バーニングハンマー!」

そこにタイガは火球を飛ばすと、それをトライストリウムダークネスはバリアで防



ぐ。

「タイガ！ブラストアタック！」

バリアが消えた瞬間に炎を纏ったタイガが突撃していくと、剣に貫かれたトライストリウムダークネスは炎に包まれる。

「これで決める！伊智香！」

「トライスクワッド！」

「「トライストリウムバースト！」」

トライストリウムバーストが炸裂し、怒涛の4連撃を受けたトライストリウムダークネスは爆発し、3つのキーが地面に落下する。

「どうだ！これが本物の絆の力だ！」

「まったく君達は……二言目には相も変わらず絆、絆……。虫唾が走るよ」

ため息をついたトレギアは魔法陣の中に消えていく。本物の力を見せつけたタイガ。その横にボルトレックスとスマッシュが並び立つ。

「シューア！」

「ジュア！」

互いに頷き合ったタイガとスマッシュは空へと飛び去っていくとボルトレックスもエネルギーが尽きてデータとなってサイバースペースへと戻っていく。

「お疲れ様でした雅美さん！」

「うん。そつちもお疲れ様」

「あれ？なんだろうあれ？」

変身を解除した伊智香と雅美は互いに検討を称え合うと2人は近くに先ほどの3つのキーが落ちていることに気づく。トライスクワッドのダークネスのキーだ。

「さっきの3体のキーだね。回収しておこうか」

雅美はキーを回収しようとすると、いきなり目の前の空間が割れ、そこから茜が飛び出てきた。

「いやあく。ありがとうございます。トライスクワッドのダークネスを倒してくれて。このキーは作るのにわりと体を張ったから手元に持つておきたいのよね」

茜はダークネス達を倒した伊智香達にお礼を言いながら3つのキーを回収しようとする。

『あいつにキーを回収させるわけにはいかない！伊智香！』

「うん！」

「・・・ッ」

伊智香と雅美は茜にキーを回収されるわけにはないと同時に駆け出す。すると茜はキーを回収すると見せかけて、真つ先に雅美を蹴り飛ばした。

「うっ……」

「雅美さん!？」

壁に激しく叩きつけられた雅美は今の一撃で気を失ってしまうと、伊智香のみが茜と対峙することとなる。

「残るのは『弟子』の一人の伊智香ちゃんだけ。余裕かしら。貴女を倒して気持ちよくキーを回収させてもらおうわ」

茜は特殊なアンダースーツで身体強化をしていたが、雅美にはそういったものがなかったので敗れた。しかしツキカゲである伊智香にはまだ手段がある。

「……そういえばこれ。最近使ってなかったな」

スパイスを手を取った伊智香はそれを一口かじる。それによって伊智香の身体能力が向上した。

「ツキカゲの切り札スパイスね。私は研修期間だったからそれはもらえなかったのよ。まあ、私にそんなものはいらないけど」

『弟子』である伊智香を完全に格下と判断している茜はスパイスがなくてもと余裕の態度をとる。事実今の伊智香では力の差は歴然で伊智香一人では勝てる要素はない。そう。一人では……。

「私は一人じゃない。師匠がいる。支えてくれる仲間がいる。タイガ君達がいる。出

会ったたくさんの人達のおかげで今の私がある。この技はそのうちの1人の剣」

『その構えは・・・伊智香、ここでそれをやるのか?』

『それはまだ練習で一度も成功してないだろ?』

『いや、今の伊智香なら或いは』

タイガ達は伊智香の構えを見て敵しそうな反応をする。その剣は異なる次元の来訪者から教わった剣技。伊智香はその剣を何度も練習したが成功した試しがないにも関わらずあえてこの場で使おうとしているのだ。

「邪心・・・抜刀斬!」

その剣技こそ邪心流、邪心抜刀斬。ジャグラスジャグラーから教わったたった1つの剣技だ。

「邪心剣って・・・!」

『BOOTUP!SHOCKWAVE』

この剣は危険だと判断した茜は咄嗟にキーを起動してバトルスパークレンスから超振動波を放つも、伊智香の剣は止まらない。

「ハアっ!」

伊智香の剣は振り抜かれたがその刃は茜を斬ってはいなかった。

「斬られて・・・ない?」

「いいえ。斬りました」

茜はまさかと慌てた様子で下を見るとトライスクワッドのダークネススキーが3本とも斬られていた光景が広がっていた。

「……やつてくれたね伊智香ちゃん。だけでもうその刀じゃ戦えないよね？」

「……そうみたいだね」

伊智香の手にしていた剣は超振動波を真正面から受けたせいでキーを破壊したと同時に折れてしまっていた。

「だけどさつきも言った通り、私は1人じゃないよ」

「お待たせ孫市」

そこに現れたのは伊智香の師匠であるモモとその師匠であった人物、雪だ。

「師匠！……じゃなかった。雪先輩。久しぶりのタッグですけどいけますか？」

「言うようになったじゃない百地。それとタッグじゃないみたいよ」

「はい！トリオです！」

刀は折れても心は折れてはいない伊智香はモモと雪の間に並び立つ。するとモモは自身の刀を伊智香に渡す。

「それじゃ……3代3人で行こうか孫市」

「はい！」

ツキカゲ3代が揃った伊智香達。冷静ならばそのままこの場を後にしていただろう。茜だが、せつかくのアイテムを破壊された茜はその冷静さを失っていた。

「ああもう！なんなのこの世界は！うまくいかないことばかり！」

やけ気味にバトルスパークレンスの光線を乱射する茜。それをモモと雪がバトルスパークレンスの光線で相殺する。

「百地！」

「はい！」

同時に駆け出したモモと雪。2人はバトルスパークレンスの狙撃でそれぞれ茜の足元と手元を狙い、動きと攻撃手段を封じる。

「孫市！」

「はい！」

そこに刀を構えた伊智香が駆けていく。しかしその途中で伊智香は先ほどの超振動波のダメージで動きが鈍ってしまう。

「まだまだあつ!!」

足を止めそうになる伊智香だったが、それに気を取られていた茜は気づくのが遅れていた。

「そっまでよ」

自分が既にツキカゲだけでなく凧の部隊やZETに囲まれていたことに。

「ハア・・・この戦いは時間稼ぎだったってわけね」

ため息をついた茜はようやく冷静さを取り戻したが時既に遅しで彼女は逃げ場を失っていた。

「アンタの負けよ。茜」

「そうみたいね」

楓の言葉に頷いた茜は戦意喪失したようで両手をあげる。

「悔しいけど完全に私の負けよ。私の敗因は貴女達を見くびっていたことかしら」

「そうね。それがアンタの敗因よ」

「そんじゃ大人しく捕まってもらうね〜」

負けを認めた茜を楓と命は取り押さえようとすると、茜はその手を避ける。

「この期に及んでまだ抵抗する気か！」

テレジアは抵抗する茜に麻酔銃を向けようとする、茜はブルトンのキーを起動してバトルスパークレンスにセットする。

『BOOTUP!GATE!』

「負けは認めるけど、捕まる気はないわね。かといってこの世界にこれ以上居座る気もないわ。悪の美学には引き際が肝心って。これ、お姉様の言葉」

ブルトンの力を使った平行世界間ゲートを開いた茜はそのゲートを潜っていく。

「待ちなさい！」

「ストップ。初さんの話だとそれは潜らないほうがいいかも」

追いかけてようとする楓を命が静止させる。どうやら初芽からの情報でゲートを潜らないほうがいいと聞かされていたようだ。

「まったく……。この世界は貴女達に邪魔されまくって踏んだり蹴ったりだったわ。新しく作ったものは全部壊されて何にも成果が上げられなかったじゃない」

「悪に成果を挙げさせてあげるわけじゃないよ。そのために私達がいるの」

五恵は悪に成果は出させないと告げると凧やZETの面々も頷く。すると茜の入ったゲートが閉じ始めた。

「今度こそ本当にお別れ。それじゃあ皆さん。またどこかの世界で会いましょう。次の世界では……。お姉様と再会したいわね」

ゲートが閉じる直前に最後にそう言い残した茜は完全にこの世界を後にした。

茜との最後の戦いの翌日。表社会は学生である伊智香達は何事もなかったかのように学園生活をして今日もWasabiに足を運ぼうと校門から出ていこうとすると、校門には雪が寄りかかっていた。



「あつ！半蔵門センパイだ！」

「本当だ！」

既に大学生である雪だが、2年・3年生には顔が知れていて有名であり、彼女に気づくなりそこには人だかりが出来つつあった。

「凄いなあ。あの人、人気者だったんだ」

「そうだよ。雪先輩は在学中みんなの人気者だったんだから」

モモはまるで自分の事のように自慢げに雪の事を語ってくる。

『よくそんな人気者がスパイなんてできてたな』

フーマはその人気に半分呆れながらも率直な感想を告げていると、伊智香とモモを視界に捉えた雪は2人に近づいてくる。

「待っていたわよ2人とも。ちよつと時間を貰えるかしら？」

雪に伊智香とモモが付いていくと、雪は一度はツキカゲの記憶を消した海岸へと足を運んだ。

「もうすつかり師匠ね。モモ」

「そんな。私なんてししょ・雪先輩に比べたらまだまだですよ」

「謙遜しなくていいわ。あなたの弟子、才賀伊智香と言ったわね。ダメージのせいで最後は動きが鈍っていたけど私達の連携に合わせて戦えるなんて中々のものよ」

「あ、ありがとうございます！」

「ただいざつて時に逃げようとしらないのはモモのダメなところを受け継いじやっているわね。伊智香、覚えておきなさい。いざつて時にはスパイだって逃げていいの。茜みたいな言葉を言ってしまうけれど、スパイには引き際が肝心よ」

「引き際……」

「一番大事なのは自分の命なの。命があるからまた次があるの」

「命があるから……次が」

「そして次があるからこそ、私達は師匠と弟子という関係を作り上げて、その経験や技術を次の世代に繋いでいくの」

師匠と弟子という形で絆が繋がっていくことに関心深い気持ちになっていた伊智香とモモ。

『俺の父さん、ウルトラマンタロウは光の国の筆頭教官をしていて、ウルトラマンメビウスっていう俺にとつての兄弟子がいるんだ。光の国でも……師匠と弟子つて形で絆は繋がっていくもんなんだ』

「絆つて……こうして次に繋がっていくんだ」

「そうだよ伊智香ちゃん。ツキカゲはこうして次に次につて絆を紡いできたの。いつかは伊智香ちゃんも師匠になる。その時は伊智香ちゃんが弟子に教えてあげて」

「はい！」

『俺もいつかは父さんのように誰かの師匠になる日がくるのかなあ』

伊智香もいつかは師匠という立場になる。それに関心深い気持ちになっていたタイガにタイタスとフーマが口を挟む。

『確かにいつかは君も師匠という立場になるだろう。だがそのためにもそんな未来があるであろう明日を守らねばならない』

『だよな。明日があつての未来だ』

『久しぶりにアレ、やっとかか』

タイガの言葉に普通の地球人には見えない人間サイズの半透明な姿で現れたタイガ達。

「生まれた星は違つていても」

「共に進む場所の一つ」

「永遠の絆とともに」

伊智香もモモと雪がいるにも関わらずにそれとなく口上を告げる。

「我ら4人」

「」「トライスクワッド！」「」

「これからも未来に・・・絆を繋げていくぞー！ー！ー！」

沈んでいく夕日に向けてタイガは叫ぶ。それに伊智香とタイタス。そしてフーマは頷いていた。

## 雷にぐ用心

「ふむ、まあこんなところか」

朝のジョギングを終えたテレジアはシャワーを浴びて制服に着替えると今日も伊智香達と同じ学校へと登校していく。誰に決められたわけでもない。自分で決めた朝練をただただライフワークとしてこなしている。

「おはようテレジア」

「おはよう五恵」

かつての自分にはなかったもの。守りたい人ができた。大切な仲間ができた。そのために彼女は少しでも強くなろうとしていた。

「ゴロサンダー!!」

「五恵・・・。五恵えええっ!!」

そんな矢先だった。守るために強くなろうとするテレジアに『無力』という二文字を叩きつけられたのは・・・。

時は1時間ほど前に遡る。

「ふむ、いい景色だ」

高台から町を見下ろす霧崎はトレギアアイを取り出すと、等身大のウルトラマントレギアへと変身すると快晴の空に右手を伸ばす。

「来たれ。雷撃の獣神、ゴロサンダー」

トレギアが空へとエネルギーを放つと、空が突如として暗雲に包まれる。

「戦いに餓えたその体。十二分に満たしてやろう」

「ゴロン、ゴロゴロ」

暗雲の中に浮かび上がる赤い巨体の怪獣。雷撃獣神ゴロサンダーだ。ゴロサンダーは暗雲とともに何処かへと消えていくとトレギアはクスクスと笑う。

「さあ、才賀伊智香。今回のゲームはどう攻略してくれるのかな？」

トレギアがゴロサンダーを地球に召喚していた頃、学校を終えてWasabiに向かうとする五恵とテレジアは前を歩いていた伊智香の存在に気づいた。

「伊智香ちゃん！」

「あつ、五恵さん。テレジアさん。お疲れ様です」

2人に軽く頭を下げた伊智香はそのまま2人と合流する。

「珍しいね。今日は1人だなんて」

「師匠はダイナボルトの訓練があるからと半蔵門さん達と人気のない山に向かいました。楓ちゃんは命さんと一緒に買い物に行く約束をしていたようで……」

「それで今日は1人なんだね」

いつもは師匠であるモモか楓とともに下校する伊智香だったが、今日は珍しく2人も用事があつたようで1人で下校をしようとしていた。

「伊智香。最近、射撃の訓練はどうなんだ？」

テレジアは最近まで剣術の訓練ばかりをしていた伊智香に射撃の訓練はしているのかを訪ねる。伊智香は師匠であるモモやその師匠であつた雪が刀の使い手だつたこともあり、剣術にも力を入れているが、彼女の才能は狙撃にこそある。元々モモは師匠たちの意思を継がせるため伊智香にも剣術を教え込もうとしたが、彼女の才能が狙撃にあつたことを理解してからはその練習もさせていたのだ。

「射撃のですか。最近ほ……ちよつとあまりやつてませんでしたね」

最近の伊智香はジャグラーから教えられた邪心剣の練習ばかりしていたので射撃の訓練は疎かになっていた。本人も気にはしていたが、それ以上に周囲がそのことを気にしていたようだ。

「せっかく射撃の才能があるんだからそれをしっかりと伸ばした方がいいよ」

師匠たちの中では最も狙撃に優れている五恵はその才能を伸ばすべきだと告げてく

る。そんな彼女は狙撃もできるがその真価は怪力からの近接戦闘にある。彼女の弟子であるテレジアも近接格闘を得意とし、五恵と共にその訓練に勤しんでいる。

「そうですね。じゃあ今日の訓練は射撃の訓練にします」

伊智香は今日の訓練を射撃にすることを決めるとテレジアは「せっかくだ」提案してくる。

「伊智香。私に試しに狙撃を教えてください」

「えっ？でも私なんかが……。射撃ならまだまだ五恵さんの方が得意だと思いますけど」

「だが才能は伊智香の方があるのだろう。モモだけでなく五恵もそう確信している。

まあ、お前もいつかは弟子を取る未来がくるんだ。その練習だと思ってみろ」

「弟子を取る未来かあ。あんまりピンとこないなあ」

自分が弟子を取る未来が想像できない伊智香にテレジアは続ける。

「伊智香もツキカゲである以上、必ず技術や魂を後世に継承させる役割を担わなければならない。お前も……。もちろん私もな」

伊智香に語るテレジアもいつかは師匠になって弟子に教えを伝えていく。それはもちろんツキカゲだけではない。タイガ達もそうだ。

「俺達もいつかは弟子とか後輩ができるんだよな」



「ん。そりやまあ、そうだろうな」

弟子や後輩を自分たちが導く未来を考えるタイガとフーマ。すると日課の筋トレを終えたタイタスも会話に入ってくる。

「教える立場になってこそ分かる事もある。教えるということは必ずしも一方的なものではない。時に教えられることもあるのだ」

「うん。分かった。．．．あまり自信はないけど、一緒に頑張ってみようテレジアさん」  
タイタスの言葉に頷いた伊智香はあまり自信がないながらもテレジアに教えてみることを決めた伊智香。そしてツキカゲ基地に到着した3人はさっそく射撃場に足を運んだ。

「とりあえず．．．テレジアさん。構えてみて」

「ああ」

伊智香はテレジアの銃の構えを確認する。元々師匠である五恵も射撃はできる方だったため、その彼女から教わっていたテレジアも構えは決して悪い方ではなかった。「いい構え。流石五恵さんから教わっているだけはあるね」

「フツ。当然だ。五恵は教えるのもうまいんだ」

まるで自分の事のように五恵が褒められるのを喜ぶテレジア。しかし伊智香は彼女の構えに違和感を抱く。

「うーん・・・」

「どうしたの伊智香ちゃん？」

「いえ、構えはいいんですけど・・・銃の重さに少し負けている感じがあるんですよ。もう少し軽い銃の方がいいんじゃないでしょうか」

「銃の重さに・・・か」

テレジアは五恵に次いで今のツキカゲの中では筋力がある方であるテレジアだからこそ、銃の重さなどは気にしていなかった。伊智香はその事にいち早く気づくと、テレジアと五恵の2人は流石だと笑う。

「代々剣の教えを伝えてきたモモちゃんの系統から射撃の使い手が育っているなんてね」

「モモの師匠。雪が聞いたらどんな顔をするだろうな」

「雪さんですか・・・。私、まだあまりあの人と話したことがないんですよ」

射撃場を後にした3人は雪の事を話題にしながら神社よりの出口から外へと出る。

「確か雪さんはツキカゲを引退する時に一度記憶を消したんですよ？」

「うん。百地の手でツキカゲの記憶を消してもらったの。だけどヤクサイが寄生した影響でその記憶を封印していた薬の効果がなくなっちゃって、今は別組織になってなったんだ」

「雪さんって・・・どんな人なんですか？」

知り合って間もない伊智香はまだ雪の事をほとんど知らない。だからこそそれなりに雪と付き合いがあつた五恵にどんな人だつたかを尋ねた。

「自分にも他の人にも厳しい人だつたけど・・・それ以上に優しい人だつたよ。特に百地は大事にしててね。他の人よりも自分を優先してつて百地に言い聞かせているのに、自分は常に百地の事を優先してたりしてね。百地もそんな師匠が大好きで、その教えを今も大切にしているんだ」

「私も・・・師匠が大好きです！」

負けじと自分も師匠であるモモのことが大好きだと告げると、それを見せられたテレジアと五恵は笑う。それにつられるように照れながら伊智香も笑うと雲行きが急に怪しくなり始めた。

「天気が怪しいね。中に戻ろっか」

空に落雷が鳴り響いたかと思うと、その空にゴロサンダーが現れた。

「伊智香、マズい。あれはゴロサンダーだ」

「知ってるの？」

「雷を司る神だ。姿を見た者には必ず死が訪れるという厄災の神」

「戦う事が生きがいの獣神だ。いったい誰が呼び寄せやがった」

タイガ達が3人とも知っているほどに危険な怪獣が突如として現れた事に驚きを隠せない伊智香。するとゴロサンダーは五恵を指差してくる。

「オンナ、気ニイツタ。オンゴロロ！」

「な、何? きやああつ!？」

ゴロサンダーが右手を広げたかと思うと五恵がその手に吸い込まれていく。

「五恵! 五恵えええつ!!」

あまりに突然の事なので対応ができなかったテレジアは五恵に向けて叫ぶ。すると伊智香とテレジアはすぐにゴロサンダーのへその部分に五恵がいた事に気が付いた。

「五恵を返せ!!」

師匠であり友である五恵が取り込まれて動揺が隠せないテレジアはゴロサンダーに向けて銃を発砲するもまるで通用しない。

「テレジアさんは師匠たちを呼んできてください。ダイナボルトならきつと対抗できるはずですよ」

「伊智香はどうする気だ?」

「あの怪獣の注意を少しでも惹きつけます」

「・・・分かった。無茶はするなよ」

五恵はモモ達を呼びにその場を去っていくと、伊智香は決意を固めた目でゴロサン

ダーを見上げる。

「行くよタイガ君」

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

タイガのアクセサリーを手に取った伊智香はそれをタイガスパークが装着されている手に持ち替える。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

ウルトラマンタイガに変身した伊智香はゴロサンダーの前へと着地をすると、霧崎はそれを見て反応する。

「来たね。ウルトラマンタイガ。いや・・・才賀伊智香」

「カカツテコイ」

タイガを見るなり挑発してきたゴロサンダー。それに対して伊智香達はどう五恵を助け出そうか考えていた。

「どうすれば五恵さんを助けられるかな？」

「ヘソを斬り落とせばいいんじゃないかねえか？」

「可能性はあるが、かなり危険だ。おそらく彼女と奴の神経は同化している」

「人間の生命力を信じるしかないな」

「・・・必ず助ける！」

五恵を絶対に助けると決意を固めた伊智香達。タイガはゴロサンダーへと駆け出して五恵が囚われているヘソを狙おうとすると、ゴロサンダーは自身の胸を叩いて電気をチャージし、電撃を放ってきた。

「うわあっ!?!」

ガードが間に合わなかったタイガは電撃を受けてその場に転倒してしまふ。

「ゴロゴロゴロ！」

「電撃など私の筋肉には効かん。私が行こう」

転倒したタイガを笑うかのような反応をするゴロサンダー。それに対してタイタスは自分が行くと進言してくる。

「分かった！」

『ウルトラマンタイタス！』

伊智香はタイガからウルトラマンタイタスへと交代すると、タイタスはゴロサンダーの放つ電撃にほとんど怯まずに前進していく。

「伊智香！雷には雷だ！」

「うん！」

『エックスレット・コネクトオン』

「エレクトロロバスター！」

エックスの力を発動したエレクトロバスターで勝負に出たタイタス。対するゴロサンダーも片腕から電撃を放ち、電撃同士のぶつかり合いはタイタスの方がやや優勢となる。

「そのまま貫け！」

「ゴロ・ゴロサンダー!!」

「何っ!?!ぬおっ!?!」

タイタスの電撃がゴロサンダーに届こうとした瞬間、ゴロサンダーはもう片腕からも電撃を放って威力を上げてくる。その威力にエレクトロバスターが押し負けてしまい、タイタスは背中から倒れてしまう。

「ゴロゴロゴロゴロ、ゴロサンダー！」

電撃を右手に集めたゴロサンダーは木で作ったような棍棒型の武器『ゴロン棒』を呼び出すとそのまま倒れているタイタスをそれで殴りつけてくる。

「ぐああああっ!?!」

鈍器としてのダメージもあるが、一億アンペアの電流に一兆ボルトの電圧も同時に打ち込んでくる攻撃には流石のタイタスも無傷とはいかず、電撃によるダメージを受けて

しまう。

「ハハハハハハっ！期待以上だよゴロサンダー！」

「大地震撼、無敵の剛力！パワーード！ガイア！タイタス！」

『powered』

『gaia』

『taitas』

「スマツシユファイ！」

『ultramansmash crashenergy』

その様子を見ていた霧崎は期待以上だと喜んでいると、遅れてやってきた雅美がウルトラマンスマツシユ・クラツシユエナジーへと変身して参戦してくる。

「ジュアー！」

横から強烈な拳を叩きつけるスマツシユ。その一撃で怯んだゴロサンダーはゴロゴロと転がっていく。

「大丈夫ですかタイタス」

「スマツシユ。助かった」

スマツシユの手を借りて起き上がったタイタスは同じく立ち上がったゴロサンダーの方を見る。



「状況は分かっているかスマツシユ？」

「ええ。五惠さんを助け出すのですよね。僕がヒーリング能力でサポートをします。ですので皆さんはゴロサンダーから五惠さんを切り離してください」

「サポートは任せたぜスマツシユ！」

『ウルトラマンタイガ！』

「タイガトライブレード！」

スマツシユというサポートがあればと再びタイガに交代する伊智香は即座にタイガトライブレードを出現させる。

「燃え上がれ！仲間とともに！」

「「「バディ・ゴー！」」」

タイガはタイガ・トライストリウムへと合体変身をする、隣に立つスマツシユもクラッシュエナジーから通常のスマツシユへと姿を変える。

「ハアアアッ！」

ゴロサンダー目掛けて振り下ろされたタイガの剣。その剣をゴロサンダーはゴロン棒で受け止める。

「くっ、ウオオオオお!!」

パワー面でもタイタスに劣っていないゴロサンダーとのパワー勝負。その戦いはゴ

ロサンダーの方が優勢だった。

「ウワツッ!? シュア!」

力負けしたタイガが怯みそうになるも、何とか食い下がって今度は足を狙って剣を振るう。

「ゴロロン」

見た目のわりにすばしっこいゴロサンダーはその剣を跳び上がる事で避けるとゴロン棒をタイガへと振るってくる。

「<sup>二</sup>「ダイナボルト! バトル・ゴー!<sup>二</sup>」

そこに参戦してきたダイナボルトはゴロン棒を拳で受け止めると、そのまま力任せにゴロサンダーのゴロン棒を弾き飛ばした。

「シュア!」

「ゴロゴロゴゴゴ」

胸ががら空きになったゴロサンダーにタイガはへそを斬り落とそうと剣を振り下ろそうとするも、ゴロサンダーは即座にへそを両腕で守る。

「意外とガードが堅い・・・」

「あいつの注意を一瞬でいいから逸らせれば・・・」

ゴロサンダーの気を少しでも逸らせればとボヤクモモ。するとテレジアはゴロサン

ダーの頭部近くにある今にも外れてしまいそうな看板に気が付いた。

「あれだ！」

テレジアはその看板目掛けて銃弾を放つと、奇跡的にその一発で看板が外れ、その看板はゴロサンダーの頭部に落下する。

「ゴロン!？」

それほどダメージ自体はないながらも、何かがぶつかつたとゴロサンダーは後ろを振り返ろうとする。そのチャンスをタイガは見逃さなかつた。

「ハアアツ！」

「つと・・・」

五恵が取り込まれているゴロサンダーのへそを斬り落としたタイガ。スマツシユは即座に駆け出すとそのへそをキャッチすると同時にヒーリング能力で五恵を回復させようとする。

「五恵！ しっかりしろ！」

へそが消滅し、五恵が出てくるとテレジアがすぐさま彼女に駆け出してくる。

「テレジア・・・ありがとう。見てたよ。助かった・・・よ」

意識を取り戻した五恵はテレジアの機転で助かったとお礼を告げると、それを見て一安心した伊智香はグツとタイガトライブレードを強く握る。

「みんな！トドメ、行くよ！」

「「応！」」

「トライスクワッド！」

「「トライストリウムバースト!!」」

「ゴロゴロゴロゴロ、ゴロサンダー!!」

タイガの放ったトライストリウムバーストとゴロサンダーの雷撃がぶつかり合う。そのぶつかり合いもタイガが押され気味になろうとすると、ダイナボルトは全砲門を展開する。

「ダイナゼノン！フル！バースト！」

ダイナゼノンのフルバーストがゴロサンダーに全弾命中すると、流石のゴロサンダーも怯んだ反応をして雷撃の威力が落ちる。

「今がチャンスです！雅美さん！」

「うん！宇宙最速！疾風の如く！マックス！ゼロ！フーマー！」

『MAX』

『ZERO』

『FUMA』

「スマッシュファイ！」

『Ultraman smash tornadodash』

スマッシュはスマッシュ・トルネードダッシュに強化変身をすると光の剣を作り出し、即座にゴロサンダーの背後を取る。

「最光剣・零式」

「ゴロオオオ!!?」

気づいたところには既に何か所も斬られていたゴロサンダーはそのダメージで片膝をつきながらも気合いでまだ雷撃を放ち続ける。しかしそこまでダメージを受けたゴロサンダーはタイガの敵ではなかった。

「ウオオオオオ!!」

「ゴロオオオ!!?」

雷撃はトライストリウムバーストに押し負け、ゴロサンダーは炎に包まれるとそのままゴロサンダーは爆発する。

「おかえり。ゴロサンダー。さて、そろそろ『ウルトラマンタイガ』という物語のフィナーレをかざる用意をするでしょう!」

ゴロサンダーの爆炎から1つの寶石が霧崎のもとへと飛んでくる。それを握りしめた霧崎は最後の計画のためその場を後にした。

「五恵さん!」

変身を解除した伊智香はテレジア達が見守る五恵のところへと駆けていく。

「伊智香ちゃん。ごめんね。心配かけて」

「いえ・・ご無事で何よりです」

スマツシユの素早いヒーリングもあってほとんど怪我もなく無事にゴロサンダーから解放された五恵は遅れてやってきた初芽に念のためと精密検査を受けることになった。

「五恵。本当に無事でよかった」

精密検査終了後。異常なしと判断された五恵は改めてテレジアにお礼を言うため彼女のもとへと足を運ぶ。

「ありがとうテレジア」

「礼を言われるような事などしていない。お前は私の師匠で友なのだからな。助けるのは当然のことだ」

照れながら目をそらすテレジアに五恵はクスリと笑う。伊智香は空気を呼んで Wasabi を出ていくと見慣れない1人の男性が何かを探すように周囲を見渡していると、こちらに気づいた男性が伊智香に話しかけてくる。

「ごめんね。ちよつと訪ねたいんだけど、この近くに美味しいカレーを食べられるお店

を知らない?」

「カレーですか? 知ってはいますけど・・・貴方は?」

何処か神秘的な雰囲気を放つ謎の男に伊智香は警戒心を抱きつつも彼に名前を尋ねる。

「あつ、名乗るのがまだだったね。僕の名前はヒビノ・ミライ。よろしくね」

## 日々の未来

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」

ヒビノミライと名乗る男性を Wasabi に案内し、カレーを食べさせた伊智香。伊智香は彼が発する気配に不思議な違和感を感じていた。

「この人、もしかして……」

違和感を感じていたのは伊智香だけではなかったようで、タイガは彼の正体に気づく1歩手前というところまでできていた。

「ヒビノさんはどうしてこの町に？」

「その前に……。彼女と一体化しているんだろう。タイガ」  
「っ！」

タイガの事を言われた伊智香は咄嗟に席を立ちミライから距離を取ると、いつでも銃を引き抜けるように手を添える。

「あなたは……何者ですか？」

返答次第では撃つ。そんな意思を殺気を込めてミライへと向けると、ミライは「待つて待つて」と両手を軽く振る。



「待つて。タイガから僕の話聞いてないかい？」

「タイガ君から？・・・ねえタイガ君。この人、知ってる？」

「知って・・・いるかもしれない」

半透明なタイガは等身大のサイズになるとミライの前に立つ。

「久しぶりだね。タイガ」

「・・・タイガ君が見えてる」

タイガが見えるということはウルトラマンを含めた異星人か、あるいは自分や雅美のようにウルトラマンと一体化している人間のどちらかだ。

「下がって孫市！」

伊智香が警戒をしていたのに気づいていたモモ達は、伊智香が席を立ち銃を構えようとしたのを合図として姿を現していた。そしてモモは伊智香を下がらせつつも、刃をミライへと向ける。

「あなたは何者ですか？」

「僕の本当の名前はメビウス。ウルトラマンメビウス」

ウルトラマンメビウス。その名前に伊智香は聞き覚えがあつた。その名はタイガとの会話の中で何度も出てきた彼の兄弟子の名前だったのだから。

「あなたが・・・！」

メビウスという名前を聞いた瞬間、伊智香は警戒を解いたが、他のメンバーはトレギアやバレットという悪い例もあるため、ウルトラマンだからといっても簡単には警戒を解かない。もちろんタイガ達トリスクワッドやウルトラマンスマッシュ、ギンガ達ニューージェネレーションヒーローズ。味方のウルトラマンの方が多いが万が一のことを考えて警戒を怠らなかつた。

「警戒されてるみたいだね。．．．まあこの世界にはトレギアもいるし仕方ないか」

「トレギア．．．！あの青くて怪しいやつのことですよ」

「あの人はタロウ教官の．．．いや、何でもないよ」

タイガを見て躊躇うようにその先を言うのをやめたミライはツキカゲの一同もトレギアの存在を知っていることを理解する。

「トレギアは僕やタイガの故郷、光の国を捨てて闇に．．．いや、光でも闇でもない混沌に身を投じたウルトラマンなんだ」

「光の国？それがあんた達ウルトラマンの故郷なの？」

「全員が全員そうってわけじゃないけど。まあ僕やタイガはそうだね」

「出身の話はとりあえずいいとしてさ。トレギアはどうしてこの地球で．．．いや、ツキカゲの周りで色々事件を巻き起こしてるの？」

命は気づいていた。トレギアや彼とつるんでいたバレットが自分達の周囲で事件を

巻き起こしていたことに。バレットが天堂の記憶から自分達を狙っていたのなら分かるが、トレギアに狙われる理由はなかった。先日のゴロサンダーの件もトレギア自身の手を下したわけではないが誰かが手を引いていたであろう事には気づいていたからこそ、この会話でトレギアの仕業だと確信した。

「それは……」

ミライは迷った。タイガ達トライスクワッドが伊智香と一体化をされていて、そのせいで標的の対象にされているのだと正直に明かさべきかを。それを明かしてしまってもきつと自分が経験したように仲間との絆は失われることはない。ミライは確信している。だがそれを明かすのは自分の役目でもないことも同時に理解した。理解したからこそ猶更彼女達になんと説明すべきかを迷ってしまった。

「やっぱり『ウルトラマン』なんだねえ。そのまっすぐでよどみのない『光』って感じ。命さんには眩しいよ」

「え、えと。ありがとう?」

なんと反応すればいいのか戸惑うミライ。それを見た命は「やっぱり」と小さく口にする。

「その反応がもう答えだよウルトラマンさん。やっぱりいるんだね。ツキカゲの中にウルトラマンがさ」

「っ!!」

命の推理に伊智香は何とか表情を変えてしまうのを堪える。ここで表情を変えてしまえばそれこそ「自分がウルトラマンです」と言っているようなものだから。

「まあ、師匠の言う通りですよね」

楓もツキカゲ内にウルトラマンがいることは薄々は気づいていたようだ。命や楓だけではない。他のツキカゲメンバーも気づいてはいたようだ。

「……」

伊智香は気づいていた。このうちの何人かはおそらく答えに行きついているだろうと。そのうえで黙ってくれているであろうことにも気づいていた。だからこそ伊智香も迷っていた。ここで素直に「自分がウルトラマンです」と打ち明けるべきなのではないかと。トライスクワッドの3人と一体化している自分がトレギアに狙われていることは分かっている。狙われているのが自分だからこそ、ツキカゲにこれ以上迷惑をかけるためにも打ち明けた方がいいのかもしれない。

「あ、あの……!」

伊智香が正直に正体を打ち明けようとした瞬間のことだった。

「っ! 皆さん。町に鎧を纏った巨人が現れたようです」

ツキカゲメンバーの元にやってきた初芽は怪獣が現れたことを一同に知らせると、ミ

ライはすぐさま外へと出てそれを確認する。

「あれはボグ星人か」

まるで自分の探していた相手ではなかったかのような反応をしたミライはその腕に変身アイテムであるメビウスブレスを出現させる。

「メビウーリースー！」

ミライの体が光に包まれると、その光は銀色の巨人となった。

「伊智香、あれが俺の兄弟子。ウルトラマンメビウスの本当の姿だ」

銀色の巨人の名はウルトラマンメビウス。タイガの兄弟子でかつてこことは違うM78ワールドの宇宙に未曾有の危機をもたらした暗黒皇帝エンペラ星人から地球を守った光の巨人だ。

「ウルトラマンメビウス・・・」

「シィアー！」

メビウスはボグ星人に対して構えるとジリジリと互いに距離を詰めていく。先に痺れを切らして動いたのはボグ星人の方だった。

「お、お前達ウルトラマンを倒さないと、アタシがあいつにやられちゃうんだ！頼むから倒されてくれ!!」

「君の事情は分からないけど、はいそうですかと倒されるわけにはいかない。僕達ウル

トラマンは負けられない戦いを・・・絶対に負けちゃいけない戦いをしてるんだ」

何者かに脅かされている様子のボーグ星人だが、だからこそメビウスは『負ける』ことが許されなかった。

「どうする？俺達もいくか？」

「・・・いや、ここはメビウスに任せよう」

フーマはメビウスに加勢しにこうと提案するもタイガは周りにツキカゲメンバーがいるせいもあって、この場はメビウスに任せようとする。この場で戦いに赴くということは伊智香がツキカゲの一同に正体を明かすことに繋がる。伊智香は正体を明かす覚悟ができていたが、タイガにはその覚悟がなかったからだ。ツキカゲを信用していないわけじゃない。だが伊智香は自分達に体を貸してくれているだけなのに、自分達は今まさに伊智香の居場所までも奪おうとしているのではないか。そういった不安が頭をよぎっていたからだ。

「タイガ。君は・・・」

「分かってる。だけど・・・まだ・・・」

タイタスはグツと拳を強く握るタイガに対して「そうか」とただ一言だけ返してメビウスの戦いを見上げる。メビウスとボーグ星人の戦いは終始メビウスの優勢でそもそもタイガ達の加勢も必要そうには感じなかった。

「シユアー！」

「ぐうっ!?!」

メビウスの蹴りを受けたボーグ星人は腹部を押しさえながら後ろに下がる。するとメビウスは肩の力を抜き、その手をボーグ星人に差し伸べようとする。

「教えてくれ。君は誰に踊られているんだ?」

「・・・と、トレギアだ。あいつはアタシの家族を人質に取って・・・」

「人質とは人聞きが悪いねえ。私はただ君のご家族と親睦を深めようと一緒に食事にもどうだと誘っただけじゃないか」

突如現れたトレギアはボーグ星人の背後に立つと彼女にそう語りかける。するとボーグ星人は背後のトレギアに殴りかかろうとするも、トレギアはそれを躲すと、指をパチンと鳴らす。

「な、何? きやあああつ!?!」

トレギアが魔法陣から取り出した『カケラ』に触れてしまった瞬間、ボーグ星人の鎧が赤黒く変色する。

「トレギア! 何をした!」

「彼女と彼女の家族にちよつとしたプレゼントさ。ベリアル欠片。君達の間では君達の間ではベリアル因子とか、デビルスプリンターとか呼んでいるんだっけ? まあ、名前

はどうでもいいか。それをプレゼントしてあげたのさ」

「ヴあああああつ!? た、たすけ・・・て」

まだ辛うじて意識のあるボーグ星人はメビウスに助けを求めて手を伸ばしてきたので、メビウスはその手を取ろうとした瞬間・・・。

「があっ!」

理性を失ったボーグ星人はメビウスに容赦なく襲い掛かってくる。メビウスは咄嗟に距離を取って攻撃は受けることはなかったが、メビウスには凶暴化させられてしまったボーグ星人を元に戻す手段を持ち合わせてはいないので焦りを感じ始めていた。

「いくらメビウスでも凶暴化させられたボーグ星人とトレギアの相手を同時にとなると難しいだろう。タイガ。これ以上は傍観してはいられんぞ」

「・・・分かってる。行こう」

覚悟を決めたタイガはもう一度周りのツキカゲを見渡す。囲まれているこの状況ではどさくさに紛れて変身していくというのは不可能だ。正体がバレるのを承知で変身するしかない。

「行けるか伊智香?」

「私は大丈夫だよ」

既に覚悟を決めていた伊智香はその腕にタイガスパークを出現させる。それに一番



最初に気づいたのは師匠であるモモだった。

「やつぱり伊智香ちゃんがウルトラマンだったんだね」

「師匠……。気づいてたんですね」

「薄々はね。だからあまり驚きはないかな」

モモだけでなく他のメンバーもほとんど驚いた反応をしない。ツキカゲの誰かがウルトラマンと分かった時点で既に伊智香がそうではないかと疑われていたようだ。

「やつぱり……色々話さないといけませんかね？」

「いや。特にないかな。打ち明けるのにも勇気が必要だったでしょう？よく頑張ったね」

咎めるどころか褒めてくれたモモに伊智香は思わず泣きそうになってしまいが、それを堪えた伊智香は一人奮闘しているメビウスを見上げる。

「師匠。あとでちゃんと話します」

「うん。待つてる」

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

モモに……ツキカゲにすべてを話す覚悟を決めた伊智香はまずは目の前のメビウスに加勢しようとウルトラマンタイガに変身をする。

「シユア！」

タイガはスワローキックでボーグ星人を蹴り飛ばすとトレギアの方に視線を向ける。

「トレギア!」

「やあ、タイガ。それに才賀伊智香。今日は来るのが遅かったねえ」

「・・・私を名指し。やっぱり私を狙ってたんだ」

自分を名指ししてくるトレギアに伊智香はやはり自分が狙われていたことを確信してしまふ。

「まあいいさ。今日はお邪魔虫のお兄さんをからかいに來ただけだからね。せつかくだ。もう少し困らせてあげよう」

そういったトレギアは魔法陣から2体のロボット怪獣を出現させる。1体は自立戦闘兵器の無双鉄神インペライザー。そしてもう1体はゴモラを模したロボット怪獣であるメカゴモラだ。

「メビウス。トレギアは任せてくれ」

「それはいいとしても・・・どうやって彼女を助けようか」

ボーグ星人を助ける気のメビウスはどうやって彼女を助けようかと迷っていると、2人のウルトラマンの前にもう1人、ウルトラマンがやってくる。

「ならばあの異星人は僕に任せてください」

ウルトラマンスマッシュだ。

「スマツシユ！ ナイスタイミングだぜ！ そっちは任せた！」

スマツシユならばボグ星人からベリアル因子を取り除くことができるはずと考えたタイガ達はスマツシユにボグ星人を任せる。

『任せられちゃったけどさ。できるの？ あの異星人から暴走してる原因の何かを切除するんだよね？』

「多少強引ですが手段がないわけではありません。まずは・・・ウルトラサーチャー！」  
ウルトラサーチャーを発動したスマツシユはまず最初にボグ星人の体内にあるであろうベリアル因子の場所を特定しようとする。

「見つけました。左わき腹ですネ」

「それを切除するんだよね。なら早業で行こう」

『ultraman smash tornadodash』

ベリアル因子が左わき腹にある事を特定したスマツシユはトルネードダツシユにウルトラフュージョンすると光の剣を出現させる。

「最光剣・零式」

スマツシユは最速の剣で左わき腹へと刃を振るうも、元々全身が鎧に包まれているような外皮であるボグ星人にベリアル因子による強化でなお硬くなっている装甲に剣が弾かれてしまう。

『剣が通らない!?!』

「この姿はスピードこそフーマと同等かそれ以上ですが、パワー面はそれほどではないですからね。今のボーグ星人相手には悪手でしたね」

『だったらまずは鎧を砕かないとね』

『ultraman smash crash energy』

「ジュア!」

クラッシュエナジーにウルトラフュージョンしたスマッシュは鎧だけを砕くようにある程度加減して殴りつける。その一撃でボーグ星人のわき腹付近の鎧が砕けると、即座にスマッシュは再びウルトラフュージョンをする。

『ultraman smash lightning generation』

ライトニングジェネレーションへと姿を変えたスマッシュはその手にゼットライザーを出現させるとその刃でボーグ星人の左わき腹を斬りつけ、ベリアル因子であるカケラを摘出する。

「今だよスマッシュ」

「ええ。スマッシュヒーリング」

即座にスマッシュは基本形態に戻りヒーリング能力でボーグ星人の傷口を癒すと、ボーグ星人は意識を失い、等身大のサイズに戻る。

「彼がスマツシユか．．．ヒカリが目をかけるだけはあるね」

スマツシユが無事にボーグ星人を助けるのを目にしたメビウスはその戦いぶりに関心する。自分には真似できない芸当でボーグ星人の命を救ったからだ。それに対して自分も答えてやらなければとメビウスは2体のロボット怪獣の方へと視線を向ける。

「僕も．．．頑張らないとね」

光の剣メビュームブレードを展開したメビウスはインペライザーの放つ光弾を回避しつつ、メカゴモラの懐に飛び込むとメビュームブレードの連続斬りを喰らわせるも、その硬く分厚い装甲に傷を入れてただけで倒すまでには至らなかった。

「っー！」

メカゴモラは反撃と言わんばかりに両腕を回転させてロケットパンチを飛ばしてくる。

「シユアー！」

それに対してメビウスはメビュームブレードでロケットパンチを体と繋いでいる鎖を斬りつけると、即座に腕を十字に構えて光線を放つ。メビウスの必殺光線、メビュームシユートだ。メビュームシユートが直撃したメカゴモラは爆発し、次にインペライザーの方を振り向く。

「ハアアアっー！」

インペライザーが相手ならばとメビウスは炎を身に纏い、銀色の身体は赤い姿へと変わる。メビウスが地球の仲間と共に歩んだ絆の象徴。ウルトラマンメビウス・バーニングブレイブだ。

「ハアアアあ!!」

インペライザーの光弾に怯むことなく駆け出したメビウスは、距離を詰めるとタロウ直伝の連続パンチを叩きこむ。その連続パンチで装甲が凹んだインペライザーはその場に転倒するとメビウスはトドメの一撃のために距離を取る。

「シユア!!」

メビウスブレスから発生させた炎を胸のファイヤーシンボルに集中させて火球を形成したメビウスは、それをインペライザー目掛けて放つ。メビウス・バーニングブレイブの必殺技。メビウムバーストだ。

「最後まで諦めず、不可能を可能にする。それがウルトラマンだ!!」

メビウスのメビウムバーストがインペライザーに炸裂すると、本来復元能力があるインペライザーはその復元する機能が破壊され、復元されることなく爆散する。

「残るはトレギアだけか・・・」

タイガとトレギアの戦いへと視線を向けたメビウス。その戦いはタイガをあざ笑うように翻弄するトレギアの方が優勢に見えた。

「ほらほらどうした？それでもNo.6の息子か？」

「くっ、言わせておけば！」

「冷静になつてタイガ君。ここはみんなで行くよ」

「応！見せてやろうぜ！俺達の力！」

「燃え上がれ！仲間と共に！」

「「バディ・ゴー！」」

ウルトラマンタイガ・トライストリウムへと合体変身したタイガ。その姿にメビウスは驚く。

「タイガ……。君も仲間と共にそこまで強くなったんだね」

「シユア！」

タイガは炎を纏った剣をトレギアへと振るうと、その燃える刃はトレギアの胸をかすめる。

「ぐっ……。火傷しちゃったじゃないか」

「俺達の炎は火傷だけじゃすまないぜ。見せてやる！俺達の炎！」

「トライスクワッド！」

「「トライストリウムバースト!!」」

必殺の炎、トライストリウムバーストがトレギア目掛けて放たれると、トレギアは赤

い魔法陣でその炎を受け止める。その強力な炎に流石のトレギアも押され始める。

「仕方ない。今日はここまでにしようか。タイガ、そして才賀伊智香。もうすぐ最高のパーティーを用意しているから、是非とも参加してくれたまえよ」

そう言い残したトレギアはもう一つの魔法陣の中に消えていくとその場から消えてしまう。

「逃がしたか」

トレギアを逃がしてしまったタイガは変身を解除すると同じくヒビノミライとしての姿に戻ったメビウスと雅美が伊智香の前に着地する。

「お疲れ。君達のおかげで彼女を無事助けることができたよ。ありがとう」

「いえ、お礼を言われるようなことは・・・」

「ところでメビウス。今回はどうしてこの地球に来たんだ？」

「タイガの無事を確認しに来たっていうのもあるけれど・・・。一度会ってみたかったからっていうのもあるかな」

ミライはそう言いながら雅美の方へと視線を向ける。

「えっ?・・・私?」

「うん。君とスマッシュのコンビに会って確かめたかったんだ。君達がこれからの未来を・・・日々の未来を守っていけるに相応しいウルトラマンかをね」



## 永遠に燃やすは絆の炎

「・・・と、言うわけです」

「えー！ー！マジかあ!？」

伊智香はツキカゲのメンバーにタイガ達と一体化して、これまで戦ってきたことをすべて話した。とは言っても既にほぼ全員が伊智香がウルトラマンだろうということを探察していて白虎以外には驚かれなかった。

「まあ、スパイだし秘密があるのはしょうがないことね」

「スパイは嘘つきっていうしね」

「えと・・・怒ったりしないんですか？」

伊智香はツキカゲメンバーが誰も正体を隠していたことに怒ったりしてこないことに疑問を感じていた。

「何で怒る必要があるの？」

「お前は一人で『ウルトラマン』を背負って戦ってきたんだ。むしろ褒めるべきだろう」  
責めるどころか褒められるべきだと言ってくる一同に伊智香は思わず泣きそうになつてみると、モモが伊智香を優しく抱きしめる。

「よく頑張ったね伊智香ちゃん。大丈夫。これからも私達が一緒だよ」  
「っ……っ！はいっ！」

流していた涙をぬぐった伊智香を撫でるモモ。するとタイミングを見計らって初芽がボーグ星人の家族について調べ上げたことを知らせてくる。

「ルカさんのご家族なのですが、この町のあらゆる監視カメラをハッキングしてようやく居場所を特定しました。港のB-2倉庫にて眠らされているみたいです」

「トレギアがただ家族を人質にするためだけにそんなところで眠らせるだなんてことはしないだろうな」

「十中八九俺達を誘うための罠だろうよ」

「だがあのご婦人の家族を助け出すためにも行かねばなるまい」

「そうだね。助けにいかないよ」

トライスクワッドの3人は罠と分かっているにもかかわらず告げてくる  
と、伊智香もそれに頷く。

「タイガ達はなんて言ってたの？」

タイガ達の声が聞こえないモモ達は伊智香に何を言っていたかを尋ねる。

「トレギアのことだから絶対に罠だけど、行くしかないって言っていました」

「私達もウルトラマン達と同意見かな。罠なのは分かっているけど助けにいかなきや」

「だが相手は本物の『ウルトラマン』だ。バレットの時のようにはいかないだろうな」  
以前戦ったウルトラマンバレットは人造ウルトラマンであり、本物のウルトラマンではなかった。だがトレギアは光の国出身の本物のウルトラマン。それもこれまで何度もタイガ達を苦しめている相手だ。これまで以上に難しいミッションになるだろうとは全員分かつていた。

「遅れてすまんの」

そこに風の部隊も合流してくる。今回のミッションはツキカゲだけでは難しいと判断した初芽が応援を要請したからだ。

「来たんだ・・・」

しぶき達が来た事に対して複雑な気持ちになる。応援に来てくれたことは素直にうれしい。だが今回は相手が悪すぎる。

「・・・行こう」

不安要素はあるが来てしまったからには仕方ないと割り切ることにした雅美。そんな表には出さない彼女の心境をミライは感じ取っていた。

「ハハ」だね」

倉庫に到着したツキカゲと風の部隊にミライを加えた面々。相談の結果まずは正面

からの戦闘に優れている風のメンバーが先行することとなった。

「突入するぞ」

しぶきの言葉に頷いた4人は倉庫の扉を開いて中へと突入する。すると椅子に座って眠らされているルカの夫と子供の前に霧崎が立っていた。

「やあ、思ってたより遅かったねえ」

「お主、以前にもあったのう。お主がトレギアか？」

「この姿でいる時は霧崎を名乗っているのだが・・・」

霧崎はトレギアアイを取り出すとそれを顔にかざして等身大のトレギアへと変身する。

「私がトレギアで間違いないよ」

「いったい何が目的でその親子を攫ったのじゃ？」

「目的・・・か。強いて言うなら次のゲームが始まるまでの暇つぶしかな」

「暇つぶしで人さらいなんてしてんじゃねえよ！」

「まだ堪えろ」

ゆらはトレギアに殴りかかろうとするも、しぶきはそれを静止する。

「次のゲームで『ウルトラマンタイガ』という物語を終わりにしようと思っただけ。今はそのための最後の準備中なんだよ」

「タイガを終わらせる？ どういう意味？」

「言葉通りならタイガを倒すって意味だと思っけど・・・」

「まあ何が言いたいかというところ・・・ゲーム開始前にお邪魔虫には退場してほしいというわけさ」

「そこまでだよ！」

トレギアが電撃を風の部隊に向けて放とうとしたタイミングでツキカゲメンバーとミライが突入してくる。

「来たか才賀伊智香」

伊智香を視界に捉えたトレギアは「待っていた」と言わんばかりに指をパチンと鳴らす。すると倉庫の外に魔法陣が出現し、そこから漆黒の鎧が大地にドシンと地響きを響かせながら着地した。

「メビウス。君ならこれの姿に見覚えがあるんじゃないかい？」

「あれはアーマードダークネス!？」

窓から漆黒の鎧を見たミライはかつて自分が仲間たちと共に倒したエンペラ星人の鎧を思い出す。目の前の鎧はその鎧にそっくりな見た目をしていて。ただ本来は赤いラインが青くなっているぐらいしか違いがない。

「何故君がアーマードダークネスを・・・」

「見ての通り本物ではないさ。でも限りなく忠実に再現はできたと思うよ」

かつての強敵の鎧を再現したというトレギアに流石のミライも驚く。

「そうだね。名付けるならアームドダークネスといつたところかな？本物と同等には強いと思うからせいぜい頑張りたまえ」

そう言い残したトレギアは魔法陣の中へと消えていき、この場から姿を消してしまうと一同はアームドダークネスを見上げる。

「師匠はルカさんの家族をお願いします」

「うん。孫市も・・・無茶はしないでね」

モモ達はルカの家族を安全なところへと避難させると伊智香は雅美とミライの隣に並び立つ。

「バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「時代を繋ぐ光の戦士！ウルトラマン！ティガ！タイガ！」

『Ultraman』

『t i g a』

『t a i g a』

「スマツシュファイ！」

『ultraman smash lighting generation』

「メビウース!!」

伊智香はウルトラマンタイガに、雅美はウルトラマンスマッシュ・ライトニングジェネレーションに、そしてミライはウルトラマンメビウスへと変身してアームドダークネスの前に着地する。

「アームドダークネス。アーマードダークネスを再現したってだけはあるな。中身がないってのになんて威圧感だ」

タイガはアームドダークネスの発する威圧感に気圧されそうになるのを堪える。スマッシュも同様に気圧されそうになってるのを何とか踏みとどまっていた。

「全力で行くぞみんな!」

「燃え上がれ!仲間と共に!」

「二「バディ・ゴー!」三」

最初から全力で行くことにしたタイガはトライストリウムに合体変身を遂げるとダイガトライブレードでアームドダークネスに斬りかかる。しかしその剣はアームドダークネスが手にしていた剣に受け止められる。

「今だ!スマッシュ!メビウス!」

「ジュア!」

「シィアー！」

タイガが跳び上がるとその後ろからはゼットライザーを手にしたスマツシユとメビウムブレードを展開したメビウスが同時にアームドダークネスに刃を振るう。

「っっ!？」

しかし2人の刃はアームドダークネスに届かなかった。アームドダークネスが発した闇の波動に2人が吹き飛ばされてしまったからだ。

「メビウス！スマツシユ!?!・・うわっ!？」

吹き飛ばされた2人に振り返ったタイガはその瞬間にアームドダークネスに首を掴み上げられる。

「っ!!」

アームドダークネスは締め上げているタイガに剣を突き刺そうとした瞬間、空から光線がアームドダークネスに直撃した。

「このっ!」

その隙をついたタイガはアームドダークネスの拘束から抜け出すと、メビウスの前に青いウルトラマンが着地する。

「大丈夫かタイガ?」

「あなたは・・ウルトラマンヒカリ!」



参戦してきたのは光の国で技術者として活躍しながらもウルトラ兄弟にその名を連ねるほど戦闘面も優れている戦士、ウルトラマンヒカリだ。

「ヒカリ。どうして君がここに？」

「スマッシュに渡すものがあつたので君に届けて貰いたかつたのだが、君が先行したため渡しそびれてしまった。だからこうして直接届けにきたんだ。受け取れスマッシュ」

そういつたヒカリはスマッシュへと視線を向けると、2枚のウルトラメダルをスマッシュに託す。インナースペースで2枚のメダルをつかみ取つた雅美はそれを確認する。

「これはメビウスと・・・」

「タロウ。ウルトラマンタロウのメダルです」

ヒカリから託されたのはメビウスのメダルと、タロウのメダルだ。

「タイガのメダルと組み合わせることで更なる力を発現できるはずだ」

「分かつた。やってみようスマッシュ」

「そうですね」

雅美は早速タイガのメダルを取り出すとタロウ、メビウスの順番でメダルをゼットライザーにセットする。そしてタイガのメダルもセットしようとした途端・・・。

「っ！」

タイガのメダルはゼットライザーに弾かれてしまった。

「えっ?なんで……」

「タロウとメビウス。そしてタイガは仲間との絆の力で大きく成長を遂げたウルトラマン達だ。君は……君達はまだ自分達の殻を破りきってはいない」

メダルを使えなかった雅美に対してヒカリは雅美とスマッシュが自分達の殻を破りきっていないことを伝える。

「殻を?でもゼットライザーを使えるようになった時点で私とスマッシュの絆は……」  
「……たぶん君とスマッシュの絆が問題なんじゃないと思う。たぶん君と君の仲間、風の部隊との絆がまだ……うわっ!」

最後まで言い切る前にメビウスが攻撃を受けてしまう。しかしおおよそのことは伝わった雅美は風のメンバーとの絆の問題があることを気にしてしまう。

「私と風のみんなとの絆が問題ってことなの?」

動揺する雅美ことスマッシュに向けてアームドダークネス放った斬撃が飛んでくる。反応に送れたスマッシュは防御が間に合わないを受け身の体制になると、そこにタイガが割り込んできた。

「風真烈火斬!」

風真烈火斬とアームドダークネスの斬撃は互角だったようで互いの攻撃が相殺された瞬間、踏み込んできたアームドダークネスの刃がタイガへと迫ってきた。

「くっ!!うわあっ!!」

ギリギリのところで剣を受け止めたタイガだったが、即座に蹴り飛ばされてしまう。

「シューティングスマッシュユ！」

スマッシュユは必殺光線を放つも雅美の感情が揺らいでいるせいで力が発揮しきれないなかつた光線はあつさりど弾かれてしまう。

「っ!!」

「危ない!!」

そんな雅美とスマッシュユのバランスが崩れているウルトラマンスマッシュユにアームドダークネスは刃を振り下ろそうとしてみると、メビウスがそれを庇って攻撃を受けてしまった。

「アアアアっ!!」

そのダメージでウルトラマンの姿を維持できなくなったメビウスはミライの姿に戻ると、ミライのもとに風の部隊が駆け寄ってくる。

「大丈夫かよオイ?」

「僕は・・・大丈夫。でも君達の仲間が・・・スマッシュユ・・・いや、雅美さんの心が揺らいでしまってる。君達の声を、想いを、絆を届けるんだ」

「私達の絆を?」

「どういふこと?」

「今、彼女は君達を信じ切れなくなかったことで自分の絆が本物かどうか揺らいでしまっている。あの娘に君達の絆を……その強さを伝えるんだ」

そうミライは凧のメンバーに伝えると、4人は頷きスマッシュを見上げる。

「雅美!不安にさせてすまんかった!」

「だけどよお!ゆら様達を見くびってんじやねえぞ!」

「確かにあなたはウルトラマンの力を持つて、特別かもしれない。だけどそれが理由で一人になっていいわけじゃないよ!」

「絆を信じて!私達の絆は今までも、そしてこれからも続いていくから!」

凧の4人の言葉を聞いた雅美は不安な気持ちが消えて、スマッシュに力が戻る。それだけではない。3枚のウルトラメダルがその熱い絆に反応してタロウメダルはタロウ・スーパーウルトラマンメダルに。メビウスメダルはメビウス・フェニックスブレイブメダルに、そしてタイガメダルはタイガ・トライストリウムメダルへと変化した。

「雅美さん。……いえ、雅美。感じましたか。彼女達との絆を」

「うん。私はもう1人じゃない。仲間が……みんながいる!」

「その絆の炎は永遠に消えることはありません!燃やしましょう!絆の炎を!」

「永遠に燃やすは、絆の炎!タロウ!メビウス!タイガ!」

雅美はゼットライザーに3枚のメダルを入れることに成功すると、それをすぐさまスキャンして力を解き放つ。

『tarrou・superultra』

『mbius・phoenixbrave』

『taiga・Trystrium』

「スマツシュファイ！」

『ultramansmash bondsfllame』

仲間との絆を確かなものとした雅美ことスマツシュはウルトラマンスマツシュ・ボンズフレイムへと強化変身を遂げることに成功した。

「よし・・・！」

その成功にミライもガッツポーズをすると、タイガの炎とスマツシュの炎に感化されて自身の光の力が炎として湧き上がり5つの人の形をとる。

「えっ・・・？まさか・・・」

それぞれの炎が作り出すシルエットに覚えがあつたミライは驚きの反応をしていると、ミライは光の空間に包まれる。

「ミライ。覚えてるか？俺達がようやくひとつのチームになった時のこと」

「忘れるわけ。・・・ないじゃないですか」



ギアに見せてやろう。人とウルトラマンの絆の炎を！僕達は1人じゃない!!」

「ああ!!」

「はい!!」

仲間との絆の力で強化変身を遂げたタイガとスマッシュ。そしてメビウスは同時に駆け出すとタイガは剣を振るい、スマッシュはキックを、そしてメビウスはパンチをアームドダークネスに叩きこむ。その連撃でアームドダークネスの鎧にヒビが入るとそれが復元されようとする。

「させるか！行くぞ伊智香！タイタス！フーマ！俺達の絆を最大まで燃やすぞ！」

「クワトロスクワッド！」

「クワトロスクワッドブラスター!!」

タイガと伊智香。そしてタイタスとフーマ。4人の絆の力を虹色の光線として放つとその光線はふさがりつつあったアームドダークネスのヒビの部分に命中する。

「シィア!!」

そこにメビウスのメビウムナイトシユートが合わさりアームドダークネスの胸部が碎けるも、アームドダークネスは驚異の復元力で耐え抜く。

「これが私達の永遠に燃える絆！」

「フレイムスマッシュアロー！」

光の弓を作り上げたスマツシユは燃え盛る炎の矢をアームドダークネス目掛けて放つと、その炎の矢はアームドダークネスを撃ち貫き鎧が完全に砕ける。

「やった！あいつ等やってくれたぜ！」

「さすが雅美！」

アームドダークネスを倒したことに風のメンバーは喜びの声を上げるとメビウス・フェニックスブレイブはメビウスとヒカリに分離して、タイガとスマツシユは変身を解除して伊智香と雅美に戻る。

「ありがとうメビウス。あなたのおかげで私は仲間との絆を確認できた」

「お礼を言うのはこっちの方だ。君達の熱い絆のおかげで僕も忘れちゃいけない絆をまた燃やすことができた。僕と僕の仲間の絆は……今も心の中で燃えているんだ」

仲間との絆を再確認したメビウス。それに静かに頷いたヒカリは先に空へと飛び去っていく。

「もう一緒にこの空を飛べないと思っていた。だけどそれは違ったんだ。どんなに離れていても、どれだけ時が流れようと……。心に絆がある限り、僕らは一緒なんだ」

自分に言い聞かせるようにそう告げたメビウスは改めて伊智香と雅美の方を見る。

「僕は一度光の国に帰るけれど、トレギアは何かまだ仕掛けようとしているみたいだから君達も気を付けて」



「はい！」

「うん。分かった」

2人はメビウスの言葉に頷くと、この地球は彼女達に任せたメビウスは空へ飛び立ち光の国へと帰還していく。

「メビウスから任せられたんだ。絶対にトレギアからこの地球を守り抜くぞ」

「うん。みんなで一緒に……。絶対に守り抜こう」

「ようやくお邪魔虫が帰っていったか。彼がいるとせつかく『ウルトラマンタイガ』の物語にピリオドを打つために用意したシナリオが台無しになってしまいかもしれなかったからね」

3人のウルトラマンとアームドダークネスの戦いを近くで見っていたトレギアは霧崎の姿へと戻るとこれまで集めたジュエルをポケットから取り出す。

「最凶獣ヘルベロス。毒炎怪獣セグメゲル。悪夢魔獣ナイトファンク。惑星守護神ギガデロス。雷撃獣神ゴロサンダー。……。あいつを召喚するために必要な5個のジュエルと宇宙を構成する6大エレメントのエネルギーは集まった」

ジュエルとエネルギーと共に火・水・風・土に加え光と闇の宇宙を構成する6大エレメントのエネルギーを空へと放つと、空には6つの属性の色をした魔法陣が出現する。

そしてその魔法陣からは黒い龍のような怪獣がその頭を突き出した。

「さあ来い『終わりなき無限』無限界獣ゲンカイ。その無限のエネルギーを思う存分地球に分け与えるといい」

## 尽きない無限

それはタイガ達がメビウスとともにアームドダークネスを撃破した翌日のことだ。

「怪獣だあああつー！」

「逃げろおおお！」

突如として町のだ真ん中に現れた無限界獣ゲンカイに逃げ惑う人々。その光景を見ながら霧崎は高笑いをする。

「ハハハっ！ さあ、『ウルトラマンタイガ』の物語にエンドマークを打とうじゃないか」  
騒ぎに気づいたツキカゲ。伊智香とモモは真っ先に現場に急行する。

「あの怪獣。あまり動かないね」

「無害な怪獣なんですかね？」

2人は大人しい怪獣なのではと思っっているのもつかの間、初芽から通信が入る。

『大変ですお2人とも！あの怪獣は地球の中心へと膨大なエネルギーを流し込んでいますー！』

「エネルギーを地球に？ いったいなんで？」

「でも地球にエネルギーを流してくれているなら悪い怪獣じゃないんじゃない？」

伊智香とモモはそれほど凶悪な怪獣ではないのではと考えているとタイタスは怪獣がどのような存在かに気づいた。

「あいつはまさか……。無限界獣ゲンカイか!？」

「知ってるのか旦那?」

「端的に言えば伝説の神獣だ。かつてとある星の超古代文明が星を豊かにするために無限のエネルギーを欲し、現世へと召喚したと言い伝えがある。ゲンカイはその身から発する無限のエネルギーで確かに星を豊かにしたけど、その膨大なエネルギーに耐えかねたその星は数日もしないうちにコアが爆発。星は滅んでしまったと聞く。そのウワサを聞きつけた星々は自分達ならその力を制御できると過信し、結局多くの星々がエネルギーに耐えかねて滅んだ。そんな記録媒介を以前閲覧したことがあったのだが……。よもやゲンカイに遭遇してしまうとは」

「神獣とは大きく出たな」

「無限のエネルギーを持つ神獣か。下手に倒すと大変なことになりそうだな」

「私の推測が正しければ、ゲンカイと我々ウルトラマンは致命的に相性が悪いはずだ」

「なんでだ? ゲンカイは無限のエネルギーを与える存在ってんなら俺達もエネルギー切れを起こすことにはないはずだろ?」

「滅んだ星みたいにタイガ君達もエネルギー過多になっちゃうってことだよ。タイタ

スさん」

「その通りだ。故に長期戦という選択肢はない上に、仮に倒せたとしても相手は無限のエネルギーの塊。倒した時の被害は計り知れないだろう」

ゲンカイに対して策を練っている間にも、ゲンカイは地球へのエネルギー供給をやめない。

「とりあえず、ゲンカイを地球から追い出そう」

「わざとエネルギーを消耗させるためにも最初からトライストリウムで行こうぜ」

「確かにそれなら少しは長く戦えるな。行くぞみんな！」

「行つてきます師匠」

「うん。頑張つてね伊智香ちゃん」

「「「バディ・ゴー！」「」」

伊智香はタイガトライブレードを出現させると、直接タイガ・トライストリウムへと合体変身する。

「シユアー！」

タイガはゲンカイを地球から追い出そうと剣を地面に突き刺して両手で押さえにかかると、

「おい！この星を爆発させる気か！地球にエネルギーを与えるのをやめろ！」

ゲンカイを持ち上げようとするタイガ。するとゲンカイはタイガに対してようやく反応する。

「つとー！」

振り向いたゲンカイはタイガに向けて無数の光弾を放つてくると、タイガは炎のバリアでそれをガードする。

「気を付けろタイガ。先ほども言ったがこの地球上でゲンカイを倒すことは極めて危険だ」

「それに奴さんのエネルギーが無限ってんならさっきの光弾も無限に撃つてこれるってこつたる。一発一発は大したことないが、数を撃たれりやこの姿でも防ぎきれねえぞ」「んなこと分かかってるって！どっちみち短期決戦なのは変わんないだろー！」

攻略法がない今、彼らはゲンカイを地球から離れたところまで運んだのちに倒すしかない。

「一気に飛ぶぞ!!」

ガツシリとゲンカイを掴んだタイガは一気に空へと飛び上がるも、ゲンカイは光弾を飛ばして抵抗してくる。

『我ニ触レルナ。光ノ者ヨ』

「しゃ、喋った!?!」

「神獸って異名があるぐらいだ。そんなぐらいの知能はあんだろ」

『我、使命ヲ全ウス』

ゲンカイはエネルギー波でタイガを引き離すと、光線を放ってくる。

「くっ！みんな！あの光線だけを相殺するぞ！」

「トライストリウムバースト！」

タイガはゲンカイの光線に対してトライストリウムバーストで対抗しようとするも、エネルギーの総量が違いすぎるゲンカイの光線に押され気味になる。

「答えるゲンカイ！お前の使命ってのはなんだ！」

『我ノ使命。ソレ即チ、星ヲ豊ニスル事。ソレコソ、我が叶エルベキ願イ』

「豊に……うわあああつ!？」

押し負けたタイガに光線が浴びせられると、変身が解除され、伊智香は地上へと落下していく。

「孫市！」

モモは咄嗟にスパイスをかじり、身体能力を上げて落下予測地点へと駆けると、伊智香をキャッチする。

「大丈夫孫市？」

「は、はい。ありがとうございます師匠」

「あの怪獣。星を豊かにするって言ってたよね？」

「タイタスさんの話だと、星にエネルギーを与え続けられると、星はエネルギー量に耐えられずに爆発してしまうらしいです」

「・・・一旦基地に帰ってみんなと相談しようか」

伊智香とモモは一度基地へと帰還すると、そこにはツキカゲだけでなく風の部隊やZETのメンバー、そして雪が集まっていた。

「来たわね。孫市。それともウルトラマンタイガって呼べばいいかしら？」

「どうやら来夢達にも伊智香がタイガ達と一体化していることが伝えられたようだ。」

「一体化してるのはタイガ君だけじゃないので・・・」

「そうだったわね。まあ今まで通り孫市と呼ばせてもらおうわ」

「・・・そろそろ本題に入ってよろしいでしょうか？」

初芽がモニターに映し出したのはゲンカイとゲンカイが地球に送り続けている膨大なエネルギーの解析映像だ。

「この流し込まれているエネルギー量、地球が耐えられるのは4日ほど。正確には今からあと82時間といったところでしょうか」

「82時間以内にゲンカイを地球から離れたところに運んで倒さないといけないのか」

「ウルトラマンの皆さんは何と？」



「ゲンカイを……。あの怪獣を地球から離れたところまで運んで倒そうとしてるみたい  
です」

「ゲンカイ。それがあの怪獣の名前ですか。ちなみにもどのような怪獣なのかはわかりま  
すか」

「はい。タイタスさんの説明によると……」

伊智香はタイタスが話していた神獣として召喚されたくだりを全員に話した。

「なるほど。神獣ねえ。刺激的……。というかももう神秘的だあ」

「師匠。何も考えていないですよね？」

「だって神獣だよ。もはや怪獣ですらないんだよ。考える余地すらないよ」

「まあ、そうですね……」

無限のエネルギーを持つ神獣に対して誰もが策らしい策が浮かばずに黙り込んでい  
た中、伊智香が口を開いた。

「私、もう一度ゲンカイのところに行つてきます。気になることがあるんです」

「気になること？」

「ゲンカイはこの星を豊かにすることが使命。叶えるべき願いつて言つてたんです。  
きつとゲンカイは誰かの願いを叶えるために現れたんだと思います」

「……元々は星を豊かにするために召喚された神獣だもんね。きつと誰かの幸せを願つ

てるんだと私は思うな」

モモの言葉に伊智香は頷くと半透明な姿で座っていたトライスクワッドの3人が立ち上がる。

「どうやらただ『倒す』だけで終わる戦いじゃなさそうだな」

「相手を理解し、その意思を尊重する。それこそが理性あるもの同士の対話というものだ。ただ戦うだけが『答え』ではない」

「俺達は正しい答えのためにあいつのところに行くんだ」

「・・・今度は私達も行くよ」

雅美も一緒にゲンカイのところに行くと言っていると、伊智香は頷く。

「ダイナボルトは話し合いには向かないね。今回は孫市達に任せるね」

「はい。師匠。・・・行きましょう雅美さん」

「うん」

伊智香と雅美は基地の外に出ると今もなお地球のコアへと向けてエネルギーを送り続けているゲンカイへと視線を向ける。

「光の勇者！タイガ！バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「スマッシュファイ！」

『Ultraman smash lighting generation』

伊智香はウルトラマンタイガへと変身すると、雅美もウルトラマンスマッシュ・ライトニングジェネレーションへと変身してゲンカイの前へと着地する。

「待てゲンカイ。お前は人々の願いを叶えるために星々にエネルギーを与えているんだろ？」

『ソレガドウシタ？』

まずは戦うのではなく対話を試みる。対話がそれほど得意ではない雅美とスマッシュはタイガの隣に立ち、その行く末を見守る。

「お前がこれ以上エネルギーを与え続けるとこの星はその量に耐えられなくて爆発してしまう。エネルギーを注ぐのをやめてくれ」

話せばきつと分かってくれる。そう信じてタイガはゲンカイを説得しようとする、ゲンカイは話を聞く気になったのか一度エネルギーの供給を停止する。

「分かってくれた・・・のかな？」

「まだ分からない。タイガ。説得を続けるんだ」

「我ハ人々ノ願イヲ叶エルタメニ現界シタ。星ヲ豊ニ。ソレガ我ニ届イタ祈リ」

「エネルギーならもう十分だ。だからもう神の世界に帰って・・・」

「おやおやあ？私の祈りが足りなかったのかなあ？」

タイガがあと少しでゲンカイを説得できるところでトレギアが姿を現す。

「トレギア！お前がゲンカイを召喚したのか！」

「ああそうさ。すべては君のためだよ。ウルトラマンタイガ。そして才賀伊智香」

「俺と伊智香のため？どういうことだ？」

「君達は『ウルトラマン』と『地球人』でありながらバディとなり絆を深め、物語を綴っていった。それは『ウルトラマンタイガ』という物語となってしまった。物語にはいつかは終わりが訪れるものさ。だからこそ君達の物語、その舞台である地球にピリオドを付けようと思ってゲンカイを呼んだのさ」

「相変わらずはた迷惑なヤロウだぜ」

「そんなこと。我々が許すと思ってるのか」

勝手すぎるトレギアの言い分にタイタスとフーマも反応するとトレギアは背後に立つゲンカイに振り向くと『闇』のエネルギーをゲンカイにぶつける。

「何をしてるトレギア！ゲンカイは・・・」

「願いを叶えるために星にエネルギーを送っていたのだろう。だったら私の願いも叶えてもらおうじゃないか。この星にピリオドが打たれるまでエネルギーを注ぎ込んでもらおう！」

神獣であるゲンカイにとって闇のエネルギーは異物だったようで黄色い目が赤く変

色し始める。

「人々ノ願イヲ叶エテコソノ神。我ハマダ、誰ノ願イモ叶エラレテイナイ」

「神なんだろう？ 願いを叶えるのだろうか？ だったら私の願いを叶えてくれよ」

「確カニ我ハ貴様ノ祈リデ現界シタ。ダガ貴様ノ願イハ邪ナルモノ。ソノ様ナ願イ。叶エルワケニハイカン」

「そうだ！ 邪悪な願いを叶えちゃいかない！」

「勝手に邪悪扱いはよくないなあ。何が善で何が悪か。宇宙には光も闇もない。あるのは等しく無だ。それと同様に善悪基準も曖昧なものじゃないか」

「確かに曖昧だ。それは認めるよ。だけど星を破壊するなんてこと、許されていいわけないだろう！」

トレギアに惑わされることなくタイガははつきりとそう答える。するとトレギアに對してスマツシユが光弾を飛ばし、強制的に闇のエネルギーの供給を中断させる。

「この相手に説得は不可能ですよタイガ。トレギアは・・・倒すしかありません！」

スマツシユはトレギアを倒すしかないと断言し、トレギアと戦い始める。一方タイガはトレギアの闇のエネルギーで今にも我を失いそうになっているゲンカイに駆け寄る。

「ゲンカイ！」

「我ハ我ヲ抑エキレナイ。コノ星ヲ破壊シテシマウ前二・・・」

自分の力でこの星を破壊してしまう前にゲンカイはこの地球を去ろうとしたが、それよりも早く闇のエネルギーがゲンカイを蝕んでしまった。

「オオオオオオ!!」

暴走し出したゲンカイは再び地球のコアへとエネルギーを注ぎ始める。

「ゲンカイ!・・・ダメだ。完全に我を失っている」

「代われタイガ。まずはあいつを地上から放すぞ」

「分かった。頼むフォーマ」

『ウルトラマンフォーマ!』

『ウルトラマンフォーマ・ストームインパクト!』

「セイヤツ!」

伊智香はタイガからフォーマに交代すると、即座にストームインパクトとなったフォーマは超高速でゲンカイの周りを駆け回り、竜巻でゲンカイを包み込む。

「風の結界だ。このままこの星から吹き飛ばすぞ」

フォーマは風の結界でゲンカイの動きを封じつつ、そのまま地球からゲンカイを追い出そうとするとゲンカイは口から光線を放ち、風の結界を容易く破壊してくる。

「マジかよ。だったら・・・旦那!頼んだ!」

『ウルトラマンタイタス!』

「ウム！任された！」

伊智香はタイタスへとウルトラチェンジをすると、タイタスはゲンカイを力づくで押さえ込む。

「このまま宇宙の果てまで運び去る！」

飛び上がったタイタスはそのまま宇宙までゲンカイを運び去ろうとする。

「くっ！この程度・・・！」

ゲンカイはタイタスの拘束から逃れようと光弾を放ってくるも、その程度では怯まないタイタス。するとゲンカイは光線を放つと、流星のタイタスも怯んでその拘束を放棄してしまう。

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント！』

スターエンシエントとなったタイタスはゲンカイを再び掴み直すとそのまま地球を抜け出て、大気圏外までやってくる。

「さて、どうする伊智香。ひとまず地球からは追い出す事に成功したが・・・このまま倒すという考えはないのだろうか？」

「うん。ゲンカイを助けてあげよう」

「とはいえ・・・強制的にエネルギーが増幅させられるのはやはりキツイものがあるな」  
ゲンカイと接触していた影響で強制的にエネルギーが増やされていたタイタスは力

ラータイマーが点滅していないにも関わらず消耗させられていた。

「すまないタイタス。無茶をさせて。ここからは俺がやるよ」

『ウルトラマンタイガ!』

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース!』

「ハアッ!」

再びタイガへと変身した伊智香はそのままフォトンアースへと強化変身を遂げると、球状のバリアでゲンカイを包み込む。

「簡易的な封印だ。作戦が決まるまでの間、この中で大人しくしててくれ」

簡易的な封印でゲンカイを押さえ込んだタイガは作戦を考えるためにも一度地球へと戻るとスマツシユとトレギアの戦いがまだ続いていた。

「シューティングスマツシユ!」

「フフツ」

スマツシユとトレギアの必殺光線がぶつかり合う。その戦いは全くの互角だったように互いの光線は相殺される。

「パワーで押し切る!」

『ultramansmash crashenergy』

クラツシユエナジーにウルトラフュージョンしたスマツシユは爆炎を潜りぬけてそ



の重たい拳を叩きこむ。

「ハアアアアアアつ!!」

連続で重たい拳を叩きこむスマッシュに対して、流石のトレギアも防御をするだけで動けずにいると、今がチャンスだと判断したスマッシュと雅美は次なる一手を取ろうとする。

「最高速度でいくよ!」

『Ultraman smash tornadodash』

「最光剣・零式」

続けてトルネードダッシュへとウルトラフュージョンしたスマッシュは最速の剣技、最光剣・零式でトレギアに連続斬りを浴びせるとそこでようやくトレギアが膝をつく。

「まったく。この間までの君達は迷い、悩み美しかった。だが今は違う。生命の美しさを失ってしまったている。まったくもってつまらないよ」

「迷い悩んだから私達は強くなれた」

「そしてかけがえのない絆を得ることができました。今の僕らは……貴方に負けることなどありえませんか!」

「また絆か……。いい加減聞き飽きた」

絆という言葉に嫌気がさした様子のトレギアは次の一撃でスマッシュを葬ろうと先

ほどよりも強力な一撃をスマッシュへと放つ。

「……っ」

トルネードダッシュのスピードなら避けることはたやすいのだがしなかった。できなかったのだ。なぜならスマッシュの後ろには仲間たちがいるツキカゲ基地があったのだから。

「避けたいのなら避けるといいさ」

「くっ……！うわあああっ?!」

避けることをしなかったスマッシュはバリアを展開して光線を防ごうとするも、スピードに特化したトルネードダッシュのバリアではあっさりとは打ち砕かれてしまい、スマッシュはまともに光線を受けたスマッシュは変身が解かれて雅美へと戻ってその場に倒れ込んでしまう。

「絆なんてのは……目に見えなくて曖昧なものじゃないか」

何処か虚しそうに語るトレギアの前に着地したタイガは構えようとすると、トレギアは空を見上げた。

「ゲンカイは……なるほど。封印を施したか。とはいえあんな簡素な封印では明日には解かれてしまうだろうね。まあ、せいぜい足掻いてみるといいさ」

魔法陣に消えていったトレギアを追いかけなかったタイガは変身を解除すると、伊智

香は急いで倒れている雅美の元へと駆け寄る。

「雅美さん！」

「大丈夫雅美ちゃん？」

「しつかりしやがれ！」

伊智香が駆けよるよりも先に風の部隊の面々が雅美を心配して駆け寄ってくると、雅美は「大丈夫」と言いながら立ち上がろうとするも、ふらつきそうになる。

「つと。無理しないで」

「ごめんなさい。ちよつとまだ・・・立てないかも」

「謝らんでもよい。むしろ庇ってくれたことに礼を言わんといけんのはこっちじゃ」

「・・・お礼なんていらないよ。だって私達は・・・仲間なんだから」

「フツ。そうじゃな」

「自分から仲間って言えるようになるなんて。成長したね雅美ちゃん」

からかわれて顔を赤くしながら照れる雅美だったが、すぐに伊智香の方を見る。

「どうするの孫市。何か策はあるの？」

「策は・・・まだありません。それでも絶対にゲンカイも地球も助けます。だって私達は・・・」

「「ウルトラマンだから！」」

伊智香達トライスクワッドはゲンカイも地球も助けると決意を固めながらも空を見上げるのだった。

## バディ&ス・パイス

タイガがゲンカイを一時的に封じ込めた翌日。もうすぐその封印が解けるということでツキカゲ基地に再び風の部隊とZETのメンバー、そして雪が集結していた。

「今のゲンカイはトレギアの闇のエネルギーで暴走してるだけで、闇を切り離せばきつと説得に応じてくれると思うんです。何とかありませんか？」

ゲンカイを助けて、地球も救う。その目的に賛同した伊智香の仲間たちはその打開策を考える。

「スマツシユのスマツシユヒーリングならゲンカイを蝕んでいる闇を祓うことができると思う」

「ゲンカイを助けられる可能性があるのは雅美さんとスマツシユさんのお2人にかかっているということですね」

「だけどヒーリングに全力をさかないといけないから誰かがゲンカイの動きを封じていてくれないと・・・」

「それなら私達がダイナボルトでゲンカイを押しさえ込むよ」

ダイナボルトのパワーならとモモはゲンカイの動きを封じ込めることを買って出る。

それに雪達3人も頷く。

「タイタスと同等のパワーのダイナボルトなら可能なはずね」

「なにより凧の部隊の後輩が頑張ろうとしてるんじや。自分らが体を張らんでどうする」

「とはいえもう1つ問題があるわね」

もう1つの問題。それは確実に自分達を妨害しに来るであろうトレギアのことだ。

「トレギアは・・・私達が決着をつけます」

伊智香の言葉にトライスクワッドの3人が頷く。伊智香達の決意は堅いようでその目を見たモモ達はその覚悟を感じ取る。

「負けないでね。孫市・・・いや、伊智香ちゃん」

「はいー」

伊智香の力強い返事にツキカゲメンバーも活気づいているとモニターに町の様子が拡大される。

「どうやらゲンカイが地球に戻ってきたようです。闇のエネルギーで暴走しているからか、周囲の電子機器もエネルギーが強制的に急速充電されて暴走しています」

「各地の護衛ロボも暴走しまくってるわ。幸いヒデオシはここが地下なおかげかまだ大丈夫みたいだけれど出撃はしないほうがいいわね」

「・・・招致」

ヒデオシことアミイは出撃できないことを悔しそうにしながらもその指示に従う。

「ではヒデオシさんは私達と一緒にここで皆さんに指示をお願いします」

「委細承知」

アミイは初芽と真瑠瀬は基地からの後方支援に徹することになると、初芽はモニターにデカデカとミツシヨンを名を表示する。

「ミツシヨンの名は・・・『バディ&スパイス』です」

全員が総出で出撃をするミツシヨンの名を告げられると各々が覚悟を決めて準備に取り掛かる。

「それでは皆さん。ミツシヨンのスタート」

ミツシヨンのスタートの合図と同時に伊智香はタイガスパークを出現させる。そしてその隣に立つ雅美もスマッシュスパークを取り出す。

「光の勇者！タイガ！バディ・ゴー！」

『ウルトラマンタイガ！』

「スマアアッシュ！」

伊智香と雅美はそれぞれウルトラマンタイガとウルトラマンスマッシュに同時変身を遂げると、モモ達4人もバトルスパークレンスとキーを手取る。

「**「**ダイナボルト！バトル・ゴー！**」**」

ゲンカイと地球を救うため、ウルトラマンタイガとウルトラマンスマッシュ。そしてダイナボルトが並び立つ。

「さてと、役者も揃ったことだし第二章。そして君とこの星の最終章の開演だ」

そこにトレギアも現れるとタイガとスマッシュは顔を見合わせて頷く。

「スマッシュ。ゲンカイを頼む」

「ええ。そちらもトレギアをお願いします」

タイガはトレギアと向かい立つとスマッシュとダイナボルトもゲンカイの前に立った。

一方その頃、命達もそれぞれに分かれて暴走するロボット達を個別に対処していた。

「それじゃ刺激的にいかがか」

「今のアタシは一味違う！」

それぞれスパイスをかじった命と楓はロボットをクナイや手裏剣で破壊していく。しかしその数に押され気味になっていた。

「さっすがに数が多いね」

「呑気なこと言ってる場合じゃないですよ師匠。アタシ達の体力は無限じゃないんです



から」

「安心しろお前達！」

2人に向かつて次々とロボットを破壊しながら近づいてくる2人の少女がいた。そう……。

「白虎様が加勢に来たぞ！」

「私もいるよ〜」

白虎と信だ。

「えっ？白虎！アンタここの担当じゃないでしょ！自分のところはどうしたの？」

「そんなもの白虎様にかかれれば朝飯前よ。朝飯は食べたけどな」

「それに師匠まで……」

「えへへ。来ちゃった」

「まあ、早く片付いたんならそれでいいよ。さあ白虎！思う存分暴れちゃって！あ、師匠はあんま強くないし無理しないで」

「オウよ！」

「ちよつと〜。私だつてやる時はやるよ〜」

命達は4人でロボットを倒している頃、五恵とテレジアの方も数に苦戦を強いられていた。

「流石に暴走しているロボットの数が多いいね」

「それだけゲンカイのエネルギーが膨大ということだろう。既に自分の担当を片付けた白虎は他の加勢に向かったらしい」

「それじゃあここは私達で頑張らないとね」

「ああ。そうだな」

スパイスを口にした五恵とテレジアはそれぞれ近接格闘でロボットを破壊している  
と、そこにも助っ人が参戦してくる。

「ハアっ！」

「あの斧・・・まさか！」

「久しぶり。五恵」

沖繩の諜報機関に所属している王香だ。

「王香ちゃん!? どうしてここに？」

「本土の方に観光に来たからサプライズで五恵に挨拶をと思ってただけど・・・まさかこんなサプライズになってしまおうとはね」

「誰かは分らんがうれしい助っ人だ」

王香のことを知らないテレジアだが五恵の友人でスパイだとすぐに察して、共にロボットの対処をしていた。

そして飛粋とゆら、葉栖美の3人も暴走するロボットの数に苦戦を強いられていた。「ちっ。1体1体はそうでもないけど数が鬱陶しいぜ」

「この子たちは動物じゃないから私には大人しくさせるなんてできないからなく」  
「でも私達が頑張らないと。一番頑張ってる雅美ちゃんに顔向けできないよ」

飛粋は今もなお最前線でゲンカイの対処をしている雅美のことを思っ自分達がここで頑張らないといけないと告げると2人も頷く。

「なんだか先輩らしくなってきたんじゃない？」

「雅美が入って一番喜んでたもんな！」

数に苦戦させられながらも飛粋が先輩らしくなってきたとゆらと葉栖美はからかう。状況に余裕はないが後輩のためにと己を鼓舞しているとそこに複数人の異星人がやってきた。

「げえ!?こんな時に異星人かよ！」

「流石にそつちの相手まではできないよ」

「いや待って。あの人達、なんか様子が・・・」

3人はロボットだけでなく異星人達の相手までしないとイケないのかと思っている。その異星人達はロボットと戦い始めた。

「地球人の娘っ子たちが頑張ってるんだべさ」

「この星に移住している俺たちも頑張らねえとな！」

「生まれた星は違うけれど、今は同じ星で生きてるんだ！」

「ここで立ち上がらないでどうするのよ！」

その異星人達は自分達もこの星で生きている者として彼女達に加勢してきたようだ。

「なんだ？ どういうことだ？」

「この星で生きている生命に星や種族の壁なんかないってことかな」

「よし！ 本職の私達も負けてられないね！」

それぞれに参戦した助っ人によって一気に優勢となった彼女達は瞬く間にその場のロボットを行動不能にしてウルトラマン達の戦い見上げた。

「いつけー！ー！ダイナボルト！」

ダイナボルトは暴走しているゲンカイを押さえ込もうと両手を伸ばすも、ゲンカイは光弾を無数に放ってそれを寄せ付けないようにしてくる。

「くっ、隙がないわね。近づけそうにないわ」

「隙がないなら力づくで隙を作ればいいんじゃない？」

「大丈夫！ この程度で壊れるほどダイナボルトはヤワな作りはしてないわ！」

光弾に怯むことなく突撃していこうとするダイナボルトだったが、ゲンカイの放った

光線によってダイナボルトの合体が解除されてしまう。

「「「まだまだあ!!」」」

爆炎の中から出てきたのは再合体したボルトドラゴンだった。ボルトドラゴンはゲンカイに噛みつきながらも、尻尾で締め付けてゲンカイの動きを封じた。

「今じゃ雅美!」

「スマツシユヒーリング!」

ボルトドラゴンが身動きを封じているところにスマツシユはスマツシユヒーリングで闇を浄化しようとする。

「闇と結合し過ぎてて・・・闇が祓えないッ」

「だったら闇だけを焼き尽くそう。私達の・・・絆の炎で!」

「そうですね。今の僕達ならきつとできるはずです!」

「永遠に燃やすは、絆の炎! タロウ! メビウス! タイガ!」

『t a r o u ・ s u p e r u l t r a 』

『m b i u s ・ p h o e n i x b r a v e 』

『t a i g a ・ T r y s t r i u m 』

「スマツシユファイ!」

『u l t r a m a n s m a s h b o n d s f l a m e 』

ボンズフレイムへとウルトラフュージョンしたスマツシユは炎の弓矢を作り出してそれを構える。

「・・・そこだッ！」

そしてウルトラサーチャーで闇のエネルギーが集まる場所を感じ取りつつ、そこ目掛けて矢を放った。その矢はゲンカイをすり抜けるように闇のみを祓うと、そのまま闇のエネルギーを焼き払った。

「ムウ・・・」

闇のエネルギーが祓われて純粹な無限のエネルギーとなったゲンカイ。ボルトドラゴンはその拘束を解いて離れるとゲンカイは我に返った。

「ドウヤラ光ノ戦士ニ救ワレテシマツタヨウダナ」

「ゲンカイ。あなたが誰かの願いを叶えるために星にエネルギーを与えることは決して間違つてはいません。ですが花に水を与えすぎるとダメになってしまうように、星にもエネルギーを与えすぎると限界は訪れてしまうものなのです」

「神獣ト言ウ肩書キハ持ツテイルトハイエ、全テノ事柄ヲ思イ通りニスル力等持ツテナイ。我ハ星ニ力ヲ注グ事シカ出来ヌ」

「だつたらゲンカイ。これからは星が壊れない程度にこれからも星々を豊かにして」

雅美はゲンカイに願いを告げる。

「仲間に会おうまで私は1人だと思っていた。だけど仲間たちと出会ったことでたくさんの絆で繋がることができた。私はこれからも絆を紡いでいきたい。それはこの星の人達だけじゃない。スマッシュやトライスクワッドだけじゃない様々な星や次元のウルトラマン。他の星のいろんな人達と絆を結んでみたくなつたの」

「絆力。良い願イダ」

そう告げたゲンカイは空へとゆっくり飛び上がる。

「ソノ願イ。聞キ入レタ。其方ノ願イガ叶ウ事、我モ願ツテイルゾ」

「また何処かで会おうゲンカイ」

次なる星へと旅立っていくゲンカイにいつかまた再開する約束をした雅美はスマッシュの変身を解くとタイガとトレギアの戦いに視線を向ける。

「こっちはやったよ。伊智香。トレギアにも絆を思い出させてあげて」

「トレギアアアあっ!!」

タイガはトレギアにパンチやキックなどで挑みかかるも、軽く受け流されてしまう。

「スワローバレット!」

「おっと・・・」

「くっ」

『ウルトラマンフーマー!』

トレギアはタイガのスワローバレットをバリアで受け止めつつ、回し蹴りをしていく。その一撃で地面に転がされたタイガはフーマーへと交代する。

「疾風怒涛!俺がためえをぶつちぎる!」

フーマーは超高速で移動しながらトレギアに光波手裏剣を投げつける。

「小賢しい!」

トレギアの電撃光線を高速で回避したフーマーは即座に背後に回り込んで光波剣・大蛇で斬りつけると、トレギアは即座に背後へと振り返って光線を放つ。

「おおっと!」

「そこに来ると思ってたよ!」

「なっ、うわあああっ!?!」

それも回避したフーマーだったが、移動先をある程度予測していたトレギアの光線が直撃した。……かに思えた。

「なあんてな!」

それすらも回避していたフーマーはトレギアの頭上から無数の光波手裏剣で攻撃をすると、またも姿をくらませる。



「・・・どこに?」

『ウルトラマンタイタス!』

周囲を見渡すトレギアはその気配が変わったことに気づき、再び上を見上げる。

「上か!」

「賢者の拳はすべてを砕く!」

空から勢いよく急降下してきたタイタスはその拳をトレギアへと叩きこむ。

「イタタ、ひどいことするねえ。賢者のくせに」

「特別だ。受けてみよ!星の一閃!アストロビーム!!」

タイタスのアストロビームがトレギアに命中すると、流石のトレギアも消耗したのか息が上がってきていた。

『ウルトラマンタイガ!』

タイタスから再びタイガに変身した伊智香。その腕にはプラズマゼロレットが装備されている。

『プラズマゼロレット・コネクトオン』

「ワイドタイガショット!」

ゼロの力を借りたワイドタイガショットを放つタイガ。その光線はトレギアのすぐ真横を横切つて当たることにはなかった。

「何のつもりだ？」

「もうやめようトレギア。お前なんだろう？父さんの親友で光の国を離れたっていうウルトラマンは……。お前がもう一度光を守護する者として歩みたいのなら……」

「フッフ、何度も言わせるな。この世には光も闇もない！」

トレギアの放った電撃光線を受け止めたタイガ。するとタイガの体が燃え上がりトライストリウムへと姿を変えた。

「それでも俺は！俺達は！光を信じる！」

「ハアアアっ！」

怒りと虚しさ。様々な複雑な感情が入り乱れているトレギアは考え無しにタイガへと向かって行く。それをタイガは正面から受け止めるとタイガトライブレードによる一太刀を浴びせる。

「ぐっ……ハアっ！」

剣の刃を掴んだトレギアはそれをひっぱり剣を奪い取ると、そのまま剣を投げ捨てる。

「トレギアアアっ！」

「タイガアアっ!!」

2人の拳はクロスカウンターとなり互いにヒットすると、それに怯んだ2人は数歩後

ろに下がる。タイガはそのまま剣を拾い上げると伊智香達の光を信じる心に呼応するかのように奇跡とも呼べる現象が起こった。

「これは……!」

「いったいどういうことだ?」

「まさに『奇跡』というに相応しい現象だろうな」

そこにはそれぞれタイガトライブレードを手にしたタイガ・トライストリウム。タイタス・スターエンシエント。フーマ・ストームインパクトの3人の巨人の姿があった。

「理由なんていいさ。みんなで一氣にトレギアを……ウルトラマントレギアを光で照らすぞー!」

「[[「バディ・ゴー!」]]」

トライスクワッドの4人は掛け声とともに『ウルトラマントレギア』の心も救うために立ち向かっていく。

「まずは俺からだ!風真・烈火斬!」

最初に仕掛けたフーマは炎の斬撃、風真烈火斬を飛ばすとその一撃を受け止めきれなかったトレギアはよろめく。

「タイタス!バーニングハンマー!」

続けて放たれる火球。タイタスバーニングハンマーの重たい一撃に数歩下がったト

レギア。そこに燃え滾るタイガが剣を構える。

「タイガ！ブラストアタック！」

燃え滾るタイガの一撃をバリアで防ごうとしたトレギアだったが、怒涛の連続攻撃によつて消耗させられていたトレギアはバリアが破られて背中から転倒する。

「まだだ！」

即座に立ち上がつて反撃をしかけてくるトレギア。3人は空へと飛びあがると太陽の逆光に照らされながら再び1つとなつて虹色に輝いた。

「タロウ……」

その姿にウルトラマンタロウを垣間見たトレギア。それに対してタイガも応える。

「そうだ！俺はタロウの息子！ウルトラマンタイガだ！」

「クワトロスクワッド！」

「クワトロスクワッド！レインボーブラスター！！」

伊智香達4人の想いが重なつた最強の光線。それを避けようとしなかつたトレギアはその光線が直撃し、爆発して光となつていった。

「トレギア……最後にタイガ君のお父さんの名前を言っていたね」

「父さんとの絆を思い出してくれたんだ。俺はそう……信じたい」

戦いを終えた伊智香は変身を解いて仲間たちの元に戻ると、真つ先にモモが彼女に抱

き着いた。

「おかえり。伊智香ちゃん」

「・・・ただいまです。師匠」

「これにて合同ミツション。完了ですね」

トレギアとゲンカイの戦いからそれなりに日が経過し3月となった。その日は空崎高校3年生であるモモ達の卒業式が行われていた。

「師匠！卒業おめでとうございませす！」

「ありがとう伊智香ちゃん」

「師匠も、まあ、無事に卒業できて良かったですね」

「何い。まるで無事卒業できなさそうだったと言いたげだなく我が弟子い」

「学園生活、長いようで短かったな」

「まだ大学生生活があるよ。今度はまた師匠と一緒にだよ」

「そうだな。また初芽と同じ学校に通えるのだったな」

3年生であるモモ達はこれで高校生活は終わりとなるが、これでツキカゲを卒業するというわけではないのでお別れではない。その事は理解しつつも伊智香は何処か寂しげな表情になる。

「どうした伊智香。別にモモ達は高校を卒業しただけでお別れってわけじゃないだろ？」

「うん。それは分かっているけど……。やっぱり寂しい気持ちは拭えないっていうか」

モモ達が『ツキカゲ』でいられるのはスパイスの効き目があるうちだけ。それが過ぎれば初芽やカトリーナのように前線を退きつつ支援に回るか、ツキカゲであった頃の記憶を消して一般人に戻るかという選択肢となる。伊智香はそんないつかは訪れる別れが近づいてきているのだと自覚させられていると同じく卒業式を迎えた飛粋とゆらが雅美を引っ張ってくる形で遭遇した。

「あつ、風の皆さん」

「よお！お前ら！お前らも無事に卒業したみたいだな！」

「お互い卒業おめでとう」

モモ達と飛粋達は互いに卒業を喜び合うと残されたもの同士も話をし始める。

「いよいよアタシ達も3年かあ」

「楓ちゃんはいよいよ『師匠』になるんじゃない？」

「そうかもねえ。でももう茜みたいなのは勘弁だわ」

「雅美さんは……この間目標ができたって言ってたけれど……」

「うん。来年高校を卒業したらまずは世界を見て回ることにしたんだ。まずは地球のあ

ちこちを見て回って、その次は宇宙に……たくさんの人達と絆を結ぶ旅に出ようと思  
うの」

雅美の大きな夢に目先のことばかり考えていた伊智香は恥ずかしい気持ちになると、  
改めて伊智香は考える。

「私の夢は師匠のようになること。……じゃあその後は？」

目先の事を解決した後、自分が師匠になった時に自分はどうしたいのか。今の伊智香  
にはその答えは出なかった。

## 最終章1 復活のグリムド

M78星雲の宇宙。ウルトラマンタイガの父親であるウルトラマンタロウは宇宙遺跡ヴオルヘスにいた。

「時空が歪み近づくことが禁じられたこの地。この地に……あの気配が……」

よく知る者の気配をこの禁じられた地で感じ取ったタロウは単身それを確認しに来たようだ。すると泉のような場所からゆっくりとその『よく知る者』が現れた。

「やはりここだったか。トレギア」

そう。ウルトラマントレギアだ。

「タロウ。昔は2人でよくこういう場所を探検したな」

「ああ。お前とはずいぶん無茶なことをした」

「……かつてこの宇宙は混沌が支配していた。光も闇もすべてが入り混じっていた。ここはその混沌を封じ込めた墓場とも呼べる場所だ」

「なら何故墓荒らしのような真似をする？」

「混沌の強大なパワーを我が物とするため。……いや、違うな。私はただ……」

何か思うところがあつた様子のトレギアは言葉を詰まされるとタロウはゆっくりと



歩み寄ろうとする。

「トレギア。一緒に光の国に帰ろう」

「ハハハっ！何も分かっていないなタロウ。お前達がいう光にも意味がなければ、闇にもまた意味などない」

そう告げたトレギアはゆっくりとその姿を消していく。どうやら先ほどまでのトレギアは幻影だったようだ。するとタロウの真上に再びトレギアの幻影が現れた。

「昔のよしみで教えてやろうタロウ。今グリムドは私の中にはいない。タイガのいる宇宙にいる」

「何い!?!」

「タイガの光線に貫かれた時、封印が緩み、あの邪神魔獣が解き放たれてしまった。グリムドと戦ったウルトラマンギンガ達は自らの変身能力と引き換えに奴を封じ込めたのだが……まもなくその結界も破られるだろう。そしてグリムドはタイガのいる地球に現れる。そうなると地球を愛するタイガ君はどうするだろうねえ？」

そう言い残したトレギアは幻影を消すと、その場にはタロウのみが取り残された。

トレギアとゲンカイとの激戦から数カ月が経過した8月。

「いよいよもって命さんも引退かな」

スパイスの効き目が落ちてきた命は自分の引退を考え始めていた。

「命の姉ちゃんもいよいよ引退の時期か」

「スパイスという手段が若いうちにしか使えないという以上引退があるのは仕方がないことだな」

「引退。．．．お別れか」

引退から別れの事を考え出したタイガ。その様子を見てタイタスとフォーマはある事を察する。

「お前、伊智香にはまだ．．．」

「言つてない」

「そうか．．．」

「まあ、なんか言いにくいよなあ」

タイガ達は大事な話があるようだが、伊智香にそれを言う決断ができずにいた。

「久しぶり」

するとそこに以前別の次元からエックススタークネスを追いかけてタイガ達と共闘した大空大地がツキカゲにやってきた。

「おっ！大地さんじゃん！．．．本物？」

「本物だよ。・・・これが証明になるかはわからないけど」  
『久しぶりだなみんな』

命は本来ではこの世界に大地がいるはずもないため宇宙人が変装しているのではと警戒するも、大地は白いエクステバイザーを出して自分が本物だということを示してくる。

「エックスさんの入ってるデバイザー！間違いない大地さんですね！ですが何故デバイスが白く？」

「ちよつと訳ありだね。これを直すためには伊智香ちゃんの手が必要なんだ」

「私の？」

「ああ。君の持つエックスレットを返してほしい」

「えと・・・はい。分かりました」

伊智香は疑いもせず大地にエックスレットを返還すると、エクステバイザーに色が戻った。

『よし。これでまた戦える』

「上にもう2人いるんだけど、彼らにも力を返してくれないかな」

「2人？」

伊智香達は上に行くとWasabiの店内には3人の男女がいた。

「このカレー！おいしいですねカツ兄。イサ兄」

「そうだなアサヒ」

「俺さ。ガラムマサラマシマシってのを行ってみたいんだけど？」

湊3兄妹。ウルトラマンロツソこと湊カツミ。ウルトラマンブルこと湊イサミ。ウルトラウーマングリージョの湊アサヒ達だ。

「あつ！あなたが伊智香ちゃんですね！はい！飴ちゃん！」

「え？あつ、どうも」

アサヒに飴を手渡された伊智香は困惑する。ウルトラマン変身した姿でアサヒとは会っているが、人間としては初対面だからだ。

「あのですね。お兄ちゃん達の力が入ったプレスレットを返してくれませんか？」

「お兄ちゃん達？あつ！もしかして兄弟ウルトラマンの！」

「ああ。俺は湊カツミ。ロツソだ」

「俺はブルのイサミね。よろしくう！」

一方その頃、雪はというととある情報を掴んだため単身で宇宙人達が集まる集会所に足を運んでいた。

「てめえ地球人。何しにきやがった」

「この間確保した宇宙人からうちの孫弟子が狙われてるって聞いたから確かめに来たのよ」

「貴様、ツキカゲとかいう組織の者か」

「ただのOGよ」

宇宙人に囲まれた雪はバトルスパークレンスを構えようとする、何処からともなくハーモニカの音が鳴り響いた。

「待ちな。お前さん達、それは野暮ってもんだろ？」

「誰だ貴様！」

「俺はガイ。風来坊だ」

「ガイだど!? どうしてお前がここに！」

ガイことウルトラマンオーブが現れたことに宇宙人達は驚くもガイは話を続ける。

「俺もタイガ。伊智香って子が狙われてるってのをウワサで聞いたもんでな」

「どうやら敵ではなさそうね」

ガイが敵ではないであろうと判断した雪。すると宇宙人達は一斉に2人に攻撃を仕掛けてくる。とはいえ雪も元スパイ。多少衰えたとはいえスパイスなしでも十分に強い彼女と長年ウルトラマンとして活躍しているガイにとって宇宙人達を無力化するに

は時間がかからなかった。

「さあ、どうして孫市が狙われているのか教えてもらいましょうか？」

「この地球が滅びる前にあの女が持つブレスレットを売り払って一儲けしようって・・・

イテテ・・・」

「滅びる？ どういうこと？」

雪はバトルスパークレンスの銃口を宇宙人達に向けながら情報を聞き出す。

「邪神魔獣グリムドが復活する」

「奴が地球に現れたら一巻の終わりだ」

「だからウルトラマンの力を持つブレスレットを転売して、その金でこの星をトングラ

しよう・・・」

彼らの言い分にガイはため息をつく。

「俺達の力を転売だと？ 呆れるこった」

「俺達？ あなた、もしかしてウルトラマンなの？」

「ああ。俺はオーブ。ウルトラマンオーブ。銀河の風来坊だ」

「はい。どうぞ」

場所は戻ってWasabiではカレーを食べ終えた湊兄妹達が伊智香からプレスレットを返却してもらっていた。

「ありがとう」

「サンキュー。これで変身できるなカツ兄！」

「変身？もしかしてお3方は変身ができなくなっていたのですか？」

初芽は彼らに変身能力を失っていたのかと尋ねると彼らは頷く。

「ああ。俺達は邪神魔獣グリムドを封印するために変身能力を失ったんだ」

「だけどその封印ももうすぐ解ける。その前に俺達に力を返してほしいんだ」

「力を返してもらえば、俺達はまた変身できるからな」

「だったら他の人達にもはやく力を返さないと」

事情を理解したツキカゲは他の変身できなくなったニュージエネレーションのメンバーを探しに外へと出ようとした途端、空が割れて青い『何か』が落ちてきた。邪神魔獣グリムドだ。

「グリムド、もう封印が解けたのか」

「大地さんとアサヒは他のニュージエネメンバーを急いで呼んできてくれ。行くぞイサ  
ミ」

「俺色に染め上げろ！ループ！」

『ウルトラマンロツソ・フレイム!』

『ウルトラマンブル・アクア!』

グリムドと戦おうとカツミとイサミはウルトラマンへと変身すると、伊智香もタイガスパークを出現させる。

「私達も!」

『カモン!』

「光の勇者! タイガ! バディ・ゴー!」

『ウルトラマンタイガ!』

伊智香もウルトラマンタイガへと変身し、3人のウルトラマンが並び立つと一つ目の青い邪神。グリムドと向かい立つ。

「シユア!」

「ハアッ!」

同時に駆け出した3人のウルトラマンはそれぞれパンチやキックなどでグリムドを攻撃するも、グリムドはまるで怯まない。

「こいつは俺が倒す! ウオオオオ!!」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース!』

フォトンアースへと変わったタイガは金色に輝く拳をグリムドの腹部目掛けて叩き



こむも、腹部にも口があつたグリムドはその口でタイガの拳を噛んでその動きを止める。

「くっ、放せ！うわあああっ!?!」

「タイガ！ループスラッガーロツソ！」

「ループスラッガーブル！」

グリムドは動けないタイガに電撃を浴びせるとロツソとブルはループスラッガーでグリムドを斬りつけ、タイガを開放する。

「今だタイガ！」

「撃て！」

「はい！」

ロツソとブルはグリムドを2人がかりで押さえつけるとタイガに光線技を指示してくる。それに頷いたタイガは光線のエネルギーを収束する。

「オーラムストリウム！」

タイガの光線。オーラムストリウムが直撃した。爆炎がグリムドを包み込むと、その炎は吸収されるようにかき消され、無傷のグリムドが出てきた。

「何っ!?!」

「まずい！」

ロツソとブルはグリムドが光線を放とうとする動作を見て即座に回避行動を取ったが、タイガは間に合わずにそれが直撃してしまう。

「うわあああつ?!」

フォトンアースの鎧でなんとか大事には至らなかったタイガだったが、鎧が解除されて通常のタイガに戻りその場に倒れ込む。

「あつ・・・!」

すると伊智香のタイガスパークから彼女が持つすべての怪獣リングが飛んで行ってしまふ。その飛んで行った先には霧崎がいた。

「おかえり。フフフッ」

「てりやあああつ!」

偶然にも近くで避難誘導をしていた凧の部隊のしぶきとゆらは即座に霧崎のいる場所へ急行し、霧崎に先制攻撃を仕掛けるも、あっさりを受け流される。

「霧崎。今度は何が目的じゃ!」

「また孫市やタイガを狙ってやがるのか!」

「そうカツカするなよお。今日のターゲットは伊智香ちゃんじゃない。私の狙いは・・・もうすぐ来るさ」

クスクスと笑いながら霧崎はタイガ達の戦いを見つめる。グリムドは青い残像を残

す高速移動でタイガ達を翻弄すると背後からタイガを襲撃し、転倒したタイガを踏みつける。その時だった。

「ストリウム光線！」

空から飛んできた光線がグリムドへと命中し、グリムドが数歩下がる。そしてタイガの前にウルトラマンタロウが舞い降りた。

「父さん・・・」

「えっ？タイガ君のお父さん？」

タロウの登場に伊智香達は驚きを隠せずにいると、霧崎は歓喜するかのように笑う。

「ハハハっ！待っていたよ！・・・我が友よ」

「立てるな。タイガ」

「父さん。俺・・・！」

「話は後だ。今やるべき事は分かるな？」

「はい！」

タロウの手を借りて立ち上がったタイガ。するとタロウはグリムドに向き直して駆け出すと連続パンチを叩きこむ。

「あの怪獣の一部はまだ私の中に眠ってるんだよ」

「何じゃと？」

「どういう事だ？」

「引き裂かれた2つは1つになるうとする。だから地球にグリムドは出現した」

「霧崎！お主また地球を滅ぼそうとするつもりか！」

「んなことさせねえぞ」

しぶきとゆらはそんなことはさせないと構え直すも霧崎は顔色一つ変えない。

「話は最後まで聞けつて。私が狙うのはウルトラマンタロウ。タイガの父親さ」

「タイガの父親だと？」

「何故タイガの父を……」

タロウを狙う理由を聞き出そうとするしぶきとゆらだったが、霧崎は青い電撃を放つて2人を攻撃してくる。その攻撃を何とか避けた2人の横を1人の男が横切った。

「トレギアアアっ！」

ウルトラマンギンガに変身する礼堂ヒカルだ。ヒカルは霧崎にキックを叩きこむと、霧崎は後ろに下がる。そこにさらにウルトラマンビクトリーに変身するシヨウも現れ、衝撃波を放ち霧崎に追い打ちをかけるも霧崎は耐え凌ぐ。

「やはり黒幕は貴様か」

「タロウに何をやる気だ？」

「特等席で美しい親子愛を見届けようじゃないか」

「父さん！」

「下がれタイガ！グリムドは私がこの手で葬り去る」

タイガは1人グリムドと戦うタロウに加勢しようとするも、タロウはタイガ達の加勢を拒む。

「ウルトラアダイナマイトオ!!」

ウルトラダイナマイトを発動したタロウはグリムドへと突撃して爆発する。その場にはグリムドの姿はなく、タイガは父親が勝利したと思つてタロウへと駆け寄る。

「父さん！やりましたね！・・・父さん？」

様子がおかしい。それに気づいた時にはもう遅かった。

「うわっ!？」

タロウに蹴り飛ばされたタイガ。ロツソとブルも様子がおかしいと駆け寄ろうとするも、タロウの攻撃に阻まれる。

「タロウのお父さんにいったい何が？」

「おそらくグリムドは爆発エネルギーと融合し、それを逆流させ、タロウの中に入り込んだようだ」

「タロウを操ってるのはグリムドってことかよ」

「と・・・う・・・さん」

「やめろおおお!!」

踏みつけられるタイガを助けようとロツソとブルはタロウに攻撃をするも、グリムドの魔の手にかかったタロウの反撃を喰らい2人は変身が解除される。

「うっ?!ぐあぁっ!?!」

反撃できずに一方的にタロウに殴りつけられるタイガ。

「お前の目的はこれか」

「やつと私のものになったな。タロウ」

「貴様あ!」

ヒカルとシヨウは霧崎を睨みつけるとタロウはタイガへとストリウム光線を放とうとしてくる。

「父さん!もうやめてください!ストリウムプラスター!」

タイガとタロウの光線がぶつかり合い、その爆風と衝撃でタイガの変身が解除される。

「最高のシヨウの始まりだ」

そう言い残してその場から姿を消した霧崎。そしてその場へと変身が解除された伊智香が落下してくる。

「シヨウ!」

「分かってる！」

伊智香を受け止めたシヨウは彼女をゆっくりとおろす。

「あ、ありがとうございます。貴方たちは？」

「彼らはウルトラマンギンガとビクトリーよ」

ヒカルとシヨウが名乗るよりも先に来夢が2人の正体を明かした。

「ギンガとビクトリーに変身していた方だっただんですね！この姿では初めまして！」

「よろしくな！後輩！」

「まずは俺達の力、返してもらおうぞ」

「はい」

伊智香は2人にもブレスレットを返すと2人の変身アイテムに色が戻る。

「ニュージェネレーションヒーローズのメンバーは今、うちの関連会社のホテルに滞在してもらってるの。もう半年ぐらいになるかしら？」

「えっ？そんなに前からこの地球にいたんですか？だったら会いに来てくれてもよかったのに」

「まあ、お前らが影の組織つてのもあつて簡単には出入りできなかつただよ。だけどもうそうも言つてられなくなつただんだ」

「グリムドの封印が解けたから・・・ですな」

「ああ。俺達はトレギアから抜け出したあいつを封印するために結界を張った。その時、エネルギーを使い果たして変身ができなくなっただ」

「グリムドはトレギアが体内に封じ込めていた。あいつがトレギアの力の源だ」

「タロウは息子を守るために自ら犠牲になったんだろ」

「結果、トレギアの狙い通り2人は戦うことになったがな。まったく、何処までも拗らせ  
たやつだ」

「トレギアは俺達が止める。親友だった相手とタロウを戦わせたくないからな」

そう言ったヒカルとシヨウはその場を後にすると、伊智香は1人町の様子を見に行く  
と移動する。町はグリムドに操られたタロウによって滅茶苦茶にされつつあった。

「笑えるよな。あれで宇宙警備隊筆頭教官っていうんだから」

タイガは自却するかのように自身の父であるタロウのことを笑う。

「なあ、笑えるよな!・・・笑えよ」

「あのさタイガ君。きつい時はきついって言うていいんだよ。辛い時は辛いって言うて  
いいんだよ」

「はあ?なんで俺がそんな事!?!」

「分かるよ。なんでもってわけじゃないけど、今のタイガ君が悲しそうなのは分かる。」



これまでどんなに厳しいことがあっても一緒に戦ってきた仲間なんだから。だから私達には正直に言っていんだよ？大丈夫。きつと大丈夫。私達ならきつとタイガ君のお父さんを助けられるよ」

根拠はない。しかし伊智香の自信あふれる言葉にタイガも勇気づけられるとそこに2人の男が近づいてくる。

「君達は良い相棒だね。気持ちは分かる。父親と戦うのは辛いよ」

「リックさん。それと・・・」

「ガイ。ウルトラマンオーブだ」

そこに現れたのはリックとガイだった。

「前は話さなかったけどさ。僕の父さんはベリアルなんだ」

「ベリアルって・・・あのウルトラマンベリアルですか？」

偽物だがベリアルと戦ったことのある伊智香はあのウルトラマンがリックの父親なのかと驚くも、リックは話を続ける。

「うん。自分で言うのも何なんだけど、想像もできないぐらい派手にやりあつてさ。ベリアルと・・・父さんと殴り合った時の痛みは今でも忘れない。でも僕が最後まで父さんと戦えたのは大切な仲間がいたから。今の君にもいるだろう？その大切な仲間がさ」  
半透明なタイガを見ながらリックがそう告げるとガイがタイガの背中を叩く。

「シャキツとしろタイガ。タロウさんを救えるのは他でもない息子であるお前だけなんだぞ」

「・・・はいっ!」

タイガは自分がタロウを救うのだと決意を固めると、伊智香は2人にも力を返さなくてはとタイガスパークを出現させる。

「リクさんとガイさんにも借りていた力をお返ししますね」

伊智香は2人にも力を返すと、2人は頷き合う。

「ありがとう」

「俺の力。役に立ってたか?」

「はい! 何度も助けられました!」

「そりゃよかった」

素直に答えた伊智香にガイは良かったと反応すると、ツキカゲ基地にいる初芽から連絡が入った。

『孫市。至急基地に帰還してください。ウルトラマンタロウさんの移動先を捕捉しました』

「はい! 今すぐ戻ります!」

「僕達も行きましょうガイさん!」

「そうだな」

部外者とはいえ緊急事態なのでウルトラマンであるニュージエネレーションヒーローズもツキカゲ基地へと共に集結することとなった。

## 最終章2 ニュージェネクライマックス

「俺達がきちんと倒していればこの地球でトレギアが好き勝手しなかったんだ。すまなかっただ」

集まって早々にカツミは一同に頭を下げてくる。

「タイガとタロウを傷つけたトレギアは絶対に許さない。あいつは大切な人を巻き込んで傷つける。今度こそ俺が決着をつける」

「俺がじゃなくて、俺達が・・・だろ？」

1人で突っ走ろうとするカツミにイサミは自分達もいると主張すると、他のニュージェネレーションヒーローズも頷く。

「グリムドの放つ波長を感知すればウルトラマンタロウさんの居場所も分かるはずだ」

初芽はキーボードを操作してタロウの中にいるグリムドの波長を解析し、その居場所を探る。するとそこに遅れて飛粋と葉栖美、そして雅美の3人がやってきた。

「ごめんなさい遅れました」

「被害範囲が結構広くて、避難誘導に時間がかかっちゃったよ」

「あの赤いウルトラマンって・・・ウルトラマンタロウだよね？」

雅美はタロウのウルトラメダルを見ながらそう呟いていると、雅美のもとにアサが駆け寄ってくる。

「雅美ちゃん！」

「アサヒさん!? またこの地球に来てくれたんですね！」

「アサヒ。もしかしてその子が・・・」

「はい！ウルトラマンスマッシュの雅美ちゃんです！」

なんの悪びれる様子もなく雅美の秘密をニュージェネレーションヒーローズにバラしてしまうアサヒに流石の雅美も苦笑いしていると初芽はタロウの居場所を特定する。

「タロウさんを発見しました。Fの13地区です」

「ごめん。何処？」

暗号化された地区を言われてもこの地球の地理に疎いニュージェネレーションヒーローズは場所が分からなかった。

「皆、これに乗るのじゃ」

『DYNAMAVOLT!』

『ACCESSESCHELD・VOLTTSTRIKER』

「アクセスコード！ボルトストライカー！」

「ボルトストライカーだけじゃ狭いわね」

『DYNAVOLT』

『ACCESSECHORD・VOLTWING』

「私達も・・・！」

「待ちなさい孫市」

ボルトストライカーとボルトウイングに乗り込んでいくニュージェネレーションヒーローズ。伊智香と雅美も乗り込もうとすると、楓が伊智香を呼び止める。

「待つてるから、必ず勝って帰ってきなさい」

「・・・うん！」

「おつ、楓がデレたねえ」

「からかわないでください師匠！」

「ごめんって！・・・命さんはたぶんこれがツキカゲとしての最後のミッションになりそうだからさ。みんな元気にハッピーエンドがいいわけなんですわ。だからさ孫市。負けないでね」

「はい！」

楓と命に背中を押された伊智香。そんな彼女に五恵とテレジアも激励の言葉を告げてくる。

「大丈夫。孫市達ならきつとタロウさんを助けられるよ」

「自分の力を信じろ。孫市」

「ありがとうございます。行ってきます！」

みんなに応援された伊智香は雅美と共にポルトウイングに乗り込もうとすると、そこにはモモも付いてきた。

「あれ？師匠も行くんですか？」

「うん。生身では無理だけどダイナポルトなら戦力になるからね」

自分も戦力になれると付いてくるモモ。伊智香はありがたいと思いつつも今度こそ乗り込もうとすると彼女の前に半透明のタイガ達3人が現れる。

「伊智香。その・・・なあ」

「実は微弱になっていたエネルギーは君の体内で休息させてもらったおかげで完全に回復したんだ」

「え？それって・・・」

「簡単に言うのだな伊智香。お前の身体を借りなくても実体化できるようになったってことだ」

「えっ？いつから・・・そもそもなんで言ってくれなかったの？」

「少し前からだな。たぶんキツカケはあの時の奇跡だと思う。・・・言えなかったのはさ。」

伊智香。お前が心配だからだよ。出会った時からお前の師匠みたく無茶が多かったし、俺達が宇宙に旅立った後が心配で……」

旅立つ。その言葉に伊智香は表情を曇らせる。いつかは訪れるとは分かっていた別れがよいよすぐ近くまで来たからだ。

「グリムドは強敵だ。この戦いで君が傷つくのを私達は見たくない」

「お前はもう戦わなくていいんだ。あとは……俺達がカタをつける」

「だから。ここでサヨナラだ伊智香」

「ふざけないでよ。私だってみんなが傷つくのは見たくない！だから一緒に戦ってきたんでしょ！3人より4人の方が強いに決まってる！タイガ君がくれたアイテムはみんなの絆を強めてくれるものなんでしょ？私達の絆は……この程度で途切れるようなものじゃないよ」

「伊智香……！ありがとう。お前の覚悟、受け取った！一緒に戦ってくれ！」

現場へと到着するとそこにはタロウだけじゃなく霧崎の姿もあった。

「お前がトレギアか」

「やあ。ニュージェネレーションヒーローズ。この姿では初めまして」



「うくん。中々のイケメンだけど、俺には負けるねえ」

「カツ兄とイサ兄の方がカツコいいです！」

イサミの言葉をアサヒ以外がスルーするとカツミは睨みつけるように霧崎に言葉を返す。

「相変わらず人の心を弄んでいるみたいだが、人間はそんなに弱くはないぞ」

「地球は最高の遊び場だった。伊智香君。君という存在が私の計画を狂わせた。最初は眼中にもなかった君はタイガ達を助け出し、私の作戦をすべて打ち砕いた。人間なんて・・・ゴミ同然の弱い生き物だろう。なのにどうして・・・人間は善も悪も入り乱れる混沌そのものだろう」

「人は矛盾してるし完璧じゃない。それでも私達は希望を・・・絆を信じたい！」

「また絆か。いいだろう。認めるよ。確かに絆の力は強いさ。だが・・・私とタロウがお前達の絆を打ち砕く」

そういった霧崎はトレギアアイを顔にかざしてウルトラマントレギアへと変身する。  
「さあ行こう我が友よ」

タロウと並び立つトレギアは伊智香達の方を振り向くと一同は並び立つ。

「よし、みんな。いこうぜえ！」

ヒカルの言葉に頷いた一同はそれぞれ変身アイテムを取り出して、変身の構えを取

る。

「ギンガアアアアア！」

「ビクトリイイイ！」

「エツクスウウウ！」

「オオオオオオオ！」

「ジイイイ！」

「ループ!!」

「星まで届け！乙女のハッピー！」

「バディ・ゴー！」

「スマツシユ！」

伊智香達はそれぞれの変身アイテムを掲げてウルトラマンへと変身する。その経緯で伊智香は3つの光に分かれて変身を遂げる。

「シヨウラア！」

7色に輝く銀河の覇者。ウルトラマンギンガ。

「ズイア！」

勝利を導く地底の守護者。ウルトラマンビクトリー。

「イイイサアツ！」

絆のユナイト。サイバー戦士のウルトラマンエックス。

「銀河の光が我を呼ぶ！」

希望への鼓動。さすらいの風来坊。ウルトラマンオーブ・オーブオリジン。

「シユア！」

支え合う仲間の絆。最強の遺伝子。ウルトラマンジード・プリミティブ。

「ハアっ!!」

決して絆を諦めない。熱血ファイター。ウルトラマンロツソ・フレイム。

閃き一閃。ウルトラマンブル・アクア。

「ハッピー！」

マコトの輝き。ウルトラウーマングリージョ。

「シユア！」

最高のバディとともに。光の勇者。ウルトラマンタイガ。

「ムウン！」

力の賢者。ウルトラマンタイタス。

「セイヤツ！」

風の覇者。ウルトラマンフーマ。

「スマツシユファイ！」

絆を紡ぐ衝撃のアーチャー。ウルトラマンスマッシュ。

「「「ダイナボルト！バトルゴー！」」」

そして爆電竜人ダイナボルト。12人の巨人と1体のロボットが並び立つ。

「役者は揃ったなあ。パーティーは派手な方がいい。私も・・・グリムドの混沌の力で」  
トレギアは自身に残るグリムドの力を用いて邪神の眷属とも呼べる怪獣達を出現させる。

「あれは・・・」

「ルギエル！」

1体目はかつてギンガとビクトリーが激闘を繰り広げたビクトルギエルを模した邪神眷属ビクトルギエル。

「ザイゴーク・・・！」

2体目はエックスがウルトラマンやティガと共に倒したザイゴークを模した邪神眷属ザイゴーク。

「俺の相手はお前だな？」

3体目はオーブが光を失うキツカケとなったマガゼットンに模した邪神眷属マガゼットン。

「良かった。父さんじゃなくて」

4体目は地球をデータ化しようとしたギルバリスを模した邪神眷属獣ギルバリス。

「ツルちゃん……」

「大丈夫だアサヒ。あれはミツルギじゃない」

「ミツルギの偽物を用意するなんて相変わらず性格が悪いぞトレギア」

5体目はアサヒの友、ミツルギが変身していたグルジオレギーナを模した邪神眷属獣グルジオレギーナ。

「消去法で私達の相手は……あの怪獣かな」

「今の僕らなら邪神の眷属だろうと……問題ありません！」

「私達も手伝うよ」

6体目はかつてとある次元にてダイナゼノンと死闘を繰り広げた怪獣ガギユラ。それと瓜二つの邪神眷属獣ガギユラ。その6体とウルトラマン達が対峙する。

「タイガ。タロウを……親父さんを任せただぞ」

「はい！」

「お前らがいう光の絆とやらを見せてもらおうか」

「ギンガサンダーボルト！」

「ビクトリウムスラッシュ！」

ギンガとビクトリーの攻撃がビクトルギエルに命中する。するとビクトルギエルは



そこにオーブは尽かさずオーブカリバーで斬りこんで追い打ちをかけようとしたが、マガゼットンも負けじと火球を放ってくる。

「ぐっ……。やるじゃないか！」

オーブカリバーで火球を受け止めたオーブは連続して放たれる火球に怯まずに突っ込んでいくのだった。

「ジードクロー！」

ジードもギルバリスに対してジードクローで攻撃を仕掛けようとすると、ギルバリスは全砲門から光線を乱射してジードを攻撃してくる。

「コークスクリュージャミング！」

回転しながら突撃したジードはギルバリスに一撃を決めて地面に着地すると、その一撃が決まった傷を見た。その部分は本物とは違い復元されてなかった。

「再生しない。やっぱり本物と違うんだ」

見た目だけ真似た別物。そう確信したジードはレッキングリップパーで追撃を仕掛けた。

「直球ストレート！」

「ワイドショットスラッガー！」

燃える火球のストレートをグルジオレギーナに投げ込んだロツソ。そこにブルが斬

撃による追い打ちをかける。するとグルジオレギーナは反撃にと強力な光線を放つてくる。

「危ないです!」

前に出たグリーンジョはバリアでその光線を防ぐ。3兄妹の連携にグルジオレギーナは翻弄されていた。

「スマッシュアロー!」

光の槍でガギュラの右膝を突き刺したスマッシュは即座に光輪で首元を狙うも大きい凶体のわりに俊敏なガギュラはそれを紙一重で回避する。

「避けてスマッシュ!」

「ダイナボルト!フルバースト!」

ダイナボルトのフルバーストが炸裂するも、ガギュラは爆炎の中から勢いよく出てくる。

「ダメージがないわけではないと思いますが・・・」

「タフな怪獣だね。簡単に倒されてはくれないさそう」

簡単には倒せない相手と理解したスマッシュと雅美はライトニングエネルギーシオンにウルトラフュージョンをするとダイナボルトと同時にその拳を叩きこんだ。

「父さんを返せ!」



「別に借りた覚えも奪った覚えもないよ。ただ・・・導いただけさ」  
「行くぞみんな！」

『ウルトラマンタイガ・フォトンアース！』

「うむ！」

『ウルトラマンタイタス・スターエンシエント！』

「オウよ！」

『ウルトラマンフォーマ・ストームインパクト！』

トライスクワッドの3人はそれぞれ強化形態へと姿を変えるとまずはトレギアへと攻撃を仕掛ける。

「スワローバレット！」

タイガのスワローバレットをバリアで受け止めるトレギア。その背後にフォーマが即座に回り込む。

「疾風怒涛！俺の連撃の嵐を見切れるか？光波剣！二又ノ大蛇！」

「ぐっ・・・」

フォーマは光の双剣でトレギアに連続斬りを浴びせると、怯んだトレギアの前にタイタスが拳を構える。

「受けてみよ。賢者の拳！エンシエントワイズマンパンチ！」

「がはっ!？」

光輝く拳を叩きこまれたトレギアは膝をつくと、まるでトレギアを庇うかのようにタロウがタイガ達に攻撃を仕掛けてくる。

「ぐっ……。父さん……」

「トレギアは私達が……」

「合点!」

タイタスとフォーマは自分達がこのままトレギアの相手をするといつて、タイガにタロウを任せる。するとタロウはタイガへと殴りかかってくる。

「くっ! ダアアアアアッ!」

タロウの拳を受け止めたタイガは膝裏に蹴りを入れて膝をつかせると連続パンチを叩きこむ。少し怯まされたタロウは反撃と言わんばかりにタイガに拳を叩きこもうとすると、タロウは寸前のところでその拳を止めた。

「父さん! グリムドと戦ってるんですね。邪悪な力に負けないでください!」

タイガはタロウを必死に抑え込もうとするも、タロウは闇の波動を解き放ちタイガを引き離す。するとその闇の波動は周囲の眷属獣たちの力を増幅させた。

「怪獣達がパワーアップしてる!？」

「グリムドの力か!」

パワーアップしてる眷属獣たちは一斉にニュージェネレーションヒーローズに攻撃を放つてくる。

「先輩方！」

タイガはギンガ達がいやられたと思つて声をあげると・・・爆炎の中からは5人のウルトラマンが出てきた。

「シユア・・・」

ウルトラ10勇士の力が1つとなつた究極の戦士。ウルトラマンギンガビクトリー。

「イイイサアツ！」

ウルトラマンとタイガの力を宿した地球の希望の力。ウルトラマンエックス・ベータスパークアーマー。

「オオオオシユア！」

3つの光と絆を結び、今、立ち上がる。ウルトラマンオーブ・オーブトリニティ。

「タイガの願いを・・・僕らが繋ぐ！」

秘めた無限の可能性を開花させた形態。ウルトラマンジード・ウルティメイトファイナル。

「ハアッ！」

纏うは真。不滅の真理。3つの魂が重なつた真の兄妹。ウルトラマングルーブ。そ

それぞれの戦士たちは最強の形態となつて攻撃を凌いでいた。

「僕らも負けていられませんね」

「全力で燃やすよ！永遠に燃やすは、絆の炎！」

『ultraman smash bond flame』

スマッシュもボンズフレイムへとウルトラフュージョンして5人の戦士と並び立つと、ダイナボルトもボルトドラゴンへと再合体する。

「ウルトラフュージョンシユート！」

「ベータスパークアロー！」

「トリニティウム光輪！！」

「クレセントファイナルジード！！」

「グルービウム光線！」

それぞれの戦士たちは必殺技で各怪獣達を撃破していく。

「私達も決めるよスマッシュ！」

「フレイムスマッシュアロー！」

「一二必勝大雷撃！レックスサンダー！！」

スマッシュとボルトドラゴンも同時攻撃でガギユラを撃破すると、タロウと戦うタイガのもとにタイタスとフォーマが駆け寄ってくる。

「全員で行くよ！燃え上がれ！仲間と共に！」

「「バディ・ゴー！」」

タイガ達は1つとなってタイガ・トライストリウムへと姿を変えるとグリムドの力と戦うタロウと向かい合う。

「父さん。今俺達が助けます」

タロウは黒い炎を身に纏って必殺のウルトラダイナマイトを放とうとする。

「いいぞ。いいぞ。息子を焼き尽くせタロウ！」

「なら俺達も！」

タイガトライブレードを地面に突き刺したタイガは自身もウルトラダイナマイトを発動しようと燃え上がる。

「ウルトラアアアツ！ダイナマイトオオ!!」

「タイガ君。この技は？」

「見様見真似だ。だけどやるしかない！」

タイガとタロウは同時に駆け出すとぶつかり合い、お互いの炎を燃やし合う。

「ハアアアアツ！」

だがタイガの炎はタロウの炎に劣るようで、タイガはタロウの放つ黒い炎に包まれそうになってしまう。

「まずい。このままだとタイガがタロウの炎に……!」

「今度はタイガの中に逃げ込む気だ!」

「そうはさせるか!」

ニュージェネレーションヒーローズは今度はタイガに逃げ込もうとするグリムドを止めようと一齐に駆け出そうとすると、その行く手をトレギアが阻む。

「親子水入らずの邪魔をするなよ」

「危ない! うわああつ!」

トレギアの電撃光線からスマッシュとボルトドラゴンがニュージェネレーションヒーローズを庇うと、スマッシュは変身が解除されて、ボルトドラゴンも合体が解かれて実体化が維持できなくなって消えてしまった。

「私達は……負けない! 私達も絆の炎を燃やすよ!」

インナースペースの伊智香とタイタス、そしてフーマも燃え上がるとタイガの火力が増大する。

「生まれた星は違っても!」

「共に進む場所は一つ!」

「永遠の絆と共に!」

「我ら4人!」

「トリスクワッド!!」

タイガの炎がタロウの炎を打ち破ると大爆発を巻き起こし、その爆炎が消えて出てきたのは倒れそうになっているタロウと支えるタイガの姿があった。

## 最終章3 奇跡と絆の物語

「タイガ。お前は仲間を……真の絆を見つけることができたのか」

タロウの体内から出ていくグリムド。それは空で『闇』となつてタイガには入ろうとしなかった。タロウのカラータイマーも邪悪な赤から青い色へと戻り、タロウは完全に正気に戻つたようだ。

「タイガ……。よくやった」

「父さん。無事で良かったです！」

「フハハハハ！……ハア……」

タイガがタロウを助けることに成功して安心してると、トレギアは哀愁漂う悲しそうな笑いをする。

「いつだつてそうだタロウ。お前は私には眩しすぎる存在だったよ……。お前らの言う『光』とはいったい何だ？……光を知るためには闇を知るしか私にはできなかつた。光と闇を超越するために」

「トレギア」

「さあ来いグリムド！引き裂かれた2つが1つになる時だ！」



トレギアは空に浮かぶ『闇』に向けて自身の『闇』を解き放とうとする。すると空の闇は再び邪神魔獣グリムドとなってしまう。

「やめろトレギア！今のお前の身体では逆にグリムドに取り込まれてしまう」

「私は・・・私自身を開放する！」

グリムドの放った闇のオーラに吸い込まれて崩れていくトレギア。やがてトレギアが完全に崩れ去ると闇のオーラを取り込んだグリムドは数倍の大きさに巨大化して真の邪神魔獣グリムドへと完全復活を遂げてしまった。

「トレギア・・・っ！」

タロウはトレギアの事を思いつつも疲弊した体でグリムドと戦おうとするも、ギンガビクトリーに止められる。

「タロウ。俺達が・・・」

ニュージエネレーションヒーローズがタロウを守るように前へと出ると、グリムドは闇のオーラを広げて『混沌』の亜空間を作り出す。

「タアアロオオウ」

「なっ・・・!!?うおおおおっ!?!」

トレギアの声で喋ったグリムドはトレギアの思念が残っているのかタロウに狙いを定めると電撃にも似たエネルギー光線でタロウを捕えると、そのままタロウを吹き飛ば

してしまおう。

「父さん!？」

タイガがタロウへと駆け寄ろうとするとニュージェネレーションヒーローズはそれぞれ必殺技を撃つ構えを取る。

「ベータスパークブラスト!」

エックスはベータスパークソードから強力な光線を放つ。

「トリニティウムシュート!!」

オーブはオーブスラッシャーからV時型の光線を放つ。

「レッキングノバ!!」

そしてジードも地面にギガファイナライザーを突き立てて強力な光線を放った。しかしその同時光線が命中してもまるで怯まないグリムドは複数の目から怪光線を放つて3人のウルトラマンを吹き飛ばした。

「「うわああああっ!?!」」

「「ならこれでどうだ!ワイドゼロショット!!」」

ギンガビクトリーはゼロの必殺技であるワイドゼロショットを放つ。

「「デルタブラストランサー!!」」

グループはカラータイマーからランスのように鋭い光線を放つ。

「クワトロスクワッドブラスタ―!!」

そしてタイガもクワトロスクワッドブラスタ―で応戦するも、その攻撃をも通用しないグリムドは再び目から光線を放ってタイガ達を吹き飛ばした。

「うわあっ!?!」

全員のカラータイマーが赤く点滅し始めるも、誰一人引こうとはせずに立ち上がる。

「負けるわけにはいかない。俺は……俺達は一步も引かない!」

そんな彼らへと放たれる雷撃。その攻撃に対して一同は身構えるも、その攻撃はタイガ達に届かなかった。

「えっ……?」

見るとそこにはグリムドの攻撃をバリアで一人受け止めるタロウの姿があった。

「父さん!」

「戦士達よ。みんなのエネルギーをタイガのウルトラホーンに集めるのだ!」

「よし!行くぜみんな!」

ギンガビクトリー達ニュージエネレーションヒーローズはタイガを囲むように集まると自身のエネルギーをすべて片手に集め、その手からタイガのウルトラホーンに送る。

「タイガ。お前にすべてを託すぜ」

光となってタイガと一つになっていくニュージェネレーションヒーローズ。すると伊智香のもとに1つのサングラス状のアイテムが現れる。ニュージェネレーションヒーローズの力が1つとなったアイテム。ニュージェネレーションアイだ。

「物凄いパワーを感じる。．．．よし！行くよ！」

伊智香はニュージェネレーションアイを自身の顔にかざしてトリガーを引くと、それに宿るニュージェネレーションヒーローズ全員の力が一気に開放される。

「シューア!!」

すると伊智香はニュージェネレーションヒーローズの力が集結した最強の戦士。ウルトラマンレイガへと変身を遂げた。

「おお．．．うおっ!!」

グリムドはその姿に動揺したのかタロウをレイガ目掛けて投げつけると、レイガはタロウを受け止めてゆっくりと地面におろすと「後は任せろ」と言わんばかりにタロウの前へと出る。

「ハッ！」

レイガはグリムドの放ってきた電撃光線を片手で弾くと、グリムドの踏みつけや叩きつけをもともせず距離を詰めていく。

「ハアアアっ!!」

そして黄金に輝く拳を叩きこんでグリムドを怯ませると、怒り狂ったグリムドは最大火力の破壊光線であるグリムレイを放とうと目にエネルギーを収束し始めた。

「来るぞ伊智香。今こそニュージエネレーションヒーローズの力を一つにするときだ」  
「うん！」

『カモン！』

ニュージエネレーションヒーローズから受け取っていた強化形態のブレスレット6つが1つとなるとニュージエネレーションレットとなって伊智香の腕に装着される。

「これで終わらせる。私とウルトラマンみんなの力で、邪悪な闇を打ち砕く！」

『ニュージエネレーションレット・コネクトオン』

「レイガ！アルティメットブラスタター!!!」

腕を十字に構えたレイガは最強の光線をグリムド目掛けて放つ。対するグリムドも破壊光線を放ってお互いの光線がぶつかり合うも、レイガの光線の方が上回りグリムドを光で包み込んだ。

「タロウ・・・」

グリムドの胸部から顔を出したトレギアは最後にタロウの名を呼ぶとグリムドとともに光となって爆発した。

「・・・」

レイガがグリムドを打ち破ったことで亜空間がもとの世界に戻ると、レイガはそれぞれのニュージエネレーションヒーローズへと分離する。そしてタイガはタロウと向かい合った。

「父さん・・・」

「よくやったタイガ。いい仲間を持ったな」

「・・・はい！」

タイガはゆつくりと後ろを振り返るとニュージエネレーションヒーローズの面々が並び立っていた。

「伊智香。いつまでもそのやさしさを忘れるんじゃないぞ」

「大切な人を守りたいという気持ち。それがきつとお前の力になる」

「みんなと手と手を繋いで進めばきつと理想の未来にたどり着ける」

「その気持ちを信じて進めば、明日への絆になる」

「支え合う仲間たちの笑顔が力になる。仲間を大切にね」

「今までの奇跡は君だから起こせたんだ」

「これから先どんな困難が起きても、君なら乗り越えられるはずだ」

「雅美ちゃんによろしく伝えといてください」

ニュージエネレーションヒーローズはそれぞれ一言ずつ伊智香に告げると、伊智香は

ゆっくりと頷く。

「はい。ありがとうございます」

「それじゃあな！」

ニュージエネレーションヒーローズはそれぞれの世界へと帰ろうと空へと飛び立っていく。そしてタイガから分離した伊智香はそのままタイガ達を見上げると、ツキカゲメンバーがその場に集まった。

「これ。返すね」

伊智香の右腕からタイガスパークが消える。

「伊智香。本当にいいのか？」

「大丈夫だよタイガ君。私達の想いはタイガスパークが無くてもずっと繋がってる。どんなに遠く離れていてもね」

「君と・・・君達と過ごした時は人生最良の時となるだろう」

「私もだよ。タイタスさん」

「別れの挨拶なんかいらねえよ。・・・寂しくなんだろうが」

「そう言わないでフーマ。ちゃんとお別れを言わせてよ」

それぞれ別れを惜しむトライスクワッドと伊智香。涙で言葉を詰まらせる伊智香のかわりにモモがタイガ達に言葉を送る。

「会いたくなったら、いつでも来てね」

「モモ！伊智香をこれからもバシ鍛えてやってくれよ！」

「うん！私は師匠だもん。しっかりと伊智香ちゃんに『想い』を伝えていくよ！」

モモは師匠として伊智香に繋いでいくことを告げるとタイガ達は頷く。

「タイタスさん！何度も助けてくれてありがとう！」

「私からも礼を言う。感謝するトライスクワッド」

「こちらこそ。この地球の日々は勉強になった」

五恵とテレジアもトライスクワッドに礼を告げると楓と命も口を開く。

「フーマー！タイガは伊智香と同じで危なっかしいとことがあるんだからちゃんと見てや

りなさいよ！」

「命さん的にはフーマが一番『ツキカゲ』のイメージキャラっぽかったよ！」

「へへっ、分かっているって。2人ともあんがとよ！」

楓と命の言葉にフーマも照れながら反応すると伊智香は涙をぬぐう。

「タイガ君！今までありがとう！お父さんとこれからも仲良くね！」

「ああ。だけど伊智香。お礼を言うのはこっちのほうだ」

「私からも礼を言わせてくれ。君のおかげでタイガは大きく成長できた」

「タロウさん……！」



タイガとタロウのお礼に伊智香は反応に戸惑っている。タイガは続ける。

「伊智香。お前は1人じゃない。モモっていう最高の師匠がいる」

「君の周りにはたくさんさんの素晴らしい仲間がいる」

「これからもたくさん仲間が増えていく。大切にするんだぜ」

タイガ達の言葉に伊智香は涙を流しながら頷くとタロウは「そろそろだ」と言うようにタイガに視線を向ける。

「それじゃあ伊智香。じゃあな」

「うん。・・・バイバイ！元気でね〜！」

タロウと共に3人が空へと飛び立っていく。こうしてタイガ達トライスクワッドはこの地球を、この宇宙を後にした。

半年後。モモや命、五恵の師匠3人組は現役のツキカゲを引退し、姉妹組織ともいえる特殊災害X課に入隊をし、楓もつい先日弟子を受け持ったため、伊智香とテレジアが現在フリーとなっていた。

「どうだ楓。正式に弟子となったあいつの調子は？」

「まだまだだね！だけでもあ・・・だからこそ育てがいつてもものがあると思うわ。もう茜みたくない失敗はしないわ」

茜の事を気にしつつも正式に楓の弟子になった少女はどちらかと言えば命に似た天真爛漫な性格をしているが、性格のわりにはできない事が多く楓は育てがいがあると感じていた。

「えへへ。そうっすか？あざまーす！」

「げっ、いたの？気づかなかったわ」

しかしながら気配を消すこと。というよりその場の『空気』に溶け込むことに関して言えば信と同等レベルなため、その才能を買って楓は彼女を弟子にしたのだ。

「松さんは。その場の空気になることが得意なので」

その弟子の名は宗房松はコードネーム・芭蕉の名を与えられている。

「何イキってんのよ。アンタはまだそれだけでしょうが？みっちり鍛えてあげるから覚悟しなさい」

「ひく。勘弁っすよ師匠〜！」

松は気配を殺してその場から逃げ去ろうとしても、気配はなくとも目の前にいられば見えるものは見えるのですぐ楓に捕まってしまう。

「アンタ……。ホント、性格以外のスペックが信さん並ね」

「信さん？ああ。師匠の師匠の師匠ですね。あれ？つまり信さんって松さんの大大師匠ってことじゃないっすか〜！」

「何よその大大師匠って。言いにくいわね」

「その信さんと松さんが同じスペックってことは・・・松さんは中々のスペックってことっスね！ウルトラ嬉しいっス！」

「いや。スペックが低いって言ってるの。あんたなんか2分の・・・いえ、3分の1のひよっこよ」

「そんなあ！ウルトラショックっスよ師匠く！」

何処かのウルトラ戦士にも似た口調の松はショックと言いながらも楓とのやり取りを楽しむかのように笑っていた。

「楓ちゃんは立派な師匠になれそうだな。・・・雅美さんももう進路を決めてるみたいだし。私は・・・」

雅美は高校を卒業後明確に凧の部隊を引退する決意を固めている。まずは世界を見て回ったのちにスマッシュと共に宇宙に行き、絆を紡ぐ旅にでることだ。立派な師匠になるうとしてる楓に、立派な目標を持つ雅美。そんな彼女達と自分を比べて自分は立派な師匠になれるだろうか。自分は弟子となる相手に教えを伝えることができるのだろうか。その不安は解消されないままだった。

それから何日かした後の次なるミッション。燃え盛る建物の中、2人の少女がそこに

いた。1人はツキカゲである伊智香。もう1人は白いフードで顔を隠している不思議な力を持つ少女。この少女こそがこの火災の文字通り『火種』だ。

「私が・・・ツキカゲって組織にですか？でも私は・・・私の力をまだ全然制御できてなくて・・・周りを傷つけてしまうかもしれない」

「始めに自信がないのは当たり前のことだよ。積み上げた努力とその成果。そして信じる人達がいればこそ・・・自信に繋がるの」

少女を炎の中から連れ出した伊智香は膝をつく少女のフードを下ろして顔を見ながらかつてモモに言われた言葉を自分の言葉で彼女に伝える。

「あなたの名前は？」

「ルナ。霧江瑠奈です」

「瑠奈ちゃん。自分を信じてみよう」

霧江瑠奈。その少女は『力』のせいで元々親にも見放され、身寄りがなかったが、日不慮の事故でワームホールを潜ってしまい、この世界に迷い出てしまった『漂流者』だ。もう何日も1人見知らぬ世界でさまよっていた彼女は精神的に不安定になり、自身の持つ『力』を暴走させてしまい火災を巻き起こしてしまった。事情と彼女の持つ力に驚きつつも理解を示したツキカゲは彼女をひとまず組織で預かることにした。

「私は・・・どうすればいいんだろう」

瑠奈は迷う。伊智香に言われた通り自分はツキカゲという組織に入るべきかを。自分は力を使いこなすことができずに周りから嫌われ、蔑まれてきた。故に自分を助け出してくれたツキカゲという組織にこれ以上迷惑をかけるのは忍びなかったのだ。

「どうすればいいのか、悩んでいるんだね瑠奈ちゃん」

「伊智香さん。．．．はい。私の力はあらゆるものを燃やしてしまう危険な力です。私はその力を制御できていない。こんな私がツキカゲにいても皆さんに迷惑をかけてしまうだけだと思います」

「それが瑠奈ちゃんの出した答えなら私は尊重するよ。自分で答えを出せるってすごいことだよね」

「伊智香さんも何か迷いがあるんですか？」

「うん。悩んでばかりだよ。立派な師匠になれるのかなとか、弟子に教えを伝えていけるのかなとか不安と悩みでいっぱい」

伊智香はその想いのたけを瑠奈に伝える。

「だけど私の師匠だった人に教わったんだ。自分を信じる事が自信に繋がるって。だから私は不安と悩みでいっぱいかもしれないけど、それでも自分のことを信じてる。いつだって燃え上がるような仲間との絆がここにある。どんなに離れていても絆は途切れやしないから。その絆が．．．私の自信に繋がってるんだ」

タイガ達のことを思い出しながら語った伊智香。すると瑠奈は自分の頬をパンと両手で叩くと決意を固めたように立ち上がった。

「伊智香さん。私をツキカゲに入れてください！」

「・・・いいの？」

「私が力を制御できないのはきつと自分に自信がないからです。いつか私も伊智香さんのような自信をつけることさえできれば、この力を制御できるようになると思うんです」

「力を制御したいからツキカゲに入りたいの？」

自分のためにツキカゲに入りたいのかと伊智香は厳しめな目線で彼女を見つめると、瑠奈はビクリと反応しながらも自身の考えを伝える。

「ない。といえば嘘になります。私はこの力を使いこなせずに周囲を何度も傷つけ、嫌われ蔑まれ・・・私自身もこの力を嫌っていました。けどこの力を誰かのために、誰かを護るために使えるのなら・・・それはとても良いことだと思っんです」

傷つける力ではなかったものを誰かのために使いたい。その胸の内を明かした瑠奈は伊智香にゆっくりと抱きしめられる。

「その想いがあるのなら瑠奈ちゃんはきつと強くなれる。私が保証するよ。だから一緒に強くなっていこう」

「それじゃあ！」

「うん！まずはツキカゲの試験に合格できるように色々教え込んであげるね！」

瑠奈は「やっぱり試験はあるんだ」と残念そうな表情をしながらも伊智香とともに日々トレーニングに励んだ。

それからさらに3か月後。正式にツキカゲとなり、伊智香の弟子となった瑠奈は『コードネーム・月読』の名前を与えられ今日が初任務デビューとなった。

「月読。こんな時に言えばいいって教えたこと。覚えてる？」

「はい。師匠。もちろんおぼえてましゅ！・・・噛んじゃった」

「やっぱりまだ緊張してるね。大丈夫。自分を信じて。燃え上がれ。仲間と共に！」

伊智香は口上を述べながらスパイスを口にすると、瑠奈もスパイスを口にして、勇気を奮い立たせるための口上を述べる。それは師匠である伊智香から教わったもう一人の自分と共に進むための言葉。

「バディ・ゴー！」

スパイスを効かせた瑠奈は『力』を開放すると炎に包まれ、伊智香と初めて出会った時の白いフードを被った姿へと変わる。伊智香とともに闇に向かって跳んでいくその姿はとある世界でウルトラマンと幾度となく激闘を繰り広げた闇魔戦士キリエロイド

にも似ていたのだった。

「ツキカゲ。ミッシヨンスター！」

これからもツキカゲの魂は人から人へと受け継がれていく。これは宇宙を超えて出会った若者達の奇跡と絆の物語だ。

ウルトラマンタイガ B U D D Y & S P Y C E F i n